パトラッシュが、ラスカルが、アンが、セーラが帰ってきた！

双葉社スーパームック2003

思い出の世界名作劇場

オフィシャルガイド



目次

思い出の世界名作劇場ハイライト



懐かしいあの場面、心に残る名シーン、感動の名セリフ……世界名作劇場全作品の思い出の名場面をハイライトで紹介。今なお多くの人の心を震わせる名作シリーズが、カラーで甦る！

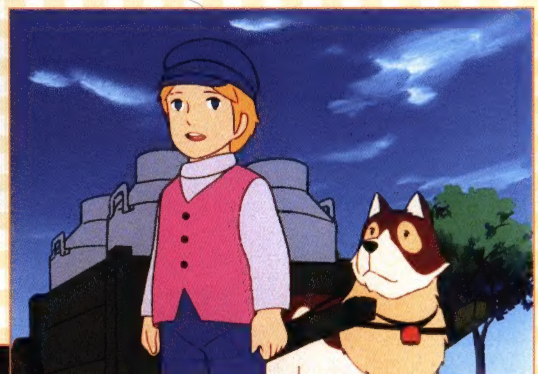


ネロとパトラッシュの無垢な魂がたどる運命

フランダースの犬



貧しい生活の中でも純粋さを失わず、
寄り添い生きてきたジェハンじいさんとネロ。
二人と出会ったパトラッシュは
ネロの親友として、運命を共にしていく。
心優しいアロアの想いだけを、あとに残して…。



—望むものは、ささやかな幸せ



▲ジョルジュとポールはアントワープが一望できる所へネロを案内するのだった





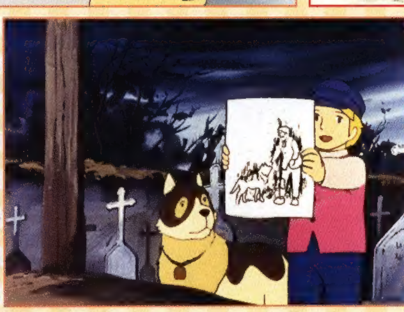




▲ネロのコンクール出品作。おじいさんとパトラッシュへの愛情が伝わってくるような力作だ



◀木こりのミッシェルは、ネロがコンクールに絵を出品したことを祝ってくれる



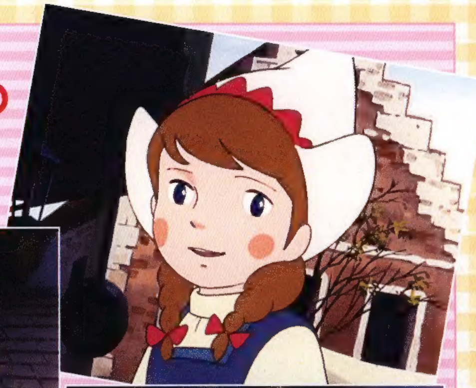
▲▶天国へ行ってしまったおじいさん。ネロは墓前で絵を掲げる

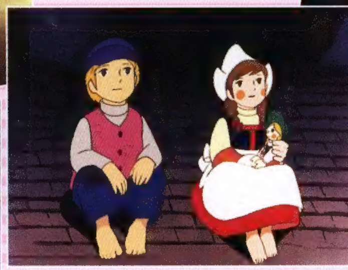
「おじいさん。
ほら、僕の絵だよ。
やっと描き上げたんだ…」（49話）





ネロとアロアの小さな愛







「ほんとに楽しみだな。ネロと一緒に毎日学校行くの」（47話）



▲アロアはネロの絵に対する気持ちを、誰よりも深く理解している



▶会うのは丘の上の木の下。ここは二人だけの場所だ

「もう何もかも終わったんだよ。みんなおしまいになっちゃったんだ…」（51話）



▲コンクールに落選したことで絶望感に襲われるネロ。身も心も疲れはてて、行くあてもないまま、村を去ろうとしていた



「パトラッシュ…なんだかとても眠いんだ…」（52話）











▲眠るように息絶えたネロとパトラッシュの所へ天使が舞い降りる



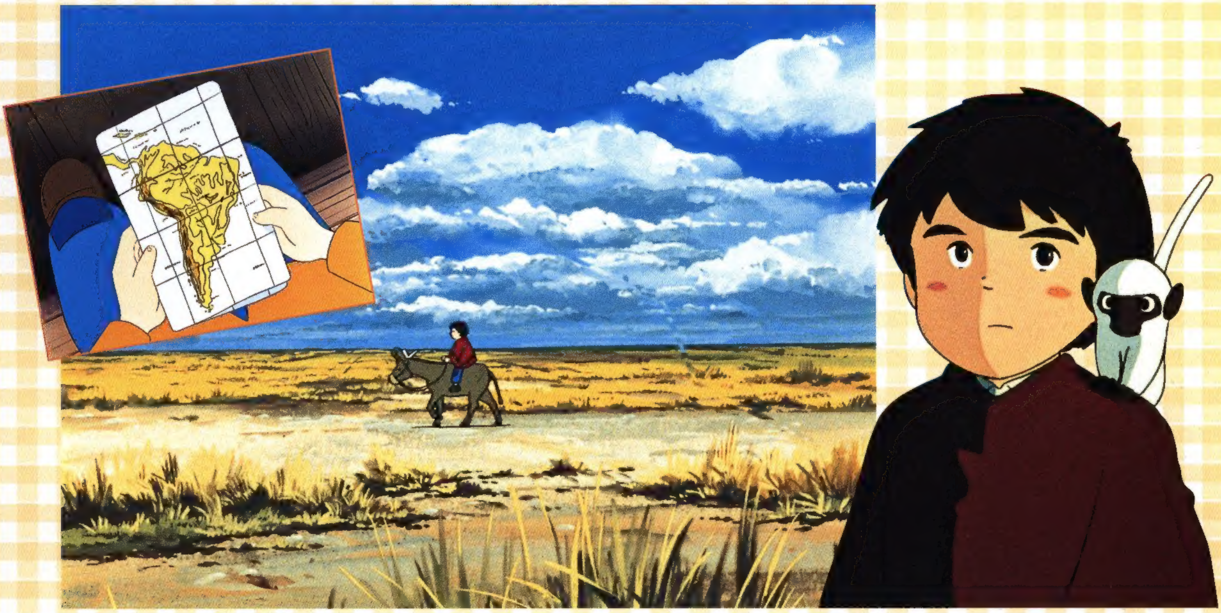


「僕は今、すごく幸せなんだよ…」（52話）



小さなマルコの大きな勇気に感動をもらった長い長い旅路

母をたずねて三千里



1883年、イタリアのジェノバから、
アルゼンチンのブエノスアイレスへ。
9歳の小さなマルコは、
出稼ぎに出たまま便りのなくなった
母を捜すために、遠い旅に出た。
それは、数えきれないほどの
苦難と試練、そして出会いの始まり。
勇気と希望を胸に、マルコはひとり、
荒野を歩きつづける──。

「ぼく勇気出すよ　一人前になって　きっときっと　おかあさんをむかえにいくよ……！」

（第1話）







希望



はるかなるブエノスアイレスへ



◀船、汽車、馬車、徒歩……遠い距離を移動するために、マルコはあらゆる手段を使う。切符代が足りないこともしばしばだ



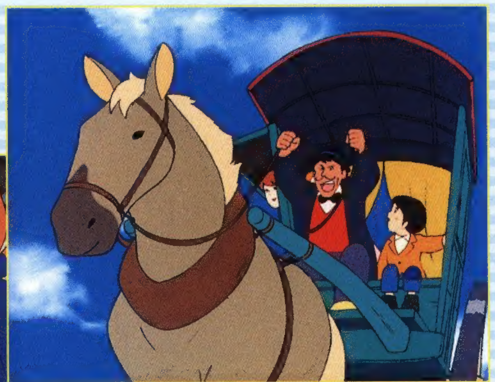
▲厳しい旅にくじけそうになるたび、新たな希望がマルコの道を照らす

◀様々な人との出会いは、マルコを力づけ、時には命を救うこともある



愉快なペッピーノ一座

ブエノスアイレスからバイアブランカまで、移動劇場の馬車で、マルコと旅をともにした、にぎやかなペッピーノ一座。ペッピーノさんの明るさとフィオリーナのひたむきさは、鮮やかに記憶に残る。





◀バイアブランカで、マルコは一座と別れた



「フィオリーナ また会えるよ きっと」(第36話)

▶マルコとの別れを惜しんでフィオリーナは走った！



◀ペッピーノ一座との馬車の旅は、マルコにとって思い出深いものになった



▶長女のコンチェッタは一座の花形。歌や踊り、人形劇で、視聴者も楽しませた



「ぼくはここにいるよ 何か月もかかってやっとみつけたんだ 夢じゃないんだよ おかあさん！」(第51話)





◀▲病気の母アンナは、家族から手紙が来ないため、心配のあまり生きる希望を失っていた。そこへマルコが……！ 感動の名シーン



▶訪ねる先に、母はいない……おかあさんは、一体どこに？

▼たったひとりでの荒野の旅は、生命の危険と隣り合わせだ

不安







▲マルコの母との再会は、フィオリーナの希望でもあった。心から喜んだフィオリーナは、明るい表情を見せる

絶望



▶水も食料も尽き、靴は破れ、足は傷つき、荒野には雪……マルコが天国に最も近づいた瞬間

ラスカルの愛くるしい仕草にほのぼのし、
スターリングのつらく哀しい決意に涙する！

あらいぐま ラスカル



▲動物が大好きなスターリングは、赤ちゃんあらいぐまの愛らしさにすっかり魅了された。これがラスカルとの出会いだった



◀スターリングとオスカーの哀願を無視して、猟師が木の上に逃げたあらいぐまの母親に向けて猟銃の引き金を引いた！



▶撃ち殺された母親の遺骸にヨチヨチとはい寄る、哀れなあらいぐまの赤ちゃん



◀まだ生まれてまもない、本当の赤ちゃんあらいぐま。母親がいなくてはとても生きていけない!?

出会い

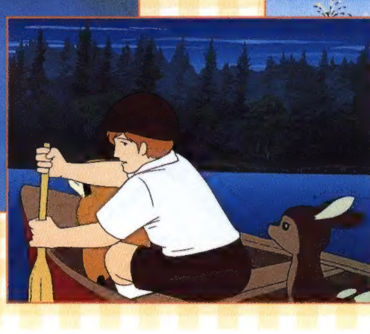
森と湖に囲まれた北アメリカの小さな町で紡がれる、
あらいぐまのラスカルと少年スターリングの友情の絆。
ラスカルの愛らしさはスターリングの哀しみをまぎらわせ、
スターリングの優しさはラスカルに安らぎを与える。だが、
ラスカルの本当の幸せについて思いあぐねたスターリングは、
哀しみをこらえて人間が来ない森にラスカルを解き放つ。
ラスカルのために、自分も新たな一歩を踏み出すために……。



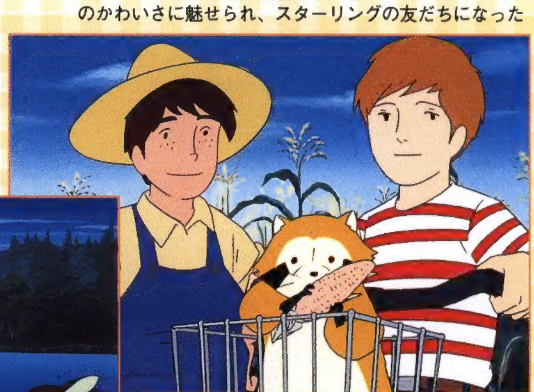
▲町に引っ越してきた新任駅長の娘のアリスもラスカルのかわいさに魅せられ、スターリングの友だちになった

絆





▶▲ラスカルの幸せを考えたスターリングはラスカルを森の奥に置いて帰ろうとする…が、ラスカルはスターリングとの生活を選んだ！

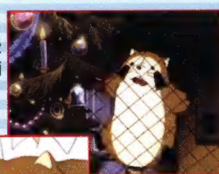


▲オスカーが自分の家の畑のトウモロコシをあげたことから、ラスカルはトウモロコシの味を覚え、近所の畑を荒らすようになってしまった

ラスカル ラブリー♥アルバム

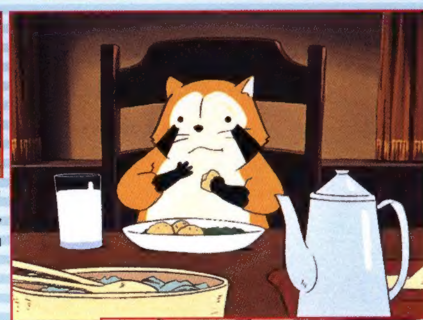


◀ザリガニは苦手？　最後はちゃんと捕まえて食べました！



▲クリスマスツリーをラスカルよけの金網の中に入れた





▲子ども用のイスに座ってお食事！



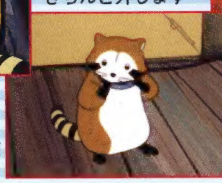


▶ソーダ水をおいしそうにゴクゴク





▲木の陰でうとうといねむり……。



▶立派な皮の首輪だけどイヤイヤ



▶ペロペロキャンディーは、手で包みをきちんと外します

別れ

「ぼくたちが別れるときがとうとう来たんだラスカル。行っておまえの幸せをつかめ。行け！　ラスカル!!」（第52話）





▲ミルウォーキーで中学校に通うことになったスターリングは、おとなに成長したラスカルを自作カヌーに乗せ、湖の対岸に向かった

▼アリスとオスカーに見送られ、スターリングはミルウォーキーへ旅立った……



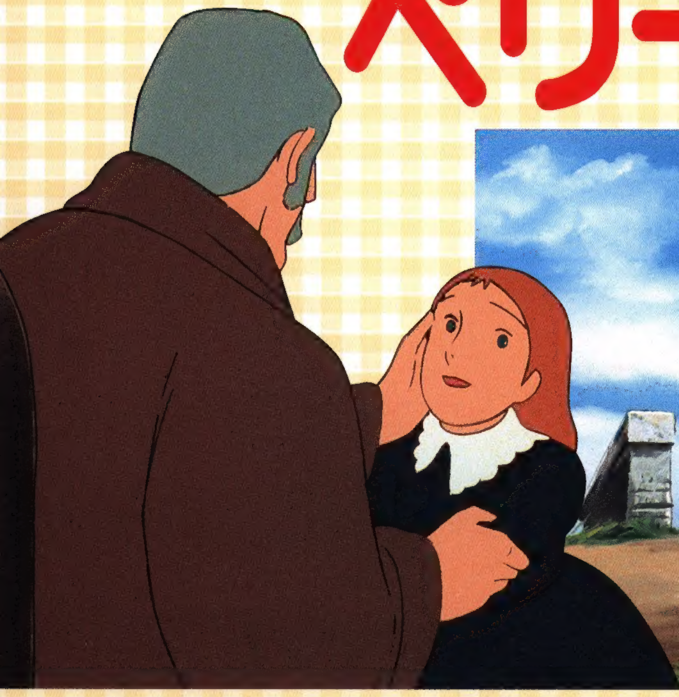


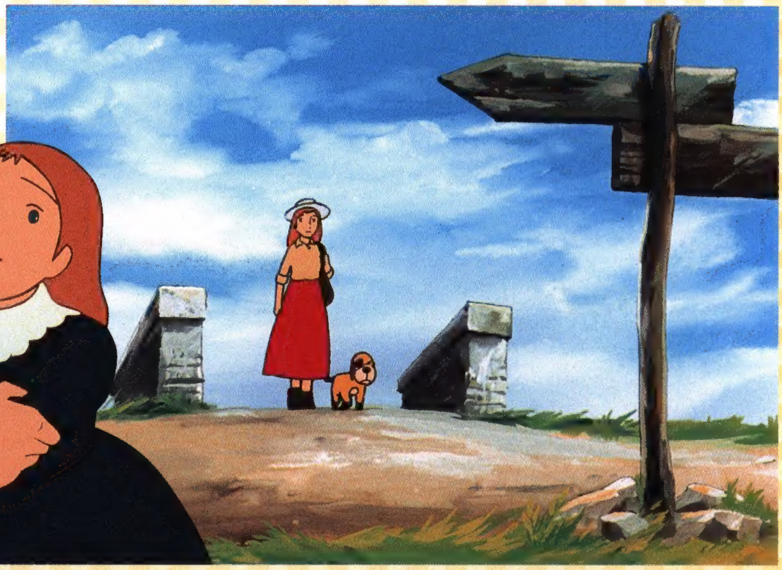


▲湖の岸辺にいる雌のあらいぐまに向かって泳ぎ出すラスカルを見送るスターリング。仲良くする2匹の姿を確認すると、哀しみを湖に捨てて帰っていく

愛と意志の少女、ペリーヌの耐える姿に胸がふるえる

ペリーヌ物語





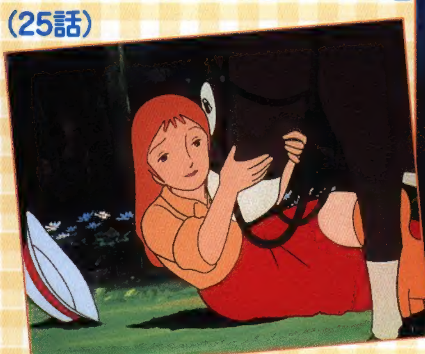
インド生まれのペリーヌは、一家で父の故郷、フランスに帰る旅の途中、両親を亡くす。つらく苦しい旅の末に、なんとか目指すマロクール村にたどり着くが、そこで待っていたのは、両親の結婚すら認めていない冷徹な祖父だった……。孫であることを隠し、祖父ビルフランの工場で働き始めるペリーヌ。やがて、ペリーヌの優しさが、冷徹なビルフランの心を溶かしていく……。

長くつらい旅



▶父の死後、母と一緒に写真屋をしながら旅を続けた。商才を発揮するペリーヌ

「パリカール！わたしのパリカール!!」（25話）



▲森で行き倒れていたペリーヌを発見したのは、母の薬代のために売ったロバだった！





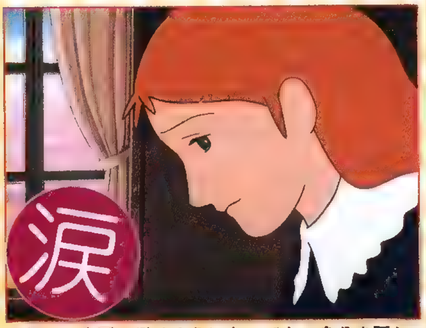


▲▶スイスの美しい風景で少女らしいひとときを過ごしたペリーヌ。しかし、苛酷なアルプス越えでフランスに入ったものの、今度は母が病に倒れる。必死の看病も空しく、天に召されてしまった



▶臨時の通訳をみごとにこなし、ビルフランの秘書として働くように

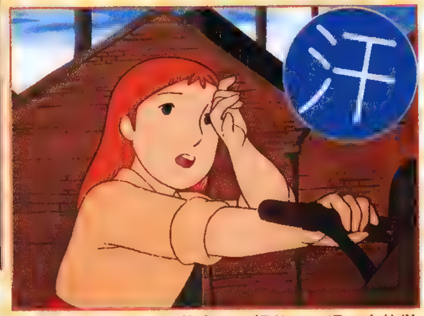
涙



▲祖父の身近で働くようになっても、身分を隠したペリーヌは、祖父の母に対する悪意に直面する。人知れず涙を流すペリーヌの姿に、胸がつまる

マロクールの村で

汗



▲オーレリィという偽名で、祖父の工場で肉体労働に明け暮れる。作品の終盤で労働者の待遇改善が描かれるなど、社会派な面もある作品だった

友情



◀工場の技師、ファブリもロザリー同様ペリーヌの心の支えとなった

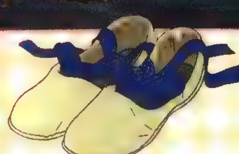




▲ペリーヌの親友、ロザリーは世話好きで、ウワサ話が大好き。フツーの女の子らしさで作品のトーンを明るくしてくれた

サバイバル





▲マロクールでは荒れた狩猟小屋をわが家とする。食器やなべから下着、靴まで手づくりするたくましさを見せた

抱擁

「さあ、行っておあげなさい。もうがまんなさる必要はないんですよ。」（第49話）



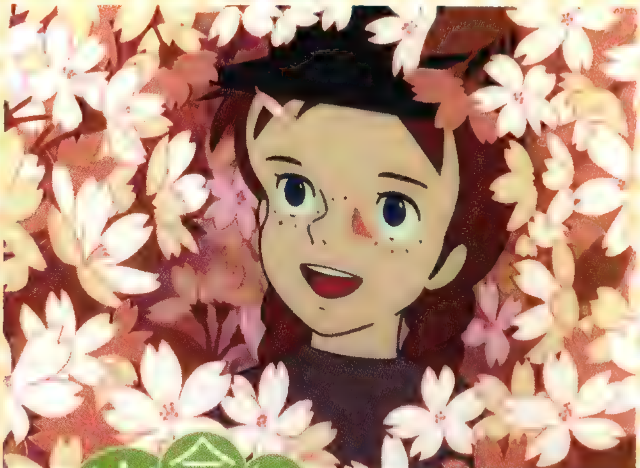
▶ペリーヌの心からの優しさが、いつしかビルフランの冷徹な心を溶かしていった。だからこそ、ついにペリーヌがビルフランの孫であることが証明された時、ふたりは心から神に感謝することができたのだ



原作の世界を美しく映像化した珠玉の名作

赤毛のアン

小さな村・アヴォンリーにやってきた少女。
おしゃべりで空想好きな赤毛のアンは、
たちまち人々の心に住み着いてしまった。
マシュウとマリラの愛情、親友との出会い。
やがてアンは、美しく成長していく…。



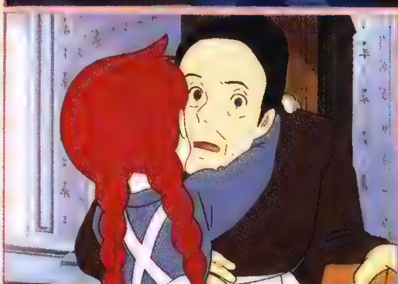


出会い



▲男の子を迎えに来たはずが、待っていたのは女の子。マシュウは驚く

マシュウとマリラの愛情に包まれて…









◀▼美しさと聡明さを身につけたアン。そんなアンを見つめるマシュウとマリラの瞳は、愛しさに満ちていた…





マシュウとの別れ…

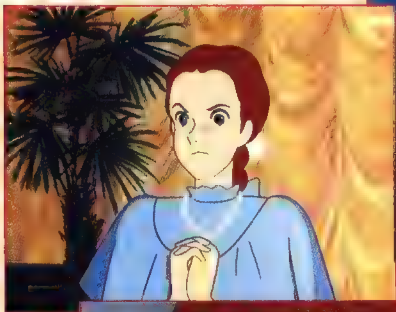




▲突然のマシュウの死。マリラとアンがこの悲しみを分かち合えるのはお互いだけだった

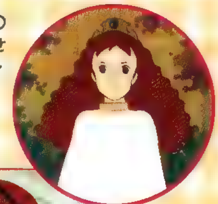
グリーン・ゲイブルズのアン・シャーリー

やせっぽっちの少女だったアンの表情は、成長と共に変化していく。移りゆく季節のように…。

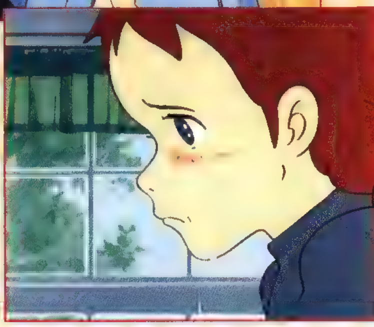


▼慈善コンサートで詩の朗読をするアン。前髪を上げた珍しいスタイル





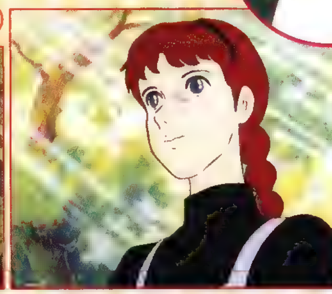
◀アヴォンリーの美しい風景に魅せられてしまうアン



▶アンの豊かな感情は泣いているときに、もっとも激しくあふれ出す。頬が涙に濡れる

「ねぇ、これ何色だと思う?」(1話)





◀教師になる決意をして新たな一歩を踏み出したアン。瞳は未来への希望に輝いていた

よきライバル ギルバート



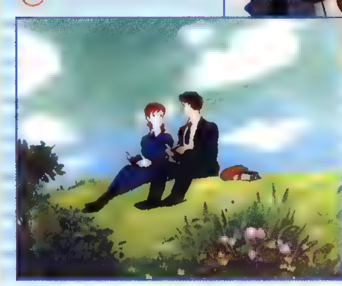
◀最悪の出会いをしてしまった二人。仲直りもできないまま月日は流れた…





「僕たち素晴らしい友達になろううね」(50話)

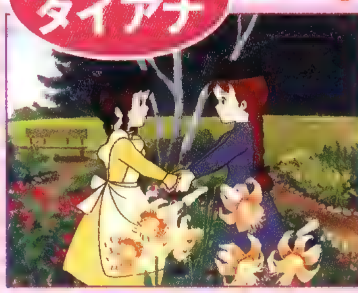




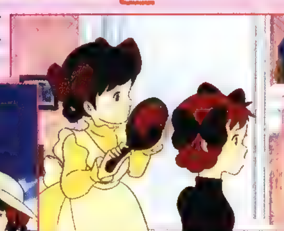
▲アヴォンリーの教職を譲ってくれたギルバートに、お礼を言うアン。二人はようやく素直な気持ちで向き合い、これまでの時間を取り戻すかのように、いつまでも話し続けた…

心の友 ダイアナ

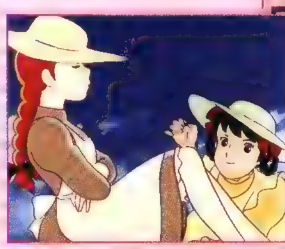
「我が心の友ダイアナ・バリーに忠実なることを我、厳かに誓います」(9話)



▲アンにとってダイアナは理想の親友だった。二人は、生涯の友となることを誓い合う



▲アンの髪を自分と同じ形に結い上げるダイアナ





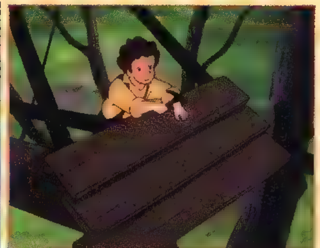
◀アンがクイーン学院に合格したことを、真っ先に知らせてくれたダイアナ。ダイアナはアンの才能を、とても誇らしく思っていた

勉強嫌いでいたずら大好き！
わんぱく少年トムの痛快、爽快アドベンチャー!!

トム・ソーヤーの冒険



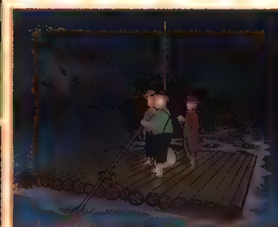
▲男の子のほとんどは、はだしで野山をかけまわる。自然が残っている村ならでは。遊びも、布を丸めたボールを使った野球や木でつくった剣のチャンバラ、カエル跳び競走など、素朴だけど楽しいものばかりだ



◀ハックのために木の上に小屋を作るトム

遊びはワイルド!





海賊ごっこ

▲家出したトムは、ベンとハックを仲間にして、いかだでミシシッピー川の上流にあるジャクソン島でキャンプ生活を楽しむ。ところが村では3人が溺死したと思って大騒ぎになっていた



◀自分たちの葬儀中にひょっこり戻ってきた3人は、村の英雄に！

開拓時代のなごりを残す、古きよきアメリカ。
ミシシッピー川を望む大自然に抱かれて
勉強そっちのけでかけまわる、わんぱく少年トム。
親友ハックといっしょにわくわくの冒険に出発だ！





▲将来、結婚することを約束したトムとベッキーが、誓いのキス。ところがトムが「前にも婚約した女の子がいた」と言ってしまい…

◀怒ったベッキーは、トムがつんでくれた花束を顔面に投げつけた

ロマンスもいっぱい

「これからはいつもぼくといっしょだよ。学校でも遊ぶときも、ダンスパーティーのときにも……」（第12話）



▲船着き場で遭ったベッキーに一目ぼれ

▶トムの優しさを知ったベッキーもやがて夢中に…!?

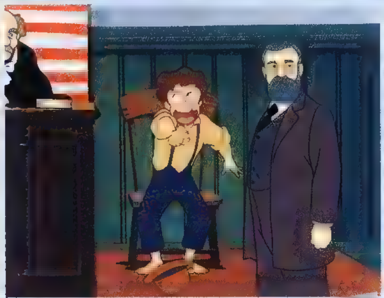




トムのワクワク事件メモ

勇気を出して証言

「インジャン、おまえだ。おまえがロビンソン先生を殺したんだ!!」（第40話）



▲トムが事実を証言すると…



▶インジャンは逃走した！

殺人事件を目撃！

トムとハックは、お化け屋敷探検に行く途中の墓場で、インジャンがロビンソン医師を殺害する事件の一部始終を墓石の陰から目撃してしまう





◀▼インジャンが手にしたナイフがギラリと光り、ロビンソン医師の胸に深々と突き刺さったのだった…



莫大な財宝発見！



▶洞窟にはインジャンが

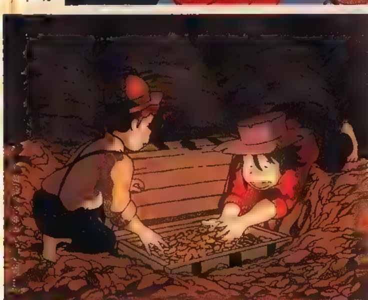


マクドウガルの洞窟で道に迷うトムは、インジャンが莫大な金貨の山を埋めた秘密の場所を発見する。手に入れた金貨は、なんと12,152ドルもあったのだ





▶▼二人はインジャンが宝を発見する場面を目撃

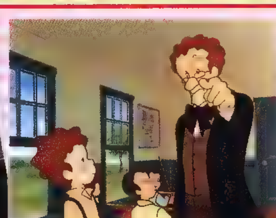


▼金貨は二人のものに！

きびしいおしおき！

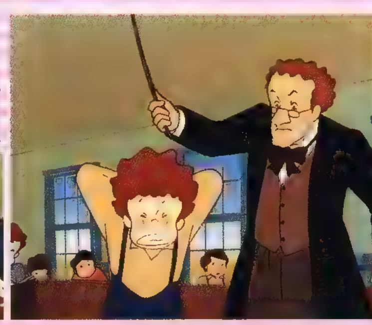


▲ドビンズ先生が夏休み中に退職して、新学期からはローズ先生に。むち打ちのおしおきは変わらない





▶▲立たされるのは日常茶飯事



▶ドビンズ先生のむち打ちの罰

みんながあこがれた無人島のサバイバル生活

ふしぎな島のフローネ

家族ロビンソン漂流記



フローネ一家は、医師の父といっしょに医師不足のオーストラリアに移住することに。ところが、船が遭難し、フローネ一家だけが無人島に上陸する。自然の脅威と戦いつつ、めずらしい動植物、樹の上の家、サバイバル生活と、フローネはふしぎな島の生活を満喫するが……。





▲あんまり危機感がない、フローネの漂流生活だ

ロビンソン家の子どもたち

野性児



▲おチビちゃんのジャックは、貝のコレクターとなる（笑）





▶長男フランツはオーストラリア行きをしぶっていた。神経質で文句ったれなところが魅力!?

生活力



▶一家５人の食料をまかなった、農家出身の母アンナの畑。野生動物の侵入に悩まされながらも立派な畑ができて、食料問題は解決

新たな航海へ！

▼火山の爆発が近いことを知り、モートンの指示で力を合わせて船を造り、脱出する



隣人



▲なんと、新たな漂流者がいることが判明。船乗りのモートンと、船員の少年タムタムだ。モートンは、一家と別行動を取ろうとするが……

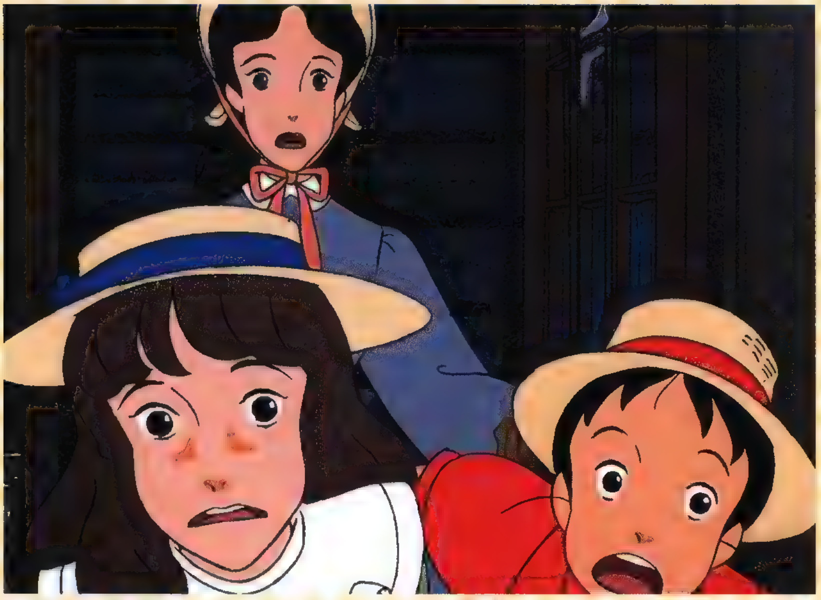
気のどくなベイツさん



一家に不安の影を落としたのが、３５話で登場した白骨。その日記から、先輩漂流者のベイツという人物であることがわかる。手厚く葬った

新天地で次々と襲う困難と戦う家族

南の虹のルーシー



理想の農場を建設しようと、オーストラリアに入植したポップル一家。
動物が大好きなルーシーとお姉ちゃんのケイトは、年が近いせいか張り合ってばかりの楽しい姉妹。
一家は土地を手に入れることすらできず、生活の苦労が続く……。あの虹をわたって、夢をかなえることができるのか──？



▶右はイギリスから連れてきたハムスターのモッシュ

夢やぶれて・・・



▲約束の土地は、いじわるな隣人ペティウェルの陰謀で手に入らない。失意の生活が始まることに……

「犬もほしかったの！」





◀▲野生のディンゴの子を飼いたいと言い出すルーシー。でもディンゴは家畜を襲う犬科の動物。さっそくヤギと仲良くさせようと訓練する

CATCH THE RAINBOW



▲プリンストンの好意でついに農場を手に入れる一家。売られたヤギとも再会、喜びをかみしめるルーシー！



◀長女クララの婚約は、ポップル一家の明るい話題

事故





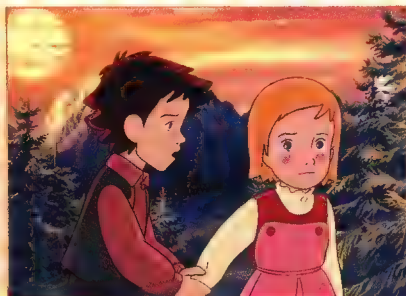
◀▲ルーシーは町で事故に遭い、記憶をなくして親切なプリンストン一家と暮らしていた。そんなルーシーの記憶を呼び戻したのは、ディンゴのリトルだった

幼なじみの二人が乗り越えていく試練の日々

アルプス物語
わたしのアンネット

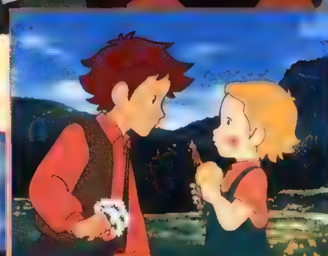
アルプスに囲まれたロシニエール村。
幼なじみのアンネットとルシエンは、
いつも一緒に過ごしてきた大親友だった。
しかし、ダニーの事故がきっかけで、
二人はお互いに傷つけ合ってしまう。
永遠に続くかと思われた辛い日々。
しかし、アンネットが心の扉を開いたとき、
そこに希望の光が差しこむのだった…。





▶勝ち気な性格が災いして、ルシエンの言葉を拒絶してしまうアンネット。二人の絆にヒビが入る

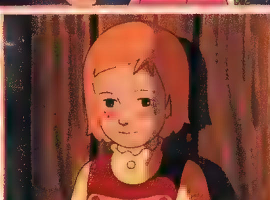
悲劇のはじまりはダニーの事故…





◀▲アンネットとの気持ちのすれ違いからダニーにやつあたりするルシエン。それが思わぬ事態を招く

アンネットの苦悩





▶ルシエンを許せない自分の感情に苦しむアンネット。友情が失われてしまったことに絶望するルシエン。二人の心は、救いを求めていた…

ルシエンの苦悩

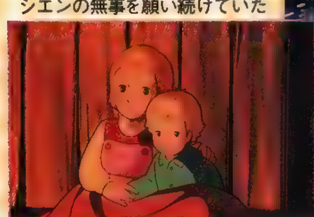




「待ってろダニー、必ずギベット先生を連れてくる…！」(40話)

▼▶ダニーのために、命がけで吹雪の峠越えに挑むルシエン。アンネットは、ただひたすらルシエンの無事を願い続けていた





やがて訪れる和解



▲自分を助けてくれたルシエンに、アンネットはやっと素直になることができた。「ごめんなさい…ルシエン」

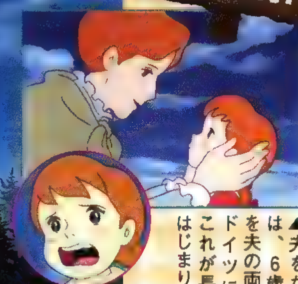
あきらめずに努力すればいつかは「夢」がかなうと教えてくれた―

牧場の少女カトリ

森と湖が美しい国
フィンランド。
母と別れたカトリは
家畜番として働きに。
学校には行けないけれど
カトリは本を読み、
夢を追い続ける。
カトリを大切に思う
温かい人々に囲まれて…。

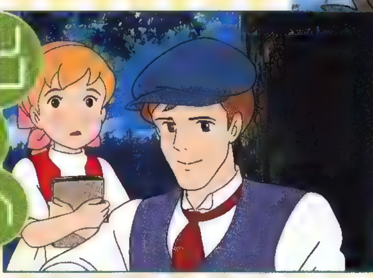


母との別れ



▲夫をなくした母は、6歳のカトリを夫の両親に預け、ドイツに働きに。これが長い別れのはじまりだった…

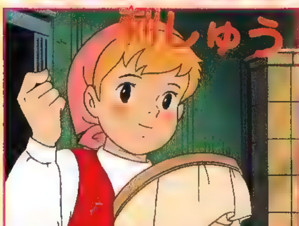
出会い



▲祖国の独立運動に燃える青年アッキは、カトリに出会ったとき叙事詩『カレヴァラ』の一節を口にする。アッキから本をもらったことがきっかけでカトリの向学心に火がつく

「乙女よ　余人のためではなく我がために
珠(たま)の連なる首飾りを巻き十字架を胸にかけよ
乙女よ　我がためにその美しき髪を編み
やわらかきリボンを結べ」（13話）

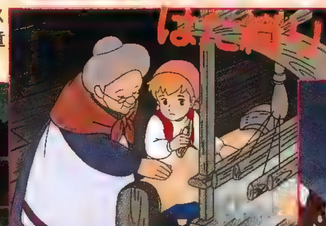
身を粉にして働きながらも カトリは「夢」を追い続けた…



▲ロッタ奥様の小間使いも。ロッタが仕事にしている刺しゅうを習い、めきめき上達！

▼クウセラ屋敷ではクラウス坊っちゃまの子守。時には童話を読んであげることも…





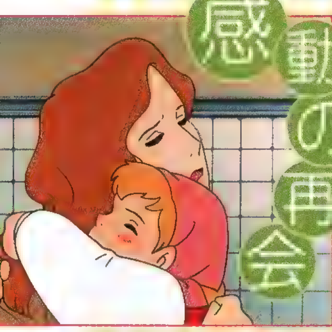
▲冬、農作業ができない間はグニンラお婆さんに染め物や織り物を教えてもらう

▼ライッコラ屋敷の家畜番をうまくこなした。ただし、北の牧場では牛が崖下に落ちて、ピンチに！



夜は勉強…。ついに学校に！

感動の再会



▲病をえた母が同じ街の病院に入院していることがわかり、カトリは走った！

▶▼夜、眠気と戦いながら本を読み、算数を勉強したことが、後に実を結ぶ。ロッタ奥様の好意で小学校に行かせてもらえることに！





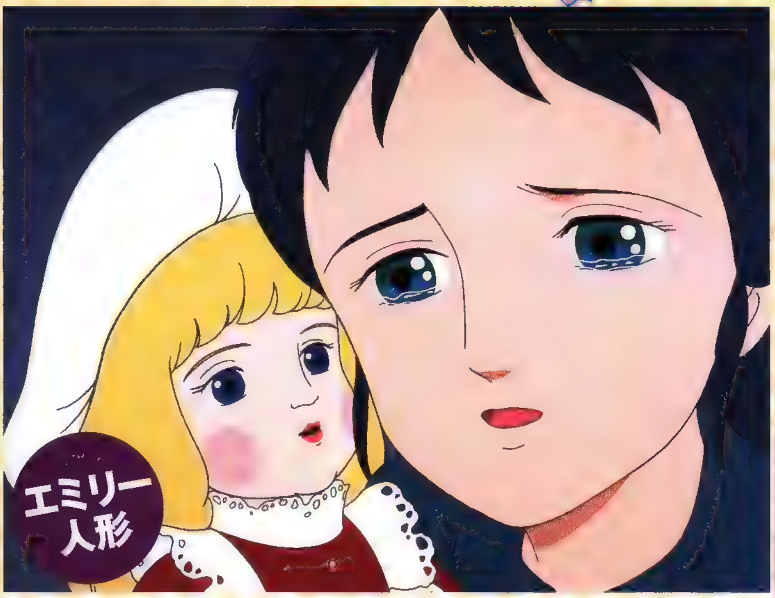
友情



▶カトリを助ける金持ちのお坊っちゃんマルティと農場で働くペッカ。ふたりはカトリをめぐるライバル！

「いじめ」が社会問題ともリンク！ セーラの名は薄幸の美少女の代名詞に

小公女(プリンセス)セーラ

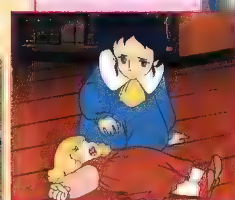


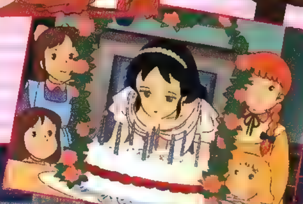
インドからやって来た、
美しく気高い少女セーラ。
ダイヤモンド・プリンセスとして
愛されたセーラの運命は、
ある日を境に一転する。
ミンチン女子学院での仕打ち、
心の支えはエミリー人形。でも、
どんなに貧しくても、つらくても、
セーラは誇りを失わない。
そんなセーラの屋根裏部屋に
ある日、魔法がかけられた…！

お洋服でたどる流転の人生

▼節目節目の衣装は、セーラの人生を反映している

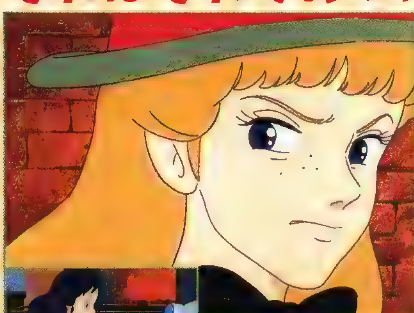








それはそれであっぱれな人たち





◀▲セーラを嫌い最終回も一人だけイヤイヤ手を振っていた、あっぱれなラビニア



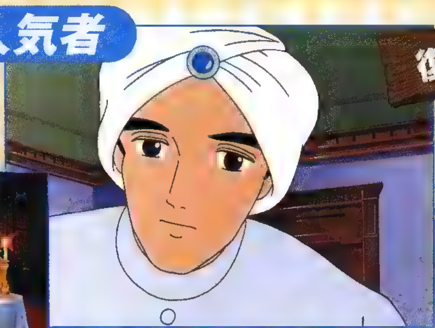


▲◀学院を守るためなら掌を返すことも平気なミンチン先生

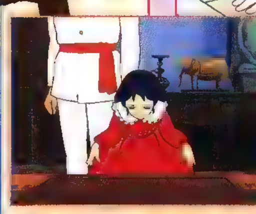
意外な人気者

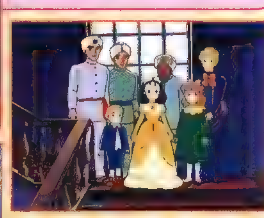
▼セーラが病気で倒れたときから、屋根裏部屋には謎の魔法がかけられるようになった





▲褐色の二枚目。セーラの屋根裏部屋に跳んできたラムダスさんは、女性ファンの人気者に

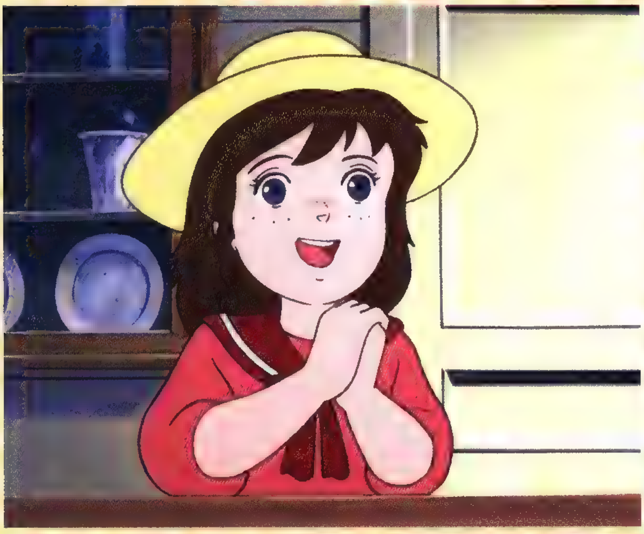




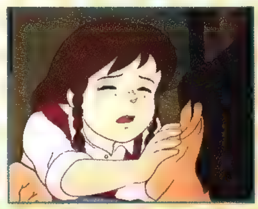


元祖・癒しの女王はポリアンナ!? みんなが癒された「よかった探し」!

愛少女ポリアンナ物語（ストーリー）



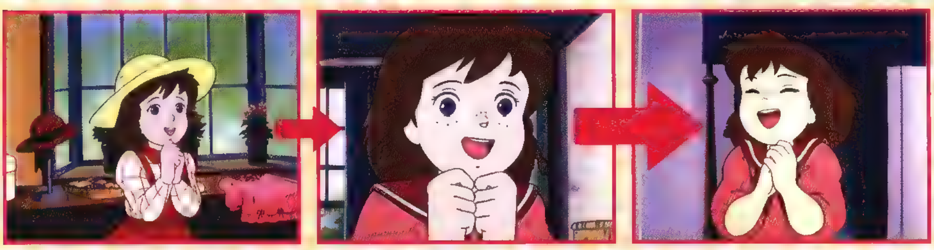
お父さんが残した言葉を信じて、
「よかった」を探すポリアンナ。
気難しかったパレーおばさんも、
ベルディングスビルの人たちも、笑顔が
膨らんでいった。
ポリアンナの足が動かなくなったとき、
「もうよかったを探せない」と泣いたとき、
町の人たちが、パレーおばさんが、
幸福のお返しをしてくれるのだった。



◀牧師だったポリアンナのお父さんが天国に召されるとき、ひとり娘に残してやれたのは、この言葉だけだった

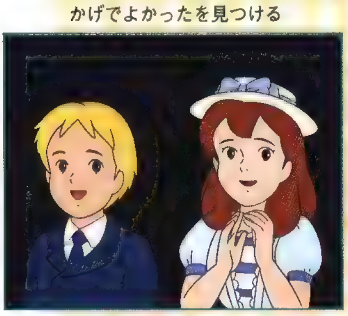
「よかった を探すんだ」

よかったポーズ



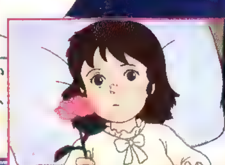
◀胸元で両手を組んで「ああ、よかった！」それが、アニメで考案された、お約束のよかったポーズだ。このポーズにさらに表情が加わって、よかった度の違いが表現される。ちなみに、左の3枚は、右に向かうほどよかった度が高い。

▼ジェニーたちもポリアンナのおかげでよかったを見つける





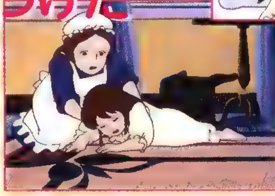
▲大きな哀しみのおかげで、ポリアンナは、パレーの愛を知る



▼西部で、お父さんとふたりで暮らしていたときから、リスのチップマックはかけがえのない友だちだ

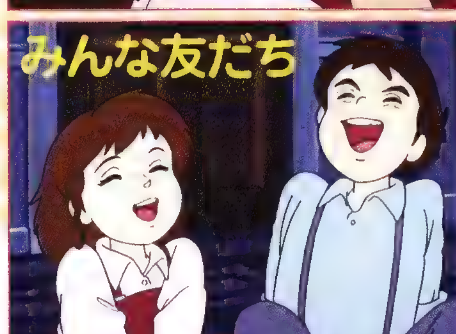






◀▲歩けなくなり泣くばかりだったポリアンナ…

▶ジミーともすぐ仲良くなって、一緒に家も建てた！

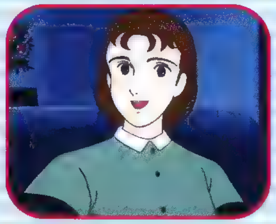


よりそって生きるマーチ家の家族愛に心があたたまる

愛(あい)の若草(わかくさ)物語(ものがたり)

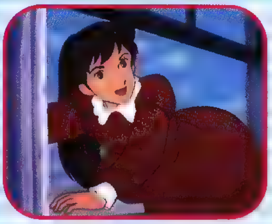
マーチ家の四姉妹

メグ



▶おしとやかな長女のメグ。つましい生活を支えながら、華やかなパーティにも憧れる年頃だ

ジョオ



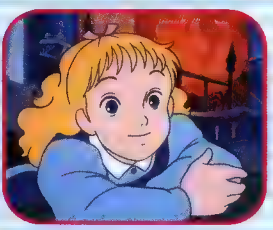
◀勝ち気で活発な次女のジョオは、小説家志望。思ったことをはっきり言う性格は、見ていて爽快だ

ベス

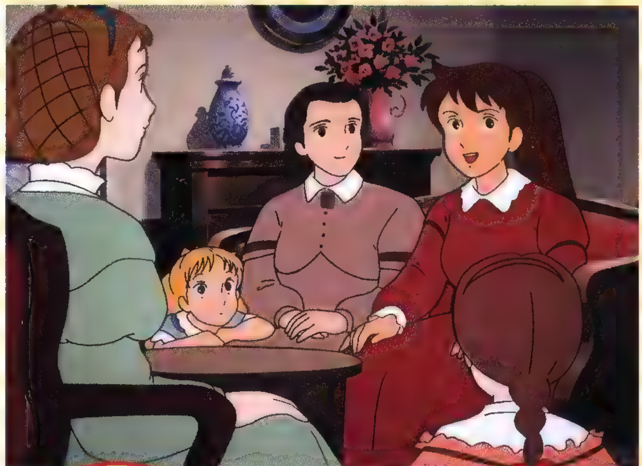


▶内気でやさしい三女のベス。ピアノや病気のエピソードで、ファンの感動の涙を誘うことが多かった

エイミー

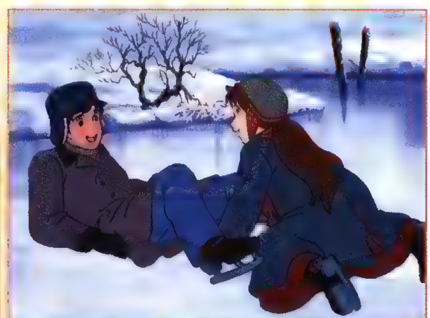


◀おしゃまな四女のエイミー。わがままや虚栄心から、失敗することも多かった、愛すべき末娘だ



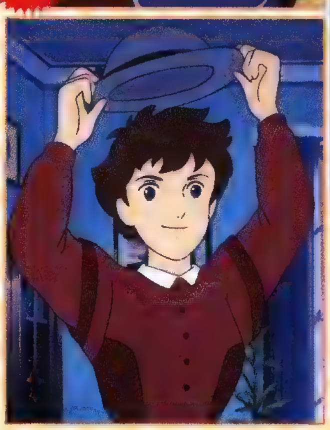


多感な年頃のマーチ家の四姉妹。
決して楽ではない生活も、
家族の心がひとつならあたたかい。
南北戦争に従軍した父親の帰りを
待ちながら、日々は過ぎていく。



▼▶日常の中で起こる、小さな事件。時にはトラブルもあるが、姉妹はひとつずつ乗り越えていく





病床に…



◀猩紅熱にかかったベスを誰もが案じた

「髪が長かろうが短かろうが、国の運命には関係ないわ」(第37話)

◀父の看病に向かう母親の旅費のために、ジョオは自慢の美しい髪を売った。本当はつらいのに強がるジョオの姿が愛しい

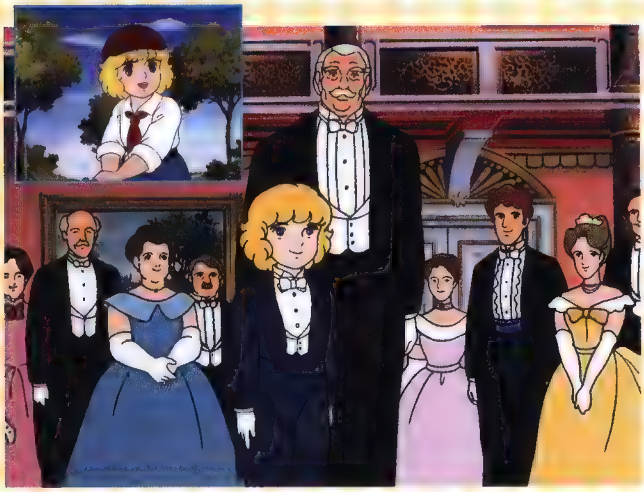
「おとうさま…」
「おかえりなさい、
おとうさま！」(第46話)



◀クリスマス、何よりうれしい家へのプレゼントは、父の帰宅だった！　家族の喜びに、見る者も胸があたたかくなる

セディの優しさと無邪気さに、かなう者なし！

小公子（しょうこうし）セディ



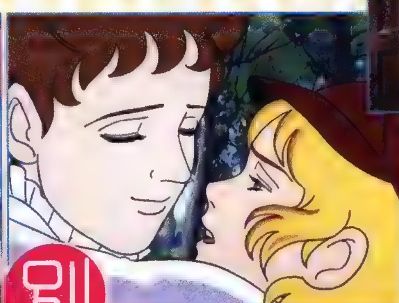
「僕が伯爵になった時は おじいさんみたいな いい人になろうと 思います」（38話）

優しい父母の愛情に包まれ
美しく健やかに成長したセディ。
そのセディに訪れた運命の激変！
貴族の世継ぎとなったセディを迎えるのは
気難しく頑迷な老人、ドリンコート伯爵。
セディの純粋さが次第に伯爵を変えていく…。

ニューヨークの下町から 貴族の後継者としてイギリスへ…

待っていたのは厳格な祖父







死

別れ

▲父の死がセディの運命を変えた。英国では母を嫌う伯爵の意向で母とも別々に

新しい友達



◀セディを「お兄ちゃん」と慕うコッキー。セディは人をわけへだてしない

セディの優しさが 伯爵を変えていく

陰謀

▼真の後継者は別にいる!?　謎の人物ミンナの登場で波瀾が！



「わしとお前は いつも一緒だ！」（41話）



◀伯爵はいつのまにかセディを深く愛していることに気づき、慟哭する!!

はじめての仕事



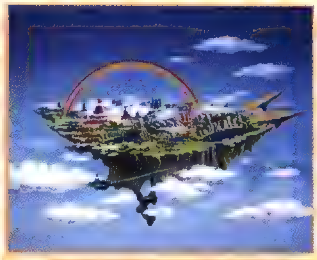
▶領主の後継者としての初仕事は、貧窮している小作人を助けること

永遠の子どものピーターパンとファンタジーの世界へGO！

ピーターパンの冒険

妖精たちが飛び回り、海賊たちが襲いくる、夢と冒険の国・ネバーランドへようこそ！人を驚かせるのが大好きなピーターパンの案内で、不思議な世界をアドベンチャー。楽しいことを頭に描き、レッツ・フライ!!

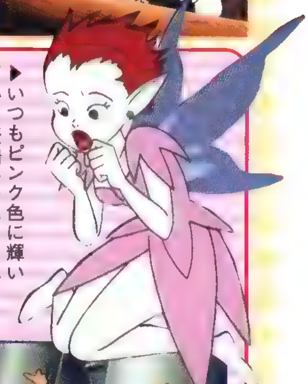




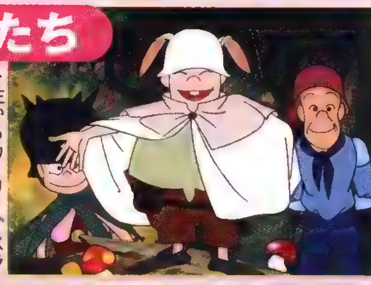


▲▶ネバーランドを訪れる、ウェンディと弟たち

ネバーランドの仲間たち



▶いつもピンク色に輝いている妖精ティンクは、おちゃめないたずら者



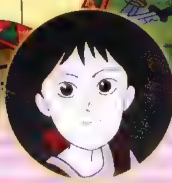
▶左からカーリー、スライトリー、トートルズ



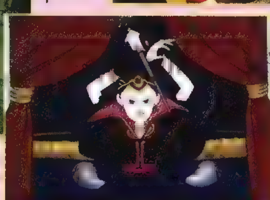
◀タイガー・リリー



▲ルナの祖母の先代ダークネス



▲ルナは祖母の野望に反対する



▲ルナが黒い鏡の中に良心を封印されて新たなダークネスに！

新たな冒険者



◀ピーターパンが再びロンドンを訪れたのは約20年後。ウェンディの娘のジェーンがネバーランドの新たな冒険者

ピーターパンの永遠のライバル



▲顔を合わせれば命賭けで戦う宿敵の海賊フック船長



◀海賊の手下



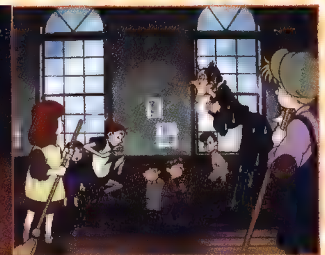
▲時計ワニは船長の天敵！

孤児ジュディの明るさに笑い 恋にときめき 悩みに切なさせまった

私のあしながおじさん







「まあ、なんて足の長い
おじさんなの……
そうだわ、
"あしながおじさん"ね！」
（第１話）

「私を助けてくださる『あしながおじさん』ってどんな人？」
見ず知らずの紳士の善意を受けて、孤児のジュディは、
学園生活を楽しみながら、大人への階段を少しずつ上っていく。
喜びも悲しみも、すべては光に満ちた明日への一歩なのだ。

「おじさまが与えてくださったのは、
学費や生活費だったのではなく、
ひとりの人間として生きていく
勇気だったのです！」（第39話）





▲卒業式で答辞を読むことになったジュディの、感動のスピーチ！





◀▲友人と過ごす日々。やがてジュディは大学への進学を志す





◀▲あしながおじさんが愛するジャービスだった！
お幸せに……！



歌声は家族の心をつなぎ　自由と希望の新天地へ──

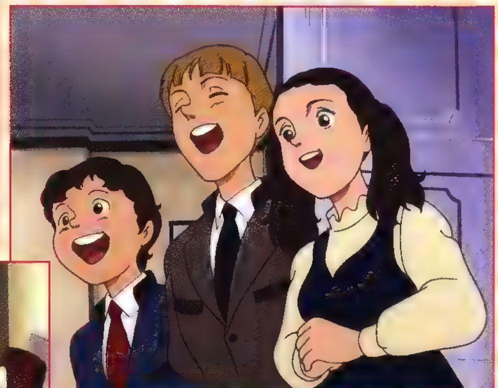
トラップ一家物語（いっかものがたり）

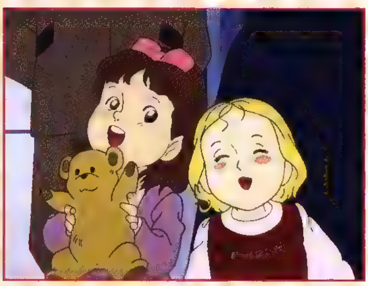


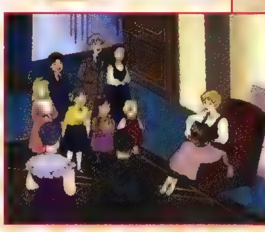
◀マリアは、持ち前の明るさとまっすぐな心で一家になじむ



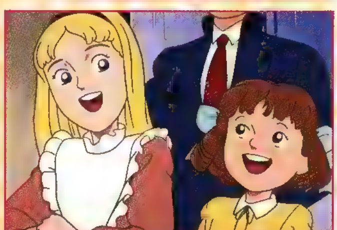
▶ノンベルク修道院の見習い修道女、マリア。名作劇場シリーズで最も年長のヒロインだ







▶反発していた子どもたちが、マリアに心を開いていく過程は見どころだ

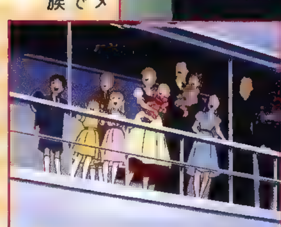


家族のいない18歳の見習い修道女が、
母親のいないトラップ男爵家に、
家庭教師としてやってきた。
一時はバラバラになりかけた、
難しい年ごろの7人の子どもたち。
マリアのまっすぐな心と明るい歌が、
新しい家族の絆を作っていく……。

誇りと信念を失わず生きるために……

▼自由の地、アメリカへ……どこで生きようと、家族はひとつだ





▲ナチスの侵攻。失われた母国、オーストリア。男爵は誇りと信念を守るため亡命を決意した！

「子どもたちの母親にはあなたがなるべきよ」（第29話）

プロポーズそして結婚！

▼マリアは家族に必要な女性なのだ…男爵は反対を退け結婚に踏みきる





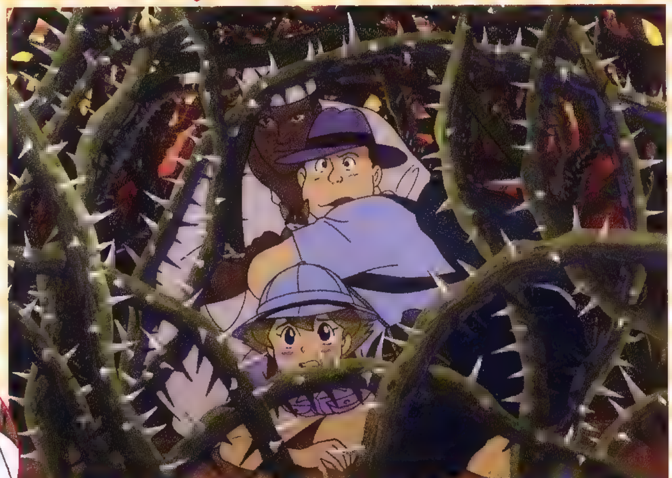
▲男爵の再婚相手イヴォンヌは自ら去っていった

ジャッキーのブッシュベイビーを自然に帰す冒険の旅

大草原の小さな天使

ブッシュベイビー

アフリカのケニア――
野生動物保護官の娘ジャッキーは
ブッシュベイビーの赤ちゃんと出会う。
マーフィと名づけたブッシュベイビーは
やがてジャッキーにとって大切な存在に。
そして、ジャッキーはマーフィをつれて
サバンナの冒険の旅に出る。
さまざまな困難に遭いながら
大自然の厳しさを学んでいくのだった……。



出会い

「私がこの赤ちゃんを育ててみせるわ！」（第1話）



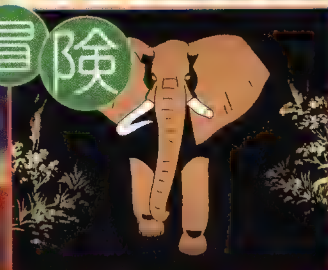


▲最初はミルクを飲ませるだけでもひと苦労だった

冒険

道なきサバンナを歩く危険な旅





▲密猟者に命を狙われたり、象の大群に遭遇したり、野火の中を走り抜けたりと、サバンナの旅はハラハラする展開が続く



「マーフィ、お願い この手紙を お父さんたちに とどけてちょうだい お前だけがたよりよ！」（第39話）



▲雨季の大雨によって、線路が決壊する。そのことを知らない列車を、なんとか止めようとするジャッキーは、マーフィに望みを託した

別れ

さようなら、マーフィ



▲ジャッキーは、マーフィは野生で生きるのが一番幸せなんだと考え、別れのつらさをこらえ優しく送り出す





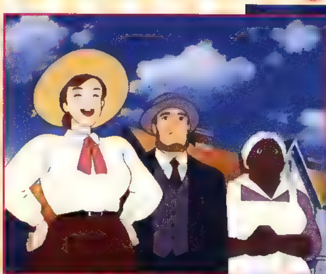
◀仲間のブッシュベイビーと一緒に、マーフィは林の中へ行ってしまう。ジャッキーには最後に別れのあいさつをするようにふり向いた

「愛の若草物語」のジョーが先生になって帰ってきた！

愛の若草物語

ナンとジョー先生

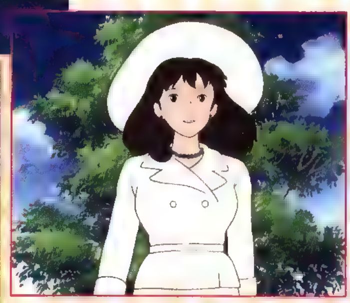
教師になったジョーが設立した理想の学校――プラムフィールド。緑豊かな風景は、集う者の心を癒す。そこへ、昔のジョーを彷彿とさせるおてんば少女のナンがやってきた。子どもたちは、あたたかさに包まれ人として大切なことを学ぶ。やがて、それぞれが歩んでいく将来に想いを馳せながら…。



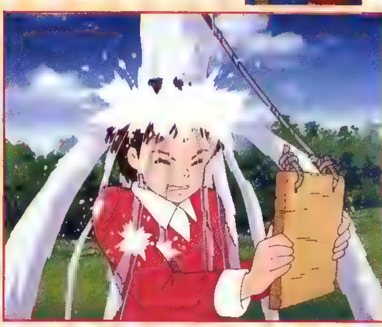
▲転入早々、大暴れしたナンに思わず笑ってしまうジョー

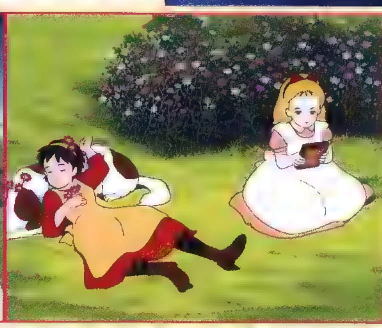


「あなたってなんて素敵な子なの！」（1話）

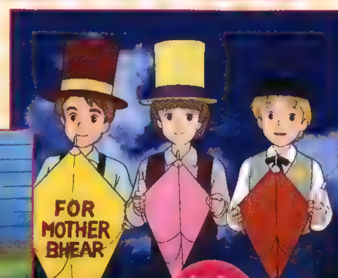


◀10年後、医者になったナンは懐かしいプラムフィールドを訪れる

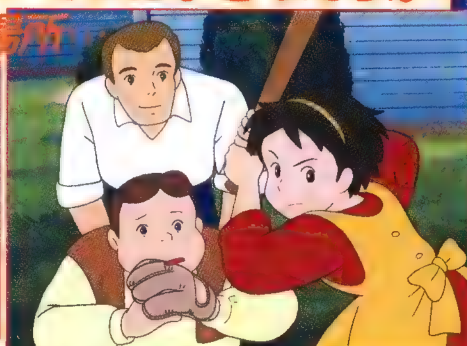




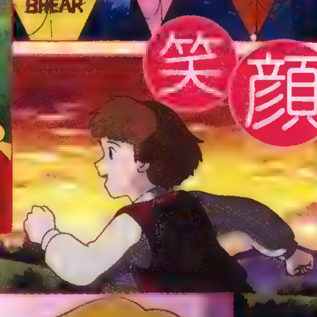
プラムフィールド―― そこは子どもたちが自分らしく生きる場所







▲人形遊びよりも野球が大好きなナン。試合ともなると、男の子たちに負けない名バッターぶりを見せる！



笑顔

出会い、――そして別れ…



▶旅立つことに迷うダンをジョーはやさしく励ます

◀再会できることを願い、ナンとダンは別れを交わす





涙

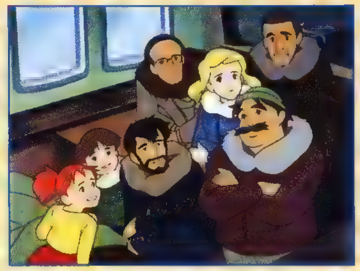
◀デーズィとデミの父親ジョンの死は大きな悲しみをもたらす

名作初のオリジナル！ 生命を育む海に誘われた海洋アドベンチャー!!

七つの海のティコ







「七つの海」から名づけられた
ナナミ。
父スコットとともに、
謎のヒカリクジラを探して，
海の冒険を続けている。
日本で出会う母の記憶、
大好きなティコの死、
「命は引き継がれるもの」
家族のことを思いながら、
生と死を目撃しながら、
ペペロンチーノ号は行く。
そして、
ヒカリクジラは現れた…！



▲ナナミが３歳のときに母さんは亡くなった。ナナミの一番の友だちティコに赤ちゃんが生まれた。父さんとの旅で、ナナミは家族のことを知っていく

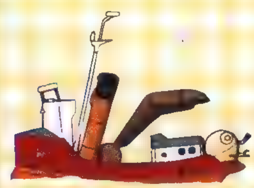
誕生



◀ナナミが生まれたのは、ティコが海岸に流れつき、スコットに救われた日だった

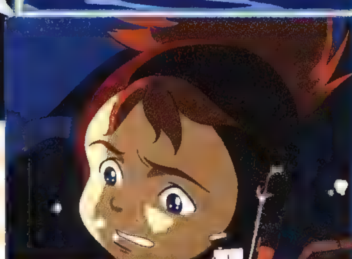
▼ティコの命は、ジュニアに受け継がれた…





死





▲氷山に閉じ込められたスクイドボールを救うため、ティコは命を懸けた

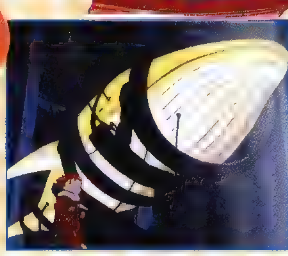
▶ティコの死は、ナナミにとって肉親の死と同じショック！



未来

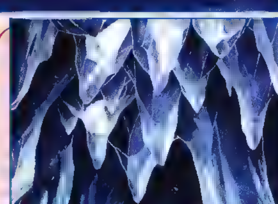


▲ヒカリクジラの声が、ナナミにだけは聞こえていた



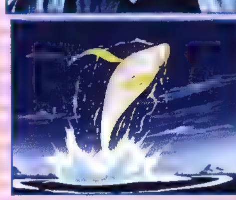
▲巨大企業GMCは、ヒカリクジラを捕獲してしまう！

発見



◀北極にあったヒカリクジラの墓場

▼探しつづけたヒカリクジラの手がかりを、スコットはナナミと一緒についに見つけた



▲ヒカリクジラは金色の姿を現す！



煙突掃除夫として働く少年たちの熱き友情…

ロミオの青い空

「僕たちは一緒だ…
どんなに離れていても…」





「忘れない。今日は僕たちの
誓いの日だ…」　(7話)

大きく変わるロミオの運命——

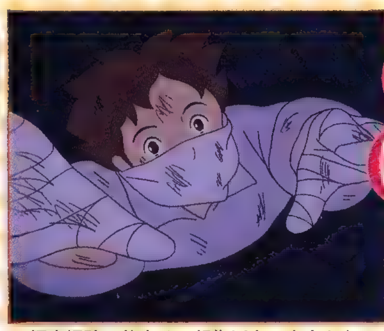
人買いルイニに売られ、ミラノで
煙突掃除夫として働く少年・ロミオ。
待ちうけていたのは、過酷な現実。
けれど、ロミオはかけがえのない
「心の宝物」を見つけた——。
それは親友アルフレドと誓い合った
永遠の友情。そして、仲間たち。
煙突から見上げた先には、
どこまでも青い空が広がっていた…。



▲旅立つロミオを、父親のロベルトは抱きしめることしかできなかった

「これでお前は
俺のものだ…」(3話)

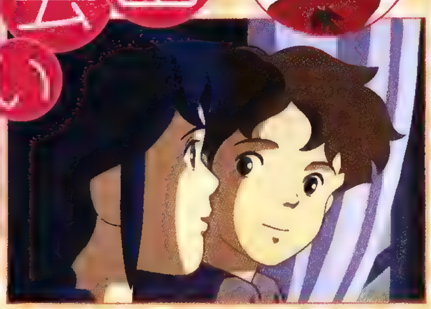




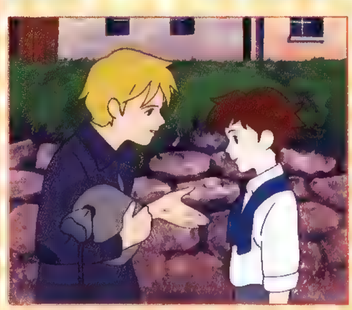
▲煙突掃除の仕事は、想像以上に大変なものだった。ロミオは必死で働く

出会い





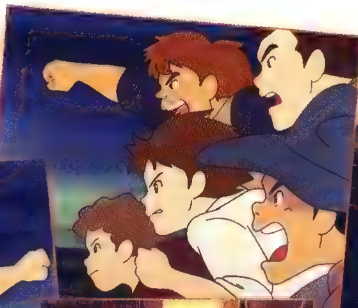
◀ロミオと親しくなったアンジェレッタは、読み書きを教えてくれた



▲川に落ちたアルフレドのカバンを拾ったロミオ。二人の友情が始まる

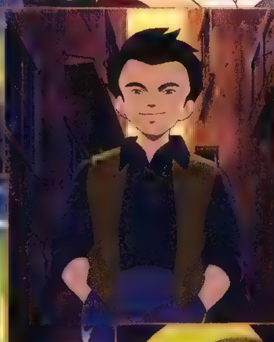
VS 狼団

▼ジョバンニ率いる狼団との決闘。ロミオはタキオーニと一騎討ちする





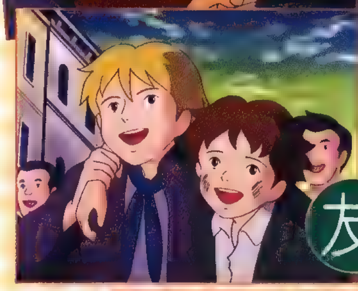
結成！ 黒い兄弟!!





▲煙突掃除の少年たちは協力し合うために「黒い兄弟」を結成した

友情

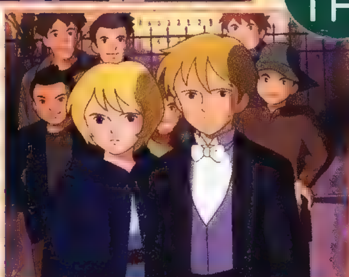


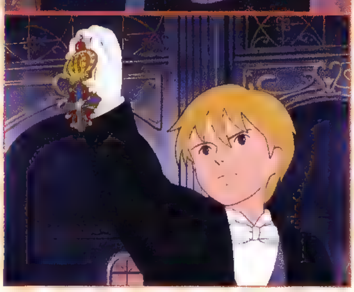




▲離れ離れになっていたアルフレドと教会で再会。再び友情を誓い合う

「その勲章は偽物です。本物はここにあります！」（28話）

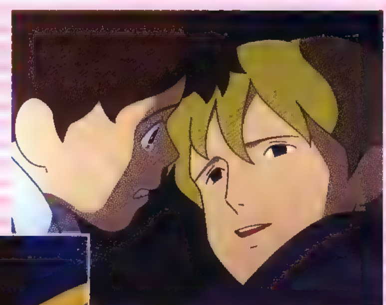




▲仲間の助けで大公邸へ潜入した貴公子アルフレド。国王の前で紋章を掲げ、叔父夫婦の陰謀を暴く

アルフレドとの永遠の別れ…

「僕が叶えられなかった夢を君が…ロミオ、ビアンカを…」

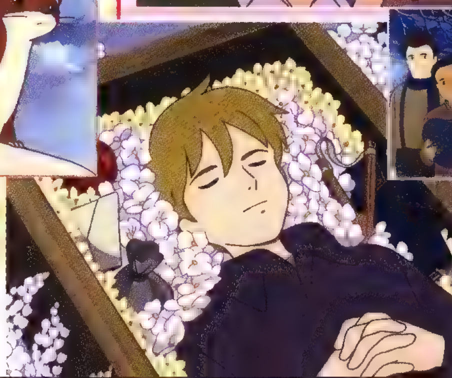




「夢をどうするの？続きを教えてよ…アルフレド…」（29話）



▲月日は流れ、ビアンカと結婚したロミオの腕には息子のアルフレドがいた…





▲アルフレドは心の中で生きている……ロミオたちはそう感じていた

ジョンとラッシーの固い絆に、涙うるうる……！

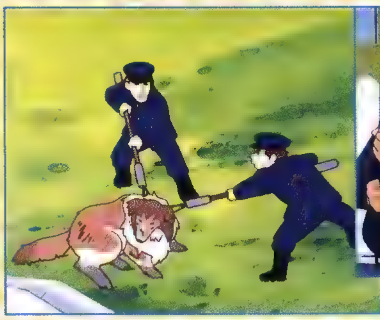
名犬ラッシー



ひとりっ子のジョンは、
迷子の子犬、ラッシーと出会う。
堅い友情で結ばれた
ジョンとラッシー。
やがて父の働く鉱山が
閉山の危機に陥り、
ジョンとラッシーに
試練がおとずれる……。



▲鉱山の社長の孫娘、プリシラとの初対面



▶ひたすらジョンのもとに向かうラッシーは、途中、野犬狩りに合う



▲鉱山の社長にあずけられたラッシー。離れ離れの生活の始まりだ

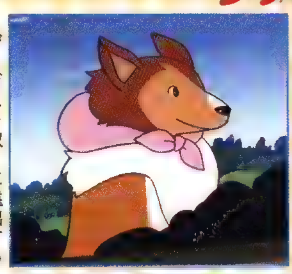


▲ラッシーを夢中で育てるジョン。両親共働きのジョンにとって、ラッシーは親友であり、兄弟でもあった

離れていても心はひとつ！



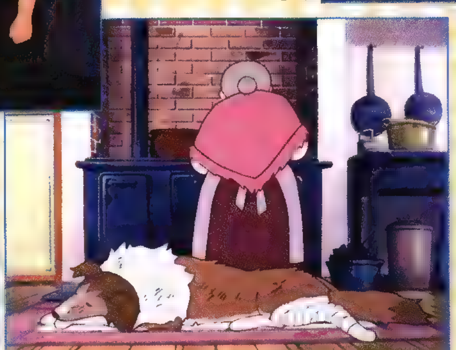
▲ラッシーを返してもらうため、ジョンも坑道に



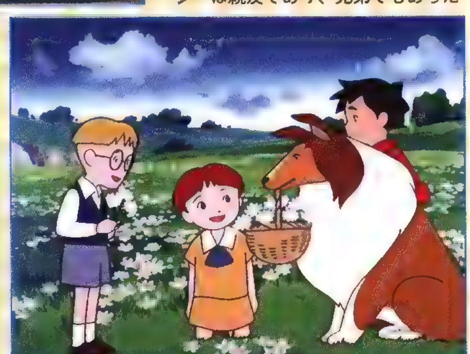
▶ザリガニを取りに遠出するジョンたちのお供。ちゃんと荷物を持っている（第5話）

▼ジョンとラッシー感動の再会！





▲旅の途中、親切な老夫婦に助けられるラッシー。夕食の支度の音に、なつかしいわが家を思い出す



▲すっかり成犬になったラッシー。ジョンの友達、サンディやコリンとともに、遊びもいたずらも一緒

どんな時も前向きなレミから元気をもらった！

家なき子レミ



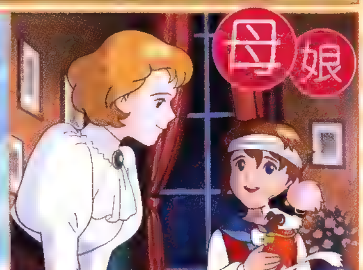
▲ヴィタリス一座と共に旅を続けるレミは、次第に多くのことを学んでいくことに



歌が上手なレミは、
貧しくても明るい女の子。
人買いに売られたレミは
ヴィタリスに助けられ、
旅の一座に加わる……。
優しいヴィタリスの死、
そしてどこかにいる、
本当のお母さん……。
出会いと別れをくり返し、
レミはどんな時も
前に向かって進み続ける。



▲アルプス越えの途中で降り出した雪。悲しい別れのプロローグでもあった



▲互いに母娘とも知らず、偶然知り合ったレミとミリガン婦人の交流が始まる



▶目指すパリを目前にして、ヴィタリスの命は尽きる。ひとりになってしまうレミ。前半のクライマックスシーン（第13話）

涙をふいて、前へ進め、レミ！

▼パリの下町で、つらい暮らしを支え合ったマチアとレミ。マチアも孤独な境遇だった







▲ガスパールは、レミでひと儲けしようとたくらむが……

◀レミとマチアは、幼い恋を育んだ

いつか
お母さんに
会える
気がする……

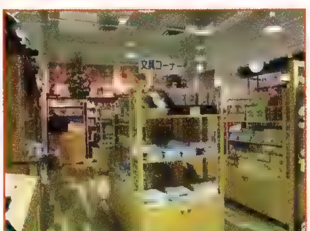
名作グッズがいっぱい!

日本アニメーションショップ

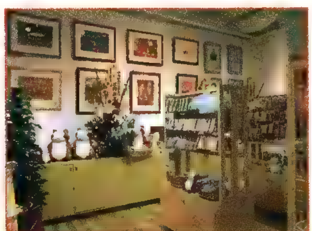
ラスカルと世界名作劇場



◀2001年7月にオープンした世界名作劇場専門ショップ。グッズが先行発売されることもあるので、情報はこまめにチェックしよう



◀文具やぬいぐるみ、食器など所狭しと並んでいる



◀雑貨のほか、名作アニメのセル画も売っている

場所	東京都千代田区丸の内1-9-1 東京駅名店街地下1階
営業時間	10:00〜20:30
定休日	なし
お問い合せ	03-5224-3941



日本アニメーションショップ 限定グッズ大紹介!

ショップやイベント会場でしか手に入らないグッズの一部を紹介。すでに完売したものもあるので欲しい人はお早めに!





▶世界名作劇場ケース入りピンバッチ　全5種（ラスカル2種、パトラッシュ、アメデオ、バロン）　各300円

◀ラスカルウォーターストラップ　全2色　各480円



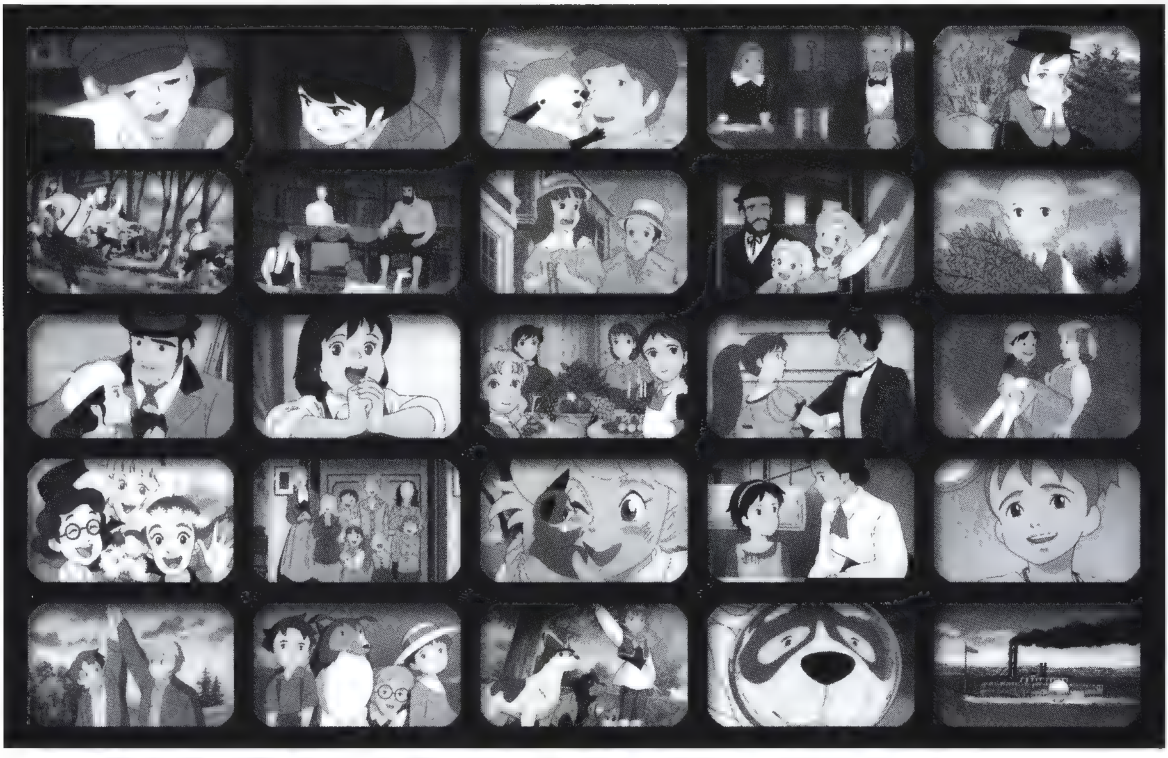
◀ラスカルダイキャストシリーズ（左からファスナーアクセサリー東京タワー・380円、アンテナリング東京駅前レンガ・380円、根付け・380円、ショートストラップ新幹線・480円）

人気商品BEST10

1. ラスカルぬいぐるみ
2. ラスカル人形焼き
3. ラスカルプチクッキー
4. ラスカルパペット
5. 世界名作劇場クランチ
6. 世界名作劇場玩具紙芝居(ハート)
7. 世界名作劇場玩具(カバヤ)
8. ポストカード各種
9. ショップ限定ストラップ
10. ミニハンカチタオル

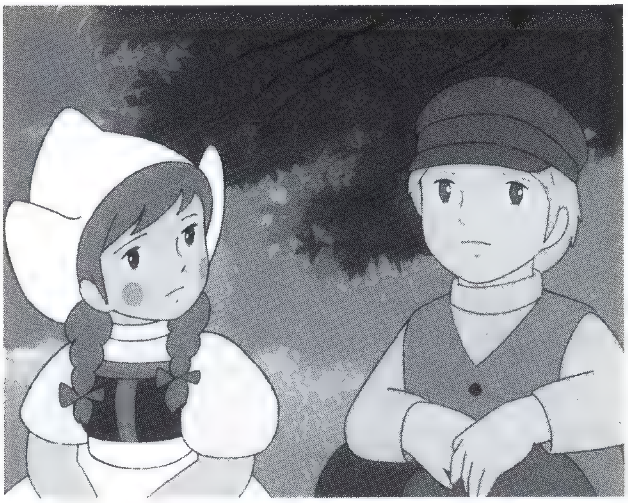
世界名作劇場
全23作品
完全解説

23年間にも及ぶ世界名作劇場の全作品、それぞれのストーリーや見どころを解説。
あわせて線画設定とともに、主要なキャラクターも紹介していきます。
忘れてしまったあの作品のあんなエピソード、あんなキャラクターの思い出が甦ってくる！



フランダースの犬

放映期間：1975年1月5日～12月28日



スタッフ 原作：ルイズ・ド・ラ・ラメー　製作：本橋浩一　製作管理：高桑充　企画：佐藤昭司　シリーズ構成：六鹿英雄・松木功・中西隆三　音楽：渡辺岳夫　キャラクターデザイン：森康二　場面設定：坂井俊一　美術監督：伊藤主計　録音監督：佐藤敏夫　撮影監督：黒木敬七　プロデューサー：高橋茂人・中島順三・松土隆二　演出：黒田昌郎　制作：日本アニメーション・フジテレビ　■主題歌：OP「よあけのみち」ED「どこまでもあるこうね」　作詞：岸田衿子　作曲：渡辺岳夫　編曲：松山祐士　歌：大杉久美子、アントワープ・チルドレン・コーラス（OP）（日本コロムビア）

キャスト ネロ：喜多道枝　ジェハン：及川広夫　アロア：麻上洋子（第1～3話）・桂玲子（第4話～）　コゼツ：大木民夫　エリーナ：中西妙子　ヌレット：遠藤晴　ミッシェル：雨森雅司　ハンス：村松康雄　アンドレ：白川澄子　ジョルジュ：駒村クリ子　ポール：菅谷政子　ノエル：永井一郎　金物屋：飯塚昭三　ヘンドリック・レイ：家弓家正　ナレーター：武藤礼子

ストーリー

友情と信頼の絆 ネロとパトラッシュ

ベルギーのフランダース地方、アントワープ郊外の小さな村に、絵の好きな少年ネロと、その祖父のジェハンが住んでいた。二人の生活は苦しかった。ジェハンが村の家々から預かった牛乳を、アントワープへ運ぶ仕事が、唯一の収入源だった。しかし二人は互いを思いやり、貧しい暮らしの中に小さな喜びを見いだして、日々を送っていた。ネロは、村一番の実力者、コゼツの娘のアロアと仲がよかった。しかしコゼツはこれを喜ばず、ことあるごとに二人を引き離そうとするのだった。

ある日ネロは、こきつかわれたあげく捨てられた労働犬を助けた。犬の名前はパトラッシュ。死にかけていたパトラッシュは、ネロの必死の看護で命をとりとめる。回復したパトラッシュは牛乳運びを手伝い、新しい家族となり、ネロと深い友情で結ばれていった。

ルーベンスのコンクール ネロの夢はふくらむが…

絵が好きなネロは、アントワープ大聖堂のルーベンスの二枚の絵を見たいと、いつも思っていた。絵を描く技術はまだ未熟だったが、才能には光るものがあった。ジェハンは、ネロの夢を応援し、励ます。だがコゼツに言わせれば、貧乏人のくせに仕事もせず絵を描くなど、ただのなまけものでしかなかった。

悩んでいたネロは、アントワープで、ルーベンスにちなんだ絵のコンクールが開催されることを知った。一等に入賞すれば、賞金をもらって絵の勉強をすることができる。ジェハンが病に倒れ、ネロは代わりに牛乳運びをすることになったが、仕事の合間に絵の勉強を続けた。だがジェハンの容態は次第に悪くなり、ついに息をひきとる。ネロは悲しみの底に突きおとされた。

襲いかかる不幸 失意と絶望と最後の光

ジェハンの死のショックを乗り越えて、ネロはコンクールに出品する絵を描いた。ジェハンとパトラッシュをモデルにしたその絵を描いていると、ネロはジェハンを失った悲しみがやわらぐような気がした。

ある晩、村の風車小屋が火事になった。ネロはゆえもなく、放火の疑いをかけられた。証拠はなかったのだが、コゼツににらまれたネロをかばう者は、村の中にいなかった。ネロに牛乳運びを頼むものはいなくなる。孤立したネロは収入を完全に失った。金も食べ物も底をつく。大家のハンスは、無情にもネロを住んでいる家から追い立てた。

ネロの最後の希望は、コンクールに入賞することだった。いよいよやってきた入賞発表の日。しかし一等の絵は、ネロの絵ではなかった。ネロの希望は、完全に絶たれたのだ。

失意の帰り道、ネロは雪の中でずっしりと金貨で重い財布を拾う。それはコゼツが銀行からおろしてきた、二千フランの大金だった。そのころ、コゼツは半狂乱になっていた。その大金を失うことは、コゼツの破産を意味していたのだ。

ネロは雪の中、コゼツの家に財布を届け、そのまま去る。後でその事実を知ったコゼツは、ネロのくもりのない心を知って、これまでの仕打ちを深く後悔した。

コンクールの審査でネロの絵を推した審査員の画家や、ネロの身を案じた人々が、ネロの小屋を訪ねる。しかしネロの姿はなかった。

ネロはパトラッシュとともに、疲れきった身体でアントワープの大聖堂にたどりついていた。その夜は、奇蹟のようにカーテンが開いていた。ネロは、あんなにも見たかったルーベンスの二枚の絵を、目の当たりにする。至福に包まれたネロは、パトラッシュを抱いて目を閉じる。その魂は天上へと上っていった。

キャラクター紹介

ネロの周囲には、彼をあたたかく見守る理解者もたくさんいた。逆にそれが、悲しいラストの涙をさそう。決して一人きりではなかったのに、なぜ……。ネロをとりまく人々を見ていこう。



パトラッシュ
▲ネロに助けられた労働犬。ネロを慕い、兄弟のように保護者のように、ぴったりと寄り添う

ネロ
▲おじいさん思いで絵の好きな優しい少年。パトラッシュと兄弟以上の絆で結ばれる

アロア
◀ネロと仲のいい幼なじみ。ネロの純粋な心を、誰よりも理解している

ジェハン
◀ネロの祖父。絵が好きな孫をあたたかく見守る

ヌレット
◀世話焼きな近所のおばさん。ネロをかわいがる

コゼツ
▶アロアの父。村一番の金持ち。ネロをさげすみ、アロアから遠ざけようとする

エリーナ
◀アロアの母。優しい人でネロをかばうが、コゼツには意見を強く言えない

ハンス
◀ネロの家の大家。コゼツにおべっかを使いつつ、ネロを目の敵にしていじめる

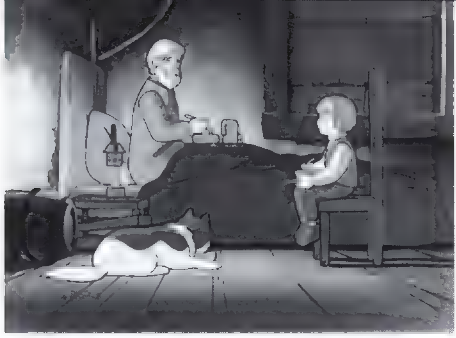
アンドレ
▶ハンスの息子で、気弱な少年。次第にネロの理解者となる

金物屋
◀パトラッシュの元の飼い主。回復したパトラッシュを取り戻そうとした

ミッシェル
◀山の中で暮らす木こりで、ネロの理解者。ジェハンにネロのことを頼まれる

ポール
▶ジョルジュの弟。兄貴の後をついて回り、言葉を真似る

ジョルジュ
▲アントワープに住むネロの友達。責任感が強く頼りになる



解説

日本アニメーションの名作劇場第1回作品。ラストの悲劇を知る視聴者から、放映中、テレビ局に「ネロとパトラッシュを死なせないで！」という投書が殺到したことが話題になった。視聴率は平均で22・5%、最終回では30%を越えた。

涙なしに見られないラストシーンは、あまりにも有名だ。現在でも、「なつかしのアニメ特集」的なテレビ番組で、感動の名場面として繰りかえし放映されている。そのため、放映当時見ていなかったが、作品名と悲しい結末だけは知っている、という人も多い。

監督（クレジットでは演出）の黒田昌郎は、その後名作劇場シリーズで、『ふしぎな島のフローネ』『ピーターパンの冒険』も監督した。また、1997年に『フランダースの犬』が新作劇場版として公開されたときには、再び監督として登板している。

天使たちがネロとパトラッシュを天上へと導いていくラストシーンは、クリスチャンだった当時のスポンサー、カルピスの会長の強い意向で、最初から決定していたものだそうだ。死後の幸せを思わせるナレーションは、確かにキリスト教的な視点で語られている。

キャラクターデザインは、詩情あふれる丸く愛らしい子どもや動物のデザインに定評がある、故・森康二。ネロとアロアが踊るかわいらしいオープニングやエンディングに、彼の持ち味がよく現れている。

このセリフがツボ!!

「友達が困っているときに助けるのが、本当の男の友情だ！」（第24話）



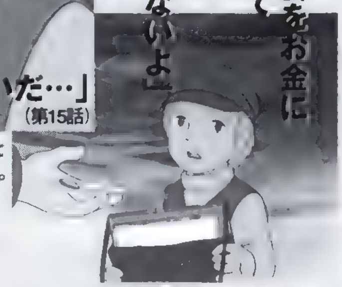
▲ジョルジュは、本当に男気あふれる友人だ。こういうことを口に出さずとも、いつも思っている。生活に困ったネロのために、仕事を探してきたこともあった

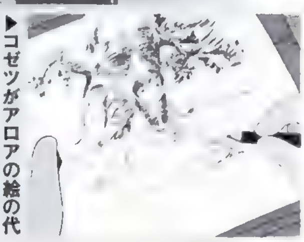


「あぁ、紙のにおいだ…」（第15話）

▲アロアからもらった古い帳簿が、ネロにとって初めて手にする画材としての紙だった。ネロのけなげな喜びように、涙が出る……

「アロアの姿をお金にかえるなんて僕にはそんなこととてもできないよ」（第15話）





▶コゼツがアロアの絵の代価としてさしだした銅貨を、ネロは受けとらない。お金が欲しくて、絵を描いているのではないのだ……

「絵を描くって怠け者のすることと？」（第37話）



▲怠け者とは……無理解なコゼツの言葉に、ネロは傷つく。でもこの後ジェハンはネロを励まし、応援してくれた

「何か描いて」（第15話）



▲絵が好きなネロの力になりたいアロア。初めての紙に緊張するネロにそっと寄り添う。小さな恋のメロディ……

ネロとパトラッシュの銅像

アニメ放映以降、アントワープにはたくさんの日本人観光客が訪れるようになった。そのため現在では、アントワープ大聖堂前広場に記念碑が、舞台となった郊外のホーボケン村のあたりにネロとパトラッシュの銅像が、建てられている。



憎むべき悪役たち！

ネロに辛くあたる大人たちは、本当に憎々しい。コゼツは親バカ丸出しで、金物屋は乱暴なヤクザ。しかし一番視聴者が憎んだのは、二枚舌のハンスだろう。強い者にはヘイコラし、弱い者はひたすらいたぶる。変わり身の速さはお見事！



この場面がツボ!!

心あたたまるシーン

▶▼アロアがいとこからもらった水晶玉に、ネロやパトラッシュの顔が大きく曲がって映る。驚いたパトラッシュは思わず吠えて、二人に笑われた。ほのぼのとした笑いに満ちたシーンだ



「ね？ きれいでしょう？」（第22話）



原作と原作者

原作者はウィーダ、本名ルイズ・ド・ラ・ラメー（1839～1908）。イギリスに生まれ、20歳ごろから作家活動を始めた。早くにイタリアに移住して、フローレンスで生涯を過ごした。40編ほどの小説と、短い物語やエッセイを書いたが、現在読むことができるものは少ない。晩年は貧しかったという。

『フランダースの犬』は、ウィーダがベルギーのアントワープを旅した記憶をもとに、1871年に執筆された。当時は、丘の上の風車も、ネロとパトラッシュが歩いた道も、物語のとおりに存在した。残念ながら、現在はない。

『フランダースの犬』は意外にも、出版されたイギリスでは忘れられ、舞台となったベルギーでもまったく知られていなかった。日本に最初に紹介されたのは、1907年。ハチ公にも通じる、パトラッシュのひたむきな忠犬ぶりと、切なく美しい悲劇が、日本人の心をとらえたのだろう。以後、現在にいたるまで読みつがれてきた。

原作の最後では、亡くなったネロとパトラッシュは、あまりにも強く抱きあっていたので引きはなすことができず、一緒に墓に葬られたことになっている。

ワンポイントコラム　ネロが憧れた“ルーベンス”ってどんな画家？

ルーベンス（1577～1640）は、17世紀バロック絵画を代表する巨匠だ。イタリア留学の後、フランドル（英語読みでフランダース）第一の画家として故国に迎えられ、宮廷画家・外交官として活躍した。名声を得て多くの弟子に囲まれ、歴史上もっとも恵まれた生涯を送った画家といってもいい。歴史画、宗教画ほか、どんな題材を描いても、そこにはみずみずしい生の輝きが、豊かに華やかに奏でられている。ルーベンスが描いた三枚の祭壇画は、今でもアニメのとおり、アントワープ大聖堂の中で見ることができる。



DVD



解説書には1巻：中島順三（プロデューサー）、2～5巻：黒田昌郎（演出）、6～9巻：喜多道枝（ネロ役）、10～11巻：伊藤主計（美術監督）、12～13巻：佐藤昭司（制作）の談話が収録されている。

発売元：バンダイビジュアル　全13巻
BCBA-0177～0189　各：カラー／103分（4話収録）日本語字幕（ON・OFF可）
¥3,800　※13巻のみ105分　全巻：OP、ED、予告編を収録　※最終巻には、カラオケ「よあけのみち」（ステレオ）の映像特典を収録

各話タイトルとスタッフリスト

1話　少年ネロ	①吉田義昭　②黒田昌郎　③黒田昌郎　④坂井俊一
2話　アロアと森へ	①吉田義昭　②柴田一　③黒田昌郎　④坂井俊一
3話　アントワープの町で	①吉田義昭　②山崎修二　③黒田昌郎　④坂井俊一
4話　新しい友達	①吉田義昭　②山崎修二　③黒田昌郎　④坂井俊一
5話　パトラッシュ	①吉田義昭　②奥田誠治　③黒田昌郎　④羽根章悦
6話　がんばれパトラッシュ	①吉田義昭　②斧谷稔　③黒田昌郎　④羽根章悦
7話　スープをおのみ	①加瀬高之　②奥田誠治　③黒田昌郎　④羽根章悦
8話　ほえたよ　おじいさん	①加瀬高之　②斧谷稔　③黒田昌郎　④羽根章悦
9話　おもいでの鈴	①加瀬高之　②奥田誠治　③黒田昌郎　④羽根章悦
10話　アロアのブローチ	①伊東恒久　②奥田誠治　③黒田昌郎　④羽根章悦
11話　エリーナの花畑	①伊東恒久　②斧谷稔　③黒田昌郎　④羽根章悦
12話　おじいさんの小さな壺	①加瀬高之　②奥田誠治　③黒田昌郎　④岡田敏靖
13話　ナポレオン時代の風車	①加瀬高之　②奥田誠治　③黒田昌郎　④羽根章悦
14話　夜空に描いた絵	①吉田義昭　②奥田誠治　③黒田昌郎　④羽根章悦
15話　古い帳簿	①吉田義昭　②高畑勲　③黒田昌郎　④羽根章悦
16話　10サンチームの写生帳	①吉田義昭　②奥田誠治　③黒田昌郎　④羽根章悦
17話　丘の上の木の下で	①加瀬高之　②奥田誠治　③黒田昌郎　④羽根章悦
18話　いたずらっ子のクロ	①加瀬高之　②横田和善・佐々木正広　③黒田昌郎　④岡田敏靖
19話　金物屋が村に	①加瀬高之　②奥田誠治　③黒田昌郎　④羽根章悦
20話　どこまでも	①加瀬高之　②奥田誠治　③黒田昌郎　④岡田敏靖
21話　船で来たお客さま	①吉田義昭　②奥田誠治　③黒田昌郎　④羽根章悦
22話　イギリスからの贈物	①松島昭　②奥田誠治　③黒田昌郎　④岡田敏靖
23話　アロアの誕生日	①加瀬高之　②奥田誠治　③黒田昌郎　④羽根章悦
24話　アロアの絵	①中西隆三　②奥田誠治　③黒田昌郎　④岡田敏靖
25話　アロアがいない	①雪室俊一　②奥田誠治　③黒田昌郎　④羽根章悦
26話　さようならアロア	①雪室俊一　②奥田誠治　③黒田昌郎　④岡田敏靖
27話　アロアのいないクリスマス	①佐藤道雄　②奥田誠治　③黒田昌郎　④羽根章悦
28話　親切な貴婦人	①佐藤道雄　②奥田誠治　③黒田昌郎　④岡田敏靖
29話　ルーベンスの2枚の絵	①高山由起子　②奥田誠治　③黒田昌郎　④羽根章悦
30話　雪の中の約束	①高山由起子　②奥田誠治　③黒田昌郎　④岡田敏靖
31話　ネロの決意	①安藤豊弘　②奥田誠治　③黒田昌郎　④羽根章悦
32話　大きなカシの木	①安藤豊弘　②西牧秀雄　③黒田昌郎　④岡田敏靖
33話　こころの手紙	①佐藤道雄　②奥田誠治　③黒田昌郎　④羽根章悦
34話　ヌレットおばさん	①佐藤道雄　②奥田誠治　③黒田昌郎　④岡田敏靖
35話　お帰りアロア	①雪室俊一　②奥田誠治　③黒田昌郎　④岡田敏靖
36話　アロアのくすり	①雪室俊一　②水沢わたる　③黒田昌郎　④羽根章悦
37話　うれしい知らせ	①安藤豊弘　②横田和善　③黒田昌郎　④羽根章悦
38話　ネロの大きな夢	①雪室俊一　②奥田誠治　③黒田昌郎　④羽根章悦
39話　心をつなぐ二つの旗	①雪室俊一　②奥田誠治　③黒田昌郎　④羽根章悦
40話　おじいさんの口笛	①雪室俊一　②奥田誠治　③黒田昌郎　④岡田敏靖
41話　なつかしい長い道	①安藤豊弘　②奥田誠治　③黒田昌郎　④羽根章悦
42話　となりに来た人	①佐藤道雄　②柴田一　③黒田昌郎　④岡田敏靖
43話　アロアのおてつだい	①佐藤道雄　②奥田誠治　③黒田昌郎　④羽根章悦
44話　おじいさんへのおみやげ	①佐藤道雄　②奥田誠治　③黒田昌郎　④岡田敏靖
45話　ひとりぼっちのネロ	①安藤豊弘　②奥田誠治　③黒田昌郎　④羽根章悦
46話　おじいさんの顔	①安藤豊弘　②奥田誠治　③黒田昌郎　④岡田敏靖
47話　風車小屋の火事	①佐藤道雄　②奥田誠治　③黒田昌郎　④羽根章悦
48話　なくなった仕事	①佐藤道雄　②奥田誠治　③黒田昌郎　④岡田敏靖
49話　描けたよおじいさん	①雪室俊一　②奥田誠治　③黒田昌郎　④羽根章悦
50話　発表の日	①雪室俊一　②奥田誠治　③黒田昌郎　④岡田敏靖
51話　二千フランの金貨	①中西隆三　②奥田誠治　③黒田昌郎　④羽根章悦
52話　天使たちの絵	①中西隆三　②奥田誠治　③黒田昌郎　④岡田敏靖

①脚本　②絵コンテ　③演出　④作画監督　※各話演出は監督が担当

母をたずねて三千里

放映期間：1976年1月4日～12月26日

スタッフ 原作：デ・アミーチス『クオレ』より　製作：本橋浩一　企画：佐藤昭司　脚本：深沢一夫　音楽：坂田晃一　キャラクターデザイン・作画監督：小田部羊一・奥山玲子　場面設定・レイアウト：宮崎駿　美術監督：椋尾篁　撮影監督：黒木敬七　録音監督：浦上靖夫　プロデューサー：中島順三・松土隆二　監督：高畑勲　制作：日本アニメーション・フジテレビ　■主題歌：OP「草原のマルコ」ED「かあさんおはよう」　作詞：深沢一夫（OP）・高畑勲（ED）　作曲：坂田晃一　編曲：坂田晃一（OP）・小六禮次郎（ED）　歌：大杉久美子（日本コロムビア）



キャスト マルコ：松尾佳子　アンナ：二階堂有希子　ピエトロ：川久保潔　トニオ：曽我部和行　フィオリーナ：信沢三恵子　ペッピーノ：永井一郎　コンチェッタ：小原乃梨子　ジュリエッタ：千々松幸子　フェデリコ：峰恵研　カルロス：宮内幸平　メレッリ：梶哲也　パブロ：東美江　フアナ：横沢啓子

ストーリー

出稼ぎに出た母に会うためマルコはアルゼンチンへ…

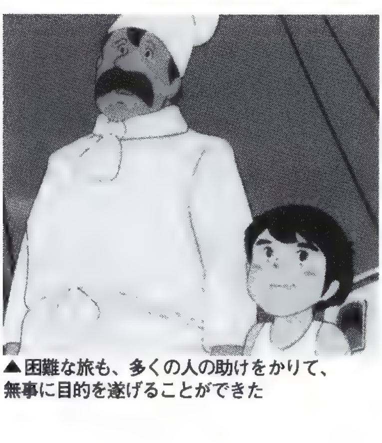
1883年、イタリアのジェノバ。8歳の少年マルコの母アンナが、アルゼンチンのブエノスアイレスにいる親戚のメレッリを頼って、出稼ぎにいってから、1年が経っていた。最初は順調に手紙とお金が送られてきていたが、「病気になった」という連絡を最後に、どちらも届かなくなる。おかあさんは、どうしているのか。病気になって大変な思いをしているのではないか……心配するマルコはついに、たった一人でアルゼンチンへ、アンナに会いにいくことを決意した。

まずは、ブラジル行きの快速船フォルゴーレ号で、リオデジャネイロへ。そして、そこから移民船に乗ってブエノスアイレスへ。ところが、アンナの働き先を知っているはずのメレッリおじさんは、1カ月前に引っ越しており、今はもういなかった。

ペッピーノ一座とともにバイアブランカをめざして

マルコは、旧知の人形劇団のペッピーノ一座と再会し、移動劇場の馬車に乗って、ともにバイアブランカをめざした。フィオリーナは次第に、母を捜すマルコに、母親と別れて暮らす自分の思いを重ねるようになっていった。草原の旅の末に、一行はバイアブランカに到着した。しかしメレッリの行方はわからず、アンナもいない。マルコは絶望する。

そこへ現れたのが、浮浪者のような風体の男エステロン。エステロンはなぜか、アンナが書いた手紙を持っていた。懐かしい母の文字を見て、マルコは希望を取りもどす。エステロンの正体は、事業に失敗して逃亡中のメレッリだった。メレッリは、アンナが家族に送ろうとしたお金を使いこんだため、預かった手紙を送ることもできず、隠していたのだ。



▲困難な旅も、多くの人の助けをかりて、無事に目的を遂げることができた

苦難に満ちたトゥクマンへのはるかな道

マルコはペッピーノ一座と別れて、ブエノスアイレスへ戻った。しかし、アンナは雇い主のメキーネスとともに、3カ月前にコルドバへ引っ越したということがわかる。同郷のイタリア人たちの好意のカンパで切符を買い、マルコは汽車でコルドバへと向かった。しかし、ここでもメキーネスはすでに引っ越したあとだった。インディオの少年パブロの、病気の妹フアナのために、持ち金すべてを投げ出したマルコは、一文無しになってしまう。500キロ先のトゥクマンまでの旅費はもうない。貨物列車に潜りこんだマルコは、途中で見つかって放りだされ、ひたすら荒野を歩くことになった。食料もなく水もない、つらく長い旅。しばらく牛車隊に世話になったマルコは、年寄りのロバを一頭もらって別れるが、そのロバも途中で死んでしまう。

苦難の旅の末、やっとたどりついたトゥクマンでは、アンナが病気で危険な状態にあった。再会した母と子は、涙で抱きあう。生きる力を取りもどしたアンナは、手術を受けて回復した。ふたりはたくさんの人に見送られながら、懐かしいジェノバへと帰っていった。

キャラクター紹介

旅を続けるマルコは一人だが、その周囲をとりまく人々は多い。遠く離れた家族。そしてジェノバとアルゼンチンで出会うペッピーノ一家は、マルコを見守るもうひとつの家族だ。旅先で出会う人々はあまりに多く、ここでは紹介しきれない。あるいは名作劇場で、もっとも登場人物が多かった作品かもしれない。

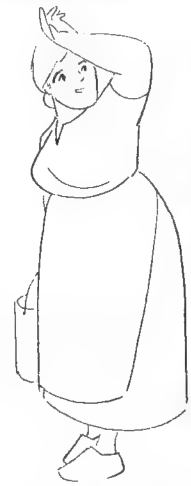
マルコ・ロッシ
▼早く一人前になりたいと願うジェノバの少年。母への強い思いと勇気を胸に、旅の困難に立ち向かう。9歳で旅立ち、2年にわたる旅の末に、母と再会する

フィオリーナ
▶ペッピーノ一家の次女。旅生活で友達がなく、無口で影のある少女だったが、マルコと友達になって明るくなった。マリオネットを上手に操る





ペッピーノ
◀ペッピーノ一座の座長で、フィオリーナたちの父親。夢を追いつづけ、妻に愛想をつかされ逃げられた



アンナ・ロッシ
◀マルコの母。家族と離れてアルゼンチンへ出稼ぎにいって、音信不通になった。家族思いで、家族からの便りが途切れたことを心配していた



コンチェッタ
◀ペッピーノ一家の長女。歌と踊りとパペット使いを担当する



ジュリエッタ
◀ペッピーノ一家の幼い三女。アメデオのいい遊び相手



おちゃめなアメデオ
▼マルコが連れているブラジル生まれのサル。時々何かの役に立つ



ピエトロ・ロッシ
▶マルコの父。ジェノバで、貧しい人でもかかれる診療所を作ろうと、がんばっている



トニオ・ロッシ
◀マルコの兄。鉄道学校で機関士の見習いをしている。アメデオは元々トニオのペットだ

旅で出会った人たち



フアナ
▼パブロの妹。病気になるが、マルコのお金で医者に診てもらえた

パブロ
◀インディオの少年。マルコと友達になり、母の行方捜しを手伝う



メレッリ
▼エステロンと名乗っていた。アンナに出稼ぎの仕事を世話した親戚



カルロス
▶ガウチョの老人。難儀していたペッピーノ一座を救ってくれた



フェデリコ
◀移民船で知り合った老人。ロサリオで再会し、助けてくれた

解説

世界名作劇場の第2弾に当たるこの作品を生み出したコンビ、監督（クレジットでは演出）・高畑勲と脚本・深沢一夫は、かつて東映動画で名作『太陽の王子ホルスの大冒険』を作りあげた二人だ。レイアウト担当は、後に『未来少年コナン』『千と千尋の神隠し』の監督を務める宮崎駿。キャラクターデザインと作画監督の小田部羊一も、東映動画時代からの盟友だ。気心の知れた優れたスタッフたちが結集して生まれた傑作であり、名作劇場の中で最高の作品とも言われている。

原作が短いため、アニメ化にあたっては、エピソードも登場人物も、大幅にオリジナルのものが加えられた。中でも印象的なのが、人形芝居のペッピーノ一座だ。存在感のある彼らは、重くなりがちなマルコの旅に明るさを添え、作品の味わいを一層深めている。

彼らだけではない。旅の先々で出会う人々の描写は、この作品の見どころだ。そこには、根っからの悪人もいなければ、根っからの善人もいない。希望も絶望も、人のあたたかさも冷たさも、貧困の問題も、すべてが等しくマルコの前に立ちあらわれる。その現実に対して、子どものマルコはあまりにも無力だ。

高畑勲監督は、マルコの旅を描くにあたって、何があろうと明るくたくましい主人公にも、一方的にかわいそうなだけの主人公にも、したくなかったと語っている。そうして生まれたマルコは、イタリアのネオレアリスモの映画の影響を受けて、現実に対して無力であり、そのことに自尊心を傷つけられながらも生きていかなくてはならない、リアルな少年として描かれている。でもだからこそ、前進を続けるマルコの勇気は尊いし、その姿に、視聴者は心揺さぶられるのだ。

1999年にリメイクされ、新作劇場版『MARCO』として全国で公開された。

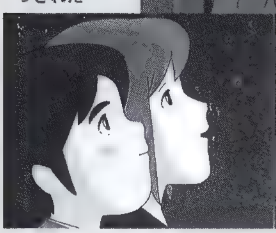
この場面がツボ!!

（第27話）

母への思い…



▶芝居で「おかあさん！」と口に出せたフィオリーナは寂しさをふっきれた





父親に愛想をつかして出ていった母親。寂しくても会いたくても口にせず我慢していたフィオリーナは、一途に母を求めるマルコの姿に、自分を重ねる。やがて、マルコが母と再会することは、フィオリーナにとっても希望となった。それを悟ったフィオリーナは星空の下で、「おかあさんと、きっと会ってね」とマルコを励ます。フィオリーナは、鏡に映ったもうひとりのマルコなのだ。

このセリフがツボ!!

「いくら探してもおかあさんはもういやしない。ぼくは呪われているんだ！」

（第34話）



はるばるバイアブランカまで来たというのに、母の行方はわからず、手がかりもない。絶望しきったマルコは、思いを吐きだすかのように叫ぶ。鬼気迫る迫力に、見ていて背筋が凍り、セリフが胸に突きささった。

「いつかおまえさんもどこかできっと、今夜の恩返しをすることになる」

（第40話）



こちらは上と逆に、冷えた心も温まるフェデリコ老人のセリフ。見知らぬ街で途方に暮れるマルコのために、酒場のイタリア人たちはなけなしの金を出しあって、汽車賃を作ってくれた。情けは人のためならず。



▲マルコの辛い旅のパートナーであるアメデオ。二人なら何も恐くない

アンデスでのロケハン

この作品では、イタリアとアルゼンチンにスタッフが足を運んでロケハンが行われた。しかし原作の描写と違い、アルゼンチンでマルコが旅をした道筋では、どこまでも平原が広がるのみで、一向にアンデス山脈は見えない。絵になりにくい、荒涼と広がる何もない平原を前に、一行は途方に暮れたそうだ。しかし結局、ロケハンの成果が、作品に見事に生かされたのは、ご覧のとおりである。

架空のサル　アメデオ

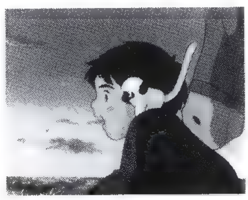
ペッピーノ一座に負けない、アニメ・オリジナルの名傍役、アメデオ。ブラジル生まれのサルということになっているが、実はこういうサルは実在せず、当然動物図鑑にも載っていない。スポンサーのカルピスがキャンペーンのために考案したようで、当時カルピスの王冠3個を送ると、アメデオ人形が当たったという。架空のペットが名作劇場に登場したのは、アメデオが初めてだった。

原作と原作者

海を渡り、2年をかけて遠く旅をしたマルコの物語の原作は、意外にも短い。子どもの視点から学校生活を日記として描いた『クオレ』（1886）の中で、先生が授業中に話してきかせる9編のお話のひとつ、「アペニンからアンデスへ」が、母を訪ねて旅をするマルコ少年の物語なのだ。

『クオレ』の作者、エドモンド・デ・アミーチス（1846～1908）は、北イタリアの生まれ。士官学校を卒業して独立戦争に赴き、1870年、イタリア全土が統一されたのを期に軍隊を去り、作家となった。

オーストリアから独立を勝ちとり、統一を果たしたばかりのイタリアには、国民の心をまとめる思想が必要だった。それを反映して、子どもたちのために書かれた『クオレ』も、犠牲や愛国心が強調されたものになっている一面がある。そのため、戦前の日本でも歓迎され、よく読まれたという事情がある。けれど根底に流れているのは、友情や隣人愛だと言えるだろう。



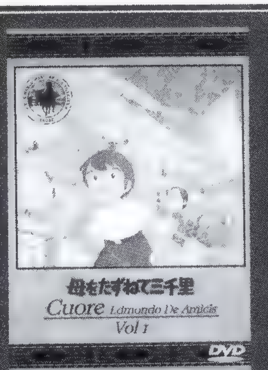
ワンポイントコラム どうして子どものマルコがアルゼンチンへ？

父のピエトロは、貧しい人々のための医療福祉の事業に、借金までして取り組んでおり、そのためジェノバを離れられない。兄のトニオは、機関士になるという将来の夢のために、鉄道学校で勉強中の身。そこで母親思いの小さなマルコが旅に出ることになったのだ。アニメ独自のリアリティのある設定だ。



▲最初はマルコの旅に反対した父親のピエトロ

DVD



解説書には、1～6巻：高畑勲（演出）、7～10巻：松尾佳子（マルコ役）、11～13巻：信沢三恵子（フィオリーナ役）の「スタッフ&キャストインタビュー」が収録されている。

発売元：バンダイビジュアル　全13巻　BCBA-0077～0089　各：カラー／103分（4話収録）日本語字幕（ON・OFF可）¥3,800　※13巻のみ106分　全巻：O.P、E.D、予告編を収録　※最終巻には、カラオケ「草原のマルコ」（ステレオ）の映像特典を収録

各話タイトルとスタッフリスト

話数	タイトル	スタッフ
1話	いかないでおかあさん	①深沢一夫　②③高畑勲　④小田部羊一
2話	ジェノバの少年マルコ	①深沢一夫　②③高畑勲　④小田部羊一
3話	日曜日の港町	①深沢一夫　②富野喜幸　③高畑勲　④小田部羊一
4話	おとうさんなんか大きらい	①深沢一夫　②③高畑勲　④小田部羊一
5話	なかよしエミリオ	①深沢一夫　②③高畑勲　④小田部羊一
6話	マルコの月給日	①深沢一夫　②富野喜幸　③高畑勲　④小田部羊一
7話	屋根の上の小さな海	①深沢一夫　②③高畑勲　④小田部羊一
8話	ゆかいなペッピーノ一座	①深沢一夫　②富野喜幸　③高畑勲　④小田部羊一
9話	ごめんなさいおとうさん	①深沢一夫　②奥田誠治　③高畑勲　④小田部羊一
10話	かあさんのブエノスアイレス	①深沢一夫　②富野喜幸　③高畑勲　④小田部羊一
11話	おかあさんの手紙	①深沢一夫　②奥田誠治　③高畑勲　④小田部羊一
12話	ひこう船のとぶ日	①深沢一夫　②富野喜幸　③高畑勲　④小田部羊一
13話	さよならフィオリーナ	①深沢一夫　②黒田昌郎　③高畑勲　④小田部羊一
14話	マルコの決意	①深沢一夫　②富野喜幸　③高畑勲　④小田部羊一
15話	すすめフォルゴーレ号	①深沢一夫　②奥田誠治　③高畑勲　④小田部羊一
16話	ちいさなコック長	①深沢一夫　②黒田昌郎　③高畑勲　④小田部羊一
17話	赤道まつり	①深沢一夫　②富野喜幸　③高畑勲　④小田部羊一
18話	リオの移民船	①深沢一夫　②奥田誠治　③高畑勲　④小田部羊一
19話	かがやく南十字星	①深沢一夫　②黒田昌郎　③高畑勲　④小田部羊一
20話	おおあらしの夜	①深沢一夫　②富野喜幸　③高畑勲　④小田部羊一
21話	ラプラタ川は銀の川	①深沢一夫　②奥田誠治　③高畑勲　④小田部羊一
22話	かあさんのいる町	①深沢一夫　②黒田昌郎　③高畑勲　④小田部羊一
23話	もうひとりのおかあさん	①深沢一夫　②富野喜幸　③高畑勲　④小田部羊一
24話	待っててくれたフィオリーナ	①深沢一夫　②奥田誠治　③高畑勲　④小田部羊一
25話	ペッピーノ一座大あたり	①深沢一夫　②黒田昌郎　③高畑勲　④小田部羊一
26話	草原へ	①深沢一夫　②富野喜幸　③高畑勲　④小田部羊一
27話	フィオリーナの涙	①深沢一夫　②奥田誠治　③高畑勲　④小田部羊一
28話	バルボーサ大牧場	①深沢一夫　②黒田昌郎　③高畑勲　④小田部羊一
29話	雪がふる	①深沢一夫　②富野喜幸　③高畑勲　④小田部羊一
30話	老ガウチョ　カルロス	①深沢一夫　②奥田誠治　③高畑勲　④小田部羊一
31話	ながい夜	①深沢一夫　②富野喜幸　③高畑勲　④小田部羊一
32話	さようならといえたら	①深沢一夫　②奥田誠治　③高畑勲　④小田部羊一
33話	かあさんがいない	①深沢一夫　②富野喜幸　③高畑勲　④小田部羊一
34話	ジェノバに帰りたい	①深沢一夫　②奥田誠治　③高畑勲　④小田部羊一
35話	おかあさんのなつかしい文字	①深沢一夫　②黒田昌郎　③高畑勲　④小田部羊一
36話	さようならバイアブランカ	①深沢一夫　②富野喜幸　③高畑勲　④小田部羊一
37話	はてしない旅へ	①深沢一夫　②奥田誠治　③高畑勲　④小田部羊一
38話	かあさんだってつらいのに	①深沢一夫　②奥田誠治　③高畑勲　④小田部羊一
39話	ばら色のよあけロサリオ	①深沢一夫　②富野喜幸　③高畑勲　④小田部羊一
40話	かがやくイタリアの星一つ	①深沢一夫　②富野喜幸　③高畑勲　④小田部羊一
41話	かあさんと帰れたら…	①深沢一夫　②奥田誠治　③高畑勲　④小田部羊一
42話	新しい友だちパブロ	①深沢一夫　②富野喜幸　③高畑勲　④小田部羊一
43話	この街のどこかに	①深沢一夫　②奥田誠治　③高畑勲　④小田部羊一
44話	フアナをたすけたい	①深沢一夫　②富野喜幸　③高畑勲　④小田部羊一
45話	はるかな北へ	①深沢一夫　②奥田誠治　③高畑勲　④小田部羊一
46話	牛車の旅	①深沢一夫　②富野喜幸　③高畑勲　④小田部羊一
47話	あの山の麓にかあさんが	①深沢一夫　②奥田誠治　③高畑勲　④小田部羊一
48話	ロバよ死なないで	①深沢一夫　②富野喜幸　③高畑勲　④小田部羊一
49話	かあさんが呼んでいる	①深沢一夫　②奥田誠治　③高畑勲　④小田部羊一
50話	走れマルコ！	①深沢一夫　②富野喜幸　③高畑勲　④小田部羊一
51話	とうとうかあさんに	①深沢一夫　②奥田誠治　③高畑勲　④小田部羊一
52話	かあさんとジェノバへ	①深沢一夫　②富野喜幸　③高畑勲　④小田部羊一

①脚本　②絵コンテ　③演出　④作画監督　※各話演出は監督が担当

あらいぐまラスカル

放映期間：1977年1月2日～12月25日



スタッフ 原作：スターリング・ノース「はるかなるわがラスカル」より　製作：本橋浩一　企画：日本アニメーション　脚本：宮崎晃 他　音楽：渡辺岳夫　キャラクターデザイン：遠藤政治　美術監督：井岡雅宏　録音監督：浦上靖夫　撮影監督：黒木敬七　作画監督：櫻井美知代・遠藤政治・小川隆雄　レイアウト：坂井俊一　演出：遠藤政治・斉藤博・腰繁男　プロデューサー：中島順三・加藤良雄　制作：日本アニメーション・フジテレビ　■主題歌：OP「ロックリバーへ」ED「おいでラスカル」　作詞：岸田衿子　作曲：渡辺岳夫　編曲：松山祐士　歌：大杉久美子・セントメリーチルドレンコーラス・コロムビアゆりかご会

キャスト スターリング：内海敏彦　ラスカル：野沢雅子　ウィラード：山内雅人　オスカー：鹿股裕司　アリス：冨永美子　セオドラ：松尾佳子　アーサー：桑原たけし　エリザベス：香椎くに子　クラリッサ：京田尚子　フローラ：阪本真澄　カール：野島昭夫　サーマン：永井一郎　フートン牧師：上田敏也　ホウェーレン先生：杉山佳寿子　スラミー：滝雅也　ジェシカ：芳賀みちる　ミッチェル医師：寺島幹夫　マーサ：貴家堂子

ストーリー

母親を亡くしたかわいい赤ちゃんあらいぐま発見！

1918年。アメリカ・ウィスコンシン州の南端にある、森と湖に囲まれたのどかな田舎町・ブレールスフォード。この町に、11歳のスターリング・ノース少年が住んでいた。両親と二人の姉がいるが、母は病院に入院中、長姉のセオドラはミルウォーキーに嫁入りし、次姉でシカゴ大学に通うジェシカは下宿しているので、家にはスターリングと父だけだ。しかし、動物好きなスターリングは、犬のハウザー、カラスのポー、そして4匹のスカンクを飼って、楽しく毎日を過ごしていた。

ある日、友人のオスカーと釣りに出かけたスターリングは、ウェントワースの森で猟師に母親を撃ち殺されたあらいぐまの赤ちゃんを拾う。その愛らしさにすっかり魅了されたスターリングは、赤ちゃんをラスカル（やんちゃ坊主）と名づけて、育てることにした。

ラスカルが幸せに暮らすことができる場所はどこ？

スターリングが一生懸命に世話をしたかいあって、ラスカルはすくすく成長する。子ども用のイスに乗ってテーブルで食事をしたり、いけすの魚を捕まえたり、カラスのポーとコインをめぐって争うなど、ラスカルは名前のとおりのいたずらっこになっていった。

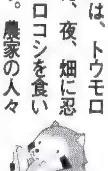
夏休みのある日、手術を受けて家に戻っていた母が天に召されてしまう。ひとりで家に残されたスターリングのベッドに入ってきたラスカルは、スターリングを励ますかのように、彼の頬をつたう涙をぬぐってくれた。

スターリングは、新しく駅長として赴任してきたスティーブンソン一家の少女・アリスや、ピクニック先の丸太小屋に住んでいた動物好きな青年・カールと知り合うことで、少しずつ持ち前の明るさを取り戻していく。

一方ラスカルは、トウモロコシの味を覚え、夜、畑に忍びこんでトウモロコシを食い荒らしてしまう。農家の人々の苦情に、スターリングは胸を痛めた。

カールの招待で、彼が働くスリーレイクスのホテルへバカンスに行ったスターリングは、「動物の楽園のようなこの森なら、ラスカルも幸せに暮らせるのではないか？」と考えて、カヌーで向かった森の奥にラスカルを置いて帰ろうとする。ところが、ラスカルは必死でカヌーを追いかけてきた。スターリングも、思わず湖に飛びこんでラスカルを抱き上げる。二人は、まだ別れることができなかった。

ブレールスフォードへ帰ったスターリングは、ラスカルの巣がある庭の樫の木の周りを金網で囲った檻を作り、その中でラスカルを飼うことにした。さらに、来るべき日に備えて、カヌーを作りはじめる。彼は「ラスカルがおとなになったときには、めそめそせずに森へ帰す覚悟」を決めていたのだ。



スターリングの環境激変でついにラスカルとお別れ！

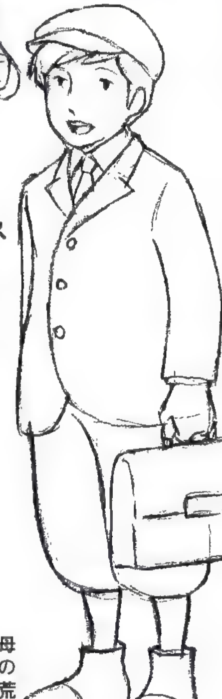
父が経営していた牧場が台風で全滅した。父は、残った農場をひとりで再建するという。スターリングは姉のセオドラの家に預けられ、ミルウォーキーの中学校に通うことになった。

ラスカルもすっかりおとなになり、お嫁さんをもらう時期が来ていた。スターリングは、来るべきときが来たことを悟り、カヌーにラスカルを乗せ、コシュコノング湖の向こう岸を目指す。人間がほとんど踏みこむことのないその土地に、ラスカルを放そうというのだ。

満月の明かりが照らす岸辺で雌のあらいぐまとラスカルが挨拶を交わす様子を確認したスターリングは、哀しみをこらえ、ひとりでカヌーをこいで帰っていくのだった……。

キャラクター紹介

ここで紹介するのはメインキャラ。ほかにも、スターリングの次姉や親類、学校の友人や町の人など、多くの魅力的なキャラが登場する。キャラクターデザインの遠藤政治は、たくさん登場する美人や姉妹の顔を描き分けるのに、とても苦心したそうだ。


スターリング・ノース
▶動物好きな少年。11歳。(第39話で12歳を迎える）ラスカルの育ての親。ひ弱そうだが、スラミーが売るケンカを買う勇気の持ち主



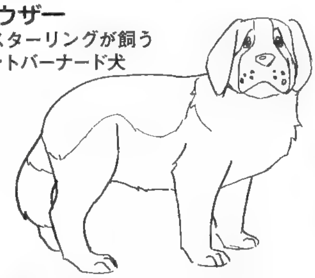
▲金持ちのお坊ちゃんだが、母の死や父の事業が傾いて親類の家に預けられるなど、運命の荒波に翻弄されることに…






▲人間にはほとんど危害を加えないが、トウモロコシの畑を荒らす困ったやつ！

ラスカル
▲ウェントワースの森で母親を猟師に殺された赤ちゃんあらいぐま。スターリングに育てられたので、人間に慣れている。ラスカルとは「やんちゃ坊主」の意味だ



ハウザー
▶スターリングが飼うセントバーナード犬






ウイラード
▲スターリングの父親。経営していた牧場や農場を、台風災害で失ってしまう

エリザベス
▲スターリングの母親。腸ガンの除去手術を受けるが、再発して死亡

セオドラ
◀スターリングの長姉。自動車の運転が荒っぽい！



ホウェーレン先生
◀町の学校の教師。スターリングの進学を期待している

カール
▶森のホテルで働く動物好きな青年。動物も彼が大好き




アリス・スティーブンソン
▲夏休みに町へ越してきた新任駅長の娘。スターリングと仲良しに



スラミー
◀町の菓子屋の息子。ガキ大将で、スターリングからラスカルを奪おうとする



サーマン
◀畑を荒らすラスカルを撃ち殺そうとする短気な隣人。新し物好きで、自動車をかっとばす

オスカー・サンダーランド
◀スターリングの親友。農家の家の手伝いが忙しい！

解説

日本アニメーションの「世界名作劇場」シリーズを代表する愛らしいペットであり、すっかりあらいぐまの代名詞にもなっている「ラスカル」は、この作品から誕生した。

昭和52年（1977年）に1年間放映され、監督（演出）とキャラクターデザインをつとめたのは「山ねずみロッキーチャック」（1973年）を監督した遠藤政治。脚本は、この作品がアニメ・デビューとなった宮崎晃。遠藤監督は、人間ドラマを書ける宮崎の腕を信じて依頼したという。ちなみに宮崎は、この作品後、多くの世界名作劇場シリーズに携わることになる。

遠藤監督は、美術スタッフと一緒に原作の舞台となったアメリカの町を訪れ、ロケハンを行っている。物語に登場する風景は、ほとんどが実際に存在するものばかりだ。また、そのときに8ミリフィルムで撮影したあらいぐまの映像が、ラスカルの愛らしい仕草の作画にも活かされているという。

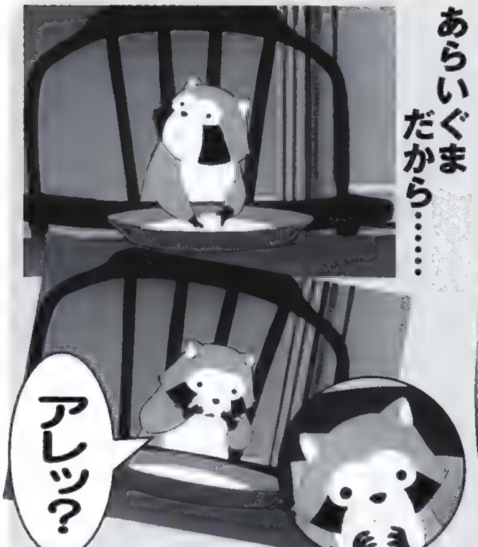
毎回登場するラスカルの微笑ましいエピソードは、この作品の見どころのひとつだ。だが、遠藤監督が一番大事にしていたのは、「スターリング少年の成長記録」だという。赤ちゃんラスカルがおとなに成長していく姿を描きながら、実はそれを見守るスターリングの成長こそがドラマのメインなのだ。

母親の死や父親の事業の悪化だけでなく、オスカーやアリスとの友情、スラミーとのケンカ、自作カヌーの製作に奔走するなど、日常生活の一つひとつが、スターリングがおとなになるための通過儀礼。ラスカルと一緒に成長するスターリングの姿に注目だ。

もちろん、ラスカルが直接関わるエピソードの数々も忘れてはいけない。特に、2回の「ラスカルとの別れ」のエピソード（第26話と最終話）は、絶対に見逃せない。

この場面がツボ!!

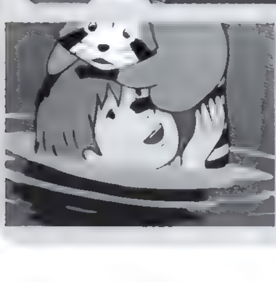
あらいぐまだから……



あらいぐまの習性といえば、食べる前にエサを水で洗うこと。ラスカルもいろんなものを水で洗った。なかでも「角砂糖を洗ってしまい、溶けてなくなってしまうエピソード」は、一番の笑いのツボ。この場面を担当した作画スタッフは、砂糖が溶ける様子を観察するために紅茶をガブ飲みし、描き終わったときはお腹を壊したとか!?

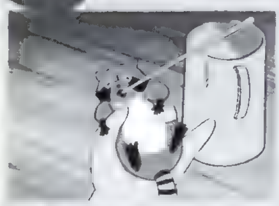
かけがえのない友達





ラスカルとスターリングが見せる「友情の絆」は感涙のツボ。母の死を悲しむスターリングをなぐさめるラスカル。そんなラスカルの幸せを願って辛い決断をするスターリング……。二人の間に結ばれた絆にウルウル…。

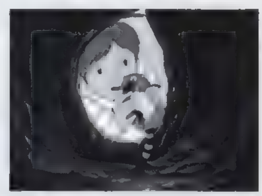
スターリングの赤ちゃんあらいぐまの育て方

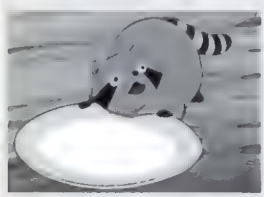




①あらいぐまは、湖や川の近くの岩穴や木の洞などに巣を作ります。ラスカルのお母さんは、木の根に巣を作っていました。あらいぐまの赤ちゃんを拾ったら、母親代わりに世話をしなくてはなりません。食事は、人肌ほどに温めたミルクをあげます。ただし、赤ちゃんは、まだ器から飲むことができません。自分の口にミルクをふくみ、ストロー代わりの「麦わら」で、赤ちゃんの口の中にゆっくりミルクを流しこんであげます。自分の方がむせないように注意しましょう。

②たくましく育てるために、家の中ではなく、自然に近い状態の巣を用意しましょう。雨や風がよけられる「庭の樫の木に開いている洞」などが理想的です。檻はまだ必要ありませんが、自分が登るためにハシゴ段をつけると便利です。





③赤ちゃんが皿からミルクを飲めるようになったら、一安心です。あと5週間もすれば、顔つきもおなじみのものに変わって、巣の外へ勝手に出てくることでしょう。





④成長すると何でも食べます。トウモロコシとハチミツが好物なので、畑荒らしに注意しましょう。

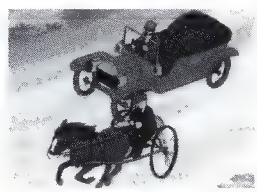
原作と原作者

スターリング・ノース（1906～1974）は実在の人物で、原作の「はるかなるわがラスカル」は、1918年の5月から翌年4月まで（スターリングが11歳から12歳の1年間）の経験をもとに書かれたもの。もちろんラスカルの話は実話なのだ。スターリング・ノースは、この物語の数年後、病気で足が不自由になるものの、シカゴ大学を卒業。新聞記者をへて、伝記小説やノンフィクション作品を執筆する。1963年に出版された「はるかなるわがラスカル」は、ダットン動物文学賞をはじめ、数々の文学賞を受賞している代表作だ。

物語の時代は、交通機関が馬から自動車に移行する時期で、馬のドニィブルックとサーマンの自動車の競争も原作に登場する。

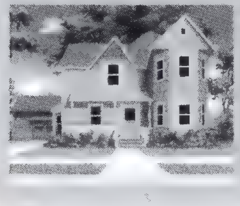
実際のスターリングには兄のハーシェルがいるが、第一次大戦に従軍しているので、原作の物語にも登場しない。

ちなみに、アリスたち、スティーブンソン一家は、アニメだけのオリジナルキャラだ。



ワンポイントコラム おなじみのスターリングの家は実際に存在するのだ！

スターリングが住んでいたあの家は、アニメと同じ姿で、今でもウィスコンシン州に残っている。町の名前は「エドガートン」で、スターリングが少年時代を過ごした家が当時のたたずまいを見せている。内部はスターリング・ノースの記念館になっていて、ラスカルが座った「スターリングが子どもの頃に使ったイス」や「金網に囲まれたクリスマスツリー」などが展示されている。残念ながらカヌーは焼失したそうだ。



DVD



解説書には、収録各話の紹介とともに、監督（演出）をつとめた遠藤政治氏の「スタッフインタビュー」が掲載されている。監督ならではの制作裏話が語られ、アメリカのロケハン話が興味深い。

発売元：バンダイビジュアル　全13巻　BCBA-0102～0114　各：カラー／103分（4話収録）日本語字幕（ON・OFF可）¥3,800　※13巻のみ105分　全巻：OP、ED、予告編を収録　※最終巻には、カラオケ「ロックリバーへ」(ステレオ）の映像特典を収録

各話タイトルとスタッフリスト

1話	黒いマスクの可愛いやつ	①宮崎晃 ②奥田誠治 ③遠藤政治・斎藤博 ④小川隆雄
2話	ぼくの新しい友達	①宮崎晃 ②森光 ③遠藤政治・斎藤博 ④小川隆雄
3話	友情	①宮崎晃 ②森光 ③遠藤政治・斎藤博 ④小川隆雄
4話	ミルウォーキーのお月さま	①宮崎晃 ②森光 ③遠藤政治・斎藤博 ④小川隆雄
5話	オスカーへの贈り物	①宮崎晃 ②森光 ③遠藤政治・斎藤博 ④桜井美知代
6話	さようならスカンクたち	①宮崎晃 ②御厨恭輔 ③遠藤政治・斎藤博 ④桜井美知代
7話	馬と自動車はどちらが速いか	①宮崎晃 ②森光 ③遠藤政治・斎藤博 ④桜井美知代
8話	蛙とボクシング	①宮崎晃 ②とみの喜幸 ③遠藤政治・斎藤博 ④桜井美知代
9話	お母さんの帰宅	①宮崎晃 ②御厨恭輔 ③遠藤政治・斎藤博 ④桜井美知代
10話	はじめての探検	①宮崎晃 ②富野喜幸 ③遠藤政治・斎藤博 ④桜井美知代
11話	消えた角砂糖	①宮崎晃 ②富野喜幸 ③遠藤政治・斎藤博 ④桜井美知代
12話	本と1セント銅貨	①宮崎晃 ②斎藤博 ③遠藤政治・斎藤博 ④桜井美知代
13話	夏休みの第一日	①宮崎晃 ②とみの喜幸 ③遠藤政治・斎藤博 ④桜井美知代
14話	母のない子	①宮崎晃 ②御厨恭輔 ③遠藤政治・斎藤博 ④桜井美知代
15話	アリスと友達になれたらなあ	①宮崎晃 ②とみの喜幸 ③遠藤政治・斎藤博 ④桜井美知代
16話	楽しいパーティーの夜	①宮崎晃・佐藤嘉助 ②斎藤博 ③遠藤政治・斎藤博 ④桜井美知代
17話	ラスカルの冒険	①宮崎晃・佐藤嘉助 ②とみの喜幸 ③遠藤政治・斎藤博 ④遠藤政治
18話	森で会ったふしぎな青年	①宮崎晃・佐藤嘉助 ②とみの喜幸 ③遠藤政治・斎藤博 ④遠藤政治
19話	ラスカルとトウモロコシ	①宮崎晃・佐藤嘉助 ②とみの喜幸 ③遠藤政治・斎藤博 ④遠藤政治
20話	スターリングの悲しみ	①宮崎晃・佐藤嘉助 ②山崎修二 ③遠藤政治・斎藤博 ④遠藤政治
21話	あぶないラスカル	①宮崎晃・佐藤嘉助 ②とみの喜幸 ③遠藤政治・斎藤博 ④遠藤政治
22話	森と湖と動物たち	①宮崎晃・佐藤嘉助 ②池野文雄 ③遠藤政治・斎藤博 ④遠藤政治
23話	カールの災難	①宮崎晃・佐藤嘉助 ②太田信 ③遠藤政治・斎藤博 ④遠藤政治
24話	走れ走れぼくらのカヌー	①宮崎晃・佐藤嘉助 ②とみの喜幸 ③遠藤政治・斎藤博 ④遠藤政治
25話	森で見つけた仔鹿	①宮崎晃・佐藤嘉助 ②池野文雄 ③遠藤政治・斎藤博 ④桜井美知代
26話	森と湖の夏まつり	①宮崎晃・佐藤嘉助 ②とみの喜幸 ③遠藤政治・斎藤博 ④桜井美知代
27話	首わと皮ひも	①宮崎晃・佐藤嘉助 ②池野文雄 ③遠藤政治・斎藤博 ④桜井美知代
28話	檻のなか	①宮崎晃・佐藤嘉助 ②とみの喜幸 ③遠藤政治・斎藤博 ④遠藤政治
29話	星空をとぼう	①宮崎晃・加藤盟 ②斎藤博 ③遠藤政治・斎藤博 ④遠藤政治
30話	ケチケチするな	①宮崎晃・加藤盟 ②とみの喜幸 ③遠藤政治・腰繁男 ④遠藤政治
31話	花火のあがる日	①宮崎晃・加藤盟 ②池野文雄 ③遠藤政治・腰繁男 ④遠藤政治
32話	わたり鳥の帰るころ	①宮崎晃・加藤盟 ②池野文雄 ③遠藤政治・腰繁男 ④遠藤政治
33話	ドニィブルックの勝利	①宮崎晃・加藤盟 ②とみの喜幸 ③遠藤政治・腰繁男 ④遠藤政治
34話	いじわるな手紙	①宮崎晃・加藤盟 ②池野文雄 ③遠藤政治・腰繁男 ④遠藤政治
35話	カールとフローラ	①宮崎晃・加藤盟 ②池野文雄 ③遠藤政治・腰繁男 ④遠藤政治
36話	待っていた老人	①宮崎晃・加藤盟 ②池野文雄 ③遠藤政治・腰繁男 ④遠藤政治
37話	朝の乳しぼり	①宮崎晃・加藤盟 ②とみの喜幸 ③遠藤政治・腰繁男 ④遠藤政治
38話	素敵なおもいで	①宮崎晃・加藤盟 ②池野文雄 ③遠藤政治・腰繁男 ④遠藤政治
39話	忘れられた誕生日	①宮崎晃 ②とみの喜幸 ③遠藤政治・腰繁男 ④遠藤政治
40話	初雪の夜	①宮崎晃 ②とみの喜幸 ③遠藤政治・腰繁男 ④遠藤政治
41話	めずらしい患者	①宮崎晃 ②森光 ③遠藤政治・腰繁男 ④桜井美知代
42話	もうすぐクリスマス	①宮崎晃・太田省吾 ②池野文雄 ③遠藤政治・腰繁男 ④桜井美知代
43話	すばらしい贈り物	①宮崎晃・太田省吾 ②池野文雄 ③遠藤政治・腰繁男 ④桜井美知代
44話	氷の上の戦い	①宮崎晃・太田省吾 ②とみの喜幸 ③遠藤政治・腰繁男 ④桜井美知代
45話	お母さんの平手うち	①宮崎晃・太田省吾 ②池野文雄 ③遠藤政治・腰繁男 ④桜井美知代
46話	お父さんのさびしい顔	①宮崎晃・太田省吾 ②池野文雄 ③遠藤政治・腰繁男 ④桜井美知代
47話	立ちあがった仔牛	①宮崎晃・太田省吾 ②とみの喜幸 ③遠藤政治・腰繁男 ④桜井美知代
48話	じゃじゃ馬ならし	①宮崎晃・太田省吾 ②池野文雄 ③遠藤政治・腰繁男 ④桜井美知代
49話	雪の家	①宮崎晃・太田省吾 ②森光 ③遠藤政治・腰繁男 ④桜井美知代
50話	カヌーの進水式	①宮崎晃 ②池野文雄 ③遠藤政治・腰繁男 ④桜井美知代
51話	残された一週間	①宮崎晃 ②池野文雄 ③遠藤政治・腰繁男 ④桜井美知代
52話	別れと出発の時	①宮崎晃 ②森光 ③遠藤政治・腰繁男 ④桜井美知代

①脚本　②絵コンテ　③演出　④作画監督

ペリーヌ物語

放映期間：1978年1月1日～12月31日



スタッフ 原作：エクトル・マロ　製作：本橋浩一　企画：佐藤昭司　脚本：宮崎晃　音楽：渡辺岳夫　キャラクターデザイン：関修一　美術設定：千葉秀雄　美術監督：井岡雅宏・野崎俊郎　レイアウト：森やすじ 他　録音監督：浦上靖夫　撮影監督：黒木敬七　プロデューサー：中島順三・松土隆二　監督：斎藤博・腰繁男　制作：日本アニメーション・フジテレビ　■主題歌：OP「ペリーヌものがたり」ED「きまぐれバロン」　作詞：つかさ圭　作曲：渡辺岳夫　編曲：松山祐士　歌：大杉久美子

キャスト ペリーヌ・パンダボアヌ：鶴ひろみ　マリ：池田昌子　エドモン：篠原大作　ビルフラン：厳金四郎　ロザリー：黒須薫　マルセル：岡村悦明　シモンじいさん：永井一郎　ファブリ：村山明　タルエル：丸山詠二　テオドール：田中崇　フランソワーズ：遠藤晴　ナレーター：渋沢詩子

ストーリー

ペリーヌの最初の試練は、父の故郷へ帰る旅

ボスニアのとある町。ペリーヌは父を亡くし、母マリとともに父の実家があるフランスのマロクールに向かうことになった。

母娘二人、父の職業であった写真師をしながらの旅だ。ロバのパリカールの引く写真機材を積んだ馬車が、移動手段であり、家でもあった。行く先々の町で生きる糧として写真撮影を請け負いながら、二人の旅は続く。

しかし、イタリアからスイスに入るためにアルプス越えを強行した後、フランスに着くと、病弱な母はついに倒れてしまう。ペリーヌは、持ち物をすべて売って治療費を工面するが、母はついに亡き人となってしまった。

親切だったパリの下町の人々に別れを告げ、ペリーヌは一人で旅立つ。母の「人に愛されるには、まず自分が人を愛さなくては……」という言葉を胸に……。

小さな胸に秘密を隠して、祖父との暮らしが始まった

生死を分かつほどのつらい旅を経て、ついにマロクールにたどり着いたペリーヌ。しかし、町で見聞きした祖父の人柄は、冷たく、厳しいものだった。ペリーヌの父は、かつて出張先のインドでマリと結婚したことで、祖父と仲たがいしたままだった。祖父は母をよく思っていないということも知っていたペリーヌは、どうしても名乗り出ることができなかった。

友達になったロザリーという少女の紹介で、ペリーヌはオーレリィという偽名を使い、工場で働くことになった。そこはまさに、祖父ビルフランの経営する工場なのだ。

工場でトロッコ係として働くペリーヌは、自分で見つけた無人の狩猟小屋を住まいにし、日用品から下着や靴まで、自分で手作りする生活を送っていた。

そんなある日、ビルフラン付きの英語通訳の代役をすることになる。ペリーヌの仕事ぶりと気質に感じ入ったビルフランは、孫とは知らぬままペリーヌを個人秘書として雇い、自分の屋敷に住まわせる。ペリーヌは、行方不明の息子を手をつくして捜しているビルフランに対して、やはり真実を話すことはできなかった。息子の死を知らせることが辛いのと、母マリへのビルフランの憎しみを知ったからである。

ペリーヌの優しい心が、冷徹な祖父の心を溶かす…

ビルフランのもとに、ついに息子死亡の知らせが届く。すっかり気落ちし、寝込んでしまったビルフランを、ペリーヌは親身になって看病する。やがて、ビルフランにとって、ペリーヌは日々かけがえのない存在になっていった。ペリーヌの優しさに触れ、冷徹な経営者は、労働者の身になって考える男に変わっていた。

そんなある日、ペリーヌの顔が息子に似ていることを知った盲目のビルフランは、すぐに弁護士に調査を依頼する。ほどなく知らせは届けられ、ついにペリーヌは祖父の胸に飛び込むことができたのだった。

ビルフランの目の手術も成功し、買い戻したパリカールの引く馬車で、肩を寄せ合い村を行くふたりの姿が、春風の中で輝いていた。



キャラクター紹介

キャラクターデザインは関修一。名作シリーズのキャラデザインには初登用で、森やすじ、小田部羊一らから引き継ぎ、独自の繊細な雰囲気を作り出した。ペリーヌは、頬の線や目の離れ方が微妙で、かわいらしく品がいいが、「なかなか似ない」と同人作家泣かせだったとか。

エドモン



ペリーヌの父親。インドでマリと結婚し、父の怒りを買った。意地っ張りなところは、ペリーヌにしっかり受け継がれている!?

マリ

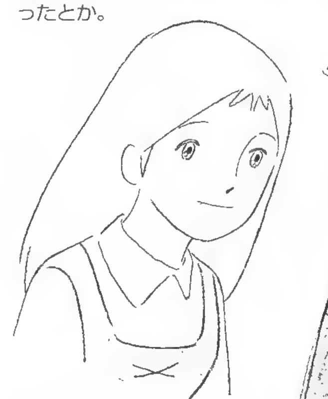


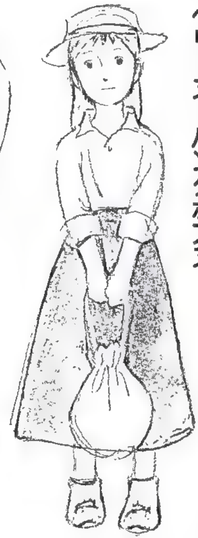


サリー姿のマリ

インド生まれの、インド人とイギリス人のハーフ。ペリーヌの母。病弱ながらもペリーヌと辛い旅を続けた

ペリーヌ・パンダボアヌ





子供ながら無私の愛と意志の強さは天下一品。明るさと頭のよさでどんな逆境も跳ね返すばかりか、周囲の人々を幸せにしていく

ビルフラン・パンダボアヌ



エドモンの父。息子の行方を捜している孤独な老人だが、冷徹な経営者。盲目であったが手術で視力を取り戻す

テオドール



ビルフランのおいで、工場の後継者の席をしきりにねらっている

タルエル



工場長。工場の実権を握ろうと、画策している

ファブリ



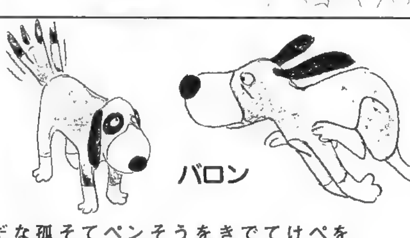
パンダボアヌ工場の技師で、ペリーヌを親身になって気にかける。ペリーヌが唯一秘密を打ち明けた相手

ロザリー



ペリーヌの親友になる、好奇心旺盛な娘。ペリーヌがしっかり者なだけに、彼女の無邪気さは視聴者に親しみを感じさせた

きまぐれバロンとできるヤツ、パリカール



バロン



パリカール

パリカールは、馬車を引くことで文字通りペリーヌたちの旅を助け、マリが病気に倒れてからは売られることで生活費をかせぎ、行き倒れ寸前のペリーヌを発見してその命を救う、まさに大活躍。それに引きかえ、バロンは好き勝手な行動でペリーヌに迷惑をかけてばかりだった。でも、そんなバロンの存在に、孤独なペリーヌはどんなにか心安らいだことだろう。

マルセル



サーカスにいる両親を追って旅の途中、ペリーヌたちと合流する

解説

ラスカルの愛らしさがブレイクした後にラインナップされたのは、ぐっとシリアスな少女の受難の物語。地味なストーリーながら、実写育ちの宮崎晃脚本が、微妙な心理ドラマをじっくり描いて感動を誘った。

逆境に負けず強いヒロイン、愛情に満ちた明るいヒロインは多いが、ペリーヌの意志の強さと愛は別格である。彼女の愛情は包容力に満ちた、どこまでも〝与える愛〟。大人になってから見直すと、その強さと謙虚さとともに「いや、いくら苦労してきたからって、この年でここまではムリだろう」と思わされるのだが、そこに説得力を与えたのが、アニメで大幅にアレンジを加えられた前半の旅部分だった。ここでじっくりとペリーヌの成長を描いたことが、後半のペリーヌにリアリティを与えている。

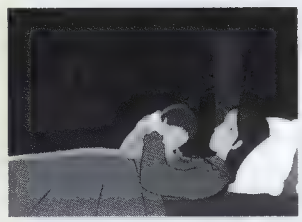
日本アニメでは、同じ年の4月から『未来少年コナン』の放映が始まっている。こちらの製作に、宮崎駿はじめ〝名作班〟スタッフがかなり移り、スケジュールも非常に厳しいものとなった。

そのため、演出の斎藤博とキャラクターデザインの関修一は名作シリーズ初挑戦。シリーズ初期こそ、スタッフ不足で作画の乱れなどもあったが、前年の『ラスカル』に引き続いて脚本は宮崎晃、絵コンテにはとみの喜幸(現・富野由悠季)ら、レイアウトは森やすじなど、ベテランの力も得て、結果的には名作シリーズの中でも高い完成度を誇る作品となった。

素性を隠してペリーヌが祖父とともに過ごす後半部分は、微妙な心理描写が続く室内劇の様相を呈している。特に、ペリーヌが祖父とともに暮らすようになってからは、息詰まる緊張感の連続だ。また、クライマックスシーンの後、後日談が4話にかけて語られるというのも、特筆すべき構成だった。

このセリフがツボ!!

「人に愛されるには、まず自分が愛さなくては……」(第21話)



母、マリが死ぬ前にペリーヌに言い残した言葉。この言葉なしには、ペリーヌの物語は成立しない。作品のテーマとも言うべきセリフ。

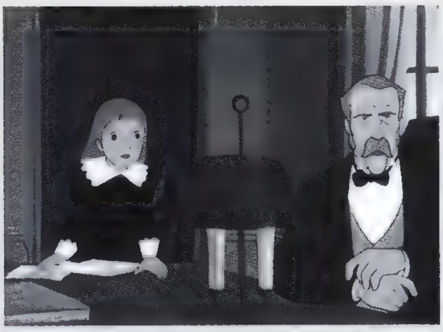
「工場なんか、どうでもいいんです。わたしがほしいのは、おじい様の心からの愛情なんです!」(第43話)



ファブリに対して訴えるペリーヌ。いつになったら名乗りをあげるんだろうとじれったく待っていたファンにとっては、頭をハンマーで殴られたようなセリフだった。改めてペリーヌの高貴な精神を認識させられた。

この場面がツボ!!

号泣!(第39話)





祖父に母を「嫁とは思っておらん」と否定され、耐えきれず「でも、お二人にはお子様が……」と言うペリーヌに、「ま、できてしまったのだから、金ぐらい出してやるさ」と言い放つ祖父。一瞬固まってしまい、その後、声を押し殺して涙を流すペリーヌに号泣! 祖父が盲目だという設定が最大限生かされた。

53本の長丁場

『ペリーヌ』の放映された昭和53年は1月1日と12月31日が日曜日だったため、全53本も放映された。当時は1年間の放映が常識だったとはいえ、正月特番も大みそかも関係なしとは恐れ入る。3カ月の番組改編ごとに特番がある今では絶対考えられない。ちなみに全53話というのは、名作シリーズ史上最長記録。

原作者対決!?

『ペリーヌ物語』の正式邦題は『家なき娘』だが、同じ作者によるアニメ版『家なき子』が、前年の10月から日本テレビ系列で放映。製作は東京ムービー新社で、監督は出崎統。テレビ初の立体アニメで、華やかで濃い出崎演出は、一見地味ながらじっくりと心の機微を描く『ペリーヌ』と好対照だった。

気まぐれバロン

『ペリーヌ』のエンディング・テーマは「気まぐれバロン」。とぼけた表情のやんちゃな犬、バロンのファンも多かった。『たんぽぽクレーター』『1スーの銅貨』などの漫画家、筒井百々子は、当時アニメーターで、『ペリーヌ』の動画チェックをしていた。彼女の漫画には、時々バロンが登場している。

第30話「自分の力で」

ペリーヌファンにとって忘れられないのが第30話。生活用具や靴、下着まで、何でも手づくりするサバイバル少女ぶりを見せてくれた。中でもシュミーズ作りは、多くの少年ファンの想像力を強烈に刺激した。これらは、原作でも描かれているエピソード。スタッフの個人的趣味などではないので、念のため。

原作と原作者

原作者エクトル・マロはフランスの小説家。1830年生まれ。パリ大学で法律を学び、法律家の道を歩み始めたが、文学を志して23歳でパリに出た。やがて新聞に連載小説を持つ売れっ子作家となる。

マロの小説は、同時代の権力者や政治、制度を批判する硬派なものだった。そんな中、子ども向けに書いた『家なき子』が大ヒット。便乗した類似作品が相次いで出版され、うんざりしたマロは、同じ路線の作品を依頼されても断り続けたという。

歳月が流れ、『家なき子』の最終章「家族とともに」を読み返したマロは、このタイトルの作品の構想を思いついた。それが『ペリーヌ物語』、原題『En Famille』（1893年）だ。企業家と労働者の理想郷を描くのが本来のテーマだったが、意志の強い少女を作品の中心に置く着想を得た。

もともとマロは、意志の強い少女が小島で原始的なサバイバル生活をするという話の構想を持っていた。『ペリーヌ物語』で、狩猟小屋でのペリーヌの一人暮らしがいきいきと描かれているのは、そのためだろう。

マロは多作な作家だったが、あまりにも同時代性が強かったためか、4編の児童文学以外は、皮肉にも時代の流れの中で忘れ去られてしまった。

ワンポイントコラム　マロの描きたかった「理想郷」とは？

アニメでは、ペリーヌが祖父ビルフランと和解した後、二人で工場の労働者の環境を改善する日々が描かれている。実は、これこそがマロが描きたかったテーマだったのだ。

当時は、18世紀末の産業革命を受けて、ヨーロッパ各地で大規模な工場生産が始められていた。同時に、労働条件や労働者の生活改善が問題となっていた。そんな中、空想的社会主義者と呼ばれる人々による理想国家の構想が、マロの興味を引いた。良心的な経営者のもとで、経営者と労働者が兄弟のようにともに働き、ともに生活する工業団地を描こうとしたマロだったが、連載当初から「労使関係をゆがめる」など、批判も多かったようだ。

DVD



解説書には1～3巻斉藤博（監督）、4～6巻関修一（キャラデザイン）、7～9巻宮崎晃（脚本）、10～11巻大杉久美子（歌手）と充実のインタビュー記事で読みごたえたっぷり。ジャケットイラストは関修一の描き下ろし。

発売元：バンダイビジュアル　全13巻　BCBA－0416～0428　各カラー／103分（4話収録）日本語字幕（ON・OFF可）¥3,800※1巻は5話収録128分、13巻4話収録105分。※最終巻は主題歌カラオケ「ペリーヌものがたり」（ステレオ）の映像特典を収録。全巻OP、ED予告編収録

各話タイトルとスタッフリスト

話数	タイトル	スタッフ
1話	旅立ち	①宮崎晃　②斎藤博　③小川隆雄
2話	遠い道	①宮崎晃　②とみの喜幸　③百瀬義行　④森やすじ
3話	おかあさんのちから	①宮崎晃　②高畑勲　③村田耕一
4話	泥だらけの伯爵	①宮崎晃　②斎藤博　③小川隆雄
5話	おじいさんと孫	①宮崎晃　②とみの喜幸　③百瀬義行・小川隆雄　④森やすじ・辻伸一
6話	二人の母	①宮崎晃　②高畑勲　③百瀬義行・小川隆雄
7話	サーカスの少年	①宮崎晃　②黒田昌郎　③村田耕一
8話	酔っぱらいロバ	①宮崎晃　②池野文雄　③小川隆雄
9話	商売がたき	①宮崎晃　②とみの喜幸　③小川隆雄
10話	写真機どろぼう	①宮崎晃　②池野文雄　③百瀬義行・小川隆雄　④坂井俊一
11話	バロンがんばる	①宮崎晃　②とみの喜幸　③桜井美知代　④坂井俊一
12話	たった二人の観客	①宮崎晃　②池野文雄　③村田耕一
13話	アルプス越え	①宮崎晃　②斎藤博　③小川隆雄　④坂井俊一
14話	美しい国で	①宮崎晃　②池野文雄　③桜井美知代　④森やすじ
15話	フランス！フランス！	①宮崎晃　②池野文雄　③小川隆雄　④坂井俊一
16話	おかあさんの決意	①宮崎晃・加藤盟　②黒田昌郎　④③桜井美知代
17話	パリの宿	①宮崎晃　②池野文雄　③小川隆雄　④坂井俊一
18話	シモンじいさん	①宮崎晃　②黒田昌郎　③桜井美知代　④坂井俊一・森やすじ・関修一
19話	パリの下町っ子	①宮崎晃　②とみの喜幸　③小川隆雄　④坂井俊一・関修一
20話	パリカールとの別れ	①宮崎晃　②池野文雄　③桜井美知代　④坂井俊　・森やすじ・桜井美知代
21話	最後の言葉	①宮崎晃　②黒田昌郎　③百瀬義行　④坂井俊一・関修一
22話	忘れられない人々	①宮崎晃　②池野文雄　③百瀬義行　④坂井俊一・桜井美知代
23話	ひとりぼっちの旅	①宮崎晃・佐藤嘉助　②黒田昌郎　③小川隆雄　④坂井俊一・森やすじ・関修一
24話	美しい虹	①宮崎晃・佐藤嘉助　②池野文雄　③小川隆雄　④坂井俊一・桜井美知代
25話	パリカール！私のパリカール！	①宮崎晃・佐藤嘉助　②池野文雄　③小川隆雄　④坂井俊一・森やすじ・関修一
26話	親切なルクリおばさん	①宮崎晃・佐藤嘉助　②黒田昌郎　③百瀬義行
27話	おじいさんの冷い顔	①宮崎晃・佐藤嘉助　②池野文雄　③小川隆雄　④坂井俊一
28話	パンダボアヌ工場	①宮崎晃・佐藤嘉助　②池野文雄　③百瀬義行　④坂井俊一
29話	池のほとりの小屋	①宮崎晃・佐藤嘉助　②黒田昌郎　③小川隆雄　④関修一
30話	自分の力で	①宮崎晃　②とみの喜幸　③百瀬義行
31話	お客様を迎えて	①宮崎晃　②池野文雄　③小川隆雄　④坂井俊一
32話	名前の秘密	①宮崎晃　②池野文雄　③桜井美知代
33話	テオドールの財布	①宮崎晃　②池野文雄　③小川隆雄　④坂井俊一
34話	忘れられない一日	①宮崎晃・加藤盟　②池野文雄　③百瀬義行　④坂井俊一
35話	英語の手紙	①宮崎晃・加藤盟　②池野文雄　③小川隆雄　④坂井俊一
36話	よろこびと不安	①宮崎晃・加藤盟　②斎藤博　③桜井美知代
37話	おじいさんの大きな手	①宮崎晃・加藤盟　②黒田昌郎　③小川隆雄　④坂井俊一・関修一
38話	すてきなワンピース	①宮崎晃・加藤盟　②とみの喜幸　③百瀬義行
39話	インドからきた手紙	①宮崎晃・加藤盟　②池野文雄　③小川隆雄　④坂井俊一
40話	バロンの災難	①宮崎晃・加藤盟　②池野文雄　③桜井美知代
41話	お城のような家	①宮崎晃・加藤盟　②とみの喜幸　③小川隆雄　④坂井俊一
42話	ロザリーの悲しみ	①宮崎晃　②斎藤博　③関修一・百瀬義行　④坂井俊一・関修一
43話	日曜日。ペリーヌは	①宮崎晃　②池野文雄　③小川隆雄
44話	いじわるな夫人	①宮崎晃・加藤盟　②池野文雄　③桜井美知代
45話	ボスニアからの知らせ	①宮崎晃・加藤盟　②とみの喜幸　③小川隆雄　④坂井俊一
46話	ビルフランの悲しみ	①宮崎晃　②池野文雄　③百瀬義行
47話	オーレリィの顔	①宮崎晃　②池野文雄　③小川隆雄　④坂井俊一
48話	火事	①宮崎晃　②とみの喜幸　③桜井美知代
49話	幸せの涙が流れる時	①宮崎晃　②池野文雄　③小川隆雄　④坂井俊一・関修一
50話	初雪の降った日	①宮崎晃　②池野文雄　③百瀬義行
51話	おじいさんの目	①宮崎晃　②池野文雄　③小川隆雄　④坂井俊一
52話	忘れられないクリスマス	①宮崎晃　②池野文雄　③桜井美知代
53話	春の訪れ	①宮崎晃　②池野文雄　③小川隆雄　④坂井俊一

①脚本　②絵コンテ　③作画監督　④レイアウト　※各話演出は不在で監督がその役割を担っている。

赤毛のアン

放映期間：1979年1月7日～12月30日



スタッフ　原作：ルーシー・モード・モンゴメリ　製作：本橋浩一　製作管理：高桑充　企画：佐藤昭司　脚本：千葉茂樹 他　音楽：毛利蔵人　キャラクターデザイン・作画監督：近藤喜文　場面設定：宮崎駿　画面構成：宮崎駿・櫻井美知代　美術監督：井岡雅宏　録音監督：浦上靖夫　撮影監督：黒木敬七　プロデューサー：中島順三・遠藤重夫　演出：高畑勲　制作：日本アニメーション・フジテレビ　■主題歌：OP「きこえるかしら」・ED「さめない夢」　作詞：岸田衿子　作曲・編曲：三善晃　歌：大和田りつ子（OP・ED）

キャスト　アン：山田栄子　マシュウ：槐柳二　マリラ：北原文枝　ダイアナ：高島雅羅　ギルバート：井上和彦　リンド夫人：麻生美代子　ジェーン：高木早苗　ルビー：小山まみ・高坂真琴　ジョーシィ：堀絢子　ミニー・メイ：小山まみ　ミス・ステイシー：鈴木弘子　アラン牧師：曽我部和行　ミセス・アラン：江川菜子　ジョセフィン：川路夏子　ナレーター：羽佐間道夫

ストーリー

マシュウが出会ったのは夢見がちな赤毛の少女アン

19世紀末のカナダ東部、プリンス・エドワード島にある小さな駅に、一人の少女が降り立つ。そばかすだらけで赤毛の少女の名前はアン・シャーリー。グリーン・ゲイブルズと呼ばれる家に住むマシュウとマリラの老兄妹に引き取られるために、孤児院からやってきたのだ。ところが、駅まで迎えに行ったマシュウは、アンを見てビックリ。引き取るのは、農場の手伝いをしてもらう男の子のつもりだったからだ。仕方なくアンを家へ連れていくマシュウ。道中、空想好きのアンのおしゃべりを聞くうちに、いつの間にか彼女を気にいっている自分に気づく。マリラはすぐにアンを孤児院へ送り返そうとするが、アンの辛い身の上話に心が動き、やがて正式に引き取る決心をする。

アンを教育するマリラは、教えたことの飲みこみの早さに満足するが、感情の起伏が激しいアンの周囲はトラブルが絶えなかった。しかし、持ち前の明るさで学校では人気者のアン。ダイアナとは生涯の友情を誓い合い、大親友になった。その一方、いずれ学問のライバルとなるギルバートとは、彼がアンの赤毛をからかったことがきっかけで、以後ほとんど口をきかなくなってしまう。

アンを支えた学問の道…そして、マシュウとの別れ

アンは目覚ましく成長していった。クリスマスのコンサートでは、マシュウから贈られたドレスに身を包み、見事に大役を果たす。また、新任のステイシー先生やアラン牧師夫妻などの理解者たちに励まされ、学力もぐんぐんと伸ばしていった。名門クィーン学院にトップの成績で進学し、奨学金での大学進学も目指すアン。そして猛勉強の末、エイヴォンリー奨学金の資格を得た。美しく思慮深い女性になったアンを、眩しそうに見つめるマシュウとマリラ。二人にとって、アンは今やかけがえのない娘になっていた。

そんなとき、アンにとって最大の悲しみが訪れる。心臓を患っていたマシュウが、全財産を預金していた銀行が倒産したことにショックを受けて、急死してしまったのだ。葬儀の前夜、マリラはアンに、厳しく接していても我が子のように愛していたことを語る。二人はマシュウを失った悲しみを分かち合い、共に泣き崩れるのだった。

人生の転機を迎えたアン。ギルバートとの和解…

いつもの生活に戻ったある日、自分の眼が失明の危機にあることを知ったマリラは、グリーン・ゲイブルズを手放すことを考える。それを聞いたアンは、大学に進学するのをやめ、教員として働くことでマリラを助けようと決意した。そうすれば、大切なグリーン・ゲイブルズを失うこともなかったのだ。

しかし、アヴォンリー村の教員はすでにギルバートに決まっていたため、アンは別の土地で働かなければならなかった。そこへ救いの手を差しのべたのは、他ならぬギルバートだった。彼はアヴォンリーでの仕事をアンに譲り、自分が別の土地へ行くことにしたのだ。これを知ったアンは、ギルバートを訪ねると感謝の言葉を伝え、これまで素直に接することができなかったことも詫びる。ギルバートは、ずっとアンと友人になりたいと願っていた。二人は今までの分を取り戻すかのように語り合い、お互いに働きながら大学進学を目指していこうと約束する。

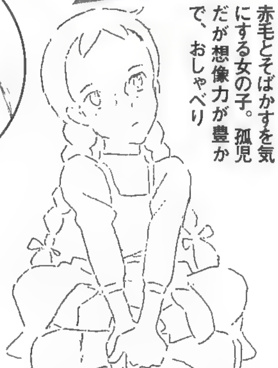
その夜、ステイシー先生や友人のステラに手紙を書くアンは、自分の未来が希望に満ちていることを確信するのだった。そして、空を見上げながら呟いた――「神は天にいまし、すべて世はこともなし」。

キャラクター紹介

キャラクターデザインを手がけたのは近藤喜文。原作を通じて多くの人が抱いていたキャラクターのイメージを損なうことなく、忠実に表現している。



15歳のアン



アン・シャーリー
赤毛とそばかすを気にする女の子。孤児だが想像力が豊かで、おしゃべり



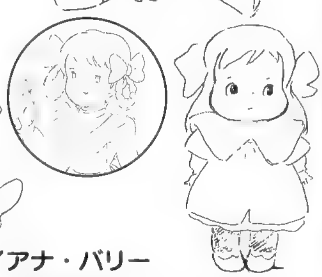
マシュウ・カスバート
アンのよき理解者。寡黙で女性恐怖症のため未婚だった。アンを引き取ってからは、マリラも驚く変化を見せる





マリラ・カスバート
マシュウの妹。あまり笑顔を見せず、口うるさいところもあるが、アンを愛し、立派に育てようとしている





ミニー・メイ
ダイアナの妹。喉頭炎にかかったとき、アンの看病によって救われる

ダイアナ・バリー
アンと生涯の友情を誓い合った親友。その姿も性格も、アンにとっては理想的な存在。進学するアンを応援





ギルバート・ブライス
アンの学問でのライバル。赤毛をからかって以来、口をきかなくなるが、つねにアンのことを気にかけている様子



ジェーン・アンドリュース



ルビー・ギリス



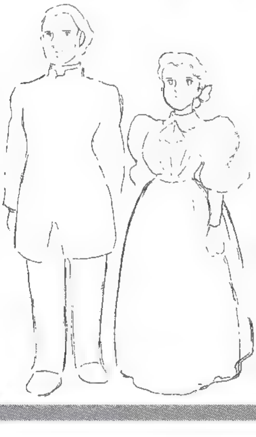
ガーティ・パイ（左）
ジョーシィ・パイ（右）

アンの学友
長年に渡って共に学ぶ、アンの友人たち。ジョーシィはアンをライバル視して、嫌味を言うこともしばしば





ミス・ステイシー
新任の教師。自立した活動的な女性で、アンは大きく影響を受ける





アラン牧師　ミセス・アラン
新任の牧師夫妻。その仲むつまじさから人々に慕われる。夫人はアンの相談相手



リンド夫人
グリーン・ゲイブルズの近所に住み、昔から何かとマシュウたちの世話をやく





ジョセフィン・バリー
ダイアナの大叔母でお金持ち。アンのよき理解者で心の友の一人

解説

『赤毛のアン』は名作シリーズの中でも、屈指の傑作──今でも、こう語られることは多い。理由のひとつに「原作に忠実に描かれたストーリー」が挙げられる。その背景には、高畑勲監督がアンの心情を理解できず、あえて原作通りにした……という事情があるようだが、原作ファンにはすでに馴染み深かった細かいエピソード（マシュウとふくらんだ袖のドレス、湖で演じた『白百合姫』など）が、作品世界を損ねずに再現されたことは、結果的に多くの支持を得る要因になった。

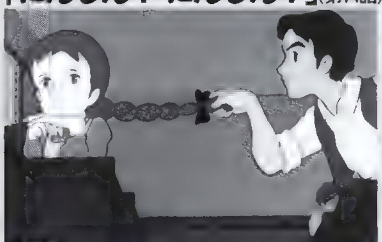
制作当時、物語の舞台となるプリンス・エドワード島では、スタッフによる綿密なロケハンが行われた。今でも『赤毛のアン』の世界を求めて、観光に訪れる日本人は多いが、そのきっかけはこのアニメにあると言っても過言ではない。それほど、名作シリーズ版のイメージが人々に与えた影響は大きい。

ちなみに、名作シリーズは開始当初から番組冒頭に『カルピス劇場』というタイトルが付いていたが、この『赤毛のアン』から『世界名作劇場』へと変更された。それは単純に、スポンサーがカルピス一社から花王石鹸との共同提供になったためだが、この新しいタイトルが以降のシリーズの総称になったことを思えば、『赤毛のアン』は記念的な作品だったといえる。また、このシリーズからナイター中継による放送休止が行われるようになり、名作シリーズの各作品が、丸1年分の全52話放送されることはなくなった。

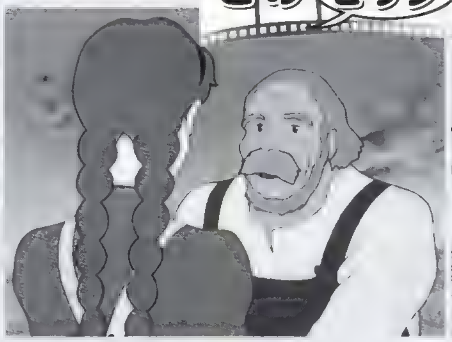
アンを演じた山田栄子は、本作がデビューとなる。当時は新人だったが、その後も少年から大人の女性まであらゆるキャラクターを演じ、名作シリーズには欠かせない存在になった。アン役のオーディションで、最後まで主役候補に残っていたのは、のちに『小公女セーラ』でセーラを演じた島本須美である。

このセリフがツボ!!

「にんじん！ にんじん！」(第14話)



▲アンとギルバートを長年に渡って決別させた罪深い一言。ギルバートとしては気になる女の子をからかっただけのつもりだが、それはアンをひどく傷つける言葉だった。そして騒動へ…。



「1ダースの男の子よりおまえにいてもらうほうがいいよ」(第46話)

◀老いたマシュウを気づかい「自分が男の子だったら…」と呟くアンへの言葉。「お前はわしの自慢の娘なんだ」──アンはマシュウの深い愛を感じる。

「神は天にいまし すべて世はこともなし」(第50話)



▲19世紀に活躍したイギリスの詩人、ロバート・ブラウニングの詩の一節。世界の美しさを讃えたこの詩に、アンは自分の希望ある未来を重ねた。

「あぁ～あたしどうしよう泣き出しちゃいたいわ！」(第2話)



▲自分が望まれた子どもではなかったと知り、絶望するアン。もうすでに涙があふれている。



「そうさのぅ…」

▲もっとも多く登場し、マシュウを思い浮かべた誰もが自然にイメージするセリフ。どんなことも、この一言が穏やかに受けとめる。

場面設定を降りた宮崎駿

映像の美しさには定評があるこの作品。今や巨匠となった宮崎駿が14話の途中まで、場面設定として参加していたことはあまりにも有名だ。ただ、アンの作風に、今ひとつ肌があわなかったらしい。その後は『ルパン三世・カリオストロの城』の制作に入った。



▶夕陽で長く伸びた影が印象的な場面。

アンとお菓子

野いちごにレヤー・ケーキにアイスクリーム…お菓子にちなんだ場面が多い『アン』。アン自身がキッチンに立つシチュエーションも何度か描かれている。北米ならではの甘そうなスウィーツは人気が高く、物語に登場するお菓子を紹介したレシピ本も多数ある。



▶アンは間違えて、ケーキに薬を入れる…。

成長したヒロイン

11歳から15歳へ、美しく成長したアン。名作シリーズの中では、ラストシーンで大人になった主人公が登場することはあるが、物語の中で見た目にわかるほど成長するパターンは少ない。大人っぽくなったアンは、そばかすがあっても赤毛でも十分にキレイだった。



▶いつのまにかアンの背が伸びて、驚くマリラ。

原作と原作者

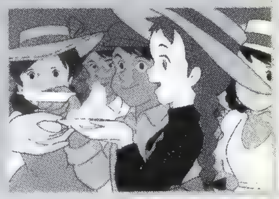
児童文学として、あまりにも有名な『赤毛のアン』。特に日本の女性にとっては、誰もが少女時代に一度は読んだというほど、世代を越えて浸透した名作である。

原作者のルーシー・モード・モンゴメリは1874年、本作の舞台でもあるプリンス・エドワード島で生まれた。小学校教師を経て、郵便局職員の仕事の傍ら、執筆活動を開始。初めて出版社に採用された作品こそ『赤毛のアン』だった。この作品に登場するエピソードの多くは、プリンス・エドワード島で育ったモンゴメリ自身の体験を元にしており、グリーン・ゲイブルズも実在した。そこにはマリラとマシュウのモデルになった老兄妹が住んでいたと言われる。

『赤毛のアン』がきっかけで、モンゴメリはカナダ初の商業作家として成功を収めた。牧師と結婚後も、牧師夫人としての仕事をしながら、さまざまなヒロインたちの物語を書いた。同時に出版社の要請で『アン』の続編も書き続け、シリーズは長編・短編合わせて10作品にもなった。モンゴメリにとって『アン』シリーズの執筆は、決して本意ではなかったと言われている。しかし、この作品で彼女はプリンス・エドワード島に、永遠に名を刻む作家となった。

ワンポイントコラム　アンが食べてみたかったアイスクリーム

ヨーロッパで生まれたアイスクリームがアメリカ大陸へ渡ったのは18世紀。19世紀半ばから一般向けに商品化が進んだ。しかし、それはアメリカでの話。カナダの東端にあるプリンス・エドワード島では、まだまだ珍しい食べ物だった。



11話でアンは一度も食べたことのないアイスクリームに想いを巡らせ、アイスクリームが振る舞われるピクニック行きたさに嘘の盗みを告白してしまう。それほど貴重なお菓子だった。

DVD



解説書には全巻に渡り、高畑勲（監督）、中島順三（プロデューサー）、近藤喜文（キャラクターデザイン・作画監督）の「スタッフ座談会」を掲載。キャラ設計や舞台設計など、当時の制作現場について語っている。

発売元:バンダイビジュアル　全12巻　BCBA-0090〜0101　各:カラー／103分(4話収録)／日本語字幕(ON・OFF可)／¥3,800円　※1・2巻は128分(5話収録)、12巻は105分(4話収録)　全巻:OP、ED、予告編を収録　※最終巻に、カラオケ「きこえるかしら」(ステレオ)の映像特典収録

各話タイトルとスタッフリスト

1話　マシュウ・カスバート驚く	①千葉茂樹・高畑勲　②③高畑勲　④近藤喜文
2話　マリラ・カスバート驚く	①千葉茂樹・高畑勲　②③高畑勲　④近藤喜文
3話　グリーン・ゲイブルズの朝	①磯村愛子・高畑勲　②③高畑勲　④近藤喜文
4話　アン・生立ちを語る	①②③高畑勲　④近藤喜文
5話　マリラ決心する	①神山征二郎　②池野文雄　③高畑勲　④近藤喜文
6話　グリーン・ゲイブルズのアン	①磯村愛子・高畑勲　②池野文雄　③高畑勲　④近藤喜文
7話　レイチェル夫人恐れをなす	①神山征二郎　②奥田誠治　③高畑勲　④近藤喜文
8話　アン日曜学校へ行く	①神山征二郎・高畑勲　②とみの喜幸　③高畑勲　④近藤喜文
9話　おごそかな誓い	①神山征二郎　②とみの喜幸　③高畑勲　④近藤喜文
10話　アン・心の友と遊ぶ	①神山征二郎・高畑勲　②楠葉宏三・腰繁男　③高畑勲　④近藤喜文
11話　マリラ・ブローチをなくす	①神山征二郎　②奥田誠治　③高畑勲　④近藤喜文
12話　アン・告白する	①神山征二郎・高畑勲　②とみの喜幸　③高畑勲　④近藤喜文
13話　アン・学校へ行く	①神山征二郎・高畑勲　②奥田誠治　③高畑勲　④近藤喜文
14話　教室騒動	①神山魁三　②奥田誠治　③高畑勲　④近藤喜文
15話　秋の訪れ	①神山征二郎　②とみの喜幸　③高畑勲　④近藤喜文
16話　ダイアナをお茶に招く	①高野文邦　②奥田誠治　③高畑勲　④近藤喜文
17話　アン、学校にもどる	①神山征二郎・高畑勲　②とみの喜幸　③高畑勲　④近藤喜文
18話　アン、ミニー・メイを救う	①神山征二郎・高畑勲　②奥田誠治　③高畑勲　④近藤喜文
19話　ダイアナの誕生日	①高野文邦　②横田和善　③高畑勲　④近藤喜文
20話　再び春が来て	①高野文邦・高畑勲　②腰繁男　③高畑勲　④近藤喜文
21話　新しい牧師夫妻	①千葉茂樹　②楠葉宏三　③高畑勲　④近藤喜文
22話　香料ちがい	①千葉茂樹　②横田和善　③高畑勲・横田和善　④近藤喜文
23話　アン お茶によばれる	①千葉茂樹・高畑勲　②腰繁男　③高畑勲　④近藤喜文
24話　面目をかけた大事件	①千葉茂樹　②楠葉宏三　③高畑勲　④近藤喜文
25話　ダイアナへの手紙	①高野文邦・高畑勲　②横田和善　③高畑勲・横田和善　④近藤喜文
26話　コンサートの計画	①千葉茂樹・高畑勲　②奥田誠治　③高畑勲　④近藤喜文
27話　マシュウとふくらんだ袖	①高野文邦・高畑勲　②腰繁男　③高畑勲　④近藤喜文
28話　クリスマスのコンサート	①高野文邦・高畑勲　②光延博愛　③高畑勲　④近藤喜文
29話　アン、物語クラブを作る	①②③高畑勲・横田和善　④近藤喜文
30話　虚栄と心痛	①高畑勲・高野文邦　②楠葉宏三　③高畑勲　④近藤喜文
31話　不運な白百合姫	①荒木芳久・高畑勲　②斉藤博　③高畑勲　④近藤喜文
32話　生涯の一大事	①千葉茂樹・高畑勲　②腰繁男　③高畑勲　④近藤喜文
33話　クィーン組の呼びかけ	①千葉茂樹・高畑勲　②横田和善　③高畑勲・横田和善　④近藤喜文
34話　ダイアナとクィーン組の仲間	①千葉茂樹・高畑勲　②楠葉宏三　③高畑勲　④近藤喜文
35話　夏休み前の思わく	①荒木芳久・高畑勲　②腰繁男　③高畑勲　④近藤喜文
36話　物語クラブのゆくえ	①高野文邦・高畑勲　②横田和善　③高畑勲・横田和善　④近藤喜文
37話　十五歳の春	①高野文邦・楠葉宏三　②楠葉宏三　③高畑勲　④近藤喜文
38話　受験番号は13番	①千葉茂樹・高畑勲　②馬場健一　③高畑勲　④近藤喜文
39話　合格発表	①千葉茂樹・高畑勲　②腰繁男　③高畑勲　④近藤喜文
40話　ホテルのコンサート	①荒木芳久・高畑勲　②横田和善　③高畑勲・横田和善　④近藤喜文
41話　クィーン学院への旅立ち	①荒木芳久・高畑勲　②楠葉宏三　③高畑勲・楠葉宏三　④近藤喜文
42話　新しい学園生活	①荒木芳久・高畑勲　②馬場健一　③高畑勲・馬場健一　④近藤喜文
43話　週末の休暇	①神山征二郎・高畑勲　②腰繁男　③高畑勲・腰繁男　④近藤喜文
44話　クィーン学院の冬	①神山征二郎・高畑勲　②横田和善　③高畑勲・横田和善　④近藤喜文
45話　栄光と夢	①千葉茂樹・白石なな子　②楠葉宏三　③高畑勲・楠葉宏三　④近藤喜文
46話　マシュウの愛	①千葉茂樹・白石なな子　②馬場健一　③高畑勲・馬場健一　④近藤喜文
47話　死と呼ばれる刈入れ人	①荒木芳久・高畑勲　②腰繁男　③高畑勲・腰繁男　④近藤喜文
48話　マシュウ我が家を去る	①荒木芳久・高畑勲　②横田和善　③高畑勲・横田和善　④近藤喜文
49話　曲り角	①荒木芳久・高畑勲　②楠葉宏三　③高畑勲・楠葉宏三　④近藤喜文
50話　神は天にいまし、すべて世は事もなし	①荒木芳久・高畑勲　②馬場健一　③高畑勲・馬場健一　④近藤喜文

①脚本　②絵コンテ　③演出　④作画監督

トム・ソーヤーの冒険

放映期間：1980年1月6日〜12月28日



スタッフ　原作：マーク・トウェイン　製作：本橋浩一　製作管理：高桑充　企画：佐藤昭司　脚本：宮崎晃 他　音楽：服部克久　キャラクターデザイン：関修一　美術監督：阿部泰三郎　録音監督：浦上靖夫　撮影監督：黒木敬七　プロデューサー：松土隆二　監督：斎藤博　制作：日本アニメーション・フジテレビ　■主題歌：OP「誰よりも遠くへ」ED「ぼくのミシシッピー」　作詞：山川啓介　作曲・編曲：服部克久　歌：日下まろん

キャスト　トム：野沢雅子　ハック：青木和代　ベッキー：潘恵子　シッド：白川澄子　ポリーおばさん：遠藤晴　メアリー：小沢かほる　インジャン・ジョー：蟹江栄司・内海賢二　コリンズ保安官：鈴木泰明　マフ・ポッター：峰恵研　ベン：東美江・峰あつ子　ドビンズ先生：永井一郎　ローズ先生：江川菜子　ジム：西川幾雄　アーサー：森功至

ストーリー

冒険好きなわんぱくトムが村の英雄になっちゃう…!?

1840年代のアメリカ。ミズーリ州を流れるミシシッピー川の畔にある小さな村セント・ピーターズバーグに、わんぱくな少年トマス・ソーヤー（通称・トム）が住んでいた。

両親を亡くしたトムは、弟のシッドとともに、ポリーおばさんの家で暮らしている。

おとなしくて言いつけを守る弟のシッドとは反対に、トムはやんちゃなガキ大将だった。毎朝ポリーおばさんの怒鳴り声で目を覚まし、仕方なく向かった学校では、授業をまじめに聞くわけもない。ノート代わりの石版に落書きしたドビンズ先生の似顔絵で友人を笑わせ、教室の後ろに立たされる。

さらに、友人の宿無しハックが学校へ遊びの誘いにくれば、教室の窓から逃げ出してしまう。学校が終われば友人たちと野山をはだしでかけまわり、家に帰ってからもハックと誘い合わせて夜遊び（海賊の宝探し）に出かけてしまうのだ。

そんないたずら者のトムだが、ある日、セントルイスから越してきた少女ベッキーに一目ぼれしてしまう。家の前であれこれパフォーマンスすることでベッキーの気を引き、婚約に成功したまではよかったが「以前ほかの女の子と婚約していた」とうっかり口を滑らせ、ベッキーを怒らせてしまうのだった。

失恋したトムは、家出をして海賊になると決意。ハックと友人のベンを誘って、いかだでミシシッピー川の小島へ向かう。ところが、雨で流されたいかだの残骸を見た村の人は、「3人は溺れ死んだ」と思いこんでしまう。葬式の最中、なんとトムたちが登場。教会に集まった人々は奇跡を喜び合った。ところがそれは、騒ぎを知ったトムの「わざと式の最中に現れ、村の英雄になる作戦」だったのだ。

ベッキーとはまだぎくしゃくしたままのトムだが、彼女の身代わりにドビンズ先生のおしおきを受けたのをきっかけに、めでたく仲直りできた。

夏休みがはじまり、トムは、芝居一座の少女と知り合ったり、砂金探しや気球に乗る事件を起こしながら過ごしていた。

大金持ちにはなったけど、終わり方は格好悪いぜ!?

ある日の夜中、お化け屋敷探検に向かったトムとハックは、墓場で殺人事件を目撃する。インジャン・ジョーが、口論の末、医師のロビンソン先生をナイフで刺し殺したのだ。

ところが、翌日、保安官に逮捕されたのは酔っぱらいのマフ・ポッターだった。

事件の真相を知るトムは、勇気をふり絞って、裁判で「インジャンが真犯人だ」と証言。だが、インジャンは逃走し、行方をくらませる。トムは、インジャンの復讐を恐れた。

数週間後。ハックの新しいすみかを探して、トムとハックがお化け屋敷を訪れる。そこに、インジャンが仲間を連れて現れた。二人は、インジャンが、屋敷に隠してあった莫大な金貨を偶然掘り出す場面を目撃。保安官に知らせたものの、インジャンは再び姿を消した。

夏休みが終わりに近づき、子どもたちはピクニックへ。トムは、自由時間にベッキーとマクドウガルの洞窟を探検するが、二人で迷子になってしまう。しかも、そこにインジャンが現れた。インジャンは、仲間を殺し、洞窟に隠した金貨を掘り出そうとしていたのだ。そこに保安官がかけつける。

逃げるインジャンは、洞窟の谷に転落してしまったという。

翌日、トムとハックは、洞窟でインジャンが隠した金貨を掘り当て、大金持ちになった。

新学期がはじまり、後見人と暮らすことになったハックも学校にやってくる。

しかし、新任のローズ先生に口答えをした罰で、トムとハックは仲良くむち打たれるのだった……。

キャラクター紹介

関修一の描く少年キャラクターが魅力的。







ハック
(ハックルベリー・フィン)

▲トムの親友。母の死後、酒飲みの父から離れ、木の上に作った家でのんびり一人暮らしをしている

トム
(トマス・ソーヤー)

▲遊ぶことが大好きな小学生の男の子。将来の夢は蒸気船の操舵手。思いやりがあるガキ大将







ポリーおばさん

▲トムとシッドの母親の妹。甥の二人をわが子のように育てている



メアリー

▲ポリーおばさんの娘。優しく、信仰心に篤い。将来の夢は看護婦さん



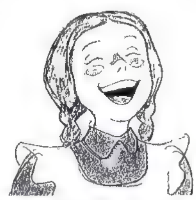
シッド

▲トムの弟だが、勉強好きで行儀もいい。誉められ方を知っている

ベッキー
(レベッカ・サッチャー)

▶セントルイスから越してきた判事の娘。最初はトムを無視したが、婚約するほど仲良くなる





▲トムの優しさを知って彼のことが大好きになる
▼飼い犬のシーザーは、いつもトムに吠えかかる









マフ・ポッター

▲いつも酒を飲んでいるおじさん。殺人事件の濡れ衣を着せられる

インジャン・ジョー

▲ネイティブアメリカンと白人のハーフ。悪い噂が多い村の嫌われ者

コリンズ保安官

▲村の治安を守る役人。マフ・ポッターを誤認逮捕してしまった

解説

アメリカ人の心の故郷とも言える小説で、世界的に有名な児童文学でもある『トム・ソーヤーの冒険』をアニメ化したこの作品は、まさに世界名作劇場の名に恥じない傑作。

斎藤博（監督）、宮崎晃（脚本）、関修一（キャラクターデザイン）の3人は『ペリーヌ物語』（1978年）を生みだしたトリオだ。

斎藤監督は「男の子を生き生きと描ける」宮崎に脚本を書いてもらうことを最初から考えていたそうだが、宮崎はこの当時病気の療養中で、制作に参加したのは9話から。関修一は、この仕事を担当するのが急遽決定したそうだが、それまでのシリーズと違う魅力のキャラを生み出すことに成功している。関自身もこの作品を代表作に挙げるほどだ。

どのスタッフにも共通しているのは、トムという男の子の主人公の「子どもらしい冒険物語」を描くのをとても楽しんでいたこと。学校嫌いで、夜遅くまで外で遊びまわり、木の上に家を作ったり、お化け屋敷や洞窟を探検するトム。彼は、子どもの（とくに男の子の）夢をそのまま形にしたような存在だ。

この作品の映像からは、そんな夢に憧れたスタッフの想いがストレートに伝わってくる。

見どころは、やはりトムのいたずらの数々。ただし、トムはただのいたずら者ではない。ペンキ塗りの仕事を友人に手伝ってもらう有名なエピソードでは、トムは、力ずくで友人に手伝わせはしない。相手が自分から手伝うようにしむける。勉強は苦手なトムだが、いたずらは天才的だ。

また、ベッキーの身代わりに先生のおしおきを受けるなど、優しい心の持ち主でもある。だからこそ、トムのまわりには仲間が集まる。おとなに疎まれる宿無しハックと村の子どもが遊ぶのも、トムとハックが仲良しだからだ。そんなトムとハックの友情話も見逃せない。

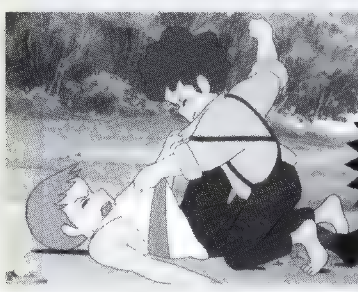
この場面がツボ!!



▲服がぬれたらすっぱだかになって乾かそう！

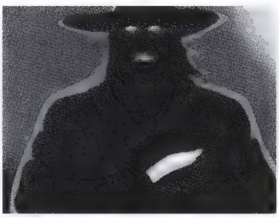
トムたちが男の子らしく元気に遊ぶ姿は、爽快そのもの。戸外をはだしで走りまわる姿を見ていると、こちらも元気が出てくる。強く、優しく、たくましくは男の子の基本だ。

▼男の子はケンカするくらい元気な方がいい!?

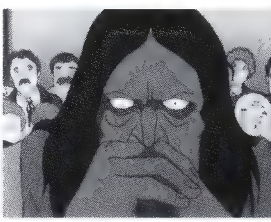


男の子は元気が一番!!

名作アニメ屈指の悪役



◀ロビンソン先生と手下を殺害。うわさでは、ほかにも殺人を犯し、しばらく村を離れていたのだ



▶海賊の宝を探したり、トムが発見した砂金を自分も見つけようとする。意外にロマンチストだったかも？

こわいぞ!! インジャン・ジョー

ほかの世界名作劇場作品にも悪党は登場するが、インジャン・ジョーほど凶悪な犯罪者は珍しい。物語の中だけで二人も殺害しているのだ！



このセリフがツボ!!

「トムたちはいたずらの度がすぎたかもしれません。だが、トムがやったいたずらで、このいたずらだけは決して神がお許しにならないといういたずらがあったかどうか……。ひとつもないでしょう。あるはずがないのです。あの3人はやはり天使なのです」（第16話）



▲自分たちの葬儀に登場することで、英雄になる計画の3人。ねらいどおり「村の英雄」に！

このセリフは、川で溺れ死んだと思われたトムたちの葬儀で、教会の牧師が発したもの。牧師が言うとおり、トムがしでかすいたずらは、たあいのないものばかり。物を壊したり人を傷つけるいたずらは、ほとんどないのだ。笑って許せるいたずらだから、トムはみんなに愛されるのだ。でも「天使」は誉め過ぎ？



▲葬儀にトムたちが現れて参列者は仰天。ポリーおばさんはトムを英雄扱いしない。ドビンズ先生はむち打ち20回の罰を与える

原作と原作者

原作者のマーク・トウェイン（1835～1915）は、アメリカ・ミズーリ州のフロリダ生まれ。本名は、サミュエル・ラングホーン・クレメンズ。4歳のとき、ミズーリ州のハンニバルに移っている。この町が『トム・ソーヤーの冒険』のセント・ピーターズバーグのモデルだ。12歳で印刷工になり、蒸気船の水先案内人や金鉱掘りの仕事をへて、作家に。発表した作品は、アメリカ文学に多大な影響を与えている。

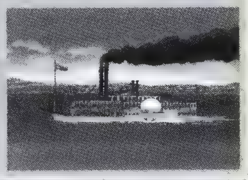
ちなみに、ペンネームの「マーク・トウェイン」とは、川船の測量手が使う言葉の「水深2尋（ひろ）（約3.6m）」からとったものだ。

『トム・ソーヤーの冒険』は1876年に書かれた自伝的小説で、登場する事件の大部分は実際にあったこと。ハックも実在の人物だったようだ。ただ、トム・ソーヤーも同じく、単独モデルでなく、3人の少年の特徴をとってつくられたキャラらしい。

アニメ『トム・ソーヤーの冒険』は、同名原作の物語だけでなく、同じマーク・トウェイン原作の『ハックルベリイ・フィンの冒険』『トム・ソーヤーの探偵』『トム・ソーヤーの探検』などに登場するエピソードや、それをもとにしたアニメ・オリジナルエピソードを組みこんで構成されている。

ワンポイントコラム　古きよき時代のアメリカが抱えていた歴史的人種問題

外輪船が航行するミシシッピー川は、北米大陸を縦断してメキシコ湾に注ぐ、世界で3番目に長い（全長3,780km）大河。トムの時代には、重要な交通路でもあった。また、この時代は南北戦争（1861年）より前なので、アメリカにはまだ奴隷制度が存在する。ポリーおばさんの家にもジムという黒人の召使いがいた。さらに第33話では、奴隷の黒人が逃げる手助けをするトムたちの姿が描かれている。



DVD



解説書には、1～4巻：斎藤博（監督）、5～7巻：阿部[illegible]三郎（美術監督）、8～10巻：関修一（キャラデザイン）、11～12巻：宮崎晃（脚本）の「スタッフインタビュー」が掲載されている。

発売元：バンダイビジュアル　全12巻　BCBA-0190～0201　各：カラー／103分（4話収録）日本語字幕（ON・OFF可）￥3,800　※1巻は128分（5話収録）全巻：OP、ED、予告編を収録　※最終巻には、カラオケ「誰よりも遠くへ」（ステレオ）の映像特典を収録

各話タイトルとスタッフリスト

1話　トムとハックとブタ騒動	①加藤盟　②竹田のびる　③斎藤博　④こさこ吉重
2話　ごきげんなペンキ塗り	①清瀬武　②竹田のびる　③斎藤博　④こさこ吉重・関修一・後上義隆
3話　トム一目ぼれをする	①神山征二郎　②竹田のびる　③斎藤博　④こさこ吉重
4話　サムじいさんのおまじない	①神山征二郎　②竹田のびる　③斎藤博　④こさこ吉重
5話　恋は異なもの味なもの	①神山征二郎　②腰繁男　③斎藤博　④高野登
6話　ハックの家づくり	①神山征二郎　②竹田のびる　③斎藤博　④こさこ吉重
7話　ライバル登場	①富田義朗　②馬場健一　③斎藤博　④こさこ吉重
8話　あこがれの蒸気船	①磯見忠彦　②鈴木孝義　③斎藤博　④高野登
9話　ポリーおばさんの子供たち	①宮崎晃　②横田和善　③斎藤博　④こさこ吉重・桜井美知代
10話　村の嫌われ者	①宮崎晃　②腰繁男　③斎藤博　④こさこ吉重・後上義隆
11話　海賊の宝	①宮崎晃　②馬場健一　③斎藤博　④こさこ吉重
12話　ベッキー・サッチャー怒る	①宮崎晃　②鈴木孝義　③斎藤博　④高野登
13話　海賊になるんだ	①宮崎晃　②横田和善　③斎藤博　④こさこ吉重
14話　海賊に学校はない	①宮崎晃　②腰繁男　③斎藤博　④桜井美知代・後上義隆
15話　冒険、冒険また冒険	①宮崎晃　②横田和善　③斎藤博　④こさこ吉重
16話　トム・ソーヤーの葬式	①宮崎晃　②馬場健一　③斎藤博　④高野登
17話　運の悪い日	①宮崎晃　②竹田のびる　③斎藤博　④杉野昭夫
18話　痛い仲直り	①宮崎晃　②鈴木孝義　③斎藤博　④こさこ吉重
19話　蛙の戦い	①宮崎晃　②横田和善　③斎藤博　④桜井美知代・後上義隆
20話　ドビンス先生の秘密	①宮崎晃　②腰繁男　③斎藤博　④こさこ吉重
21話　夏休みの始まり	①宮崎晃　②鈴木孝義　③斎藤博　④高野登
22話　病気にならない薬	①宮崎晃　②竹田のびる　③斎藤博　④後上義隆
23話　ナマズ釣りの日	①宮崎晃　②横田和善　③斎藤博　④こさこ吉重
24話　ネクタイをしたハック	①太田省吾・宮崎晃　②腰繁男　③斎藤博　④こさこ吉重・桜井美知代
25話　意地っぱり野郎	①宮崎晃　②竹田のびる　③斎藤博　④高野登
26話　子役のリゼット	①太田省吾・宮崎晃　②馬場健一　③斎藤博　④こさこ吉重
27話　お芝居の始まるまで	①太田省吾・宮崎晃　②鈴木孝義　③斎藤博　④桜井美知代
28話　リゼットを助けろ	①太田省吾・宮崎晃　②横田和善　③斎藤博　④こさこ吉重
29話　突然のさようなら	①太田省吾・宮崎晃　②腰繁男　③斎藤博　④高野登
30話　ハックの父親	①宮崎晃　②馬場健一　③斎藤博　④こさこ吉重
31話　数を数えろ	①太田省吾・宮崎晃　③斎藤博　②鈴木孝義　④桜井美知代
32話　黄金を見つけた！	①宮崎晃　②腰繁男　③斎藤博　④こさこ吉重
33話　自由に向って逃げろ	①太田省吾・宮崎晃　②横田和善　③斎藤博　④高野登
34話　天から降ってきた男	①宮崎晃　②竹田のびる　③斎藤博　④こさこ吉重
35話　空を飛びたい	①宮崎晃　②鈴木孝義　③斎藤博　④後上義隆
36話　気球を直そう	①宮崎晃　②横田和善　③斎藤博　④こさこ吉重・桜井美知代
37話　空からの眺め	①宮崎晃　②竹田のびる　③斎藤博　④高野登
38話　おそろしい出来事	①宮崎晃　②腰繁男　③斎藤博　④こさこ吉重
39話　良心の痛み	①宮崎晃　②鈴木孝義　③斎藤博　④後上義隆
40話　マフ・ポッターの裁判	①宮崎晃　②横田和善　③斎藤博　④こさこ吉重・桜井美知代
41話　インジャン・ジョーの行方	①宮崎晃　②竹田のびる　③斎藤博　④高野登
42話　楽しい船の旅	①宮崎晃　②腰繁男　③斎藤博　④こさこ吉重
43話　白い馬を見た	①宮崎晃　②鈴木孝義　③斎藤博　④後上義隆
44話　稲妻をつかまえろ	①宮崎晃　②竹田のびる　③斎藤博　④こさこ吉重・桜井美知代
45話　さらば白馬よ	①宮崎晃　②腰繁男　③斎藤博　④高野登
46話　化物屋敷で	①宮崎晃　②横田和善　③斎藤博　④こさこ吉重
47話　マクドウガルの洞窟	①宮崎晃　②鈴木孝義　③斎藤博　④後上義隆
48話　インジャン・ジョーの最後	①宮崎晃　②竹田のびる　③斎藤博　④こさこ吉重
49話　格好のわるい終わりかた	①宮崎晃　②竹田のびる　③斎藤博　④こさこ吉重

①脚本　②絵コンテ　③演出　④作画監督

家族ロビンソン漂流記
ふしぎな島のフローネ

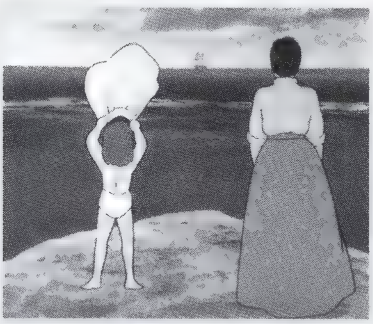
放映期間：1981年1月4日～12月27日



スタッフ 原作：ヨハン・ダビット・ウィース 製作：本橋浩一 製作管理：高桑充 企画：佐藤昭司 脚本：松田昭三 音楽：坂田晃一 キャラクターデザイン：関修一 美術監督：井岡雅宏 録音監督：小松亘弘 プロデューサー：松土隆二 監督：黒田昌郎 制作：日本アニメーション・フジテレビ ■主題歌：OP「裸足のフローネ」ED「フローネの夢」 作詞・作曲：井上かつお 編曲：青木望 歌：潘恵子（ポニーキャニオン）

キャスト フローネ・ロビンソン：松尾佳子 エルンスト（お父さん）：小林勝彦（1～7話）、小林修（8話～） アンナ（お母さん）：平井道子 フランツ：古谷徹 ジャック：高坂真琴 エミリー：黒須薫 モートン：永井一郎 タムタム：塩屋翼

この場面がツボ!!
「はやく見つけてちょうだーい！」（第20話）



沖に船を発見して大声で呼ぶシーンでは、やおらワンピースを脱いでそれを振り回した。船はむなしく通りすぎ、それはそれで切ないシーンなのだが、別の意味でも印象深い。

ストーリー

19世紀初頭。スイスの医師、ロビンソン一家は、医師不足の開拓地、オーストラリアに向かっていた。好奇心旺盛なフローネは、幼い弟ジャックと一緒に大騒ぎ。音楽家志望の長男フランツだけは浮かない顔だった。

ところが、オーストラリアを目前に船は嵐で座礁、一家はなんとか近くの島にたどり着いたが、そこは絶海の孤島だった。こうして、ロビンソン一家のサバイバル生活が始まる。

物知りで頼りになる父エルンストと、栽培の知識があるしっかり者の母アンナは、さまざまなアイデアで無人島での生活を切り拓いていく。フローネは、初めて見るブチクスクスの子供をメルクルと名付けてペットにし、サバイバル生活を満喫していた。気弱な兄、フランツだけが、不安や不満で時々暗くなってしまうのだった。

しかし、無人島の自然は厳しい。やっと作り上げた快適な木の上の家も、雨季に入って手放さなければならなくなった。一家は洞窟に新たな住居を求める。そんなある日、新たな漂流者、モートン船長とタムタム少年が加わる。しかし変わり者のモートンは、一家と合流することなく、洞窟での生活を続ける。

ある日フローネは、川の水が温かいことに気づく。たび重なる地震といい、火山の噴火が近いことはあきらかだった。一刻も早く島を脱出すべく、ロビンソン一家とモートンたちは力を合わせて帆船を作り始める。気弱なフランツも、いつしかたくましい働き手になっていた。

ついに帆船が完成し、皆は脱出に成功した。一時は順調な航海だったが、日照りと凪で船は漂流するばかり。水も底をつき、もはやこれまでと思われた時、ついに新天地、オーストラリアの港が見えてきた！

こうして一家は目的地、オーストラリアに無事到着、新たな生活を始めるのだった。

解説

前作『トム・ソーヤーの冒険』後、スタッフに大きく移動があり、『フローネ』には作画監督不在という変則的な話数がかなりある。キャラクターの雰囲気がときどき微妙に変わるのは、そのせいだろう。

原作では男の4人兄弟だったのを、フローネを登場させて主人公にすえた。無人島のサバイバルといっても、万能な父親以下、家族が常に一緒で、危機感はあまりない。名作シリーズには、孤独な主人公の自立や成長がテーマのものが多いが、この作品はサバイバルを描きながらも、テーマはむしろ「家族」と言ってもいいだろう。

天真爛漫でなにも考えていないようなフローネと、内向的で心配性のフランツが好対照。前々年『機動戦士ガンダム』でアムロを演じた古谷徹が、フランツ役によくハマっていた。

原作と原作者

原作は日本ではあまり知られていないが、スイス児童文学としては『ハイジ』と並び欧米では有名で、ディズニーが映画化した『南海漂流』（ビデオタイトル『スイス・ファミリー・ロビンソン』）がある。

息子のヨハン・ルドルフ・ウィースは、父のヨハン・ダビットが書き残した原稿を加筆整理し、1814年に『スイスのロビンソン』として発表した（原作はダビット名義）。もとは、父のダビットが、実話を脚色して子どもたちに語り聞かせた寝物語だったという。ルドルフはベルン大学の哲学教授で、ほかに歴史書、スイス民謡集、詩集などの著作がある。

キャラクター紹介



フランツ：音楽を愛する繊細なフローネの兄

フローネ：後先考えず行動する子供らしい主人公

アンナ：お母さん。魔法のような畑を作る

ジャック：フローネの弟。貝殻を集めるのが趣味

エルンスト：お父さん。医師で、科学的冷静さがウリ

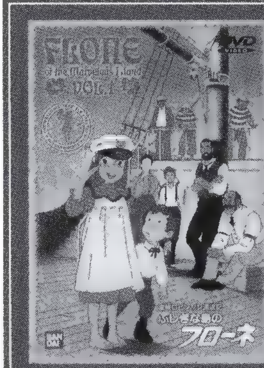
エミリー：フランツのガールフレンド

モートン：島に漂着した船乗り。変わり者

タムタム：モートンの船のボーイだった少年

メルクル：ブチクスクス。フローネのペット

DVD



解説書には、1～6巻：黒田昌郎（監督）、10～11巻：関修一（キャラデザイン）のインタビュー掲載、最終巻には企画書の抜粋収録。ジャケットイラストは関修一。

発売元：バンダイビジュアル　全12巻
BCBA-0572～0583　各：カラー／103分（4話収録）日本語字幕（ON・OFF可）￥3,800　※1・2巻は128分5話収録 12巻は105分（4話収録）全巻OP、ED、予告編を収録※最終巻にカラオケ「裸足のフローネ」（ステレオ）の特典映像付き

各話タイトルとスタッフリスト

話数	タイトル	①	②	③	④
1話	一通の手紙	松田昭三	黒田昌郎	黒田昌郎	桜井美知代
2話	旅立ち	松田昭三	奥田誠治	黒田昌郎	村田耕一
3話	フローネの心変り	松田昭三	馬場健一	黒田昌郎	桜井美知代
4話	オーストラリアをめざして	松田昭三	奥田誠治	黒田昌郎	村田耕一
5話	フローネ船長	松田昭三	横田和善	黒田昌郎	桜井美知代
6話	こわい嵐	松田昭三	奥田誠治	黒田昌郎	桜井美知代
7話	なんでもできるおとうさん	松田昭三	横田和善	黒田昌郎	村田耕一
8話	島をめざして	松田昭三	奥田誠治	黒田昌郎	村田耕一
9話	あたらしい家族	松田昭三	腰繁男	黒田昌郎	桜井美知代
10話	かなしみの再会	松田昭三	奥田誠治	黒田昌郎	村田耕一
11話	おばけの木	松田昭三	横田和善・桜井美知代	黒田昌郎	桜井美知代
12話	おかあさんの活躍	松田昭三	鈴木孝義	黒田昌郎	――――
13話	フランツの目	松田昭三	山中茂	黒田昌郎	村田耕一
14話	貝殻の歌がきこえる	松田昭三	黒川文男	黒田昌郎	――――
15話	木の上の家	松田昭三	横田和善	黒田昌郎	――――
16話	我家の日課	松田昭三	黒川文男	黒田昌郎	――――
17話	おかあさんの畑	松田昭三	山中繁	黒田昌郎	――――
18話	メルクルを助けて！	松田昭三	黒田昌郎	黒田昌郎	川筋豊
19話	フローネ、狩に行く	松田昭三	古沢日出夫	黒田昌郎	――――
20話	船が見える	松田昭三	――――	黒田昌郎	村田耕一
21話	亀の赤ちゃん	松田昭三	横田和善	黒田昌郎	――――
22話	ジャックはコレクター	松田昭三	黒川文男	黒田昌郎	――――
23話	無人島の休日	松田昭三	池野文雄	黒田昌郎	村田耕一
24話	フローネの家出	松田昭三	黒川文男	黒田昌郎	――――
25話	無人島の夜はまっくらやみ	松田昭三	横田和善	黒田昌郎	――――
26話	おにいちゃんは弓の名手？	松田昭三	斎藤博	黒田昌郎	村田耕一
27話	無人島の音楽会	松田昭三	黒川文男	黒田昌郎	――――
28話	ジャックの病気	松田昭三	杉山卓	黒田昌郎	――――
29話	フローネ行方不明となる	松田昭三	斎藤博	黒田昌郎	村田耕一
30話	きついお仕置き	松田昭三	横田和善	黒田昌郎	――――
31話	わたしはのけもの？	松田昭三	黒田昌郎	黒田昌郎	――――
32話	船ができた！	松田昭三	横田和善	黒田昌郎	岡豊
33話	雨、雨、ふれふれ	松田昭三	黒田昌郎	黒田昌郎	村田耕一
34話	洞窟をさがせ！	松田昭三	横田和善	黒田昌郎	前田英美
35話	洞窟の秘密	松田昭三	黒田昌郎	黒田昌郎	森友典子
36話	幽霊が出る！	松田昭三	楠葉宏三	黒田昌郎	岡豊
37話	あらたな漂流者	松田昭三	横田和善	黒田昌郎	村田耕一
38話	男の子と女の子	松田昭三	楠葉宏三	黒田昌郎	前田英美
39話	ひねくれ者モートン	松田昭三	横田和善	黒田昌郎	森友典子
40話	少年タムタム	松田昭三	楠葉宏三	黒田昌郎	岡豊
41話	行ってしまったモートンさん	松田昭三	黒田昌郎	黒田昌郎	村田耕一
42話	恐ろしい地震	松田昭三	楠葉宏三	黒田昌郎	前田英美
43話	戻ってきたモートンさん	松田昭三	黒田昌郎	黒田昌郎	森友典子
44話	もう一度船を！	松田昭三	楠葉宏三	黒田昌郎	岡豊
45話	死なないでロバさん	松田昭三	横田和善	黒田昌郎	村田耕一
46話	ヤギをすてないで	松田昭三	黒田昌郎	黒田昌郎	前田英美
47話	続ヤギをすてないで	松田昭三	黒田昌郎	黒田昌郎	森友典子
48話	さようなら無人島	松田昭三	岡部英二	黒田昌郎	岡豊
49話	陸が見える！	松田昭三	横田和善	黒田昌郎	村田耕一
50話	また会う日まで	松田昭三	黒田昌郎	黒田昌郎	前田英美

①脚本　②絵コンテ　③演出　④作画監督　（――はいずれもクレジット表記なし）

南の虹のルーシー

放映期間：1982年1月10日～12月26日

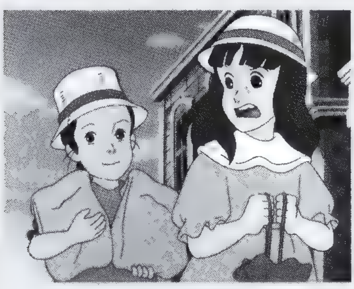


スタッフ 原作：フィリス・ピディングトン　製作：本橋浩一　製作管理：高桑充　企画：佐藤昭司　脚本：宮崎晃　音楽：坂田晃一　キャラクターデザイン：関修一　美術：阿部泰三郎　撮影監督：黒木敬七　録音監督：斯波重治　プロデューサー：松土隆二　監督：斎藤博　制作：日本アニメーション・フジテレビ　■主題歌：OP「虹になりたい」ED「森へおいで」　作詞：深沢一夫　作曲・編曲：坂田晃一　歌：やまがたすみこ（ポニーキャニオン）

キャスト ルーシー・メイ・ポップル：松島みのり　ケイト：吉田理保子　クララ：玉川沙季子　アーサー：堀勝之祐　アーニー：谷育子　ベン：松田辰也　トヴ：鈴木三枝・高田由美　ペティウエル：滝口順平　デイトン：肝付兼太　ジョン：井上和彦　ビリー：鈴木三枝　フランク・プリンストン：小島敏彦　シルビア：坪井章子

この場面がツボ!!

ルーシーのボケに、ケイトのツッコミ。姉妹マンザイにハマって見る



ケイトは一生懸命妹の上位に立とうとするが、実はほとんど同レベルな上に、ルーシーは必殺マイペース人間。なかなかうまくいかず、まさに「のれんに腕押し」。会話は毎回かけ合い漫才のようになってしまう。

ストーリー

ポップル一家は、理想の農場を夢見て、新天地オーストラリアに到着した。農夫の父アーサー、母のアーニー、そして娘のクララ、ケイト、ルーシー・メイ、息子のベンとトブの7人家族を、荒涼とした大地が迎える。

しかし次女のケイトと三女のルーシーは元気いっぱい。年が近いせいか常に対抗意識を燃やしながらも、マイペースで新生活を満喫している。特に動物好きのルーシーにとって、オーストラリアのめずらしい動物たちは魅力だった。長女クララは、移民船の船員、ジョンと思いを通わせる。ジョンは再会を約束して去っていく。

やっと首都アデレードに家を囲えたポップル一家。ルーシーはベンの拾ってきた野性のディンゴの子をリトルと名付け、飼い始める。

ところが、一家は農場の入手に失敗。父とベン、クララは、生活のために慣れない仕事につくが、父が事故でけがをしてしまう。たちまち生活苦が一家を襲い、ルーシーがかわいがっていた羊も売ることに。そして羊を追って町に出たルーシーは、馬車にはねられて記憶を失ってしまう。

ルーシーを助けたのが、プリンストン夫妻だった。特にプリンストン夫人は、名前も思い出せないルーシーを、エミリーという亡くした娘の名前で呼んで可愛がっていた。ある日、事故現場にたたずんでいるルーシーを、リトルが発見。この再会で、ついにルーシーは記憶を取り戻し、家に戻ることができた。

クララとジョンの結婚式も行われ、しばし幸福感がポップル一家を満たす。プリンストンはルーシーを養女に、と申し出る。アーサーは断るが、ルーシーは広大な農場を持つプリンストンの養女になれば、父も念願の農場が手に入ると考え、養女になる決心をする。その気持ちに打たれたプリンストンは、ポップル一家に農場を提供するのだった。

解説

『ルーシー』は、当時ヒットしたドラマ『大草原の小さな家』のオーストラリア版になるはずだった。

しかし、スタート時点で連載中だった原作は、結局ラストまで一家は農場を手に入れることができず、開拓農家の苦労とたくましさを描くというコンセプトは成り立たなくなった。後半のルーシーの記憶喪失などは、アニメのオリジナルだ。

本作では、なんといってもルーシーとケイト姉妹の魅力が輝いていた。ルーシーのムツゴロウ先生顔負けの動物フリークぶりも豪快だ。

一方、父アーサーの農夫らしい朴訥とした不器用さも味がある。希望を失って酒におぼれるなど、人間味あふれるキャラクターで、物語に厚みとリアリティを持たせており、子どもだけでなく大人も惹きつける。



原作と原作者

原作『南の虹』は小説誌に連載され、1982年に単行本として出版された。作者はフィリス・ピディングトン。1910年オーストラリア・メルボルン生まれ。オーストラリアの教育大学で演劇の講師を務め、退官後、執筆活動を始めた。この『南の虹』が72歳にして処女作ということだ。

原作では、特にルーシーが主役という設定ではなく、オーストラリアに入植したポップル一家の全員をたんねんに描いている。講談社セシール文庫で1985年に出版されたが、現在は絶版になっている。原作が連載中に『ルーシー』放映が決定し、日豪文化交流に貢献を果たしたとしてオーストラリアでも報道されたという。

DVD



解説書には、1～5巻：斎藤博(監督)、7～9巻：宮崎晃(脚本)、10・11巻：関修一（キャラデザイン）のインタビューを掲載、12巻：企画書抜粋収録。ジャケットは関修一。

発売元：バンダイビジュアル　全12巻
BCBA-0548～0559　各：カラー／104分（4話収録）日本語字幕（ON・OFF可）¥3,800　※1・2巻／128分5話収録、12巻/105分4話収録　全巻OP、ED、予告編収録※最終巻カラオケ「虹になりたい」(ステレオ)の特典映像収録

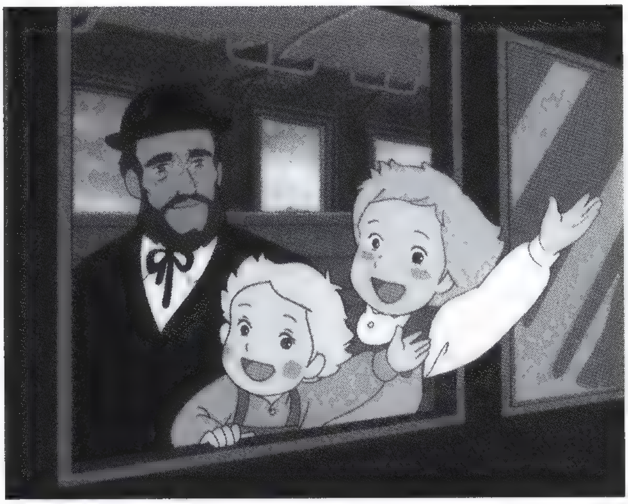
各話タイトルとスタッフリスト

話数	タイトル	①	②	③	④
1話	新しい土地へ	①宮崎晃	②清瀬二郎	③斎藤博	④森友典子
2話	可愛いヤツ	①宮崎晃	②楠葉宏三	③斎藤博	④森友典子
3話	かわり者	①宮崎晃	②清瀬二郎	③斎藤博	④前田英美
4話	はじめての探険	①宮崎晃	②楠葉宏三	③斎藤博	④森友典子
5話	雨のち晴	①宮崎晃	②清瀬二郎	③斎藤博	④村田耕一
6話	アデレードという町	①宮崎晃	②清瀬二郎	③斎藤博	④前田英美
7話	ベンの災難	①宮崎晃	②楠葉宏三	③斎藤博	④森友典子
8話	出発の前夜	①宮崎晃	②清瀬二郎	③斎藤博	④前田英美
9話	アデレードへの道	①宮崎晃	②楠葉宏三	③斎藤博	④森友典子
10話	緑の町	①宮崎晃	②清瀬二郎	③斎藤博	④前田英美
11話	小さなわが家	①宮崎晃	②鈴木孝義	③斎藤博	④森友典子
12話	アデレードの夜	①宮崎晃	②清瀬二郎	③斎藤博	④村田耕一
13話	ベンがやって来た！	①宮崎晃	②楠葉宏三	③斎藤博	④前田英美
14話	たくましい男	①宮崎晃	②鈴木孝義	③斎藤博	④森友典子
15話	二つの家	①宮崎晃	②清瀬二郎	③斎藤博	④前田英美
16話	ずぶぬれのお医者さん	①宮崎晃	②楠葉宏三	③斎藤博	④村田耕一
17話	不幸な出来事	①宮崎晃	②鈴木孝義	③斎藤博	④森友典子
18話	木登り	①宮崎晃	②清瀬二郎	③斎藤博	④前田英美
19話	今日は買い物	①宮崎晃	②楠葉宏三	③斎藤博	④森友典子
20話	井戸の水	①宮崎晃	②清瀬二郎	③斎藤博	④前田英美
21話	アデレードの設計者	①宮崎晃	②鈴木孝義	③斎藤博	④森友典子
22話	レンガとディンゴの子	①宮崎晃	②楠葉宏三	③斎藤博	④前田英美
23話	おまえの名はリトル	①宮崎晃	②清瀬二郎	③斎藤博	④森友典子
24話	夏の終りの日	①宮崎晃	②鈴木孝義	③斎藤博	④前田英美
25話	ついてない時は…	①宮崎晃	②清瀬二郎	③斎藤博	④村田耕一・高野登
26話	病気になった！	①宮崎晃	②楠葉宏三	③斎藤博	④森友典子
27話	凧に乗って	①宮崎晃	②清瀬二郎	③斎藤博	④前田英美
28話	川の向う岸	①宮崎晃	②腰繁男	③斎藤博	④森友典子
29話	リトルの訓練	①宮崎晃	②清瀬二郎	③斎藤博	④前田英美
30話	誕生日のおくりもの	①宮崎晃	②楠葉宏三	③斎藤博	④村田耕一・高野登
31話	リトルと黒い犬	①宮崎晃	②清瀬二郎	③斎藤博	④森友典子
32話	虹の橋のたもと	①宮崎晃	②清瀬二郎	③斎藤博	④前田英美
33話	失われた夢	①宮崎晃	②楠葉宏三	③斎藤博	④森友典子
34話	リトルと学校	①宮崎晃	②清瀬二郎	③斎藤博	④前田英美
35話	対決	①宮崎晃	②楠葉宏三	③斎藤博	④村田耕一
36話	巣の中の五シリング	①宮崎晃	②清瀬二郎	③斎藤博	④森友典子
37話	草原の強盗団	①宮崎晃	②楠葉宏三	③斎藤博	④前田英美
38話	ルーシーは名探偵	①宮崎晃	②清瀬二郎	③斎藤博	④森友典子
39話	二つの別れ	①宮崎晃	②楠葉宏三	③斎藤博	④村田耕一
40話	わたしは誰？	①宮崎晃	②清瀬二郎	③斎藤博	④前田英美
41話	見知らぬ町　見知らぬ人	①宮崎晃	②清瀬二郎	③斎藤博	④森友典子
42話	エミリーと呼ばれる子	①宮崎晃	②清瀬二郎	③斎藤博	④前田英美
43話	すれ違い	①宮崎晃	②清瀬二郎	③斎藤博	④村田耕一
44話	リトル！リトル！	①宮崎晃	②清瀬二郎	③斎藤博	④前田英美
45話	トブが消えた	①宮崎晃	②清瀬二郎	③斎藤博	④森友典子
46話	穴の中のウォンバット	①宮崎晃	②清瀬二郎	③斎藤博	④前田英美
47話	とうさんの決意	①宮崎晃	②清瀬二郎	③斎藤博	④村田耕一
48話	大金持ちの子に…	①宮崎晃	②清瀬二郎	③斎藤博	④森友典子
49話	クララの結婚	①宮崎晃	②清瀬二郎	③斎藤博	④前田英美
50話	虹に向って	①宮崎晃	②清瀬二郎	③斎藤博	④森友典子

①脚本 ②絵コンテ ③演出 ④作画監督

アルプス物語
わたしのアンネット

放映期間：1983年1月9日～12月25日

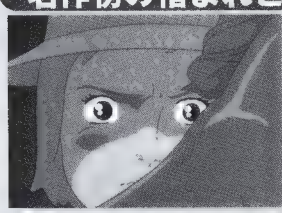


スタッフ 原作：パトリシア・セント・ジョン　製作：本橋浩一　製作管理：高桑充　企画：佐藤昭司・久保田栄一（フジテレビ）　脚本：吉田憲二　音楽：広瀬量平　キャラクターデザイン：竹松一生　美術監督：井岡雅宏・阿部泰三郎　録音監督：小松亘弘　撮影監督：黒木敬七　プロデューサー：松土隆二　監督：楠葉宏三　制作：日本アニメーション・フジテレビ　■主題歌：OP「アンネットの青い空」ED「エーデルワイスの白い花」　作詞：阿木燿子　作曲・編曲：広瀬量平　歌：潘恵子（OP・ED）

キャスト アンネット：潘恵子　ルシエン：山田栄子　ダニー：室井深雪　ピエール：小林修　クロード：沼波輝枝　フランシーヌ：増山江威子　マリー：吉田理保子　モレル：片岡富枝　ペギン：緑金四郎　ギベット：山内雅人　ニコラス：徳丸完　ジャン：青木和代　マリアン：中野聖子　クリスチーネ：飯塚はる美　フランツ：川島千代子　ナレーター：梨羽雪子

この場面がツボ!!

名作初の憎まれヒロイン!?



ルシエンへの仕打ちで視聴者の反感を買ったアンネット。ルシエンの馬を壊す場面の形相は、ヒロインと思えないほどの迫力だった。

宗教色の強い作品世界



アニメでは宗教色が多少抑えられたが、神を象徴するものは随所にあった。ダニーの足が治る場面でも、天使に救われる夢が描かれた。

ストーリー

スイスの小さな村・ロシニエール。そこに暮らすおてんばな少女アンネットと気弱な少年ルシエンは、小さい頃から仲のいい幼なじみだった。母親のフランシーヌを亡くしたアンネットは、生まれたばかりの弟ダニーの母親代わりになり、深く愛していた。

5年後。成長したダニーはアンネットにとって、天使のような存在だった。しかし、ささいな喧嘩でアンネットとルシエンの心がすれ違ったとき、おそろしい事故が起きる。ムシャクシャしていたルシエンが、ダニーのペットのクラウスを崖に突き出し、止めようとしたダニーが崖下に落ちてしまったのだ。命は助かったものの、片足が不自由になったダニー。アンネットはルシエンを激しく責める。償おうとするルシエンの想いは、アンネットに打ち砕かれ続けた。

そんなとき、学校の展覧会に向けて、ルシエンはダニーに贈る馬の木彫りを作った。ところが、偶然その馬を見たアンネットは、ルシエンへの憎しみに突き動かされ、壊してしまう。罪の意識に悩むアンネット。ルシエンも自暴自棄になり、苦しんでいた。

雪深い夜、クラウスを捜しに森へ入ったアンネットは、身動きがとれなくなっていたところをルシエンに助けられる。いつしか消えていく、心の中のわだかまり…。二人はようやく仲直りすることができた。

ある日、隣町のモントルーに、どんな足も治す名医が滞在していると聞いたルシエンは、ダニーの治療を頼むため、吹雪の峠越えを決行する。ルシエンの命がけの行動はギベット医師の心を動かし、ダニーは手術を受けられることになった。そして数カ月後、アンネットとルシエンの前には、元気に駆け回るダニーの姿があった…。

解説

「わたしのアンネット」は名作シリーズの中でも、キリスト教色の強さとテーマの重さで、異彩を放っている作品だ。主人公のアンネットと幼なじみのルシエンは、それぞれに「罪」を背負い、その「償い」に苦悩する。ルシエンを憎み続けるアンネットや、償いの道を見失ってしまうルシエンの痛々しい心理描写は、作品に対する賛否両論の的にもなった。しかし、それはキャラクターの心を丹念に描くという、名作シリーズの主旨が貫かれた結果ともいえる。

また、原作が日本ではマイナーだったこともあり、視聴率は決してよくなかった。そのため、名作シリーズが「小公女セーラ」以降にメジャーな原作路線へ転向したきっかけは、一部「アンネット」にあると言っても過言ではない。

なお、この作品は、名作シリーズで数々の作品を手がけている楠葉宏三の世界名作劇場初監督作品でもある。

キャラクター紹介



アンネット
勝ち気で元気な少女。ダニーを溺愛する

ルシエン
アンネットの幼なじみ。気弱な性格だが木彫りが上手

ダニー
アンネットの無邪気な弟。クラウスと汽車が好き

クラウス
ダニーが可愛がっている毛の色が変わるオコジョ

フランシーヌ
アンネットの亡くなった母親

ピエール
アンネットのやさしい父親

ギベット
有名な外科医。ダニーの足を治療する

ペギンじいさん
森で暮らす老人。木彫りの腕前は一流

クロード
アンネットの遠縁の女性

マリー
モントルーで働くルシエンの姉

原作と原作者

この作品の原作となる児童文学『雪のたから』は、イギリスの女流作家パトリシア・セント・ジョンによって、1950年に執筆された。日本ではあまり知られていないが、欧米では子ども向けの宗教小説として有名で、イギリスでは映画にもなった。翻訳本は主にキリスト教書店で扱われており、その内容も神や信仰心についての描写が多い。原作とアニメのストーリーに大きな違いはないが、キャラクターの行動やセリフに込めた宗教的な意味合いは、原作の方が濃厚になっている。パトリシアは幼少の頃にスイスで過ごしたことがあり、その経験を作品の舞台に反映させた。

DVD



解説書には、1~6巻:楠葉宏三（監督）の「スタッフインタビュー」、7~12巻:潘恵子（アンネット役）の「キャストインタビュー」を掲載。潘さんはアンネット役の難しさについて語っている。

発売元:バンダイビジュアル　全12巻
BCBA-0707~0718　各カラー／103分（4話収録）／日本語字幕（ON・OFF可）／¥3,800円　※12巻は105分（4話収録）
全巻:OP、ED、予告編を収録　※最終巻に、カラオケ「アンネットの青い空」（ステレオ）の映像特典収録

各話タイトルとスタッフリスト

1話　アンネットとルシエン	①吉田憲二　②③楠葉宏三　④竹松一生
2話　ソリ競争の日に	①吉田憲二　②黒川文男　③楠葉宏三　④佐藤好春
3話　愛と悲しみと	①吉田憲二　②③楠葉宏三　④前田英美
4話　おかあさんになったアンネット	①吉田憲二　②黒川文男　③楠葉宏三　④竹松一生
5話　あたらしい家族	①吉田憲二　②横田和善　③楠葉宏三　④佐藤好春
6話　牧場にて	①吉田憲二　②清瀬二郎　③楠葉宏三　④前田英美
7話　チーズを作ろう	①吉田憲二　②③楠葉宏三　④竹松一生
8話　秋まつりの日に	①吉田憲二　②③楠葉宏三　④佐藤好春
9話　村に汽車がやって来た	①吉田憲二　②清瀬二郎　③楠葉宏三　④前田英美
10話　ふたりの冒険旅行	①吉田憲二　②清瀬二郎　③楠葉宏三　④竹松一生
11話　クリスマスの贈り物	①吉田憲二　②横田和善　③楠葉宏三　④佐藤好春
12話　白い森のできごと	①吉田憲二　②清瀬二郎　③楠葉宏三　④前田英美
13話　すれ違うこころ	①吉田憲二　②③楠葉宏三　④竹松一生
14話　おそろしい出来事	①吉田憲二　②清瀬二郎　③楠葉宏三　④佐藤好春
15話　ダニーを助けて！	①吉田憲二　②清瀬二郎　③楠葉宏三　④前田英美
16話　病院	①吉田憲二　②岡部英二　③楠葉宏三　④竹松一生
17話　森の老人	①吉田憲二　②清瀬二郎　③楠葉宏三　④佐藤好春
18話　ダニーの松葉杖	①吉田憲二　②③楠葉宏三　④前田英美
19話　思いがけない診断	①吉田憲二　②清瀬二郎　③楠葉宏三　④竹松一生
20話　ノアの方舟	①吉田憲二　②清瀬二郎　③楠葉宏三　④佐藤好春
21話　罪の重さ	①吉田憲二　②③楠葉宏三　④前田英美
22話　ダニーの宝物	①吉田憲二　②清瀬二郎　③楠葉宏三　④竹松一生
23話　悲しい嘘	①吉田憲二　②③楠葉宏三　④佐藤好春
24話　アンネットの涙	①吉田憲二　②③楠葉宏三　④前田英美
25話　おもいでの牧場	①吉田憲二　②清瀬二郎　③楠葉宏三　④竹松一生
26話　遠い雲 遠い日々	①吉田憲二　②③楠葉宏三　④佐藤好春
27話　ニコラス先生の教え子たち	①吉田憲二　②清瀬二郎　③楠葉宏三　④前田英美
28話　展覧会にむけて	①吉田憲二　②③楠葉宏三　④竹松一生
29話　こわされた夢	①吉田憲二　②清瀬二郎　③楠葉宏三　④佐藤好春
30話　後悔の涙	①吉田憲二　②③楠葉宏三　④前田英美
31話　峠へつづく道	①吉田憲二　②③楠葉宏三　④竹松一生
32話　伝えたい真実	①吉田憲二　②③楠葉宏三　④佐藤好春
33話　勇気ある告白	①吉田憲二　②清瀬二郎　③楠葉宏三　④前田英美
34話　さようならフランツ	①吉田憲二　②③楠葉宏三　④竹松一生
35話　心の扉をひらいて	①吉田憲二　②清瀬二郎　③楠葉宏三　④佐藤好春
36話　よみがえった友情	①吉田憲二　②杉村博美・斉藤次郎　③楠葉宏三　④前田英美
37話　二人のたからもの	①吉田憲二　②③楠葉宏三　④竹松一生
38話　ルシエンの誓い	①吉田憲二　②杉村博美・斉藤次郎　③楠葉宏三　④佐藤好春
39話　吹雪の峠をこえて	①吉田憲二　②③楠葉宏三　④前田英美
40話　立ち上がれルシエン	①吉田憲二　②③楠葉宏三　④竹松一生
41話　ダニーを診てくれますか	①吉田憲二　②③楠葉宏三　④佐藤好春
42話　ペギンじいさんの秘密	①吉田憲二　②杉村博美・斉藤次郎　③楠葉宏三　④前田英美
43話　希望の町 ローザンヌ	①吉田憲二　②③楠葉宏三　④竹松一生
44話　ギベット家のひとびと	①吉田憲二　②③楠葉宏三　④佐藤好春
45話　手術の日	①吉田憲二　②③楠葉宏三　④前田英美
46話　再会	①吉田憲二　②杉村博美・斉藤次郎　②③楠葉宏三　④竹松一生
47話　輝く光の中で	①吉田憲二　②③楠葉宏三　④佐藤好春
48話　友情よ永遠に	①吉田憲二　②③楠葉宏三　④前田英美

①脚本　②絵コンテ　③演出　④作画監督

牧場の少女カトリ

放映期間：1984年1月8日～12月23日



スタッフ 原作：アウニ・ヌオリワーラ　製作：本橋浩一　製作管理：高桑充　企画：佐藤昭司・久保田栄一（フジテレビ）　脚本：宮崎晃　音楽：冬木透　キャラクターデザイン：高野登　美術：阿部泰三郎　録音監督：小松亘弘　撮影監督：黒木敬七　プロデューサー：松土隆二　監督：斎藤博　制作：日本アニメーション・フジテレビ　■主題歌：OP「Love with you～愛のプレゼント～」ED「風の子守歌」　OP作詞：伊藤薫　OP作曲：三木たかし　ED作詞・作曲：伊藤薫　編曲：鷺巣詩郎（OP・ED）　歌：小林千絵（ポニーキャニオン）

キャスト カトリ：及川ひとみ　サラ：藤田淑子　ユリス：宮内幸平　イルダ：京田尚子　マルティ：古谷徹　ペッカ：塩屋翼　マリ：津賀有子　ヘレナ：小林優子　アンネリ：鈴木れい子　ピヒトリ：藤井つとむ　テーム：野島昭生　ウッラ：杉田郁子　エスコ：上田敏也　ハンナ：吉田理保子　アッキ：井上和彦　エミリア：水倉久美子・山本百合子　グニンラ：高橋和枝　ソフィア：松島みのり　ロッタ：滝沢久美子　クラウス：高坂真琴　イーネス：中西妙子　エリアス：勝田久　セルマ：山田礼子　レオ：伊倉一恵　ナレーター：武藤礼子

ストーリー

別れた母とは音信不通にカトリは9歳で働きに…

舞台は20世紀初頭、第一次世界大戦前のフィンランドの田舎。父を亡くした6歳の少女カトリは、出稼ぎに出ていた母サラと1年ぶりに再会する。しかし、サラはカトリにダックスフントの子犬を贈り、カトリを祖父母に預け、再びドイツに働きに出てしまう。

そして、3年の月日が流れた…。9歳の少女カトリは戦争のせいで音信の途絶えてしまった母を待ち、祖父母を助けながら家の手伝いに励んでいた。しかし、ウコンネミ家は不作が続き、そのため牛を売ろうとするが、その牛も熊に襲われてしまう。祖父もケガをしたため、いよいよ家計が逼迫。ついにカトリは自ら働きに出ることを決心した。

青年アッキとの出会いがカトリに「夢」を与えた

遠縁の友人マルティの紹介で、カトリは愛犬アベルを連れ、村から遠いライッコラ屋敷に家畜番として奉公に出る。一度、持ち場を離れたため牛が崖から落ちる事故があったものの、カトリは家畜番としての仕事を上手にこなし、次第に主人テームの信頼を得るようになる。また屋敷の奥様ウッラは一人娘を亡くしたことで心の病にかかっていたが、カトリの優しい心に触れ、次第に癒されていく。

屋敷ではいろいろな事件が起こるが、遠縁のマルティ、隣屋敷で働くペッカなどに助けられ、カトリは一生懸命働いた。また、青年アッキに『カレヴァラ』というフィンランドの叙事詩を収めた本をもらったことで勉強への意欲を燃やすようになる。しかしある日、アッキはカトリの目の前で政治犯として警察に逮捕されてしまう。ペッカも奉公先が羊毛泥棒に放火され、ほかの屋敷に移っていった。

そして春。放牧をはじめるころ、村に熊が出没。小さな女の子に家畜番は無理と判断した主人は、カトリに暇を出す。惜しまれながらも、カトリは1年間働いた屋敷を去り、新しい職を探さなければならなくなった。

都会に出て小学校に入学6年ぶりに母と再会！

次の働き場所は、友人ペッカがいるクウセラ屋敷に決まった。クウセラ屋敷の主人は軍人で、妻ロッタと幼い息子クラウスが主人の留守を守っていた。奥様のロッタは聡明なカトリを気に入り、小間使い兼クラウスの子守役を任せることにする。カトリは看護婦のエミリア、女医のソフィアなど自立した女性と知り合ったことで、同じ働くのなら、人に喜ばれる仕事をしたいと考えるようになり、いつか学校へ通いたいと夢見ながら独学を続ける。そこにもたらされたロッタの夫戦死の知らせ。ロッタは実家のあるトゥルクに帰ることになり、カトリに同行を求める。友達ペッカとの別れを悲しむ一方、学校へ通わせてくれる言うロッタの言葉に感激するカトリ。

しかし、ロッタの実家で待っていたのは、田舎娘のカトリのことを気に食わないロッタの伯母イーネスの意地悪だった。だが、カトリは持ち前の明るさと聡明さで、次第にイーネスの心さえとらえていく。

その間も一人で勉学を続けていたカトリは、小学校の試験に合格。特待生として学校に通うことになった。釈放後、新聞記者になったアッキとも再会し、希望に満ちた生活をはじめる。そんなある日、音信不通だった母サラが、偶然にもトゥルクの病院に入院しているという連絡が入る。サラは戦争のため出稼ぎ先から帰れず、やっと帰国の途についた矢先に病に倒れたのだった。6年ぶりに親子は感激の再会を果たした。母とともに祖父母の待つ家に帰りながら、カトリは将来に思いをはせる。カトリはその後、農村の人々を鮮やかに描く作家となったのだった…。

キャラクター紹介

キャラクターデザインの高野登は名作シリーズ初期の頃から作画に参加。はじめてのキャラデザインにもかかわらず魅力的なキャラクターを多く生み出した。特にカトリの清楚な可愛らしさが光る。

イルダ
カトリの祖母。カトリをしっかり者に育てる



ユリス
カトリの祖父。離れて暮らすカトリを心配する



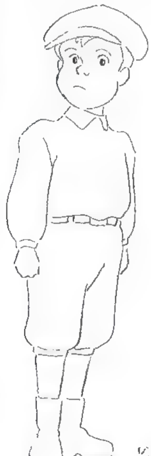


サラ
カトリの母。ドイツに出稼ぎに行くが、戦争のため帰れなくなり、行方不明に

カトリ・ウコンネミ



9歳で奉公に。働くことをいとわず、頭がよく、しっかり者。しかも明るく優しい！



マルティ
カトリの遠縁。お坊っちゃまだが、それをひけらかすことはない



ペッカ
家畜番。後に兄のいる屋敷に。カトリが好きで世話を焼く



アベル
カトリの愛犬のダックスフント。牧羊犬としてカトリを助ける

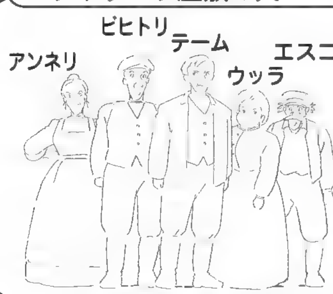


ヘレナ
マルティのいとこ。貧しいカトリをバカにして、つらくあたる



クラウス
カトリが子守をしたロッタの息子。カトリとアベルが大好き

ライッコラ屋敷の人々



●アンネリ／家事担当の雇い人●ビヒトリ／農作業担当の雇い人●テーム／ライッコラ屋敷の主人。厳しいが話せばわかる人●ウッラ／奥様。心の病にかかっていた●エスコ／テームの叔父



イーネス
ロッタの伯母。頑固者で、田舎娘のカトリをいじめる

ハンナ
ライッコラ屋敷の臨時雇い。実は羊毛泥棒の一味で、カトリを嫌う



カトリの夢を応援した人たち



ロッタ
クウセラ屋敷の奥様。カトリを気に入り学校に通わせてくれる



ソフィア
当時は珍しい女医。カトリのあこがれの人。車を運転する



エミリア
看護婦。自立した女性でカトリに大きな影響を与えた。後にアッキと結婚する

アッキ
カトリの勉学への意欲を支える。フィンランド独立運動の活動家。後に新聞記者



解説

『牧場の少女カトリ』放送前年にあたる83年4月から、NHK朝の連続テレビ小説で『おしん』が始まった。平均視聴率52％を記録した人気番組で、全国に『おしん』ブームが起きた。『カトリ』も主人公の幼い少女が奉公に出るという設定で『おしん』と似ていることから、放送前は「西洋版おしん」というキャッチをつけて注目を集めようとした。しかし、いざ放送が始まると、『おしん』とはまったく味わいの異なる、カトリとカトリを取り巻く人々の日常が、明るく淡々と描かれるふところの深い作品となった。

脚本の宮崎晃は、原作の基本的設定だけをいかして、大胆な脚色をほどこした。時代背景を20世紀初頭に設定。革命に燃える青年（アッキ）を登場させ、フィンランド独立運動とからめたり、フィンランドの昔話やアンデルセンの童話（みにくいあひるの子）を「夢」を持つカトリの成長話にからめ、次なる展開の布石にするなどした。監督の斉藤博も宮崎晃の脚本を尊重。細かな人物描写と日常描写をていねいに見せる演出をした。その正攻法の演出が、カトリをはじめとするキャラクターを魅力的にし、作品の明るさを支えた。二人のコンビは名作シリーズ中5本あるが、『カトリ』は最高傑作との呼び声が高い。

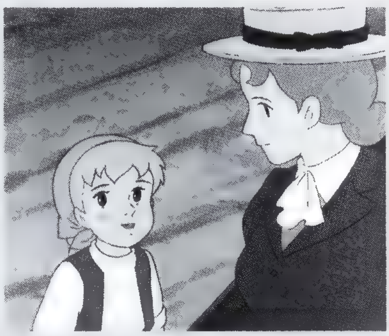
そして、高野登による素晴らしいキャラクターデザイン。それを毎回、高野自身が加わった強力な作画陣が支えた。また、フィンランドの透き通るような「空気」を描きだした阿部泰三郎の美術も見事である。

物語の最後にカトリの「夢」は実現したことが語られるが、作品を全編通して見ると、「夢」は実現することが大切なのではなく、その過程、「夢」を持ち続け、そのために努力することが大切なのだと、スタッフが考え、訴えていたことがわかる。

この場面&セリフがツボ!!



◀クラウス坊っちゃんが高熱を出した。往診に来てくれたのは、若く美しい女医ソフィア。カトリは彼女の仕事ぶりを見て、あこがれを覚える…（29話）



▶カトリはソフィアに、お医者さんになるにはどうしたらいいのかたずねる。ソフィアの答えは、ここにいては無理。都会の大学で勉強しなければ…ということだった。

それまでカトリは、小学校にも行けない自分のような奉公人でも、頑張れば医者や看護婦になれるかもしれないと考えていた。しかしソフィアの言葉で現実の厳しさを思い知らされる。カトリにとっての一番の「敵」は、境遇…というのが、この話のツボ。次の30話では、童話「みにくいあひるの子」を読んでいる途中、「自分は白鳥になれないあひるでは…」という不安に襲われ、嗚咽する。

「あたし これからも、夢を持ち続ける…ずっと持ち続ける」

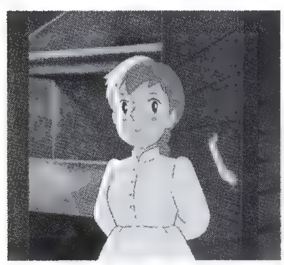
（眠ってしまったカトリにマルティが）

「夢は見続けろよなカトリ…素晴らしい夢を見ろ」

（40話）

カトリのすごさは決してあきらめないことだ。ソフィアに言われた「でもね、希望は持ち続けなさい。そうすればひょっとしたら道が開けるかもしれないわ」の言葉を胸に、本を読み、算数を勉強する。そして、ついに都会に出る幸運が巡ってきた。40話のマルティのセリフは、カトリを応援する視聴者の思いでもあった。

カトリはお嬢様…？



▲ハルマ屋敷のパーティにロッタ奥様が見立てたドレスで（39話）

カトリは可愛い。貧しい境遇に育ちながら、生まれながらに品も備わっている。ソフィアはロッタに「お宅のお嬢様だとしてもおかしくない」と言ってるし、トゥルクの小学校では生徒たちが編入したカトリを「ドイツに占領されてフィンランドに逃げてきたどこかの国の王女様」と噂した。愛らしさと上品さを合わせ持つカトリ。マルティやペッカ、レオ（級友）がカトリを好きになるのも無理はない？

あわや途中で打切りの危機？

完成度の高い作品にもかかわらず、当時は視聴率の低迷が続き、局側から放映半ばで打ち切りの声が上がった。10分早く始まる裏番組『クイズおもしろゼミナール』（NHK）に視聴者を取られたことも一因だ。なんとか一年間放映されたが、翌年からは知名度の高い原作のアニメ化が続くことになる。

印象的な「サウナ」シーン

作品中、フィンランドの伝統的入浴法「サウナ」が数回出てくる。13話ではビヒタ（体をたたく白樺の小枝の束）を作るカトリ（写真）と、サウナに入るカトリのオールヌード（背中からだが）が見られる。



ペッカの名前の由来は？

カトリの友達ペッカは純朴ないなかっぺ。それを引っくり返して「ペッカ」と名づけた。キャラ設定の資料では、カトリに「これが噂のポテトボーイね」などと言われている。



シベリウスの「フィンランディア」

『カトリ』の音楽にはフィンランドの国民的作曲家シベリウス（1865～1957）の交響詩「フィンランディア」が使われた。「フィンランディア」はシベリウスが『カレヴァラ』（P67参照）を題材に作った楽曲。演奏は東京フィルハーモニー交響楽団が行った。

原作と原作者

原作はフィンランドの女流作家アウニ・ヌオリワーラ。原題『PAIMEN,PIIKA JA EMANTA』は「家畜番、農家の奥様」というような意味で、1936年に発表。彼女の母親をモデルに書かれたと言われている。

原作は三つの話で構成されている。第一部は少女期から結婚まで。第二部と第三部は、カトリが農場の奥様となってからが描かれている。日本では森本ヤス子訳で第一部のみが訳され、1952年に出版された。『牧場の少女』という題は、そのとき森本ヤス子が考えたものと言われている。

原作とアニメの違いは大きい。カトリが働き者のしっかりした少女という点は同じだが、原作では、カトリが祖父母に預けられたのは母親の離婚のせいであり、その後母親は再婚。父親違いの妹がいるなど、カトリは母親の愛情を十分に得られずに育っている。また、カトリを取り巻く人々も冷たく、特にクウセラ屋敷の人々の印象が悪い。カトリが将来に夢を持って、勉学に励み、自立していく姿も書かれていない。

なお、森本ヤス子による日本語版は長らく絶版となっていたが、根強いファンの要望があり、2002年、いのちのことば社から装丁を一新して復刊された。

ワンポイントコラム　カレヴァラ

13話で、アッキがカトリにあげた本『カレヴァラ』。カトリが聖書以外ではじめて読んだ本として、物語中、何度もその名が出てくる。『カレヴァラ』とは、フィンランドの民族的叙事詩。7世紀から10世紀にかけてつくられ、長く語り継がれてきたものを、19世紀の前半にリョンルート（ロンルート）が編集し、発表した（1835〜1849）。以来、フィンランドの人々に支持され、当時、事実上ロシアの支配下にあったフィンランドのナショナリズムの意識を高めた。日本での初訳は森本覚丹で、この『牧場の少女カトリ』の原作本をはじめて日本に紹介した森本ヤス子の夫である。

DVD



ジャケットは全巻三浦厩夫による描き下ろし。解説書は1巻〜6巻に斎藤監督のインタビューが。絵コンテの清瀬二郎が実は監督自身であることなど興味深い話満載。7〜12巻は宮崎晃(脚本)が語る。

発売元：バンダイビジュアル　全12巻　BCBA-0683〜0694　各：カラー／103分（4話収録）日本語字幕（ON・OFF可能）¥3,800※1巻は128分（5話収録）全巻：OP、ED、予告編を収録※最終巻にカラオケ「Love with you〜愛のプレゼント〜」（ステレオ）の映像特典収録

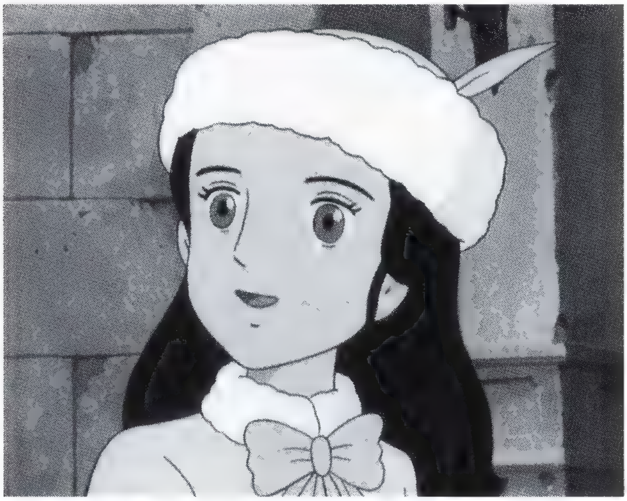
各話タイトルとスタッフリスト

1話　別れ	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④高野登
2話　友だち	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④森友典子
3話　春のあらし	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④佐藤好春
4話　決意	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④高野登
5話　出発	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④保谷裕江
6話　主人	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④森友典子
7話　奥様	①宮崎晃　②楠葉宏三　③斎藤博　④佐藤好春
8話　災難	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④森友典子
9話　愛情	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④高野登
10話　約束	①宮崎晃　②楠葉宏三　③斎藤博　④佐藤好春
11話　喧嘩	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④森友典子
12話　手紙	①宮崎晃　②楠葉宏三　③斎藤博　④高野登
13話　素敵な贈物	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④佐藤好春
14話　はじめての招待	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④森友典子
15話　おもいがけないお給料	①宮崎晃　②楠葉宏三　③斎藤博　④高野登
16話　迷子になった羊	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④佐藤好春
17話　狼を退治する日	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④森友典子
18話　二つの火事	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④高野登
19話　隣どうし	①宮崎晃　②楠葉宏二　③斎藤博　④佐藤好春
20話　来た人と去る人	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④森友典子
21話　アベルが狙われた	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④高野登
22話　春を待ちながら	①宮崎晃　②清瀬二郎・楠葉宏三　③斎藤博　④佐藤好春
23話　熊と牛はどちらが強いか	①宮崎晃　②清瀬二郎・楠葉宏三　③斎藤博　④森友典子
24話　出会いと別れ	①宮崎晃　②清瀬二郎・楠葉宏三　③斎藤博　④高野登
25話　島での出来事	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④佐藤好春
26話　助けてくれた人	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④森友典子
27話　都会育ち	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④高野登
28話　新しい生活	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④佐藤好春
29話　夢を見ていた	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④森友典子
30話　美しい白鳥のように	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④高野登
31話　本が送られてきた	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④佐藤好春
32話　魔法の本と悪魔	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④森友典子
33話　喜びと悲しみ	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④高野登
34話　ヘルシンキ行き	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④佐藤好春
35話　父と娘	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④森友典子
36話　奥様の決意	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④高野登
37話　迷子のアベル	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④佐藤好春
38話　それぞれの道	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④森友典子
39話　ハルマ屋敷のパーティ	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④高野登
40話　道づれ	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④佐藤好春
41話　トゥルクの人々	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④森友典子
42話　絵のない絵本	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④高野登
43話　自動車に乗った!	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④佐藤好春
44話　にくらしい娘	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④森友典子
45話　疲れた一日	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④高野登
46話　美しいもの	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④佐藤好春
47話　お土産のランドセル	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④森友典子
48話　ああ入学	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④高野登
49話　おかあさんの帰国	①宮崎晃　②清瀬二郎　③斎藤博　④佐藤好春

①脚本　②絵コンテ　③演出　④作画監督

小公女（プリンセス）セーラ

放映期間：1985年1月6日～12月29日



スタッフ 原作：フランシス・ホジソン・バーネット　製作：本橋浩一　製作管理：高桑充　企画：佐藤昭司・久保田栄一（フジテレビ）　音楽：樋口康雄　キャラクターデザイン：才田俊次　レイアウト監修：森やすじ　オープニング作画：櫻井美知代　美術設定：川本征平　美術監督：沼井信朗　録音監督：小松亘弘　撮影監督：森田俊昭　プロデューサー：中島順三・石川泰平（フジテレビ）　監督：黒川文男　制作：日本アニメーション・フジテレビ　■主題歌：OP「花のささやき」ED「ひまわり」　作詞：なかにし礼　作曲：森田公一　編曲：服部克久　歌：下成佐登子（ポニーキャニオン）

キャスト セーラ・クルー：島本須美　ミンチン先生：中西妙子　アメリア先生：梨羽由記子　ラビニア：山田栄子　ベッキー：鈴木三枝　ロッティ：渡辺菜生子　アーメンガード：八百坂万紀　クリスフォード：仲村秀生　ラムダス：田中秀幸　ピーター：坂本千夏　ラルフ・クルー：銀河万丈

ストーリー





インドからきたダイヤモンド・プリンセス

ロンドンの寄宿学校・ミンチン女子学院に一人の少女がやってきた。インドのダイヤモンド鉱山で財をなしたラルフ・クルーの一人娘、セーラ・クルーだ。幼い頃に母を亡くしたセーラだが、父の深い愛情に包まれ、思慮深く思いやりのある少女に育っていた。

クルー家の財産をあてにする学院の院長ミンチン先生は、セーラに特別室を与え、専用のメイドまでつけて待遇を良くする。面白くないのはラビニアだ。ダイヤモンド・プリンセスと呼ばれ人気を集めるセーラに、学院一の代表生徒の座も奪われてしまったからだ。

11歳の誕生日 試練の日々が始まった

だが、11歳の誕生日を境に、セーラの運命は一転する。父が事業に失敗し、亡くなったというのだ。財産のあてがはずれたミンチン先生の態度は豹変した。無一文になったセーラはメイドとして働かせることにし、満足な服や食事も与えず、コキ使うようになったのだ。セーラの心を癒してくれるのは、お父さんが買ってくれたエミリー人形だった。

セーラの不運を喜ぶラビニアは、代表生徒の座に戻り、露骨にいじめを繰り返す。生徒たちは遠巻きに見つめるしかなく、メイドのベッキーだけが力になろうと必死だった。

疲れ果て、嵐の中を買い物に行かされたセーラが熱を出して倒れてしまった。薄暗く寒い屋根裏部屋で衰弱していくばかりだ。そんなセーラを救ったのは、謎の魔法。目が覚めると部屋は暖かく、豪華な料理が用意されているのだ、誰もいないのに…。魔法は毎日続き、セーラは元気をとり戻していく。

しかし、束の間の幸福はミンチン先生の知るところとなり、激怒した先生はセーラを馬小屋に追いやってしまう。さらには学院からも追放されてしまったセーラは、貧しい御者の少年ピーターを頼るしかなく、雪の町でマッチ売りに身をやつしていく。





過酷な日々の果てに 再び動きはじめた運命

そんなある日、ミンチン女子学院から迎えがきた。セーラ宛に豪華な荷物が届いたのだ。贈り主は隣に住むクリスフォード氏。屋根裏の魔法も、セーラの境遇を知った彼の仕業だった。運命は再び動きはじめた。

クリスフォード氏は亡くなった共同経営者の一人娘を探していたが、その娘こそセーラだった。クルー家の名誉も財産も回復された。今までの仕打ちを恨むでもなく、ミンチン女子学院に戻ることを選ぶセーラ。

インドに一時、里帰りするセーラの船を見送る一団には、ミンチン先生やラビニアたちの姿もあった。

キャラクター紹介

ミンチン女子学院の中でほとんどのドラマは展開し、キャラクターは女性ばかり。物語の中盤、隣に越してくるクリスフォード家は男所帯。絶妙のコントラストをなしていた。




ベッキー
セーラ付きのメイド。セーラのことを心配し、こっそり助けてくれる




ピーター
御者の子。出会いで救われて以来セーラを敬愛している



セーラ・クルー
誇り高き少女。逆境にめげず、精神的にたくましくなっていった





ラルフ・クルー
優しかったセーラの父



エミリー人形
セーラがお父さんのかわりに話しかける人形

おとなりの方々

セーラにとっての救世主たち。隣にいて、尋ね人に気づかないのがじれったい！

ラムダス
セーラの境遇に気づくインド人の使用人。身が軽い



クリスフォード
ラルフ・クルーの親友で共同経営者。優しい紳士




スーリャ
ラムダスが世話する猿。セーラの部屋に侵入、出会いのきっかけに

ミンチン女子学院

女子学院の厳しさは女だけで生きるのが大変だった当時をしのばせる



ラビニア
高慢。自分が一番でいたいイジメっ子




ミンチン先生
学院経営にすべてをかけ、強引かつ計算高い

アーメンガード
セーラを好き。気が弱い



ロッティ
一番幼い生徒で、セーラママを慕う




アメリア先生
姉のミンチンに依存するタイプ



シーザー
学院の主のようにウロつく猫

解説

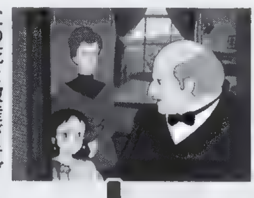
「いじめ」という言葉が現れた1980年代。時代をつかまえたのか、こっちが先だったのか、その「いじめ」の濃厚さが社会現象にまでなって、「セーラ」は大ヒットした。

セーラの運命が暗転する11歳の誕生日は第11話、クリスフォード氏によって光が戻る第43話。その間約30話分、ほぼ7カ月間、セーラはミンチン先生や料理人夫婦、ラビニアたちのいじめに耐えたことになる。「いじめ」の重さに比して、最後に救われるカタルシスは大きくなるわけで、実際、じれったいまでに気づかなかったクリスフォード氏が、ようやくセーラの名前を確認するシーン、セーラがやはり莫大な資産の後継者だったと知ってミンチン先生がワナワナとくずれ落ちるシーン、一気に復権する終盤は痛快だ。

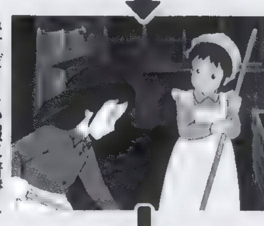
ただ、放映当時はセーラにばかり同情し、イヤなヤツにしか思えなかったミンチン先生だが、今見ると、未知の世界インドの資産家に幻想を抱いてしまった先生の背景にも、思いが及んだりする。子どもにも大人にも、見るほどにいろいろな見方ができるところが「セーラ」の、ひいては「名作」の奥深さかもしれない。

この場面がツボ!!

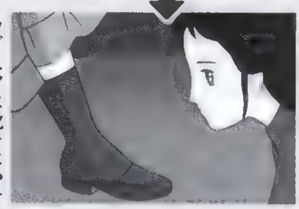
多彩ないじめシーンも名場面のツボ。写真を並べると次第にエスカレートしたようすがわかる。



父の死と破産が告げられた誕生日からスタート



みすぼらしい服に着替えさせられ小間使いに



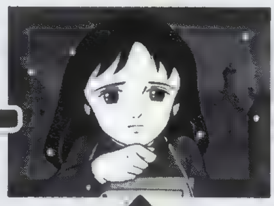
ラビニアは靴をはかせろと迫った



過労と雨で、高熱を出して衰弱してしまう



屋根裏の魔法がバレてついに馬小屋へ!



ついに放り出されて、雪の中でマッチ売り



君の　名前は?
セーラ……
セーラ・クルーです
こ、この子だったのだ…!（第43話）

すべてはこの一瞬のために!

このセリフがツボ!!

クリスフォード氏がセーラをラルフ・クルーの娘と知った瞬間、視聴者の心も大爆発!　あの快感のために、長いいじめの路はあったのだ!

「いじめ」のツボと日活の意外な関係!?

「セーラ」の脚本を書いているのは、主に中西隆三。名作シリーズでは「フランダースの犬」でもおなじみだが、この人の作品履歴は興味深い。

もともと実写畑の人で、石原裕次郎主演の「泣かせるぜ」や「男の世界」など、もうタイトルを見ただけで「男だぜ」の、いわゆる日活アクションものをバリバリ書いていた人なのだ。

「エミリー…」とつぶやくセーラからは想像もつかないが、一方で中西の作品には「夜の牝　花と蝶」「華やかな女豹」など、女の世界のドロドロを描く作品もある。セーラへのいじめで、見る側の怒りを見事なまでにあおってくれた中西脚本には、さすが実写で鍛え抜かれたドラマの達人技が生かされていたのだと、納得してしまうのである。

フランスでダントツの『セーラ』人気

「名作アニメ」はさまざまな形で海外にも進出しているが（104ページ参照）フランスでもっとも人気が高かったのは、この「小公女セーラ」だったそうだ。

以前、日本のテレビ局がフランステレビ事情として取材をおこなった際、子どもたちの反応の多くは「もう一度「セーラ」が見たい」だったという。

ハッキリした理由はわからない。関係者に聞いても首をかしげるばかりだが、早くに亡くなったセーラの優しいお母さんがフランス人だったこと、セーラをいじめた悪役的なミンチン先生は謹厳なイギリス女性の象徴に見える。立場が最後に逆転するドンデン返しは、イギリスに対してライバル意識の強いフランス人には愉快だったからなのかと、うがった憶測もしてしまうのだ。

原作と原作者

原作の原題は『A Little Princess』。日本語訳では現在『小公女』や『小公女セーラ』のタイトルで、新潮社文庫、岩波少年文庫（現時点で絶版）、講談社などから出版されている。

1887年に最初に世に出たセーラの物語を1903年戯曲にしたところ好評を博し、セーラの周囲のキャラクターを加筆して、1905年に出版されたのが『A Little Princess』である。

原作者バーネット夫人（1849〜1924）はイギリス生まれ。4歳で父と死別し、母方の叔父をたよって16歳で渡米。しかし、叔父も破産状態で、苦労したといわれる。24歳で結婚。1886年には既に名作『小公子』で作家としての地位を不動のものにしているが、長男の死、離婚など、バーネット自身、苦難の人生を歩んだ人のようである。

この「名作アニメ」の流れは、ほぼ原作通り。ただ、セーラを助けてくれる御者の少年ピーターはアニメオリジナルのキャラクターであったり、セーラがミンチン女子学院にやってくるときの年齢は、アニメのほうが3歳上になっていたり、アニメと原作とでは、設定で若干の違いがある。

ワンポイントコラム インドとダイヤモンド

インドのダイヤモンド鉱山で巨万の富を築いた人物の娘として、セーラはダイヤモンド・プリンセスと呼ばれた。現代ならまさに夢物語だが、舞台となる19世紀後半は、現実に起り得る夢だった。

20世紀に入り南アフリカにその座を譲るまで、インドは最大のダイヤモンド産出国。まさにひと山当てた人物は、存在したのだ。後世さまざまな逸話を生んだ有名なダイヤモンドも多数産出している。イギリス王室の至宝、約109キャラットの「コ・イ・ヌール（光の山）」、フランス王妃マリー・アントワネットやコレクションしたホープ家の一族など、手にする者を次々に不幸に陥れた青いダイヤ「ホープ」もインド産。ミンチン先生の目がくらむのも、わからないではない。

DVD



黒川文男監督への取材記事でまとめた解説書が面白い。「いじめ」がクローズアップされたが、自分たちが描いたのは「女の性だ」など、おじさんモード全開で語る監督の話は目からウロコものだ。他にもキャラクターデザイン才田氏のインタビューを収録。

発売元：バンダイビジュアル　全11巻　BCBA-0395～0405　各：カラー／128分（5話収録）日本語字幕（ON・OFF可）￥3,800　※第11巻は105分（4話収録）全巻：OP、ED、予告編を収録　※最終巻にカラオケ「花のささやき」（ステレオ）の特典映像収録

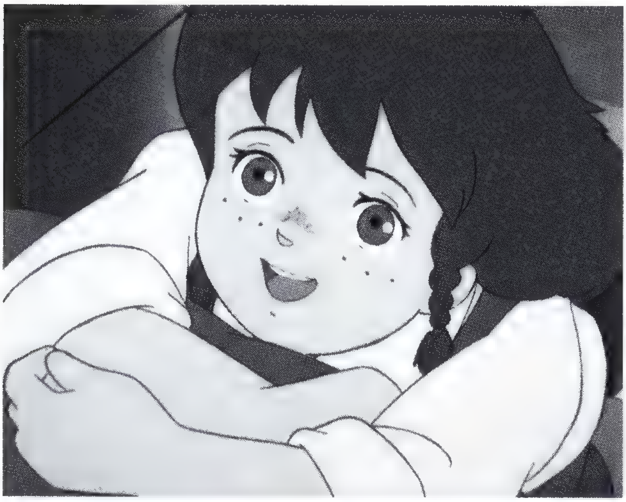
各話タイトルとスタッフリスト

話数	タイトル	①	②	③	④
1話	ミンチン女子学院	中西隆三	———	黒川文男	才田俊次
2話	エミリー人形	中西隆三	———	黒川文男	才田俊次
3話	はじめての授業	中西隆三	坂本雄作	黒川文男	才田俊次
4話	親友アーメンガード	中西隆三	———	黒川文男	才田俊次
5話	泣き虫ロッティ	中西隆三	坂本雄作	黒川文男	山崎登志樹
6話	灰かぶりベッキー	中西隆三	黒田昌郎	黒川文男	大谷敦子
7話	代表生徒	中西隆三	鈴木幸雄	黒川文男	山崎登志樹
8話	親切なお嬢様	中西隆三	坂本雄作	黒川文男	大谷敦子
9話	インドからの手紙	中西隆三	———	黒川文男	山崎登志樹
10話	二つのプレゼント	中西隆三	黒田昌郎	黒川文男	才田俊次
11話	プリンセスの誕生日	中西隆三	坂本雄作	黒川文男	山崎登志樹
12話	屋根裏の暗い部屋	中西隆三	坂本雄作	黒川文男	大谷敦子
13話	つらい仕事の日	中西隆三	———	黒川文男	石井邦幸
14話	深夜のお客さま	中西隆三	平林　淳	黒川文男	山崎登志樹
15話	街の子ピーター	中西隆三	坂本雄作	黒川文男	大谷敦子
16話	ロッティの冒険	椋露地桂子	坂本雄作	黒川文男	石井邦幸
17話	小さな友メルの家族	椋露地桂子	———	黒川文男	山崎登志樹
18話	悲しいメイポール祭	中西隆三	腰繁男	黒川文男	大谷敦子
19話	インドからの呼び声	中西隆三	———	黒川文男	山崎登志樹
20話	謎の特別室生徒	中西隆三	腰繁男	黒川文男	石井邦幸
21話	涙の中の悲しみ	中西隆三	矢沢則夫	黒川文男	大谷敦子
22話	屋根裏のパーティー	中西隆三	———	黒川文男	山崎登志樹
23話	親切なパン屋さん	椋露地桂子	矢沢則夫	黒川文男	石井邦幸
24話	エミリーの運命	中西隆三	———	黒川文男	大谷敦子
25話	一日だけのシンデレラ	中西隆三	②③黒川文男		山崎登志樹
26話	年少組の小さな先生	中西隆三	岡部英二	黒川文男	石井邦幸
27話	デュファルジュ先生の帰国	中西隆三	楠葉宏三	黒川文男	大谷敦子
28話	夏休みの大騒動	中西隆三	岡部英二	黒川文男	山崎登志樹
29話	ベッキーの里帰り	中西隆三	黒田昌郎	黒川文男	石井邦幸
30話	インドから来た紳士	中西隆三	———	黒川文男	大谷敦子
31話	屋根裏にきた怪物	中西隆三	岡部英二	黒川文男	山崎登志樹
32話	壁の向う側の秘密	中西隆三	———	黒川文男	石井邦幸
33話	新学期のいじわる	中西隆三	岡部英二	黒川文男	大谷敦子
34話	嵐の中のつぐない	中西隆三	岡部英二	黒川文男	山崎登志樹
35話	消えそうないのち	中西隆三	楠葉宏三	黒川文男	石井邦幸
36話	魔法のはじまり	中西隆三	吉田健二郎	黒川文男	大谷敦子
37話	屋根裏は大混乱	中西隆三	矢沢則夫	黒川文男	山崎登志樹
38話	こわされた魔法	中西隆三	鈴木幸雄	黒川文男	石井邦幸
39話	馬小屋の寒い夜	中西隆三	矢沢則夫	黒川文男	大谷敦子
40話	アメリア先生の涙	中西隆三	鈴木幸雄	黒川文男	山崎登志樹
41話	妖精たちのパーティ	中西隆三	鈴木孝義	黒川文男	石井邦幸
42話	雪の日の追放	中西隆三・鎌田秀美	樋口雅一	黒川文男	大谷敦子
43話	幸せの素敵な小包	中西隆三	鈴木孝義	黒川文男	山崎登志樹
44話	おお、この子だ！	中西隆三	鈴木孝義	黒川文男	石井邦幸
45話	ミンチン院長の後悔	中西隆三	鈴木孝義	黒川文男	大谷敦子
46話	また逢う日まで	中西隆三	鈴木孝義	黒川文男	山崎登志樹

①脚本　②絵コンテ　③演出　④作画監督　（———はいずれもクレジット表記なし）

愛少女ポリアンナ物語（ストーリー）

放映期間：1986年1月5日～12月28日



スタッフ 原作:エレナー・ホグマン・ポーター　製作:本橋浩一　製作管理:高桑充　企画:佐藤昭司・久保田栄一(フジテレビ)　音楽:小六禮次郎　キャラクターデザイン・作画監督:佐藤好春　美術監督:川井憲　録音監督:山田悦司　撮影監督:森田俊昭　プロデューサー:中島順三・石川泰平(フジテレビ)　監督:楠葉宏三　制作:日本アニメーション・フジテレビ　■主題歌:(♯1～27)OP「し・あ・わ・せカーニバル」ED「愛になりたい」　作詞:岩里祐穂　作曲:芹澤廣明　編曲:和泉一弥　歌:工藤夕貴(ハミングバード)　(♯28～51)OP「微笑むあなたに会いたい」ED「幸福」　作詞:浅見純(OP)・三浦徳子(ED)　作曲:鈴木キサブロー(OP)・小杉保夫(ED)　編曲:矢野立美　歌:工藤夕貴(ハミングバード)

キャスト ポリアンナ・フィティア：堀江美都子　ジョン牧師：田中秀幸　パレー・ハリントン：野沢雅子　ジミー・ビーン：山田栄子　トーマス・チルトン：田中秀幸　ジョン・ペンデルトン：銀河万丈　ナンシー・ハートレー：潘恵子　トムじい：緒方賢一　ダルギン：近藤多佳子　デラ・ウェザビー：吉田理保子　ジェミー：渡辺菜生子　サディ・ディーン：佐久間レイ　ルース・カリウ：池田昌子　ナレーター：中西妙子

ストーリー

両親を亡くしたポリアンナは、パレーおばさんと暮らすことになった。おばさんはポリアンナにつらくあたるが、牧師だった父が残した言葉「よかったを探すんだ」を胸に、明るくふるまうのだった。

そのおかげで孤児院から逃げてきた少年ジミーや気難しいペンデルトンさん、パレーおばさんまでが次第に心を開いていく。事故でポリアンナの足が動かなくなったときは、今度はおばさんがポリアンナの心を支えてくれたのだ。

パレーおばさんとチルトン先生の結婚、そして先生の急死。ジミーはペンデルトンさんの養子になった。

リハビリのためカリウ夫人の家に住むことになったポリアンナは、夫人の行方不明の甥を探して、大奮闘。嬉しいことも悲しいこともある中で、ポリアンナはいつも「よかった」を探していく。

解説

原作の訳では「喜びのゲーム」となるところを「よかった探し」に変えた時点で、アニメの成功は決まったといえる。教義的な言葉が、明快な癒しのキーワードになったのだ。

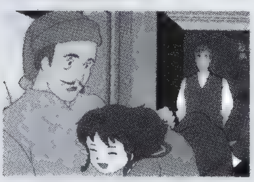
かたくなに家を守るパレーおばさん、パレーの姉への思いが消えないペンデルトン、パレーとの行き違いが解けないチルトン先生。そして、甥を案じて沈みがちなカリウ夫人。

プライドが高く、自分の世界にひとり埋没していた大人たちは、ポリアンナの強烈にストレートな「よかった」探しで鎧を外してもらっていった。

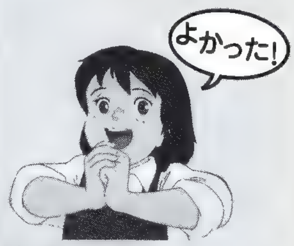
『ポリアンナ』は少女ポリアンナの成長物語であると同時に、実はポリアンナに癒される大人たちのドラマだったのだ。

この場面がツボ!!









抱きつき魔ポリアンナに癒された大人たち

本心から「よかった！」と思えばポリアンナの体は勝手に動く。子どもの温もりほど心を溶かす特効薬はなく、人間性まで変える重要なツボになっているのだ。

パレーおばさんの「よかった」！

使用前 4話



ポリアンナがきたばかりの頃のパレーさんは表情が固い。が…

使用後 20話



ポリアンナにさんざん抱きつかれたあとは、笑顔まで柔らかい！

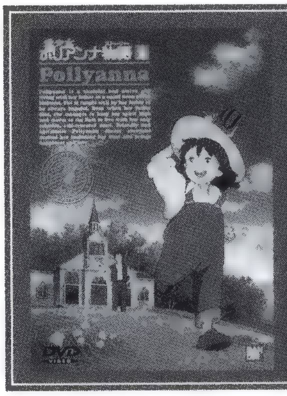


原作と原作者

原作者ポーター（1868～1920）はアメリカ生まれ。1913年に出版した『少女パレアナ』が大人気で、続く1915年には続編『パレアナの青春』も出た。

アニメは珍しく2部構成だが、ポリアンナが事故にあい手術を終えるまでの第1部が『少女パレアナ』をベースに。カリウ夫人とジェミーの物語は第2部『パレアナの青春』をベースにしている。第2部では、ジミーとの恋愛も重要な要素になっているが、アニメではその成長はカットされた。「楽天主義」と訳される「pollyannaism」は、「よかった探し」のポリアンナのキャラクターから実際に生まれた言葉である。

DVD



解説書で語っているのは、楠葉宏三監督とポリアンナ役・堀江美都子さん。二人の『ポリアンナ』への愛情に満ちたコメントは必見。豪華な声優陣を揃えたキャスティングの裏話にも言及が……

発売元：バンダイビジュアル　全12巻
BCBA-0560～0571　各：カラー／128分（5話収録）日本語字幕（ON・OFF可）￥3,800　※5巻は105分（4話収録）全巻：OP、ED、予告編収録　※最終巻にカラオケ「し・あ・わ・せカーニバル」（ステレオ）の特典映像収録

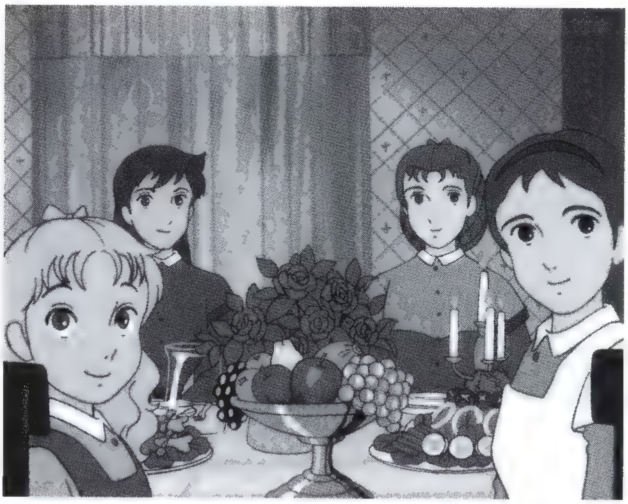
各話タイトルとスタッフリスト

1話　教会の小さな娘	①久貴千彩子　②楠葉宏三　③佐藤好春
2話　死なないで父さん	①久貴千彩子　②楠葉宏三　③佐藤好春
3話　丘の上の賛美歌	①久貴千彩子　②楠葉宏三　③佐藤好春
4話　見知らぬ町へ	①久貴千彩子　②矢沢則夫　③佐藤好春
5話　ナンシーの約束	①久貴千彩子　②腰繁男　③佐藤好春
6話　新しい服騒動	①久貴千彩子　②杉村博美　③佐藤好春
7話　うれしいおしおき	①久貴千彩子　②矢沢則夫　③佐藤好春
8話　不思議な紳士	①久貴千彩子・国弘珠緒　②黒川文男　③佐藤好春
9話　放っておけないわ	①久貴千彩子　②楠葉宏三　③佐藤好春
10話　何とかしなくちゃ！	①久貴千彩子　②矢沢則夫　③佐藤好春
11話　ペンデルトンの森で	①久貴千彩子　②楠葉宏三　③佐藤好春
12話　スノー夫人の驚き	①久貴千彩子　②楠葉宏三　③佐藤好春
13話　おば様はお気の毒	①久貴千彩子　②杉村博美　③佐藤好春
14話　手鏡の思い出	①久貴千彩子　②矢沢則夫　③佐藤好春
15話　不思議な特効薬？	①久貴千彩子　②吉田健二郎　③佐藤好春
16話　怒らないで！おば様	①久貴千彩子　②矢沢則夫　③佐藤好春
17話　チルトン先生大好き！	①久貴千彩子　②杉村博美　③佐藤好春
18話　ペンデルトンの謎	①久貴千彩子　②吉田健二郎　③佐藤好春
19話　驚くべき秘密	①久貴千彩子　②矢沢則夫　③佐藤好春
20話　危ない！ポリアンナ	①久貴千彩子　②杉村博美・楠葉宏三　③佐藤好春
21話　恐ろしい宣告	①久貴千彩子　②矢沢則夫　③佐藤好春
22話　足が動かない!!	①久貴千彩子　②杉村博美・楠葉宏三　③佐藤好春
23話　よかったが探せない！	①久貴千彩子　②矢沢則夫　③佐藤好春
24話　もう一度歩きたい	①久貴千彩子　②杉村博美　③佐藤好春
25話　危険な手術	①久貴千彩子　②矢沢則夫　③佐藤好春
26話　死なないでポリアンナ	①久貴千彩子　②楠葉宏三　③佐藤好春
27話　第一部完・愛になりたい	①久貴千彩子　②楠葉宏三　③佐藤好春
28話　忍びよる影	①久貴千彩子　②矢沢則夫　③佐藤好春
29話　さよなら　ヘルティングスビル	①久貴千彩子　②片渕須直　③佐藤好春
30話　大都会ボストンの生活	①久貴千彩子　②楠葉宏三　③佐藤好春
31話　チップマックがいない！	①久貴千彩子　②矢沢則夫　③佐藤好春
32話　迷子のポリアンナ	①久貴千彩子　②杉村博美　③佐藤好春
33話　チップマックはどこ？	①久貴千彩子　②片渕須直　③佐藤好春
34話　カリウ夫人の悲しい秘密	①久貴千彩子　②矢沢則夫　③佐藤好春
35話　若君ジェームス	①久貴千彩子　②杉村博美　③佐藤好春
36話　路地裏の天使	①久貴千彩子　②矢沢則夫　③佐藤好春
37話　本当のジェミーが欲しい!!	①久貴千彩子　②楠葉宏三　③佐藤好春
38話　どうして幸福になれないの？	①久貴千彩子　②杉村博美　③佐藤好春
39話　さよならパーティ事件	①久貴千彩子　②矢沢則夫　③佐藤好春
40話　たのしいボストン見物	①久貴千彩子　②杉村博美　③佐藤好春
41話　嵐のはじまり	①久貴千彩子　②矢沢則夫　③佐藤好春
42話　失われた帰り道	①久貴千彩子　②楠葉宏三　③佐藤好春
43話　死なないでチルトン先生！	①久貴千彩子　②杉村博美　③佐藤好春
44話　悲しみをのりこえて	①久貴千彩子　②矢沢則夫　③佐藤好春
45話　荒れた花園	①久貴千彩子　②杉村博美　③佐藤好春
46話　ジェミー・ケントの謎	①久貴千彩子　②矢沢則夫　③佐藤好春
47話　危険な遊び	①久貴千彩子　②楠葉宏三　③佐藤好春
48話　助けて！ジェミー	①久貴千彩子　②矢沢則夫　③佐藤好春
49話　解きあかされた過去	①久貴千彩子　②矢沢則夫　③佐藤好春
50話　ボクがジェミーだ！	①久貴千彩子　楠葉宏三　③佐藤好春
51話　幸福はすぐそばに	①久貴千彩子　②楠葉宏三　③佐藤好春

①脚本　②絵コンテ　③作画監督　※各話演出のクレジット表記はなし

愛の若草物語

放映期間：1987年1月11日～12月27日



スタッフ 原作:ルイザ・メイ・オルコット「若草物語」「続・若草物語」より　製作:本橋浩一　製作管理:高桑充　企画:佐藤昭司・久保田栄一　脚本:宮崎晃　音楽:大谷和夫　キャラクターデザイン:近藤喜文・山崎登志樹　作画監督:山崎登志樹 他　美術監督:高野正道　プロデューサー:中島順三・石川泰平　監督:黒川文男　制作:日本アニメーション・フジテレビ　■主題歌:(1～14話)OP「若草の招待状」ED「夕陽と風とメロディ」　作詞:秋元 康(OP)・麻生圭子(ED)　作曲:高見沢俊彦(OP)・松任谷正隆(ED)　編曲:佐藤準(OP)・松任谷正隆(ED)　歌:新田恵利(ポニーキャニオン)　(15～48話)OP「いつかきっと！」ED「お父さまへのララバイ」　作詞:おおくぼ由美　作曲:森田公一　編曲:大谷和夫　歌:潘恵子・山田栄子・荘真由美・佐久間レイ[以上OP]・下成佐登子[ED](ポニーキャニオン)

キャスト ジョオ：山田栄子　メグ：潘恵子　ベス：荘真由美　エイミー：佐久間レイ　メアリー：中西妙子　フレデリック：阪修　マーサ：水城蘭子　ローレンス：宮内幸平　ローリー：飛田展男　ブルック：小島敏彦　ハンナ：大方斐紗子　アンソニー：曽我部和恭　ジョン：関俊彦　デーヴィッド：塩屋浩三

ストーリー

南北戦争に行った父の帰りを待つ母と四姉妹

1863年、南北戦争中のアメリカ、ニューコードの町に、マーチ一家は暮らしていた。母親のメアリーと、メグ、ジョオ、ベス、エイミーの四姉妹、それに家政婦のハンナと子猫のミルキー・アンが、出征中の父フレデリックの留守を守っていた。

一家はゲティスバーグ近郊の家を戦火で失い、この町に逃れてきたので、暮らしは貧しかった。しかし、心を合わせて父の帰りを待つ一家に、あたたかい笑いの絶えることはなかった。娘たちはそれぞれに将来に夢を描き、生活が苦しい中でも、生き生きと毎日を送っていた。

隣家との交流ローリー少年とローレンス氏

そんな一家に興味を持ったのが、隣家の少年ローリーだ。両親を失い、厳格な祖父と暮らすローリーは、マーチ家のあたたかな家庭の雰囲気にあこがれていた。やがて、ローリーとその祖父、ローレンスは、マーチ家と行き来するようになる。年老いたローレンスにとっても、一家との交流は、心をあたためてくれるものだった。

やがて、内気な三女のベスが、ピアノを弾くのが大好きだと知ったローレンスは、「自宅にあるグランドピアノを、いつでも弾きにきていい」とベスに伝えた。さらにローレンスは、亡くなった孫の形見の、音のよい小さなピアノを、ベスに送る。ベスの感激はひととおりではなく、今まで怖くて近づけなかったローレンスに抱きつき、心からのお礼を言った。

四姉妹それぞれの小さな事件と成長をくりかえしながら、季節はうつり、再び冬が近づいてきた。

父が戦場で倒れたさらにベスが猩紅熱に……

父のフレデリックが、戦場で病気になり、危ない状態だという連絡が入った。看護に向かうことになった母のメアリーのために、ジョオは髪を売ってお金を作った。

貧しい中でも、より生活に困っている人たちへの助力を惜しまなかった母に代わり、ベスは貧しいフンメル一家をたびたび訪問した。しかしそこで赤ん坊が猩紅熱で亡くなり、ベスにもうつってしまう。ベスの容態はどんどん悪くなっていった。姉妹たちは、心配に胸がつぶれそうになりながら、母の帰りを待つ。危険なところだったが、ベスはなんとか峠を越し、ジョオたちは抱きあって喜んだ。

父の帰還そしてそれぞれの未来へ

父の病気が順調に回復していると知らせが入り、メアリーが戻ってきた。ベスも、次第に元気を取り戻していった。年が明けたら、フレデリックは戻ってくるという。一家にとって、一番苦しかった時は過ぎたようだ。

クリスマス、一家に思わぬクリスマス・プレゼントが届いた。予定よりも早く、フレデリックが戻ってきたのだ。一年ぶりに父と再会した四姉妹は、心から喜び、父を迎えた。

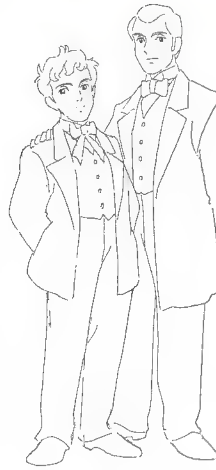
新しい春がめぐってきた。メグは、長く一家の力になってくれた青年、カール・ブルックのプロポーズを受け入れ、彼と結婚することになった。ジョオは、夢だった小説家になる道が開け、勉強のためにニューヨークへ行くことになっていた。ベスはすっかり元気になり、エイミーも成長していく。長かった戦争は終わり、もうフレデリックは戦場へ戻らなくてよくなった。四姉妹は、それぞれの未来へ踏み出していく。しかし、家族の絆は、決して変わることがないだろう。

キャラクター紹介

名作シリーズ中期の秀作。
メインキャラは近藤喜文デザイン



ジェームズ・ローレンス
隣家の老人。気難しく見えるが、本当は優しい人だ



カール・ブルック
ローリーの家庭教師。マーチ家とも知り合いになる。メグのことが好き

ローリー・ローレンス
隣家に暮らすローレンスの孫。マーチ家に興味を持ち、ジョオに好意を抱く



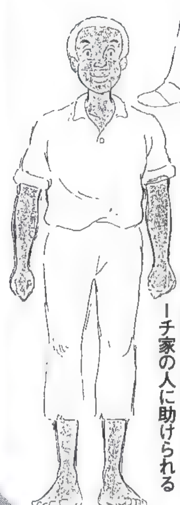
アンソニー・ブーン
ニューコードタイムズの編集者。ジョオの作家デビューに一役買う



デーヴィッド・フォーレット
マーサの甥。いつもマーサにお金をたかりにくる



マーサ・フォーレット
フレデリックの叔母。お金持ちで頑固な人。ジョオがお気に入り



ジョン・マーティー
南軍から脱走した黒人兵。マーチ家の人に助けられる

マーチ家の人々



メグ
本名マーガレット・マーチ。16歳。優しく穏やかな性格の長女。舞踏会など華やかなものにも憧れる



ジョオ
本名ジョセフィン・マーチ。15歳。活発で男まさりの次女。読書が好きで小説家をめざしている



ベス
本名エリザベス・マーチ。10歳。内気だが心優しくピアノを愛する三女



エイミー
おませでおしゃまな7歳の四女。自分勝手でわがままなところもある。四姉妹の中で唯一学校に通っている



メアリー・マーチ
優しくてしっかりしたマーチ家の母親



ミルキー・アン
ベスが拾ってきた子猫。以後家族の一員に



ハンナ
マーチ家の黒人の家政婦。人がよく、頼りになる



フレデリック・マーチ
マーチ家の父親。南北戦争に行っている

解説

女の子なら誰でも一度は読んだことがある名作中の名作『若草物語』。アニメ化されたのは、これが初めてではない。昭和55年に東映動画によりスペシャル枠で、翌年には国際映画社によりテレビシリーズとして放映されている。3度目にして、名作劇場に登場となったわけだ。

こうしてできあがった本作品は、名作劇場の中でも、きわめて淡々と描かれる、日常描写に徹した作品となった。家族の小さな波風はあるものの、大きな事件は、ベスが猩紅熱で生死の境をさまよったことぐらいで、ひたすら家族の日常を描ききった。

原作の知名度は、名作劇場で一、二を争うものだが、アニメ化にあたっては、オリジナルの要素がいろいろ盛りこまれている。

原作でマーチ一家が住んでいる町は、コンコード。しかしこれでは、前年度の『愛少女ポリアンナ』の舞台と同じになるため、アニメではニューコードという、架空の港町が舞台として設定された。

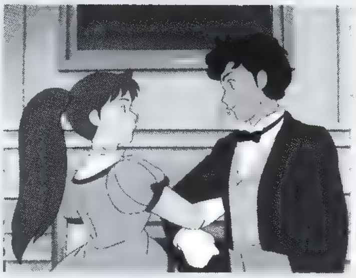
史実でも有名な「ゲティスバーグの戦い」にからませた、マーチ一家が戦争で被害を受け、疎開して新しい家を探すという冒頭のエピソードも、アニメ・オリジナルのものだ。

また、視聴者の年齢を意識したのだろう。原作よりエイミーの年齢を下げた上で、ナレーションもエイミーの視点で語られている。

監督は『小公女セーラ』を担当した黒川文男。脚本は『あらいぐまラスカル』『トム・ソーヤーの冒険』『ブッシュベイビー』などの宮崎晃。四姉妹などメインキャラクターのデザインは『赤毛のアン』『名探偵ホームズ』などのキャラクターデザインを担当し、スタジオジブリの数々の映画でも作画監督を務めた故・近藤喜文による。

このセリフがツボ!!

「きみの家には、ぼくの家にないものがいっぱいあるんだ。兄弟がいる。お父さんはいらっしゃらないようだけど、やさしそうなお母さんがいる。笑い声がある。歌声がある。家庭のあたたかさに満ちあふれている」（第19話）



ジョオは、ずっと隣家からマーチ家の様子を見ていたローリーと、舞踏会で対面する。なぜ見ていたのかと尋ねるジョオに、ローリーが答えたのがこのセリフだ。確かにマーチ家は貧しくて、ジョオに言わせれば「足りないものだらけ」なのだが、これを聞けば納得だろう。あたたかな家庭の理想像に、ローリーならずとも憧れてしまうのではないだろうか。



「そんなに後悔しているんですもの。神様もきっと許してくださると思うわ」（第30話）

エイミーのことで、激しく後悔するジョオを、母のメアリーはあたたかく慰め、欠点を直すよう諭す。なんと立派な母親！　本当に昔はジョオのような性格だったのだろうか？

この場面がツボ!!

けなげなベスの喜びにホロリ（第26話）







▼▶内気なベスが感激のあまり、ローレンスの胸にとびこんだ！

ローレンスを怖がっていたベスだが、小さくて音のよいピアノをもらった嬉しさでお礼に向かう。ローレンスもこれには感激！



◀マーチ家の女性が気になるローリーとブルック。彼らの恋の行方は？

姉妹のロマンス

年頃のメグとジョオには、恋の話もある。女らしいメグは、ブルックと婚約することになるが、第1話では、エイミーの学校のサットン先生からも思われていた様子がうかがえる。男っぽいけど生き生きとしたジョオはジョオで、隣のローリーと、新聞社のアンソニーのふたりに思いを寄せられていた。ただし、当の本人は相手にしていなかった。

クリノリン・スタイル

この話は、19世紀後半、クリノリン・スタイルというファッションが流行った時代に当たる。鳥かごのようなクリノリンという下着をつけることで、スカートを大きくふくらませているのだ。他にも、裾広がりの袖や、胸元の切り替えが特徴的。近藤喜文のメインキャラのコスチューム・デザインは、その特徴をとてもよくとらえていて、わかりやすい。

DVD



解説書には、1～9巻：黒川文男（監督）、10～12巻：山崎登志樹（キャラクターデザイン）の「スタッフインタビュー」が収録されている。四姉妹と家族にかけた監督の思いがうかがえる。

発売元：バンダイビジュアル　全12巻
BCBA-0695～0706　各：カラー／103分（4話収録）日本語字幕（ON・OFF可）¥3,800　※12巻のみ107分　全巻：OP、ED、予告編を収録　※最終巻に、カラオケ2曲「若草の招待状」「いつかきっと！」（ステレオ）の映像特典収録

ワンポイントコラム　ピアノをめぐる物語


▲ピアノを弾くベスのシーンは、ある意味マーチ家の家族の幸せの象徴だ

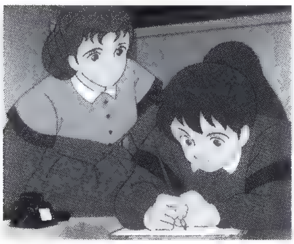
ピアノは作品の中で、象徴的にいろんな役割を果たしている。ローレンスの意向でピアニストになることを断念したローリーにとって、一時期ピアノは辛いものだったようだ。ローレンスがベスに、自宅のグランドピアノを弾くことを許可したり、小さなピアノを贈った名場面は忘れがたい。また、猩紅熱から回復したベスが弾くピアノを、家族が再び囲む場面では、喜びが一際強調された。

原作と原作者

家庭小説の金字塔とも呼ぶべき『若草物語』の原題は『Little Women』。これは、原作者ルイザ・メイ・オルコット（1832～1888）の父が、娘たちを呼ぶときに、好んで使った言い方らしい。物語自体も、オルコットが若いころに住んでいたコンコードを舞台にし、自分の家族をモデルにした、自伝的要素の強いものだ。もちろん、小説家をめざすジョオが、オルコット自身だ。姉の結婚にジョオが腹を立てる話や、後に妹のベスが病死するなど、物語のエピソードのいくつかは実話なのだ。

この作品は、オルコットに富と名声をもたらし、『赤毛のアン』と並ぶ少女小説のバイブルとして、広く親しまれた。名作劇場でもアニメ化された『あしながおじさん』の中で、主人公が「『リトル・ウイメン』を読まずに育った女の子は、大学でわたし一人」と語るシーンがあるほどだ。

この作品には『続』『第三』『第四』の三作の続編がある。『続』で、メグは結婚して双子の母に。ベスは亡くなり、ジョオは作家になり、ローリーがエイミーと結婚、そしてジョオが結婚するまでが描かれた。『第三』と『第四』はその後の話で、名作劇場『ナンとジョー先生』の原作にあたる。



各話タイトルとスタッフリスト

話数	タイトル	スタッフ
1話	パパが帰ってきた!!	①宮崎晃　②黒田昌郎　③黒川文男　④山崎登志樹
2話	ミルキー・アンを拾った	①宮崎晃　②③黒川文男　④山崎登志樹
3話	あぶない！早く逃げて！	①宮崎晃　②③黒川文男　④山崎登志樹
4話	戦争がはじまる！	①宮崎晃　②矢沢則夫　③黒川文男　④山崎登志樹
5話	町が燃えてしまう！	①宮崎晃　②辻伸一　③黒川文男　④山崎登志樹
6話	さよなら　ふるさと！	①宮崎晃　②楠葉宏三　③黒川文男　④古山匠
7話	おば様はいじわる！	①宮崎晃　②矢沢則夫　③黒川文男　④山崎登志樹
8話	お家を貸して下さい！	①宮崎晃　②辻伸一　③黒川文男　④古山匠
9話	怒りん坊のジョオ！	①宮崎晃　②矢沢則夫　③黒川文男　④山崎登志樹
10話	ほめられて　けなされて	①宮崎晃　②杉村博美・松見真一　③黒川文男　④古山匠
11話	マーサおば様はお気の毒！	①宮崎晃　②楠葉宏三　③黒川文男　④山崎登志樹
12話	雷なんて大嫌い！	①宮崎晃　②辻伸一　③黒川文男　④古山匠
13話	私たちの変な家	①宮崎晃　②杉村博美　③黒川文男　④山崎登志樹
14話	エイミーと悪い友だち	①宮崎晃　②辻伸一　③黒川文男　④古山匠
15話	お隣からのぞく不思議な少年！	①宮崎晃　②楠葉宏三　③黒川文男　④山崎登志樹
16話	ひどい　メグは泥棒なんかじゃない！	①宮崎晃　②山口武志・松見真一　③黒川文男　④古山匠
17話	ジョオとリンカーン大統領の演説	①宮崎晃　②楠葉宏三　③黒川文男　④山崎登志樹
18話	メグとジョオ舞踏会にデビュー？	①宮崎晃　②辻伸一　③黒川文男　④大谷敦子
19話	おこげドレスと素敵な紳士	①宮崎晃　②杉村博美　③黒川文男　④古山匠
20話	ジョオのお見舞いは元気がいっぱい	①宮崎晃　②楠葉宏三　③黒川文男　④山崎登志樹
21話	発表！はりきりジョオの自信作	①宮崎晃　②岡部英二　③黒川文男　④古山匠
22話	おなかのすいたクリスマス	①宮崎晃　②辻伸一　③黒川文男　④山崎登志樹
23話	ベス！思いがけない贈物に大喜び	①宮崎晃　②杉村博美・山口武志　③黒川文男　④古山匠
24話	メグの小さな恋のはじまり？	①宮崎晃　②岡部英二　③黒川文男　④山崎登志樹
25話	小説家ジョオの2ドルの傑作	①宮崎晃　②楠葉宏三　③黒川文男　④古山匠
26話	怖がりベスとお隣の老紳士	①宮崎晃　②辻伸一　③黒川文男　④山崎登志樹
27話	学校でお仕置されたエイミー	①宮崎晃　②八沖繁雄　③黒川文男　④古山匠
28話	エイミー！なんてことするの！	①宮崎晃　②黒田昌郎　③黒川文男　④山崎登志樹
29話	死なないで　エイミーが川に落ちた！	①宮崎晃　②辻伸一　③黒川文男　④古山匠
30話	ゴメンねと言えたらいいのに	①宮崎晃　②杉村博美　③黒川文男　④山崎登志樹
31話	メグはきせかえ人形じゃない！	①宮崎晃　②黒田昌郎・杉村博美　③黒川文男　④古山匠
32話	困ったマーサおばさんの性格	①宮崎晃　②辻伸一　③黒川文男　④山崎登志樹
33話	楽しい楽しい野外パーティだ	①宮崎晃　②八沖繁雄　③黒川文男　④古山匠
34話	エイミーは悪い夢を見た！	①宮崎晃　②杉村博美　③黒川文男　④山崎登志樹
35話	メグ、それはやっぱり恋なのよ	①宮崎晃　②辻伸一　③黒川文男　④古山匠
36話	ジョオの小説が新聞にのった	①宮崎晃　②四辻孝夫　③黒川文男　④山崎登志樹
37話	チチキトク…ジョオが髪を売った	①宮崎晃　②杉村博美　③黒川文男　④古山匠
38話	悪い知らせの電報がきた！	①宮崎晃　②辻伸一　③黒川文男　④山崎登志樹
39話	みんなが書いた手紙、手紙、手紙	①宮崎晃　②波岡伸　③黒川文男　④古山匠
40話	ベスが猩紅熱にかかった！	①宮崎晃　②八沖繁雄　③黒川文男　④山崎登志樹
41話	お母さま早く帰ってきて！	①宮崎晃　②波岡伸　③黒川文男　④古山匠
42話	神様、どうかベスを助けて！	①宮崎晃　②辻伸一　③黒川文男　④山崎登志樹
43話	大都会ニューヨークへ行こう　ジョオ	①宮崎晃　②池野文雄　③黒川文男　④古山匠
44話	ニセ手紙事件・犯人は誰か？	①宮崎晃　②辻伸一　③黒川文男　④山崎登志樹
45話	おじいさまがローリーをなぐった	①宮崎晃　②池野文雄　③黒川文男　④古山匠
46話	思いがけないクリスマスプレゼント	①宮崎晃　②池野文雄　③黒川文男　④山崎登志樹
47話	さよなら！アンソニー	①宮崎晃　②辻伸一　③黒川文男　④古山匠
48話	春！それぞれの旅立ち	①宮崎晃　②③黒川文男　④山崎登志樹

①脚本　②絵コンテ　③演出　④作画監督

小公子セディ

放映期間：1988年1月10日～12月25日



スタッフ 原作：フランシス・ホジソン・バーネット　製作：本橋浩一　製作管理：高桑充・中島順三　企画：佐藤昭司・石川泰平（フジテレビ）　脚本：石森史郎　音楽：森田公一　キャラクターデザイン：櫻井美知代　レイアウト設定：前田英美　美術監督：沼井信朗　録音監督：山田悦司　撮影監督：森田俊昭　プロデューサー：中島順三・遠藤重夫・小牧次郎（フジテレビ）　監督：楠葉宏三　制作：日本アニメーション・フジテレビ ■主題歌：OP「ぼくらのセディ」ED「誰かを愛するために」作詞：山上路夫　作曲：森田公一　編曲：大谷和夫　歌：西田ひかる（ポニーキャニオン）

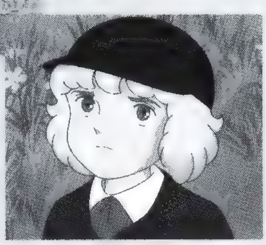
キャスト セディ：折笠愛　アニー：宗形智子　ジェイムズ：小川真司　ドリンコート伯爵：渡部猛　メロン：斎藤昌　ハヴィシャム：阪脩　コッキー：堀江美都子　ジェーン：山田栄子　ウィルキンス：島田敏　ブリジット：松井菜桜子　ミンナ：増山江威子　キャサリン：佐久間レイ　ホッブス：上田敏也　ディック：柴本広之

この場面＆セリフがツボ!!

「僕いりません！　僕…おじいさんにずーっと生きていてもらいたいんだもの」（第27話）



◀伯爵はセディを連れてはじめて遠乗りに出かける。目指すのは伯爵の領地が見渡せる丘



▶伯爵の死後、領地を相続すると聞いて暗い顔に。セディの純粋さと優しさが表れている

ストーリー

セドリック・エロル（セディ）はニューヨークの下町で暮らしている。野球が大好きな素直で愛らしい少年だ。

ある日、父ジェイムズのもとに弁護士ハヴィシャムが現れた。ジェイムズはイギリスのドリンコート伯爵家の息子であるが、アメリカ女性と結婚し、勘当されていた。しかし跡継ぎの長男ビーヴィスが死亡したため伯爵は次男ジェイムズを後継者として迎えようと考えた。ところが、そのジェイムズも心臓発作で急死。唯一の後継者になったセディは母アニーとイギリスに渡った。

イギリスで二人を待っていたのは母子が別れて暮らす生活。ドリンコート伯爵はセディの母アニーがアメリカ人だからだという理由で彼女を嫌い、ドリンコート家の敷居をまたぐことを許さなかった。しかし、セディは持ち前の無邪気さと優しさで、伯爵の冷たい心を溶かしていく。

セディは村人とも仲良くなり、貧しい人々を救うため伯爵に働きかける。伯爵のことを「村人思いの優しい伯爵」と信じるセディ。その期待に応えるため、伯爵は心ならずも領地改革に乗り出すことになった。

セディに愛情を感じるようになった伯爵はセディを後継者として正式にパーティでお披露目する。そこにもたらされた驚くべき知らせ！　ミンナという女が、わが子こそ正式な後継者と名乗り出たのだ。

遠くアメリカでセディの窮地を知った友達ディックは、新聞に載ったミンナの顔を見て驚く。後継者とする子どもは兄ベンとミンナの間にできた子だった。嘘を暴かれたミンナは捨てゼリフを残して去る。頑固だった伯爵もセディを賢く優しい子に育ててくれたアニーを認め、冷たく接したことに対し許しを乞うた。今ドリンコート家の新しい未来が始まろうとしていた。

解説

『小公子セディ』の特徴は、スタートから12話まで、アメリカのニューヨークでの暮らしを描いたことだろう。

愛情あふれる父母との生活や、セディと友達がニューヨークの下町を走りまわり、野球に興ずる姿などが生き生きと描かれ、アニメ版のセディが「ふつうの感覚を持った少年」であることが強調されている。

スタッフは初期の頃より名作シリーズの作画を支えた櫻井美知代が、はじめてキャラクターデザインを手がけた。作画のもとになる設定資料に細かい指示の書きこみがあることから、彼女がリアリティのある作画を目指したことがうかがえる。

脚本はドラマの必殺シリーズなどで有名な石森史郎。別れ別れに暮らさなければならない母子の寂しさをていねいに描き、ホームドラマ的要素も加味した。



原作と原作者

フランシス・バーネットの原作で、『小公女セーラ』に続いて名作シリーズ二度目の登場だ。この作品が発表されると米英両国で話題となり、独立戦争後の両国の感情的対立をやわらげる役目を果たした。セドリックスタイルと呼ばれる、えりにレースのついたビロード服や、巻き毛スタイルが流行したと言われている。原題は『リトル・ロード・フォントルロイ』。アニメ版「セディ」でもよく出てくる言葉だが、「ロード」はイギリスで公・侯・伯爵などにつける敬称。「フォントルロイ」はドリンコート伯爵家の跡継ぎの名称だ。日本題の『小公子』は1892年に初訳した若松賤子によるもの。

DVD



ジャケットイラストは櫻井美知代の描き下ろし。解説書には彼女のインタビューを掲載（8巻〜10巻）。性格を考えた上でキャラデザインをする話など興味深い。1巻〜7巻は楠葉監督のインタビュー。

発売元：バンダイビジュアル　全10巻　BCBA−0847〜0856　各カラー／94分（4話収録）／日本語字幕（ON・OFF可能）／¥3,800※1・2巻は128分（5話収録）3巻は122分（5話収録）10巻は97分（4話収録）※最終巻にカラオケ「ぼくらのセディ」（ステレオ）の映像特典収録

各話タイトルとスタッフリスト

話数	タイトル	スタッフ
1話	ニューヨークはぼくの街！	①石森史郎 ②楠葉宏三 ③しまだひであき
2話	ぼくにおじいさんがいた！	①石森史郎 ②楠葉宏三 ③しまだひであき
3話	おじさんは悪いひと？	①石森史郎 ②楠葉宏三 ③本木久年
4話	ぼくはなにも知らなかった！	①石森史郎 ②楠葉宏三 ③前田英美
5話	死なないで父さん！	①石森史郎 ②楠葉宏三 ③しまだひであき
6話	母さん、ぼくは泣かないよ！	①石森史郎 ②池野文雄 ③山崎登志樹
7話	ぼくが母さんを守る	①石森史郎 ②楠葉宏三 ③本木久年
8話	母さんは絶対に悪くない！	①石森史郎 ②楠葉宏三 ③しまだひであき
9話	母さんが…倒れた！	①石森史郎 ②池野文雄 ③山崎登志樹
10話	いやだ!! イギリスなんか行きたくない	①石森史郎 ②楠葉宏三 ③藤井裕子
11話	ウソだ！ ぼくが貴族になるなんて！	①石森史郎 ②黒田昌郎 ③しまだひであき
12話	さようなら！ ぼくの街ニューヨーク	①石森史郎 ②池野文雄 ③本木久年
13話	どうして母さんと離れてくらすの!?	①石森史郎 ②楠葉宏三 ③山崎登志樹
14話	猛犬デューガルはぼくの友だち！	①石森史郎 ②池野文雄 ③しまだひであき
15話	母さんの悪口は言わないで!!	①石森史郎 ②楠葉宏三 ③藤井裕子
16話	コッキーはおちゃめな女の子	①石森史郎 ②楠葉宏三 ③櫻井美知代
17話	うれしい！ やっとおじいさんに会える!	①石森史郎 ②池野文雄 ③賀川愛
18話	おじいさん ぼくがセディです!!	①石森史郎 ②池野文雄 ③しまだひであき
19話	馬に乗れるなんてほんとうに素敵だ！	①石森史郎 ②池野文雄 ③山崎登志樹
20話	おいしい？ 釣り名人のおくりもの!!	①石森史郎 ②黒田昌郎 ③しまだひであき
21話	四ツ葉のクローバーがくれた勇気！	①石森史郎 ②黒田昌郎 ③賀川愛
22話	セディが起こした奇跡!!	①石森史郎 ②楠葉宏三 ③山崎登志樹
23話	母親には絶対に会わすな!!	①石森史郎 ②黒田昌郎 ③しまだひであき
24話	おじいさんの嫌いなアメリカ人の手紙！	①石森史郎 ②池野文雄 ③山崎登志樹
25話	未来の名君セディ、初めての仕事！	①石森史郎 ②楠葉宏三 ③賀川愛
26話	落馬！ 大怪我？ ぼくが悪いんです！	①石森史郎 ②黒田昌郎 ③しまだひであき
27話	いつの日かドリンコート伯爵になる！	①石森史郎 ②池野文雄 ③山崎登志樹
28話	プレイボール！ 伯爵対セディ！	①石森史郎 ②斎藤博 ③しまだひであき
29話	伯爵が怒った！ ニューイックを呼べ！	①石森史郎 ②辻伸一 ③賀川愛
30話	母さんの病気はぼくがなおす	①石森史郎 ②黒田昌郎 ③山崎登志樹
31話	おじいさんは鬼伯爵なんかじゃない！	①石森史郎 ②鈴木孝義 ③しまだひであき
32話	本当だよ！ これ母さんの馬車なんだ！	①石森史郎 ②斎藤博 ③山崎登志樹
33話	奇跡 きまぐれ？ 伯爵の決意	①石森史郎 ②辻伸一 ③賀川愛
34話	コッキー危ない 崩れ落ちたレンガ!!	①石森史郎 ②斎藤博 ③しまだひであき
35話	助けてセディ！ 消えたコッキーのなぞ！	①石森史郎 ②斎藤博 ③山崎登志樹
36話	サーカスにつれてって！ 村の収穫祭	①石森史郎 ②鈴木孝義 ③しまだひであき
37話	僕におばあさんがいた！ 母さんの味方？	①石森史郎 ②辻伸一 ③賀川愛
38話	危うしセディ！ ロンドンからの知らせ!!	①石森史郎 ②楠葉宏三 ③山崎登志樹
39話	僕はニセモノ？ 現れたもう一人の若君！	①石森史郎 ②楠葉宏三 ③しまだひであき
40話	僕はリトルプリンスじゃない！	①石森史郎 ②楠葉宏三 ③山崎登志樹
41話	セディが狙われる!? 悪女ミンナの陰謀！	①石森史郎 ②辻伸一 ③賀川愛
42話	ミンナの秘密！ アメリカからの電報！	①石森史郎 ②楠葉宏三 ③しまだひであき
43話	おめでとう！ 君こそリトルプリンスだ！	①石森史郎 ②楠葉宏三 ③山崎登志樹

①脚本　②絵コンテ　③作画監督　※各話演出のクレジット表記はなし

ピーターパンの冒険

放映期間：1989年1月15日〜12月24日



スタッフ 協力：ロンドン、グレート・オーモンド街小児科病院　原作：ジェイムズ・M・バリ　協力：角川文庫「ピーターパンの冒険」より　製作：本橋浩一　製作管理：高桑充・中島順三　企画：佐藤昭司・清水賢治（フジテレビ）　音楽：渡辺俊幸　脚本：雪室俊一・島田満　キャラクターデザイン・場面設定：なかむらたかし　美術設定：川本征平　美術監督：高野正道　録音監督：山田悦司　撮影監督：森田俊昭　プロデューサー：遠藤重夫・立川善久（フジテレビ）　監督：黒田昌郎　企画制作：フジテレビ・日本アニメーション　■主題歌：OP「もう一度ピーターパン」ED「夢よ開けゴマ！」　作詞：秋元康　作曲：井上ヨシマサ　編曲：西平彰・佐藤準　唄：ゆうゆ

キャスト ピーターパン：日高のり子　ウェンディ：松井菜桜子　ジョン：羽村京子　マイケル：渕崎ゆり子　フック船長：大塚周夫　ティンカー・ベル：島本須美　カーリー：三田ゆう子　トートルズ：伊倉一恵　スライトリー：江森浩子　スミー水夫長：緒方賢一　ビル：郷里大輔　チェッコ：山寺宏一　アルフ：玄田哲章　スターキー：平野正人　ロバート：二又一成　タイガーリリー：川村万梨阿　ルナ：川村万梨阿　ダークネス：京田尚子　トン・チホーテ：田の中勇　プシケ：神代知衣　フローラ：富沢美智恵　ナナ：山寺宏一　エリザベス：鈴木弘子　ダーリング：玄田哲章

ストーリー

1900年。イギリス・ロンドンの住宅街にあるダーリング家。長女のウェンディ、長男のジョン、末っ子のマイケルの3人が、空を飛べる不思議な少年・ピーターパンに誘われるまま、夢の国・ネバーランドへ向かった。

ウェンディは、ピーターパンの仲間の3人の少年（カーリー、スライトリー、トートルズ）のお母さんとして生活することになった。

ところが、妖精のティンクは、ピーターパンと仲良くするウェンディに嫉妬し、ピーターパンを目の敵にする海賊フック船長にそそのかされて、海賊がウェンディをさらう手引きをする。

だが、フック船長にだまされたことを知ったティンクは、ウェンディを取り戻すために海賊のアジトへ潜入したピーターパンの大ピンチを命がけで救うのだった。

そのおかげで、ピーターパンはウェンディの救出に成功し、海賊のアジトは崩壊する。

ところが、自分の行動を恥じたティンクが、故郷の妖精の谷に帰ってしまう。

ピーターパンたちがティンクを迎えに旅立ったところ、ネバーランドでは異変が起きていた。黒魔術師のダークネスが、ネバーランドを暗黒の死の世界に変えようとしていたのだ。

妖精の谷でティンクを再び仲間に加えたピーターパン一行は、ダークネスの恐ろしい野望を阻止するために、その居城を目指す。

一方、ダークネスの野望に反対している孫娘のルナが、黒魔術の力の源「黒の鏡」を持って逃走する。

しかし、連れ戻されたルナは、無理にダークネスの力を継承させられてしまう。良心を黒の鏡の中に封印されたルナは、嬉々としてネバーランドを死の世界に変えはじめた。

ルナに取り入ってネバーランドを征服しようとするフック船長とピーターパンの決戦の最中、ウェンディがルナの良心の奪還に成功。

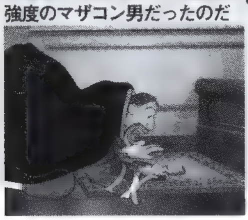
ネバーランドに美しさが復活するのを見届けたウェンディは、再訪を誓い、二人の弟とともにロンドンへ帰っていくのだった……。

この場面がツボ!!



▲少々自分勝手なティンクは、命賭けの技を披露した

▼自称・凶悪なフック船長は強度のマザコン男だったのだ



イガイな一面

見た目の印象とは異なる性格のティンクとフック船長。彼らが見せる、予想外の行動が感動と笑いのツボだ！

解説

『ピーターパンの冒険』は、ネバーランドという「架空の世界」を舞台にしていることで、世界名作劇場の中では、一際異彩を放っている。

監督は『フランダースの犬』（1975年）を生み出した黒田昌郎。キャラデザインは、映画『AKIRA』（1988年）で作画監督をつとめた、なかむらたかし。独特な雰囲気を漂わせるキャラも、世界名作劇場では異色な存在だ。見どころは、いつもフワフワ宙に浮くピーターパンの浮遊感。戦いのアクションも必見だ。

また、後半の「ダークネス編」はオリジナル物語。スリリングな展開に目が離せない。

名作劇場15周年記念作品なので、あらいぐまのラスカルも登場！



キャラクター紹介



原作と原作者

原作者ジェイムズ・マシュウ・バリ（1860〜1937）は、スコットランドの出身。エジンバラ大学卒業後、新聞記者となり、その後、作家活動を開始した。

ピーターパンの物語は1902年に短編として生まれ、数回書き改められている。アニメの原作は、1911年に「ピーターパンとウェンディ」（角川文庫版では「ピーターパンの冒険」）の題で出版されたもの。

アニメのピーターパンは、最終回でウェンディの帰宅を笑顔で賛成した。ところが原作では、帰るのを引き止め、彼女の母の哀しみを知って、仕方なく帰宅を承知するという、せつないラストを迎えるのだ。

DVD



解説書には、1〜7巻：黒田昌郎（監督）、8〜10巻：なかむらたかし（キャラデザイン・場面設定）の「スタッフインタビュー」が掲載されている。企画段階の裏話は、興味深いものばかり。

発売元：バンダイビジュアル　全10巻　BCBA-0406〜0415　各：カラー／94分（4話収録）日本語字幕（ON・OFF可）￥3,800　※1巻は117分（5話収録）全巻：OP、ED、予告編を収録　※最終巻に、カラオケ「もう一度ピーターパン」（ステレオ）の映像特典収録

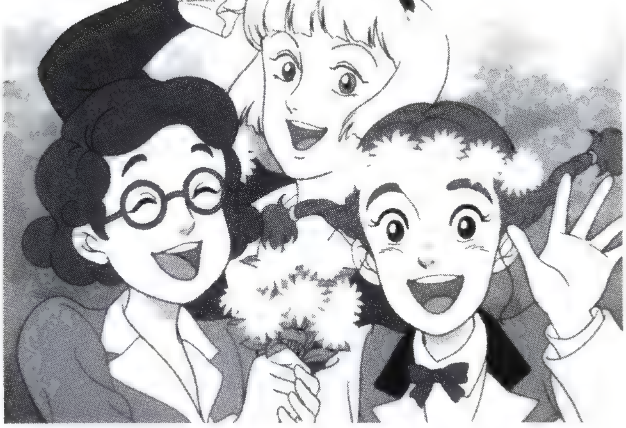
各話タイトルとスタッフリスト

1話　早く来て　みんなの憧れピーターパン	①雪室俊一・島田満　③川崎博嗣・大久保富彦
2話　ネバーランドへGO！GO　GO！	①雪室俊一・島田満　③川崎博嗣・大久保富彦
3話　海賊が出た！夢と冒険の国ネバーランド	①雪室俊一　②辻伸一　③川崎博嗣・大久保富彦
4話　登場！時計ワニはフック船長の友だち？	①雪室俊一　②吉田茂承　③大久保富彦
5話　フック船長はミシンの音が大嫌い！	①雪室俊一　②古川順康　③川崎博嗣・大久保富彦
6話　ジョンの初恋？おてんば娘現れる	①雪室俊一　②楠葉宏三　③遊佐和重
7話　ウェンディ頑張る！卵は誰にも渡さない	①雪室俊一　②楠葉宏三　③川崎博嗣・大久保富彦　石之博和
8話　作戦開始！時計ワニを笑わせろ！	①雪室俊一　②腰繁男　③川崎博嗣・大久保富彦
9話　ネバーランドの法律？毎日が誕生日だ！	①島田満　②楠葉宏二　③川崎博嗣・大久保富彦
10話　怪しげな行動　ジョンを尾行しろ	①雪室俊一　②辻伸一　③川崎博嗣・大久保富彦
11話　新兵器！水陸両用シンデレラの馬車？	①雪室俊一　②楠葉宏二　③遊佐和重
12話　海賊も逃げる？マイケルの怖い話	①島田満　②黒川文男　③沖浦啓之・川崎博嗣・大久保富彦
13話　救出作戦開始！ピーターパンを助けろ	①雪室俊一　②楠葉宏三　③川崎博嗣・大久保富彦
14話　スノルム山の悪魔とマイケルの勇気	①雪室俊一　②楠葉宏三　③遊佐和重
15話　フックを裏切れ！海賊をやめたチェッコ	①雪室俊一　②黒川文男　③川崎博嗣・大久保富彦
16話　ウェンディ怒る！ピーターパンて大嫌い	①島田満　②楠葉宏三　③川崎博嗣・大久保富彦
17話　ジョンが眠れない！眠りの精を捕まえろ	①雪室俊一　②辻伸一　③遊佐和重
18話　勇気を示せトートルズ！海賊の旗を奪え	①雪室俊一　②楠葉宏二　③川崎博嗣・大久保富彦
19話　フックの決意！消えた海賊船の謎？	①雪室俊一　②楠葉宏三　③川崎博嗣・大久保富彦
20話　絶体絶命！ウェンディが霧の谷に消えた	①島田満　②松見真一・斎藤次郎　③沖浦啓之
21話　ウェンディを救え！命をかけたティンク	①島田満　②楠葉宏三　③川崎博嗣・大久保富彦
22話　秘密兵器始動！フック船長最後の切札	①島田満　②辻伸一　③川崎博嗣・大久保富彦
23話　謎が深まる！ティンクの故郷を探せ	①雪室俊一　②楠葉宏三　③ふるたしょうじ
24話　恐ろしい黒マントの集団と謎の美少女！	①雪室俊一　②辻伸一　③川崎博嗣・大久保富彦
25話　お帰りティンク！妖精の国は不思議な国	①雪室俊一　②楠葉宏三　③石之博和
26話　復活フック船長！空飛ぶ海賊船建造計画	①島田満　②鈴木孝義　③川崎博嗣・大久保富彦
27話　ジョンの憧れ！木馬に乗った騎士	①雪室俊一　②横田和善　③ふるたしょうじ
28話　悪魔になったウェンディ	①雪室俊一　②楠葉宏三　③沖浦啓之
29話　妖精プシケ　勇気を出して飛び立て	①雪室俊一・島田満　②辻伸一　③大久保富彦
30話　浮上開始　フックの空飛ぶ海賊船	①雪室俊一　②矢沢則夫　③川崎博嗣
31話　夢がない！飛べなくなったピーターパン	①雪室俊一　②楠葉宏三　③賀川愛
32話　海賊と一緒に探せ、白い鏡の謎	①雪室俊一　②辻伸一　③大久保富彦
33話　ルナの涙　私はダークネスの魔女？	①雪室俊一　②古川順康　③川崎博嗣
34話　汽笛が聞こえる？幽霊機関車を探せ！	①雪室俊一　②楠葉宏三　③谷口守泰
35話　強敵！手を組んだフックとダークネス	①雪室俊一　②辻伸一　③賀川愛
36話　冒険中止！みんなの胸がドキドキ痛い！	①雪室俊一　②楠葉宏三　③川崎博嗣・大久保富彦
37話　史上最大の迷路！ダークネス城への道	①雪室俊一　②古川順康　③川崎博嗣・大久保富彦
38話　黒い鏡始動！ネバーランドが大ピンチ	①雪室俊一　②楠葉宏三　③賀川愛
39話　フックの野望！ダークネス城を乗っ取れ	①雪室俊一　②楠葉宏三　③谷口守泰
40話　最後の決戦！ピーターパン対フック船長	①雪室俊一　②辻伸一　③川崎博嗣・大久保富彦
41話　さようならピーターパン！夢と冒険の国	①雪室俊一　②黒田昌郎・なかむらたかし　③川崎博嗣・大久保富彦

①脚本　②絵コンテ　③作画監督　※各話演出のクレジット表記はなし

私のあしながおじさん

放映期間：1990年1月14日～12月23日



スタッフ 原作：ジーン・ウェブスター「あしながおじさん」より　製作：本橋浩一　製作管理：高桑充・中島順三　企画：清水賢治・大橋益之助・佐藤昭司　脚本：藤本信行・大塚汎　音楽：若草恵　キャラクターデザイン：関修一　作画監督：菊池晃・大城勝・ふるたしょうじ　美術設定・工藤剛一　美術監督・森元茂　プロデューサー：立川善久・松土隆二　監督：横田和善　制作：日本アニメーション・フジテレビ　■主題歌：OP「グローイング・アップ」ED「キミの風」　作詞：来生えつこ　作曲：来生たかお　編曲：信田かずお　歌：堀江美都子（OP／ED）、SHINES（ED）（日本コロムビア）

キャスト ジュディ：堀江美都子　サリー：佐藤智恵　ジュリア：天野由梨　ジャービス：田中秀幸　ジミー：島田敏　ボブ：塩屋翼　リペット：藤田淑子　スローン：鳳芳野　ハーマン：石森達幸　ハーディ：田口昂　ペンデルトン：村越伊知郎　ペンデルトン夫人：吉田理保子　ジョージ：緒方賢一　エリザ：京田尚子　アマサイ：小林通孝　キャリー：小林優子　グリグス：増岡弘

ストーリー

孤児院出身のジュディの学園青春ストーリー

アメリカのジョン・グリア孤児院で育った13歳のジュディは、名門のリンカーン記念女子学園へ進学できることになった。ジョン・スミス氏と名乗る匿名の後見人が、ジュディのユーモアのセンスと文才に興味を持ち、援助してくれるという。ジュディは、その人物を「あしながおじさん」と呼ぶことにした。

名門の子女に囲まれた、全寮制の学園での生活は、ジュディにとってカルチャーショックの連続だ。同室のジュリア、サリーは、ジュディのとっぴな行動にとまどう。明るく活発なジュディだが、自分が孤児だということだけは、周囲に言えずにいた。ジュディは、学園生活のさまざまな出来事とともに、自分の悩みもあしながおじさんに手紙で書きおくる。しかし、返事がくることはなかった。

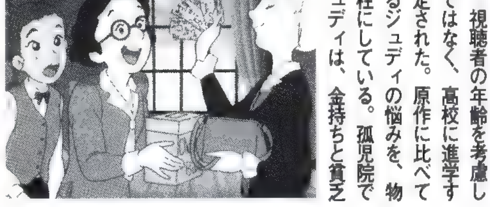
一方でジュディは、ジュリアの叔父、ジャービス・ペンデルトンと知りあった。ジャービスは、お金持ちなのに気取ったところのない人で、身内に変わり者と思われていた。ジュディは彼と親しくなり、3年の月日が経つうちに、互いに思いあう間柄になっていった。けれど、孤児であることを打ちあけられないジュディは、ジャービスの思いに応えることができない。住む世界が違うことを痛感したジュディは、ついに彼のプロポーズを冷たく拒絶してしまう。

卒業式の日、ジャービスが肺炎で危ないと知ったジュディは、自分の行動を深く悔いて、答辞の壇上で、自分が孤児院の出身であることを皆に打ち明けた。その勇気に、学友も出席者たちも、惜しみない拍手を送った。

あしながおじさんが倒れたと聞いて、ジュディは一目会いたいと、駆けつける。そこにいたのはジャービス。ジャービスこそ、あしながおじさんその人だったのだ。すべてを知ったジュディは、4年後に彼と結ばれる。

解説

主人公ジュディは、視聴者の年齢を考慮して、原作にある大学ではなく、高校に進学する14歳の女の子に設定された。原作に比べてアニメは、孤児であるジュディの悩みを、物語のひとつの大きな柱にしている。孤児院で金持ちを見てきたジュディは、金持ちと貧乏人、慈善や施しの問題には、心がひりひりと反応してしまうのだ。根っからのお嬢様であるジュリアが、ジュディとの日々の中で変わっていく描写も、対照的で興味深い。



ワンポイントコラム　変わり者のお金持ち ジャービス・ペンデルトン



▶ジャービスは、自分を理解してくれるジュディに惹かれる

変わり者と身内に言われるジャービスはジュディに好意を抱くが、自分が「あしながおじさん」だとは打ち明けられない。彼もジュディと同じく、心に秘密を抱えた人物なのだ。二人の恋模様に、視聴者はハラハラさせられた。

原作と原作者

原作は、ジュディがあしながおじさんにあてて書いた書簡集のかたちをとった小説だ。ユーモアのあるジュディの文体も、添えられたジュディの絵も楽しい。原作者のジーン・ウェブスター（本名アリス・ジェーン・チャンドラー・ウェブスター）は、1876年アメリカ・ニューヨーク州生まれ。父は出版社を経営し、母はマーク・トウェインの姪にあたる。ヴァッサー女子大学在学中から創作に没頭し、卒業後は作家として活動しつつ、社会事業活動を行ったが、1916年に40歳の若さで亡くなった。『続・あしながおじさん』は、孤児院の院長となって悪戦苦闘するジュディの親友サリー・マクブライドが主人公になっている。

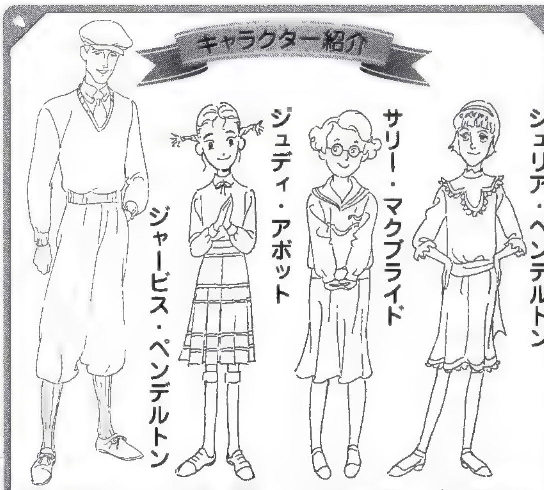
DVD



解説書には、1～5巻：横田和善（監督）、6～10巻：松土隆二（プロデューサー）の「スタッフインタビュー」が収録されている。作品やキャラクターたちへの思いが熱く伝わってくる。

発売元：バンダイビジュアル　全10巻
BCBA-1085～1094　各：カラー／94分（4話収録）日本語字幕（ON・OFF可）
¥3,800　※10巻のみ97分　全巻：O.P.、E.D、予告編を収録　※最終巻には、カラオケ「グローイング・アップ」（ステレオ）の映像特典を収録

キャラクター紹介



ジャービス・ペンデルトン　変わり者といわれるお金持ち。実は…

ジュディ・アボット　主人公。孤児院育ちなのを隠している

サリー・マクブライド　ジュディの友人。気のいい女の子

ジュリア・ペンデルトン　ジュディの友人。お金持ちのお嬢様



エリザ　ジョージの妻。あたたかい性格

ジョージ　ロックウィロー農場のオーナー

グリグス　後見人ジョン・スミス氏の秘書

ハーマン先生　国語教師。ジュディの才能をかう

ミス・スローン　学園の寮の管理人。独身

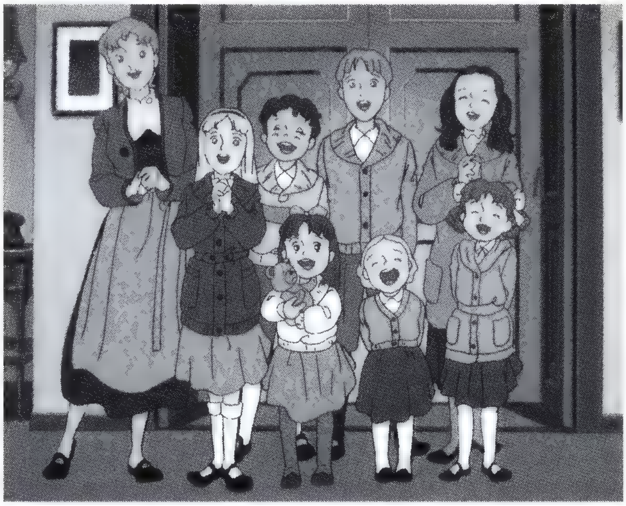
各話タイトルとスタッフリスト

1話　運命を変えた月曜日	①藤本信行　②③横田和善　④ふるたしょうじ
2話　ひとりぼっちの旅立ち	①藤本信行　②③鈴木孝義　④菊池晃
3話　憧れのリンカーン記念女子学園	①藤本信行　②③横田和善　④大城勝
4話　てんやわんやの入学式	①藤本信行　②③鈴木孝義　④ふるたしょうじ
5話　お部屋の素敵な飾り方	①藤本信行　②和田市郎　③横田和善・松見真一　④菊池晃
6話　嘘つきは嫌いですか？	①藤本信行　②関戸始　③横田和善　④大城勝
7話　金貨の上手な使いみち	①藤本信行　②③鈴木孝義　④入江篤
8話　屑籠に捨てられた手紙	①藤本信行　②③横田和善　④ふるたしょうじ
9話　ジュリアの叔父様は変り者？	①藤本信行　②和田機雄　③横田和善・松見真一　④菊池晃
10話　裏切ってごめんなさい	①藤本信行　②③鈴木孝義　④大城勝
11話　おもいがけない人の名	①藤本信行　②関戸始　③横田和善・斉藤次郎　④入江篤
12話　奇妙な偶然	①藤本信行　②和田機雄　③横田和善・松見真一　④ふるたしょうじ
13話　サリーの勇気ある挑戦	①藤本信行　②③鈴木孝義　④菊池晃
14話　初めての小説が盗作？	①藤本信行　②③横田和善　④大城勝
15話　ホットドッグと壁の花	①藤本信行　②関戸始　③横田和善・斉藤次郎　④入江篤
16話　クォーターバックからの贈り物	①藤本信行　②③鈴木孝義　④ふるたしょうじ
17話　打ちあけられない心	①藤本信行　②松見真一　③横田和善・松見真一　④菊池晃
18話　感謝祭への招待状	①藤本信行　②③横田和善　④大城勝
19話　友よ、ともに歌わん	①藤本信行　②関戸始　③横田和善・斉藤次郎　④入江篤
20話　年上の同級生	①藤本信行　②③鈴木孝義　④ふるたしょうじ
21話　美しさとかなしみと	①藤本信行　②関戸始　③横田和善・加賀剛　④菊池晃
22話　窓に降る雪	①藤本信行　②③横田和善　④大城勝
23話　それぞれのクリスマス	①藤本信行　②③鈴木孝義　④入江篤
24話　お気に召すまま	①大塚汎　②斉藤次郎　③横田和善・斉藤次郎　④ふるたしょうじ
25話　ふるさと・ニューヨーク	①大塚汎　②楠葉宏三　③横田和善・佐土原武之　④菊池晃
26話　明日に架ける橋	①藤本信行　②加賀剛　③横田和善・加賀剛　④大城勝
27話　家庭教師は楽じゃない	①藤本信行　②③横田和善　④入江篤
28話　無慈悲な命令	①藤本信行　②③鈴木孝義　④ふるたしょうじ
29話　思い出がいっぱい	①藤本信行　②斉藤次郎　③横田和善・斉藤次郎　④菊池晃
30話　夏の日の恋	①藤本信行　②楠葉宏三　③横田和善・中西信彰　④大城勝
31話　花ざかりの娘たち	①藤本信行　②横田和善・佐土原武之　③横田和善　④入江篤
32話　黄昏の駅にて	①藤本信行　②③鈴木孝義　④ふるたしょうじ
33話　すれちがう想い	①藤本信行　②楠葉宏三　③横田和善・斉藤次郎　④菊池晃
34話　この胸のときめきを	①藤本信行　②③横田和善　④大城勝
35話　孤独な青春	①藤本信行　②加賀剛　③横田和善・加賀剛　④入江篤
36話　今を生きるために	①藤本信行　②③鈴木孝義　④ふるたしょうじ
37話　聖夜のさようなら	①藤本信行　②③横田和善　④菊池晃
38話　悲しいプロポーズ	①藤本信行　②斉藤次郎　③横田和善・斉藤次郎　④大城勝
39話　過去からの卒業	①藤本信行　②③鈴木孝義　④ふるたしょうじ
40話　はじめましておじさま	①藤本信行　②③横田和善　④菊池晃

①脚本　②絵コンテ　③演出　④作画監督

トラップ一家物語

放映期間：1991年1月13日～12月22日



スタッフ 製作：本橋浩一　製作管理：高桑充・中島順三　企画：清水賢治・大橋益之助・佐藤昭司　企画協力：ヨハネス・フォン・トラップ、ハンス・ウィルヘルム　脚本：しろやあよ　音楽：風戸慎介　キャラクターデザイン：関修一　美術設定：伊藤主計　美術監督：森元茂　プロデューサー：和田実・立川善久・松土隆二　監督：楠葉宏三　制作：日本アニメーション・フジテレビ　■主題歌：OP「ドレミの歌（DO-RE-MI）」作詞：Oscar HammersteinⅡ　日本語詞：ペギー葉山　作曲：Richard Rodgers　編曲：風戸慎介　歌：伊東恵里、森の木児童合唱団（日本コロムビア）ED「両手を広げて」　作詞：いしいめぐみ　作曲・編曲：風戸慎介　歌：伊東恵里（日本コロムビア）

キャスト マリア：勝生真沙子　トラップ男爵：堀勝之祐　ルーペルト：安達忍　ヘートヴィッヒ：川村万梨阿　ヴェルナー：松岡洋子　小さいマリア：白鳥由里　ヨハンナ：石川寛美　マルティナ：鈴木砂織　アガーテ：渡辺菜生子　マチルダ夫人：藤田淑子　イヴォンヌ：山田栄子　ハンス：平野正人　フランツ：大山高男　ローズィ：遠藤晴　クラリーネ：色川京子　ミミー：荻森侚子　ヴァスナー神父：森功至

ストーリー

26人目の家庭教師と7人の子どもたち

明るくて活発な、ノンベルク修道院の見習い修道女マリアは、家庭教師としてトラップ男爵家に9カ月間派遣されることになった。男爵家には、2年前に母親をなくした7人の子どもたちがいた。しかし、これまでの体験から、子どもたちはすっかり家庭教師に不信感を持っていた。子どもたちは反発し、マリアを追いかえそうとする。しかしマリアが、裏表のないあたたかい心で子どもたちに接するうちに、子どもたちは一人、また一人と、マリアに心を開いていった。母親がいなくなってからバラバラになりかけていた家族は、再びひとつにまとまる。子どもたちと男爵に深く信頼されたマリアは、いつのまにか一家になくてはならない人になっていった。

新しいおかあさま？トラップ男爵の再婚

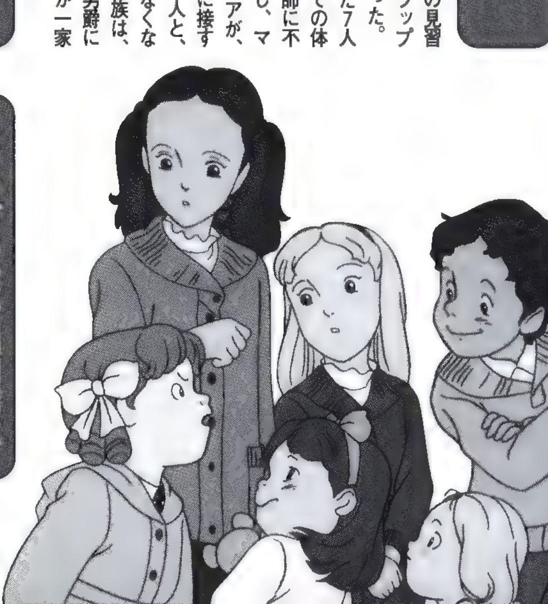
トラップ男爵は、家政婦長を務めるマチルダ男爵夫人から、強く再婚を勧められていた。相手のイヴォンヌ伯爵令嬢も、トラップ男爵の人柄に惹かれ、結婚を望んでいた。しかしイヴォンヌは、7人の子どもたちが自分になつくわけがないと思いこみ、子どもたちと向きあおうとしない。子どもたちもイヴォンヌになつかず、父の再婚に反対する。イヴォンヌは、マリアと一家の絆を認めざるを得ず、やがて男爵家を去っていった。

マリアが修道院に帰る日が近づいてきた。マリアがいなくなったら、また家の中が火の消えたようになってしまう……子どもたちの後押しを受けて、男爵はマリアにプロポーズした。思いがけない展開に、マリアは迷う。だがマリア自身も、今では一家を家族のように思っていた。すべては神のお導き……心を決めたマリアは、男爵と結婚した。

トラップ一家合唱団誕生 そしてナチス侵攻……！

男爵が全財産を預けていた銀行が破産し、一家は財産を失った。マリアの発案で、唯一残った自宅で下宿屋を開業することになる。一家は心を合わせてこの危機を乗りきった。下宿人のヴァスナー神父の指導で、子どもたちは歌が上達し、「トラップ一家合唱団」として、演奏会を開くまでになった。

1938年、ナチス・ドイツ軍が侵攻してきた。ナチスの支配下におかれて、オーストリア共和国という国は消滅する。男爵はナチスへの協力を拒むが、それは家族に危険がせまることを意味していた。だが正しくないと思うものには従えない！　誇りと信念は一度失ったら取りもどせない。信頼できるごく少数の人たちの手を借りて、一家とヴァスナー神父は祖国を出た。「トラップ一家合唱団」の演奏会での縁で、一家は自由の国アメリカへと向かうのだった。



キャラクター紹介

舞台や映画でお馴染みの
キャラクターを関修一が
見事にデザインした。

ゲオルク・フォン・トラップ
トラップ家の主で、7人の子どもたちの父親。オーストリア帝国海軍の潜水艦の艦長だった英雄的人物。その功績により男爵に

ヘートヴィッヒ
トラップ家の長女。13歳。気が強く、マリアやイヴォンヌによく反発する

ルーペルト
トラップ家の長男。14歳。真面目でしっかり者。運動は苦手だが、手先が器用だ

マリア・クッチャラ
ノンベルク修道院から家庭教師として派遣された見習い修道女。18歳。明るくまっすぐな性格で歌が好き。両親を亡くしている



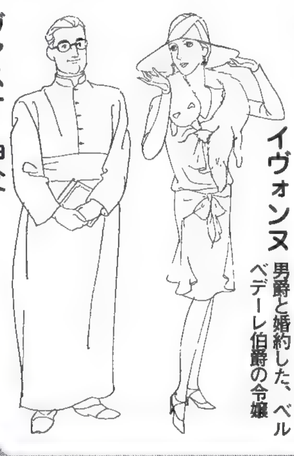
小さいマリア
トラップ家の次女。8歳。2年前に猩紅熱にかかって以来病弱。亡き母を慕う

ヨハンナ
トラップ家の三女。6歳。いつも一人で含み笑いをしている、陽気な女の子

アガーテ
トラップ家の五女。3歳。兄弟で一番のチビちゃんで、人なつっこい甘えん坊

マルティナ
トラップ家の四女。5歳。熊のぬいぐるみのニコラを手放さない、無口な夢想家

ヴェルナー
トラップ家の次男。10歳。元気なやんちゃ坊主で、いたずら好きな男の子



ヴァスナー神父
トラップ家の下宿人。子どもらに歌を教える

イヴォンヌ
男爵と婚約した、ベルベデーレ伯爵の令嬢



アガタ
2年前に猩紅熱で亡くなった、子どもたちの母親。実家はホワイトヘッド男爵家

トラップ家で働く人々



マチルダ夫人
家政婦長の男爵夫人。作法にはうるさい



ハンス
執事。終盤でナチス党員だったことが判明



フランツ
庭師。かつてトラップ艦長の部下だった



ローズィ
コック。子どもたちをかわいがっている



クラリーネ
メイド。マチルダ夫人の腰ぎんちゃく的な存在



ミミー
メイド。マリアや子どもたちと仲がいい

解説

名作劇場第18弾は、実話を元にした「トラップ一家物語」だ。大人には、映画「サウンド・オブ・ミュージック」の元になった話と言ったほうが、通りがいい。アニメは、実話とミュージカルの「いいとこどり」で構成した……とは、楠葉監督の話。有名な「ドレミの歌」をオープニング主題歌にしたのも、そのためだ。ただし諸般の事情により、発売中のDVDやビデオでは、「ほほえみの魔法」というオリジナルの歌に差し替わっている。

主人公マリアの18歳という年齢設定は、名作劇場では異色だ。子どもっぽい無邪気さや明快な正義感を持ったマリアは、一方では責任を持って仕事をまかされた大人でもあるため、メインの視聴者である子どもたちには、少し距離があった。けれどその分は、トラップ家の子どもたちが補った。大人と子ども、どちらの考え方も理解して行動するマリアは、これまでの作品にない幅を「トラップ一家物語」に持たせた、画期的な主人公なのだ。

実話でマリアがトラップ家に派遣されたのは、19か20歳のときだが、アニメでは都合上18歳に設定してある。また、トラップ一家がオーストリアを脱出したとき、実話のマリアは30歳を越えているが、これも時間を短縮して描いている。当初は、アルプスを越えたあと、演奏会をしながらヨーロッパを旅したことや、アメリカでの紆余曲折なども描かれる予定だったという。放映スケジュールの都合でカットされたのは、残念なことだった。

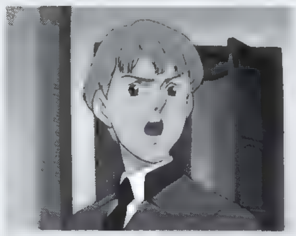
監督は、名作劇場ではもっとも多くの作品を担当した楠葉宏三監督。実写ドラマを多く手がけるしろやあよが脚本を担当し、自身の実体験なども盛りこんで、ユニークで細やかな家族それぞれのエピソードを、生き生きと描きだした。賛美歌や民謡など、劇中で一家が歌う合唱曲は、実際にマリアや子どもたちを演じた声優によって歌われている。

この場面がツボ!!

7人の子どもたち それぞれにドラマあり！

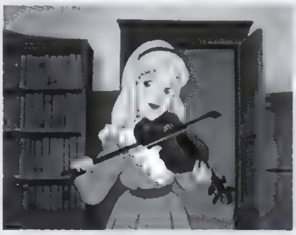
この作品ではマリアだけでなく、トラップ家の7人の子どもたちひとりひとりが主人公でもあった。それぞれの忘れられないエピソードをふりかえってみよう。

ルーペルト 第14話 オルゴールの秘密



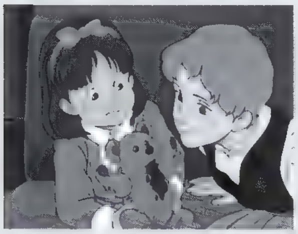
▲プレゼントの人形を壊したと疑われて……。ルーペルトの初恋と、彼の“誇りと意地”が描かれた

小さいマリア 第10話 ミシンとヴァイオリン



▲アガタの思い出を遠ざける男爵。でも小さいマリアは、思い出の品に触れることで逆に明るさを取り戻す

マルティナ 第15話 マルティナと熊のニコラ



▲無口でがんこなマルティナ。でも熊のニコラへの態度を通して、マリアを信頼し、心を開いていく

ヘートヴィッヒ 第22話 1人で生きてゆける？



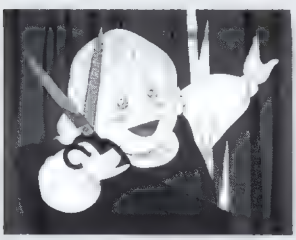
▲父のイヴォンヌとの婚約に反発したヘートヴィッヒは家出する。名作劇場初の、生理をめぐるエピソード

ヨハンナ 第30話 結婚してくれますね？



▲飲みこんだコインはいつ出るの？いつも元気なヨハンナが、マリアに嫌われたのでは、と不安になる話

アガーテ 第28話 いたずらアガーテ



▲アガーテは、自分を甘やかしてくれたイヴォンヌになつく。でもそれは、本当の心の交流ではなかった

ヴェルナー 第18話 生きとし生けるもの



▲「貴族の子弟らしくない」と言われてへこむヴェルナー。傷ついた子鹿を助けたことで、父親と語り合う

原作と原作者

アニメ『トラップ一家物語』には、原作がない。実話が元になった作品なのだ。

マリア・フォン・トラップ（1905～1987）は実在の人物で、自叙伝『トラップ・ファミリー・シンガーズ』を書いている。これが元になり、ドイツの映画『菩提樹』（1956年公開）、舞台ミュージカル『サウンド・オブ・ミュージック』（1959年初演）が生まれた。さらに舞台が映画化されて、「ドレミの歌」で有名な、ジュリー・アンドリュース主演の映画（1965年公開）が作られたのだ。

ドラマとしては、亡命が成功するまでの話が有名だが、アメリカに渡ってから合唱団として成功するまでの苦労話も、なかなかおもしろい。

企画協力としてクレジットされているハンス・ウィルヘルムは、絵本『トラップ一家物語（原題：The Trapp Family Book）』の作者だ。

神の思し召しのままに

主人公のマリアが見習い修道女とあって、神に祈るシーンは頻繁に出てくる。修道士や修道女は、自分の身をキリスト教の神に預け、自分自身の幸せや利益は一切追求せず、ひたすら世のため神のために働く、禁欲的な生き方を選んだ人たちだ。家族のいないマリアは、いわば神の家に「家族」を求め、修道女になろうとしたのだ。結婚という「人としての幸せ」など論外！　けれど結局、修道院の許しと祝福を受けて、新しい人生へこぎだしていく。夫と子どもたちという新しい「家族」を、マリアは得たのだ。



秘められた艦長の逸話

「オーストリアの英雄」として、地元では有名人のトラップ男爵。第一次世界大戦の折に、オーストリア帝国海軍の潜水艦の艦長として功績を立て、その武勲でマリア・テレジア勲章を受けて、男爵の爵位を得た人物だ。大戦に負けて領土を縮小したオーストリアは、海のない小さな共和国となり、男爵も片田舎で実業家としての人生を送ることになる。しかし、かつての軍人として、オーストリアへの愛国心は人一倍強いのだ。



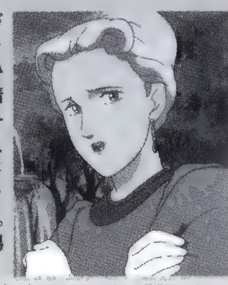
DVD



解説書には、1～6巻：楠葉宏三（監督）、7～10巻：しろやあよ（脚本）の「スタッフインタビュー」が収録されている。物語の随所にこめられた作り手の思いや裏話は、読みごたえがある。

発売元：バンダイビジュアル　全10巻
BCBA-1105～1114　各：カラー／94分（4話収録）日本語字幕（ON・OFF可）
¥3,800　※10巻のみ97分　全巻：OP、ED、予告編を収録　※最終巻には、カラオケ「両手を広げて」（ステレオ）の映像特典を収録

ワンポイントコラム　イヴォンヌ姫の憂鬱



トラップ男爵との結婚を望みながら、果たせなかった伯爵令嬢、イヴォンヌ姫。自分も父の再婚を体験している彼女は、ある意味子どもたちの心情をよく理解していたため、かえって一家になじめなかった。高貴な雰囲気や、自分の気持ちのままに行動する正直さが魅力で、監督の話によると、スタッフの中にもファンが多かったらしい。彼女をふって若いマリアと結婚した男爵には、非難ごうごうだったとか。

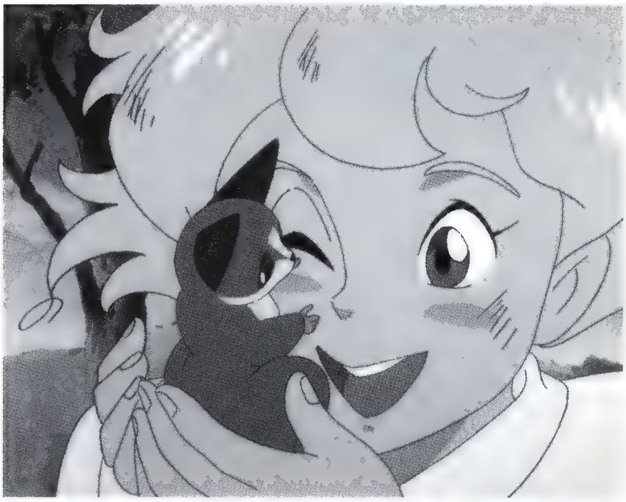
各話タイトルとスタッフリスト

1話	私、修道女志願です	①しろやあよ　②③楠葉宏三　④入江篤
2話	シスターとしての未来	①しろやあよ　②楠葉宏三・中西伸彰　③楠葉宏三　④加藤裕美
3話	艦長と7人の子供たち	①しろやあよ　②③楠葉宏三　④大城勝
4話	26人目の家庭教師	①しろやあよ　②関戸始　③楠葉宏三　④入江篤
5話	マリアは騒ぎの張本人	①しろやあよ　②③斎藤次郎　④加藤裕美
6話	迷子とはらぺこ騒動	①しろやあよ　②③楠葉宏三　④大城勝
7話	大人は信じられない	①しろやあよ　②加賀剛　③楠葉宏三・加賀剛　④加藤裕美
8話	礼儀作法が大事です!?	①しろやあよ　②③楠葉宏三・中西伸彰　④大城勝
9話	トラップ男爵の婚約者？	①しろやあよ　②③斎藤次郎　④加藤裕美
10話	ミシンとヴァイオリン	①しろやあよ　②加賀剛　③楠葉宏三・加賀剛　④大城勝
11話	どろんこ遊びは最高	①しろやあよ　②③楠葉宏三・佐土原武之・中西伸彰　④加藤裕美
12話	マリア風チョコレートケーキ	①しろやあよ　②③楠葉宏三　④田中穰
13話	ドン・キホーテの初恋	①しろやあよ　②楠葉宏三・斎藤次郎　③斎藤次郎　④大城勝
14話	オルゴールの秘密	①しろやあよ　②加賀剛　③楠葉宏三・加賀剛　④加藤裕美
15話	マルティナと熊のニコラ	①しろやあよ　②③楠葉宏三　④遠井和也・細井信宏
16話	マリア先生がいない家	①しろやあよ　②楠葉宏三・佐土原武之・中西伸彰　④大城勝
17話	傷ついた子鹿	①しろやあよ　②楠葉宏三・斎藤次郎　③斎藤次郎　④田中穰
18話	生きとし生けるもの	①しろやあよ　②③楠葉宏三　④加藤裕美
19話	イヴォンヌ姫のお土産	①しろやあよ　②加賀剛　③楠葉宏三・加賀剛　④伊武菜鳥・細井信宏
20話	それぞれの人生	①しろやあよ　②③楠葉宏三　④大城勝
21話	トラップ男爵の決断	①しろやあよ　②則座誠・斎藤次郎・楠葉宏三　③斎藤次郎　④田中穰
22話	1人で生きてゆける？	①しろやあよ　②加賀剛　③楠葉宏三・加賀剛　④加藤裕美
23話	天使への願い事	①しろやあよ　②③楠葉宏三　④伊武菜鳥・細井信宏
24話	クリスマス・キャロル	①しろやあよ　②楠葉宏三・佐土原武之・中西伸彰　④大城勝
25話	白銀のアルプスにて	①しろやあよ　②楠葉宏三・則座誠　③則座誠　④田中穰
26話	オレンジと花の苗	①しろやあよ　②③楠葉宏三　④加藤裕美
27話	昨日・今日・明日	①しろやあよ　②③斎藤次郎　④細井信宏
28話	いたずらアガーテ	①しろやあよ　②加賀剛　③楠葉宏三・加賀剛　④大城勝
29話	妻になる人、母になる人	①しろやあよ　②③楠葉宏三　④加藤裕美
30話	結婚してくれますね!?	①しろやあよ　②斎藤次郎・則座誠・楠葉宏三　③斎藤次郎　④田中穰
31話	神様の思し召し	①しろやあよ　②③楠葉宏三　④細井信宏
32話	七月の花嫁	①しろやあよ　②中西伸彰　③楠葉宏三・中西伸彰　④大城勝
33話	本当の家族	①しろやあよ　②③楠葉宏三　④加藤裕美
34話	ファミリー合唱団誕生	①しろやあよ　②加賀剛　③楠葉宏三・加賀剛　④細井信宏
35話	歌声は風にのって	①しろやあよ　②則座誠・楠葉宏三　③則座誠　④田中穰
36話	ナチス侵攻	①しろやあよ　②③斎藤次郎　④大城勝
37話	あたらしいご挨拶	①しろやあよ　②加賀剛　③楠葉宏三・加賀剛　④伊藤広治
38話	ハンスの秘密	①しろやあよ　②③楠葉宏三　④細井信宏
39話	誇りと信念	①しろやあよ　②楠葉宏三　③楠葉宏三・則座誠　④田中穰
40話	さようならわが祖国	①しろやあよ　②③楠葉宏三　④大城勝

①脚本　②絵コンテ　③演出　④作画監督

大草原の小さな天使
ブッシュベイビー

放映期間：1992年1月12日〜12月20日

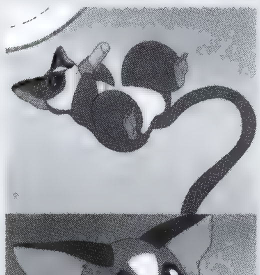


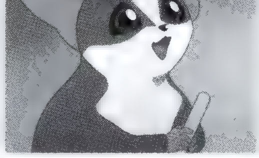
スタッフ 原作：ウィリアム・スチーブンソン　製作：本橋浩一　製作管理：高桑充・中島順三　企画：清水賢治・大橋益之助・佐藤昭司　脚本：宮崎晃　音楽：宮川彬良　キャラクターデザイン：関修一・加藤裕美　美術設定：伊藤主計　美術監督：森元茂　音響監督：藤野貞義　撮影監督：森田敏昭　プロデューサー：鈴木吉弘・松土隆二　監督：鈴木孝義　制作：日本アニメーション・フジテレビ　■主題歌：OP1「APOLLO」　作詞・作曲：谷村新司　編曲：佐孝康夫　歌：沢靖英　OP2「微笑みでプロローグ」　作詞：及川眠子　作曲：岸正之　編曲：信田かずお　歌：山野さと子　ED「鳥になる」　作詞・作曲：谷村新司　編曲：佐孝康夫　歌：岡本麻弥（日本コロムビア）

キャスト ジャッキー：岡本麻弥　マーフィ：白鳥由里　アーサー：土師孝也　ペニー：滝沢久美子　アンドルー：金丸淳一　テンボ：小杉十郎太　ミッキー：松岡洋子　ケイト：松下美由紀　クランクショウ博士：緒方賢一　ヘンリー：島田敏　ハンナ：佐々木優子　ハワ：松井摩味　ダン：佐藤正治　ボブ少佐：銀河万丈　アトマニ：大塚芳忠　サフィナ：萩森侚子

この場面がツボ!!

第12話　ハッカアメと密猟者





ブッシュベイビーは雑食である。実際、ハッカアメを食べて酔っぱらうかどうかは分からないが、小さな両手で食べ物をつかんで食べる仕草はとても愛らしい。

そんなブッシュベイビーという日本ではなじみのない生き物について、知ることができたのも、この作品の魅力のひとつである。ちなみにブッシュベイビーは、霊長目、ロリス科、ガラゴ属。正式には「ショウガラゴ」という。

ストーリー

アフリカのケニヤで暮らす、野生動物保護官アーサーの娘ジャッキーは、明るく元気な13歳の女の子。ある日、アーサーが、母親を失くしたブッシュベイビーの赤ちゃんを連れて帰ってくる。ジャッキーはそのブッシュベイビーの赤ちゃんをマーフィと名づけ、苦心の末育てる。

そんなある日、ジャッキー一家のイギリス帰国が決まった。ところが、乗船する段になって、マーフィの輸出許可書をなくしたことに気づく。「マーフィを連れていけない！」と船を降りたジャッキーは、港で密猟の証拠をつかみ、密猟者に追われる父の助手テンボと再会する。一方、ジャッキーがいないことに気づいたアーサーは、警察からの電報で、ジャッキーが誘拐されたと誤解してしまう。そのころ、ジャッキーはクラスメイトのミッキーと偶然再会する。3人はマーフィを野生に帰すため、道なきサバンナをいく苛酷な旅に出る。

密猟者に追われ、野生動物に襲われながらもテンボの活躍で、なんとか危機を乗り越えるジャッキーたち。そんな中、マーフィを野生に帰す訓練も行われた。しかし崖から落ちてケガをしたミッキーは、ジャッキーを探していたクランクショウ博士の飛行機で、病院へ運ばれることになる。

旅を続けるジャッキーとテンボは、大雨により決壊した線路を発見する。対岸には、ジャッキーを追いかけてきたアーサーと兄アンドルーがいた。そこで決壊を知らせる発炎筒を対岸のアーサーたちへ手渡すのに、マーフィが一役買った。無事列車を止め、事故を防ぐことができた。

密猟者を捕まえ、アーサーたちと無事再会したジャッキーは、マーフィを野生に帰してやることを告げる。そしてついに、ジャッキーとマーフィの別れのときがやってきた……。

解説

名作シリーズ初のアフリカを舞台にした作品で、じつは1981年〜1982年ごろには、すでに企画書が作られていたという。つまり日本アニメーションにとっては、10年越しでアニメ化が実現した作品なのだ。

また前年までは、いわば19世紀から20世紀初頭を舞台にした物語を中心に描いていたのに対し『ブッシュベイビー』には、ジェット機や扇風機、冷蔵庫が登場するなど、極めて現代に近い感覚で描かれている物語だった。そのため、これまでの名作シリーズを愛好するファンには、若干違和感のある作品ではあった。

しかし、ブッシュベイビーを野生に帰すというラストシーンは感動的だった。原作ではイギリスに連れて帰ってしまうが、宮崎晃脚本のアニメでは、その逆を選んだのだ。密猟などのアフリカならではの社会問題が盛り込まれていた作品だけに、ふさわしいラストだったと言える。

原作と原作者

原作者のイギリス出身の作家ウィリアム・スティーブンソンは、1925年ロンドン生まれ。のちにカナダに移住しカナダ人となる。
第二次世界大戦中、軍の諜報機関にいたスティーブンソンは、その経験を活かして、戦後はジャーナリストとして活躍する。ノンフィクションを数多く著していたが、フィクションとして1965年に発表したのが、アニメの原作『The Bushbabies』だ。
この作品は、作家として独立する直前に出版されたものであり、いわばスティーブンソンの処女作とも言うべき作品である。なおフィクションと言っても、スティーブンソンが家族とケニアで暮らしていた経験を元に書かれている。実際、娘のジャクリーヌ（ジャッキーのモデル）は、「カマウ」という名のブッシュベイビーを飼っていた。

キャラクター紹介



ジャクリーヌ・ローズ（通称・ジャッキー）
ケニアに住んでいるイギリス人の少女。明るく前向きな性格で、好奇心も旺盛。少々お転婆すぎるところも。

マーフィ
ブッシュベイビー。親に死なれて孤児になったところをアンドルーに拾われジャッキーに育てられる。

アーサー
ジャッキーの父親。ケニアで野生動物保護官を務める。



ペニー
ジャッキーの母親。優しく子どもたちを見守る。

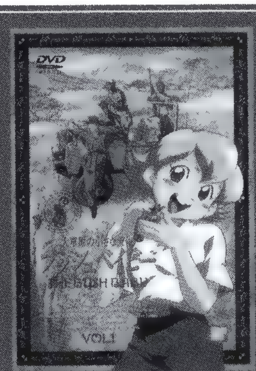
アンドルー
ジャッキーの兄。少し気弱なところもあるが優しい性格。

テンボ
アーサーの助手として働く黒人青年。自然や動物に詳しい。

ミッキー
ジャッキーの同級生。何かと騒ぎを起こすことが多い。

ケイト
ジャッキーの同級生で、いつも行動を共にする大親友。

DVD



解説書には、1～5巻：鈴木孝義（監督）、6～9巻：加藤裕美（キャラクターデザイン）の「スタッフインタビュー」、10巻：「ジャッキーたちの旅路」が掲載されている。ジャケットは加藤裕美描き下ろし。

発売元：バンダイビジュアル　全10巻
BCBA-1095～1104　各：カラー／94分（4話収録）日本語字幕（ON・OFF可）¥3,800　※最終巻のみ99分　全巻：OP・ED、予告編を収録　※最終巻はカラオケ「APOLLO」（ステレオ）の映像特典を収録している

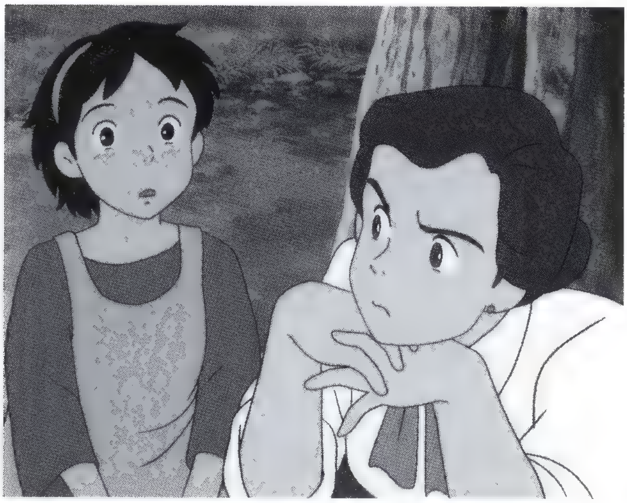
各話タイトルとスタッフリスト

1話	草原で拾った赤ちゃん	①宮崎晃　②③鈴木孝義　④加藤裕美	21話	さようならケイト	①宮崎晃　②鈴木孝義　③加賀剛　④加藤裕美
2話	死なないでマーフィ	①宮崎晃　②③中西伸彰・鈴木孝義　④伊藤広治	22話	無くなった許可証	①宮崎晃　②楠葉宏三・中西伸彰　③中西伸彰　④伊藤広治
3話	しかけやローズ	①宮崎晃　②則座誠　③鈴木孝義　④田中穣	23話	波止場の大事件	①宮崎晃　②斉藤博　③加賀剛　④鷲田敏弥
4話	哺乳ビンをさがせ	①宮崎晃　②③加賀剛　④細井信宏	24話	アフリカひとりぼっち	①宮崎晃　②③則座誠　④田中穣
5話	傷ついた象	①宮崎晃　②③鈴木孝義　④加藤裕美	25話	テンボに逮捕状!?	①宮崎晃　②③鈴木孝義　④細井信宏
6話	マーフィの病気	①宮崎晃　②楠葉宏三　③加賀剛・鈴木孝義　④伊藤広治	26話	マーフィの災難	①宮崎晃　②斉藤博　③中西伸彰　④加藤裕美
7話	女性獣医ハンナ	①宮崎晃　②③則座誠　④田中穣	27話	追う人、追われる人	①宮崎晃　②③加賀剛　④鷲田敏弥
8話	博士の飛行機	①宮崎晃　②③加賀剛　④細井信宏	28話	密林の象たち	①宮崎晃　②③則座誠　④田中穣
9話	真夜中のお散歩	①宮崎晃　②③鈴木孝義　④加藤裕美	29話	野生を取りもどせ!!	①宮崎晃　②③鈴木孝義　④細井信宏
10話	修理屋ダン・ムーア	①宮崎晃　②楠葉宏三　③加賀剛　④伊藤広治	30話	サバンナのおきて	①宮崎晃　②斉藤博　③中西伸彰　④加藤裕美
11話	探偵団結成！	①宮崎晃　②③則座誠　④田中穣	31話	毒矢とハーモニカ	①宮崎晃　②③加賀剛　④鷲田敏弥
12話	ハッカアメと密猟者	①宮崎晃　②③中西伸彰　④細井信宏	32話	やさしい戦士・テンボ	①宮崎晃　②③則座誠　④田中穣
13話	探偵団プラス1	①宮崎晃　②③鈴木孝義　④加藤裕美	33話	炎に向かって走れ！	①宮崎晃　②斉藤博　③中西伸彰　④伊藤広治
14話	ヒヒの襲撃	①宮崎晃　②③加賀剛　④伊藤広治	34話	マサイ族の小屋	①宮崎晃　②③鈴木孝義　④細井信宏
15話	ふしぎな木バオバブ	①宮崎晃　②楠葉宏三・則座誠　③則座誠　④田中穣	35話	ジャッキー倒れる!!	①宮崎晃　②③加賀剛　④加藤裕美
16話	秘密のほらあな	①宮崎晃　②楠葉宏三・中西伸彰　③中西伸彰　④細井信宏	36話	豹と二人の戦士	①宮崎晃　②③則座誠　④田中穣
17話	密猟団現わる	①宮崎晃　②③鈴木孝義　④加藤裕美	37話	雨の日の思い出	①宮崎晃　②斉藤博　③中西伸彰　④鷲田敏弥
18話	チョッキ騒動	①宮崎晃　②③加賀剛　④伊藤広治	38話	列車が流される!?	①宮崎晃　②③加賀剛　④伊藤広治
19話	運命のはじまり	①宮崎晃　②楠葉宏三　③則座誠　④田中穣	39話	駈けぬけろマーフィ	①宮崎晃　②③中西伸彰　④細井信宏
20話	霧のキリマンジャロ	①宮崎晃　②斉藤博　③中西伸彰　④細井信宏	40話	マーフィのさようなら	①宮崎晃　②③鈴木孝義　④加藤裕美

①脚本　②演出　③絵コンテ　④作画監督

若草物語ナンとジョー先生

放映期間：1993年1月17日～12月19日



スタッフ 原作：ルイザ・メイ・オルコット　製作：本橋浩一　企画：清水賢治（フジテレビ）・大橋益之助（電通）・佐藤昭司　脚本：島田満　音楽：デービッド・シービルズ　キャラクターデザイン：佐藤好春　美術設定：伊藤主計　美術監督：川口正明　音響監督：藤野貞義　撮影監督：森田俊昭　プロデューサー：鈴木吉弘（フジテレビ）・中島順三　監督：楠葉宏三　制作：日本アニメーション・フジテレビ　■主題歌：OP「明日もお天気」ED「青空のDing-Dong」　作詞：小坂明子（OP）・伊藤薫（ED）　作曲：小坂明子（OP）・伊藤薫（ED）　編曲：信田かずお　歌：小坂明子（OP）・伊藤薫＆森の木児童合唱団（ED）

キャスト ナン：松倉羽鶴　ジョー：山田栄子　ベア先生：秋元羊介　ダン：林 延年　ナット：池上麻里子　トミー：高山みなみ　デミ：山田恭子　デーズィ：荒木香恵　フランツ：森川智之　エミル：結城比呂　スタッフィ：佐藤智恵　ネッド：愛河里花子　ジャック：柏倉つとむ　ロブ：渕崎ゆり子　テディ：南杏子　エーシア：羽鳥靖子　メアリー・アン：藤井佳代子　サイラス：槐柳二　メグ：潘恵子　ローリー：飛田展男　ページ：石森達幸

ストーリー

おてんばナンがプラムフィールドにやってきた！

「大人になると誰もが忘れてしまう。自分がかつては子どもだったことを…」――一人の女性が、プラムフィールドへ向かっていた。10年前のことを思い出しながら…。

ボストン近郊のコンコード駅。そこに降り立ったナンは、迎えを待たずに歩きだした。向かう先はプラムフィールド。ベア夫妻が理想の教育を目指して設立した寄宿制の学校だ。ところが、ナンを待ち受けていたのはトミーたちの手荒な歓迎。怒ったナンは反撃に転じて大暴れ。駆けつけたジョーは、そのすさまじさに、思わず大笑いするのだった。

騒ぎを起こした罰としてジョーがナンに与えたのは、一日先生として授業を行なうことだった。悩んだ末、ナンが選んだテーマは『私の偉大な11年間について』。大切なのは自分を知ってもらうこと。その講義を見ながら、ジョーはナンを導いていく決意を固める。

無法者ダンが巻き起こすプラムフィールドの嵐…

雨の日の夕方、ナットという少年が訪ねてきた。街でバイオリン弾きをしていたが、父親の死で天涯孤独になり、ローリーからプラムフィールドを紹介されたのだ。みんなに温かく迎えてもらったナットは、感謝の気持ちをこめてバイオリンを奏でるのだった。

ある日、ローリーに連れられ街へ出かけたナンとナットは、ダンという不良少年と出会う。ダンはナットが街にいた頃の知り合いだった。ダンをプラムフィールドへ誘うナット。そのときは相手にもしていなかったが、後日、ダンはプラムフィールドへやってきた。ジョーはひとまず彼を受け入れるが、ダンの反抗的な態度は変わらなかった。トラブルの絶えないダンに、ジョーはいつか心を開いてくれるときまで、白い花を飾ることを約束する。

ダンがプラムフィールドの生活に慣れたかと思われた矢先、トミーとデミの部屋で火災が発生する。原因はダンがトミーとナットを誘った深夜パーティーでの葉巻だった。なんとか火は収まるが、子どもたちの精神的ショックは大きかった。ベア先生はダンを友人のページさんに預けることにする。ページさんの家で働きながら、ダンは自分を見つめ直していた。やがてダンに動植物への好奇心が芽生えていることを感じたページさんは、生物学の本を貸す。それを夢中で読むダンは、自分の中に新たな可能性を見いだすのだった。

そんな時、ダンが行方不明になったという連絡が入る。ジョーは不安に駆られるが、今は待つしかなかった。一週間後、庭で倒れたダンを見つける。「ただいま…お母さん…」呟くダンの手には、白い花が握られていた。

ダンが帰ってきたことで、プラムフィールドは賑わっていた。ローリーは博物学への知識を深めたダンに感心し、プラムフィールドに博物館を作ることを提案する。

ジョン・ブルックの死 それぞれの巣立ちのとき

冬のある日、ナンとナットとダンは、ブルック家で開かれるデミとデーズィの誕生日パーティーに招待された。デミたちの父親ジョンのやさしい人柄に触れたナンは家庭の温もりを実感する。その直後、ジョンが心臓発作で亡くなった。悲しみに包まれるプラムフィールド。医者を夢見ていたナンは絶望感に襲われるが、ジョーの励ましで立ち直る。

春。トミーはボストンの学校へ転校するため、ダンはページさんとブラジルへ行くために、プラムフィールドを去ることになった。ジョーは最後の授業で、やがて巣立っていくであろう全員に別れについて語るのだった。

……10年後。大人になったナンは懐かしそうに、ジョーのもとへ駆け寄っていった…。

キャラクター紹介

キャラクターデザインは佐藤好春。『愛少女ポリアンナ物語』以来、久しぶりに名作シリーズのキャラクターを手がけた。



ジョー
（ジョセフィン・マーチ・ベア）
夫と共にプラムフィールドを設立。ナンに自分の少女時代の面影を見いだす

ナン
（アニー・ハーディング）
明るく活発な11歳の少女。野球が大好きで「おてんばナン」のあだ名を持つ

ダン・キーン
15歳の不良少年。博物学に目覚めていく

ナット・ブレイク
街で父親とバイオリン弾きをしていた12歳の少年

トミー・バングズ
いたずらっ子の12歳。ナンをからかう

フリッツ・ベア
ジョーの夫。自らの理想の教育を実現するため、プラムフィールドを設立

デミ・ブルック
ジョーの姉メグの息子。10歳。まじめな優等生で読書が好き

デーズィ・ブルック
デミの双子の妹。料理や裁縫が得意。ナットのことが好き

フランツ・ホフマン
最年長の16歳。子どもたちの監督的存在

テディ　ロブ
ジョーとフリッツの息子たち。ロブは5歳、テディは3歳

スタッフィ
（ジョージ・コール）
12歳。食いしん坊でお菓子が大好き

ネッド・パーカー
11歳。手先が器用で家具作りが得意

ジャック・フォード
12歳。しっかり者だがある事件を起こす

エミル・ホフマン
フランツの弟で14歳。海の男に憧れている

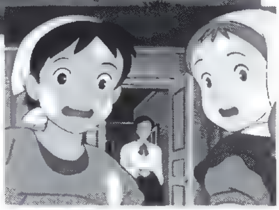
解説

『ナンとジョー先生』は、ルイザ・メイ・オルコットによる「若草物語四部作」の3作目『第三若草物語』を原作にしている。『愛の若草物語』の原作は1作目にあたるが、必ずしも続編というわけではない。ジョーやメグ、ローリーなど、共通のキャラクターも何人か登場している。しかし、その内容はあくまでも独立したものとして描かれた。

『ナンとジョー先生』について語られるなかで、よく言われていたのが「久しぶりの名作らしい名作」という言葉だ。美しく穏やかな風景、生活感あふれるエピソードは、確かにどこか懐かしさを感じさせる。それは、佐藤好春が手がけたキャラクターによる効果も大きい。一時スタジオジブリにいた佐藤好春は、この作品から久しぶりに名作シリーズに復帰。あたたかみのある絵柄は、見ていて安心できる雰囲気をかもしだしていた。

また、名作シリーズでは初めて、海外の作曲家を音楽に起用したことも話題になった。物語の舞台の空気を、より身近に感じられる人に…という理由からだった。





▲教師も生徒もひとつの家族のようなプラムフィールド

この場面&セリフがツボ!!

子どもたちを導くプラムフィールド



「この箱にワガママを閉じこめなさい」（4話）

◀少女時代にジョーがワガママを閉じこめていた小箱。ジョーは自分勝手な行動をしてしまうナンに、それを渡す。



「あなたはとても強いそうね。でも、私の心はもっと強いのよ」（12話）

▶問題児ダンを相手に、ジョーは手をやくどころかワクワクしていた。ジョーらしい言葉。



「私をぶちなさい！」（21話）

◀嘘をつくクセがあるナットとベアの約束は「今度嘘をついたら先生を叩く」というもの。自分が叩かれるより辛い罰にナットは泣く。







「ありがとう…あなたたちに出会えて本当によかった。さぁ、飛び立ちなさい。私の小鳥たち…」（40話）

◀ダンがプラムフィールドを去る日、ジョーは同じように去っていくであろう子どもたちに語りかける。深い愛情に満ちた言葉。

アンとナンとジョー

ヒロインのナンを演じた松倉羽鶴は、舞台出身の役者。当時はまだ新人で、声優としての仕事も『ナンとジョー先生』が初めてだった。一方、ジョーを演じた山田栄子も『赤毛のアン』で、いきなり主役デビューした経験の持ち主。かつての自分が重なって見えたのか、アフレコスタジオでは、つねに後輩をあたたかく見守る先輩…という感じだったらしい。まさに、ジョーとナンそのままである。

オープニングのダンの謎

11話からレギュラーで登場したダン。それでも、オープニングには番組開始当初から出演していた。みんなと一緒に農作業し、輪の中にすっかりとけこんでいるダン。…が、いずれも後ろ姿ばかり。実はダンのキャラクターデザインは、決定するまでに時間がかかり、オープニング制作時には間に合っていなかったのだった。確かによく見ると、髪形はどんなスタイルにも見える微妙な感じ…。プラムフィールドの一員になってからは、無事にラストの集合シーンに加わることができた。

「いい人」ジョンの死

ジョン・ブルックが亡くなるエピソードには、作者のルイザがモデルになったジョン・プラット（姉アンナの夫）の死を悼む気持ちがこめられている。ベア先生が語った「彼はいい人だった」のセリフ。この一言のために、ルイザは『第三若草』を書いたともいえる。



▶幸福なブルック家、しかし…。『愛の若草』のファンには切ないエピソード。

原作と原作者

原作者ルイザ・メイ・オルコットは1832年、アメリカ東北部ペンシルバニア州に四姉妹の次女として生まれた。22歳で作家の道を歩みはじめたルイザは、1866年から執筆した『若草物語』が大評判となる。この作品は『続・若草物語』『第三若草物語』『第四若草物語』と続き、「若草物語四部作」として永遠の名作になった。

『ナンとジョー先生』の原作である『第三』は、姉アンナと子どもたちの生活のために書いた作品だった。物語で描かれるプラムフィールドの教育理念は、教育者だった父エイモスの教育法をモデルにしている。子どもたちの個性を重視したその教育法は、当時のアメリカではあまり理解されず、エイモスは不遇の時代を過ごした。ルイザはプラムフィールドに、理想の学校の姿を託していたのかもしれない。生涯独身を通したルイザは、1888年に亡くなるまで、作家活動によって家族を支え続けた。

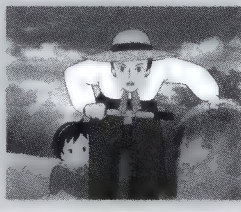
原作とアニメで異なるのはキャラクターの描かれ方だろう。原作では特に主人公は設定されず、それぞれのエピソードが全編にちりばめられている。そのため、ナンの出番もごくわずかだ。『第四』では、ダンやナンのその後を読むことができる。

ワンポイントコラム ジョーをとりまく19世紀の世の中

行動派の女性であるジョーにとって、19世紀は何かとやっかいだ。女性の参政権は認められず、自転車に乗ると言えば笑われてしまう。貧しさや人種が原因で、教育が平等に与えられないこともあった。

電話器や蓄音機の発明など、文明の進歩は著しかったが、社会の仕組みはまだまだ20世紀のようにはいかない。

「生きることは前を向くこと」——ナンにそう語るジョーの目には、遥か前方に良き未来が見えていたのかもしれない。



DVD



解説書には、1~7巻:楠葉宏三（監督）と島田満（脚本）の「スタッフ座談会」、8~10巻:藤野貞義（音響監督）の「スタッフインタビュー」を掲載。名作シリーズに対するスタッフの思い入れを感じる内容だ。

発売元:バンダイビジュアル　全10巻　BCBA-1241~1250　各カラー／94分（4話収録）／日本語字幕（ON・OFF可）／¥3,800円　※10巻は97分（4話収録）　全巻OP、ED、予告編を収録　※最終巻に、カラオケ「明日もお天気」（ステレオ）の映像特典収録

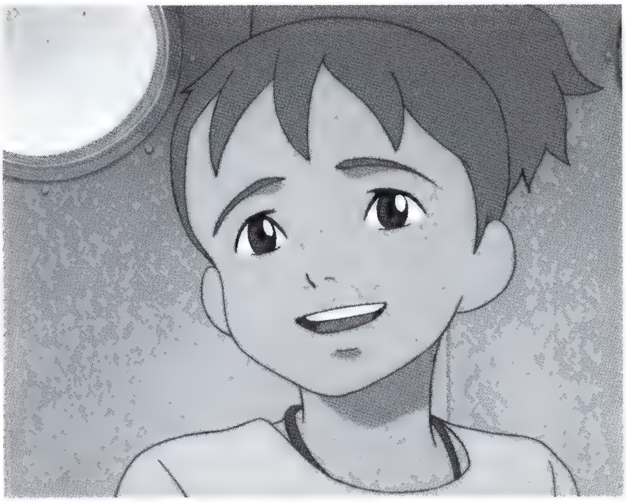
各話タイトルとスタッフリスト

1話	プラムフィールドへようこそ	①島田満　②③楠葉宏三　④佐藤好春
2話	川と野原はステキな教室!!	①島田満　②③楠葉宏三　④佐藤好春
3話	イチゴつみと黒い森	①島田満　②③則座誠　④田中穣
4話	約束の小箱	①島田満　②③楠葉宏三　④佐藤好春
5話	小さなバイオリン弾き	①島田満　②加賀剛　③片渕須直　④高野登
6話	トミーバングズ商会	①島田満　②③楠葉宏三　④鷲田敏弥
7話	僕はロビンソン・クルーソー	①島田満　②③則座誠　④田中穣
8話	はじめてのパンプキンパイ	①島田満　②中西伸彰　③片渕須直　④佐藤好春
9話	おもちゃの国の贈り物	①島田満　②加賀剛　③楠葉宏三・加賀剛　④高野登
10話	パジャマで大戦争	①島田満　②③楠葉宏三　④鷲田敏弥
11話	街から来た無法者ダン	①島田満　②③中西伸彰　④佐藤好春
12話	プラムフィールドの嵐	①島田満　②則座誠　③片渕須直　④田中穣
13話	決闘！エミルが怒った	①島田満　②③加賀剛　④佐藤好春
14話	ダンとテディの秘密	①島田満　②中西伸彰　③楠葉宏三・中西伸彰　④松本清
15話	バタカップ大騒動	①島田満　②加賀剛　③片渕須直　④鷲田敏弥
16話	学校が燃える！	①島田満　②③酒井伸次　④田中穣
17話	さよならダン	①島田満　②③加賀剛　④佐藤好春
18話	ママがやってきた	①島田満　②中西伸彰　③片渕須直　④松本清
19話	舞踏会へようこそ	①島田満　②中西伸彰　③楠葉宏三・中西伸彰　④鷲田敏弥
20話	大きくなったら何になる？	①島田満　②加賀剛　③片渕須直　④佐藤好春
21話	先生をぶちなさい！	①島田満　②③酒井伸次　④田中穣
22話	ページさんからの手紙	①島田満　②中西伸彰　③片渕須直　④松本清
23話	誰もいない庭	①島田満　②③加賀剛　④佐藤好春
24話	素直になれなくて	①島田満　②中西伸彰　③楠葉宏三・中西伸彰　④鷲田敏弥
25話	博物館を作ろう	①島田満　②③酒井伸次　④田中穣
26話	泥棒は僕じゃない！	①島田満　②楠葉宏三　③片渕須直　④松本清
27話	ひび割れた友情	①島田満　②③加賀剛　④佐藤好春
28話	告白の置き手紙	①島田満　②中西伸彰　③楠葉宏三・中西伸彰　④鷲田敏弥
29話	男の子には負けない！	①島田満　②楠葉宏三　③片渕須直　④佐藤好春
30話	小さなウェディングベル	①島田満　②中西伸彰　③楠葉宏三　④井上鋭
31話	素敵な5ドルの使い方	①島田満　②酒井伸次　③片渕須直　④田中穣
32話	私、お医者さんになる！	①島田満　②③中西伸彰　④松本清
33話	お父さんとの約束	①島田満　②高木淳　③楠葉宏三　④佐藤好春
34話	雪の日の使者	①島田満　②中西伸彰　③片渕須直　④鷲田敏弥
35話	吹雪の中で	①島田満　②高木淳　③楠葉宏三・高木淳　④井上鋭
36話	ダンの荒馬ならし	①島田満　②楠葉宏三　③片渕須直　④佐藤好春
37話	旅立ちへの予感	①島田満　②③中西伸彰　④鷲田敏弥・井上鋭
38話	それぞれの決心	①島田満　②③楠葉宏三　④佐藤好春
39話	おてんばジョー自転車に乗る	①島田満　②③楠葉宏三　④佐藤好春
40話	さよならプラムフィールド	①島田満　②③楠葉宏三　④佐藤好春

①脚本　②演出　③絵コンテ　④作画監督

七つの海のティコ

放映期間：1994年1月16日～12月18日



スタッフ 原案：広尾明　製作：本橋浩一　製作管理：本橋寿一　企画：清水賢治（フジテレビ）・佐藤昭司　音楽：美和響　キャラクターデザイン：森川聡子　美術設定：伊藤主計　美術監督：森元茂　撮影監督：森田俊昭　音響監督：藤野貞義　プロデューサー：鈴木吉弘（フジテレビ）・余語昭夫　監督：高木淳　制作：日本アニメーション・フジテレビ　■主題歌：OP「Sea loves you」ED「Twinkle Talk」　作詞：佐藤ありす　作曲：清岡千穂　編曲：戸塚修　歌：篠塚満由美（フォルテミュージックエンタテインメント）

キャスト ナナミ・シンプソン：林原めぐみ　スコット・シンプソン：池田秀一　アル（アルフォンゾ・アンドレッティ）：緒方賢一　シェリル・メルビル：水谷優子　ジェームス：増岡弘　トーマス・ルコント：松井摩味　ルコント博士：納谷六朗　ベネックス：川島千代子　メタルクロー：郷里大輔　洋子：藤井佳代子　渚：岡本麻弥　アルのばあちゃん：京田尚子

ストーリー

ナナミは海洋学者の父スコット、父の親友アルとともに調査船ペペロンチーノ号で海を旅している。ナナミが赤ん坊の頃から一緒に育ったシャチのティコも仲間だ。スコットの目的は伝説の生物ヒカリクジラを探すこと。巨大企業GMCも、謎のヒカリクジラを求めて策略をめぐらせていた。

GMCのルコント博士の息子や財閥の令嬢も船に乗り込み、さらにティコにはジュニアが生まれ、一行は賑やかになっていった。

だが、GMCの陰謀の中でティコが命を落としてしまう。悲しむナナミにスコットは「命は引き継がれたのだ」と教え、ジュニアがティコと呼ばれることになった。

南極でついに姿を現すヒカリクジラ。一度はGMCに捕獲されるが、動物たちの協力もあり、ナナミたちは無事、ヒカリクジラを救出するのだった。

解説

「名作初のオリジナル」として登場したのが『ティコ』。オリジナルだからこそ、これまで「名作アニメ」では考えられなかった設定や仕掛けが多かった。例えば、海洋汚染などの環境問題に取り組んだ点。時事性は、名作が今まで扱ってこなかったもので、新鮮な印象を受けたファンも多い。

巨悪GMCの存在もそうだが、新しさが表に出れば出るほど「名作」の定義をめぐって意見が交差したのも確かだ。

ただ「名作」の枠を少しゆるく考えればこれは非常によくできたアニメーションであり、海モノは当たらないというアニメのジンクスを破った作品として、十分、「名作」の資格はあるのだ。

この場面がツボ!!

オリジナルだとこんなに違う！



出産シーンがあった！

『ティコ』にはこれまでの「名作」にはないシーンが多いが、出産もそう。他の「名作」の動物は、パートナーができて良しとしたのだ。



トーキョーが出てきた！

欧米の小説を原作にする「名作」に日本は出てこなかった。山の手線の混雑に困惑するアルたちは笑撃！



ＳＦ設定があった！

舞台をロケハンし、リアリティにこだわるのも「名作」。海中に光の柱が立つＳＦ設定は大変珍しい。



原作と原作者

『ティコ』は「名作アニメ」20作目に、初のオリジナルに挑戦した記念すべき作品だった。広尾明の原案をもとに、オリジナルではあっても名作の一つの伝統ライン、漂流冒険物(『フローネ』や『トム・ソーヤー』など)を受け継ぐテイストがある。ジャック・マイヨールを参考にしたという素潜り100mのヒロイン。ヒカリクジラが現れるのは、地上最後の冒険フィールド南極。冒険アニメそのものが消える中、『ティコ』が守ったものは大きいのだ。

広尾明の小説「七つの海のティコ」(全3巻／角川スニカー文庫)は、GMCの成り立ちなど物語の背景も描いて評価が高い。

DVD



高木淳監督と余語昭夫プロデューサー、二人は奇しくも『ティコ』が一人で担当した作品の2作目。意気込む時期にオリジナルと直面した戸惑いや喜びが、解説書の記事から伝わってくる。

発売元：バンダイビジュアル　全9巻
BCBA-0857〜0865　各：カラー／118分（5話収録）日本語字幕（ON・OFF可）
¥3,800　※9巻は94分（4話収録）全巻：OP、ED、予告編を収録　※最終巻にカラオケ「Sea loves you」（ステレオ）の映像特典収録

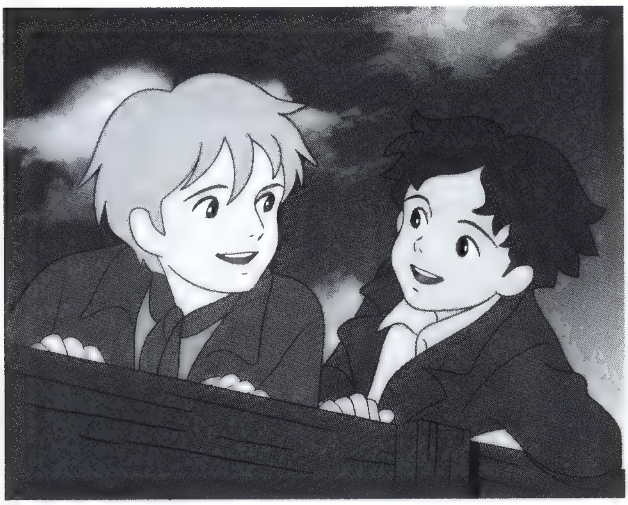
各話タイトルとスタッフリスト

1話　シャチをつれた少女　冒険者ナナミ	①青山紀之　②③高木淳　④大城勝
2話　カリブの海賊は子供をねらう!?	①三井秀樹　②片渕須直　③稲垣卓也　④井上鋭
3話　大西洋のギャングがやって来る!?	①松井亜弥　②鈴木輪流郎　③花井信也　④五月女浩一朗
4話　逃げて逃げて逃げまくれ!!	①三井秀樹　②楠葉宏三　③稲垣卓也　④大城勝
5話　リオデジャネイロは眠らない	①三井秀樹　②楠葉宏三・稲垣卓也　③楠葉宏三　④佐藤好春
6話　シロナガスクジラに逢った日	①青山紀之　②辻伸一　③稲垣卓也　④井上鋭
7話　大西洋の底　トーマスひとりぼっち	①青山紀之　②辻伸一　③花井信也　④五月女浩一朗
8話　ザイール川の沈没船　秘宝の謎	①三井秀樹　②知吹愛弓　③稲垣卓也　④大城勝
9話　幻の地底湖に浮かぶ希望の船	①松井亜弥　②③楠葉宏三　④佐藤好春
10話　ペペロンチーノ号が陸を走る！	①三井秀樹　②高木淳・楠葉宏三　③楠葉宏三　④井上鋭
11話　プリンセス・ナナミ　エーゲ海の夢	①松井亜弥　②辻伸一　③花井信也　④五月女浩一朗
12話　もうひとりのナナミと幸福な家族	①松井亜弥　②辻伸一　③稲垣卓也　④大城勝
13話　ああ！　トーマス君の人生最悪の日	①三井秀樹　②知吹愛弓　③楠葉宏三　④佐藤好春
14話　豪快！　シチリア島のアル婆ちゃん	①松井亜弥　②片渕須直　③楠葉宏三　④井上鋭
15話　素晴らしき団結！　空に舞うナナミ	①三井秀樹　②片渕須直　③花井信也　④五月女浩一朗
16話　新しい仲間!!　ティコの赤ちゃん！	①松井亜弥　②知吹愛弓　③楠葉宏三　④大城勝
17話　がんばれジュニア！　最初の深呼吸	①池田眞美子　②高木淳・楠葉宏三　③藤本二朗・宮下新平　④佐藤好春
18話　えっ!!　シェリルさんついに婚約!?	①登戸徹　②辻伸一　③楠葉宏三　④井上鋭
19話　北海油田大パニック　海鳥を守れ！	①登戸徹　②知吹愛弓　③花井信也　④五月女浩一朗
20話　ジュニアはナナミがきらいなの!?	①松井亜弥　②知吹愛弓　③高木淳　④大城勝
21話　光る氷山！　北極海のオーロラ伝説	①三井秀樹　②片渕須直　③藤本次朗・宮下新平　④佐藤好春
22話　氷の迷宮！　埋もれたままの時間	①三井秀樹　②知吹愛弓　③楠葉宏三　④井上鋭
23話　さようなら永遠に！　ティコの死	①登戸徹　②③高木淳　④大城勝
24話　命を継ぐ者　海に響くクジラの歌	①松井亜弥　②③楠葉宏三　④佐藤好春
25話　日本へ！　母さんの思い出を訪ねて	①三井秀樹　②知吹愛弓　③花井信也　④五月女浩一朗
26話　お母さんに会えた！　遠い夏の日	①松井亜弥　②楠葉宏三　③宮下新平　④井上鋭
27話　霧の怪談！　セントエルモの幽霊船	①登戸徹　②片渕須直　③楠葉宏三　④大城勝
28話　スクイドボール2号　深海をゆく！	①三井秀樹　②辻伸一　③藤本次朗　④佐藤好春
29話　ナナミの冒険　チョウの舞う島！	①松井亜弥　②③知吹愛弓　④杉山東夜美
30話　永遠の美しさが手に入る　奇跡の卵	①登戸徹　②③楠葉宏三　④井上鋭
31話　シェリルとスコット　無人島の一夜（本放送時未放映）	①松井亜弥　②知吹愛弓　③宮下新平　④大城勝
32話　シーラカンスの海へ　光る怪物の謎	①三井秀樹　②片渕須直　③楠葉宏三　④佐藤好春
33話　スコット応答せず!!　悪魔の棲む海	①三井秀樹　②片渕須直　③宮下新平　④井上鋭
34話　帆をあげろ!!　大追跡ヒカリクジラ	①登戸徹　②加賀ツヨシ　③高木淳　④大城勝
35話　ラストチャンス！　父さんの祈り	①松井亜弥　②③知吹愛弓　④杉山東夜美
36話　ヒカリクジラが危ない　悪魔の襲撃！	①三井秀樹　②片渕須直　③宮下新平　④井上鋭
37話　動きはじめた野望！　南極大陸の城	①登戸徹　②③加賀ツヨシ　④大城勝
38話　ヒカリクジラの導き　鉄の城の最後	①松井亜弥　②知吹愛弓　③加賀ツヨシ　④入好さとる
39話　それぞれの旅立ち　永遠の光の輪	①三井秀樹・松井亜弥　②青山紀之　③高木淳　④井上鋭

①脚本　②絵コンテ　③演出　④作画監督

ロミオの青い空

放映期間：1995年1月15日～12月17日



スタッフ　原作：リザ・テツナー　製作：本橋浩一　製作管理：本橋寿一　企画：佐藤昭司・清水賢治（フジテレビ）　脚本：島田満　音楽：若草恵　キャラクターデザイン：佐藤好春　美術設定：伊藤主計　美術監督：川口正明　音響監督：藤野貞義　撮影監督：森田俊昭　プロデューサー：余語昭夫・鈴木吉弘・鈴木専哉（フジテレビ）　監督：楠葉宏三　制作：日本アニメーション・フジテレビ　■主題歌：OP「空へ…」ED「Si Si Ciao～ロマナの丘で～」　作詞：佐藤ありす　作曲：岩崎琢　編曲：若草恵　歌：笠原弘子（OP・ED）

キャスト　ロミオ：折笠愛　アルフレド：藤田淑子　ビアンカ：岡村明美　アンジェレッタ：川村万梨阿　ロッシ：安西正弘　エッダ：羽鳥靖子　アンゼルモ：柏倉つとむ　アントニオ：高乃麗　ダンテ：柊美冬　ミカエル：石川寛美　ジョバンニ：檜山修之　ニキータ：石津彩　リナルド：中原茂　ロベルト：大林龍之介　ジェシカ：藤井佳代子　アニタ：丹下桜　ルイニ：小村哲生　カセラ：有本欽隆　マウリッツォ：中田和宏　グラゼーラ：沢海陽子　ナレーター：池田昌子

ストーリー

ミラノへの旅立ち…　永遠に刻まれる友情の誓い

イタリア国境に近いスイスのソノーニョ村。ロミオは温かい家庭で幸せに暮らしていたが、村に人買いのルイニがやってきたことで、大きく運命が変わる。ある日、畑が何者かに放火され、父親のロベルトも怪我を負ってしまったのだ。ロベルトを救うため、自らルイニと契約するロミオ。こうしてロミオは、煙突掃除夫として働くため、ミラノへと旅立つ。途中の村でロミオはアルフレドという少年に出会う。アルフレドも煙突掃除夫として働くため、ミラノへ向かおうとしていた。はじめは心を閉ざしていたアルフレドだが、ロミオの純粋さに触れ、度重なる危機を共に助け合うことで、次第に友情を育んでいった。やがてミラノへ到着すると、ロミオとアルフレドは別々の親方に買われていった。別れ際、二人は無言で永遠の友情を誓い合う…。

ロミオを待ち受ける試練　アンジェレッタとの出会い

ロミオを買ったロッシ親方の家には、おかみさんのエッダと息子のアンゼルモがいた。二人はロミオをこきつかい、満足な食事も与えなかった。そんなとき、ロミオに食事が差し入れられる。贈り主は、何年も寝たきりで過ごしている娘のアンジェレッタだった。いつしか親友になる二人。その様子に気づいたアンゼルモはロミオに泥棒の濡れ衣を着せ、窮地に追いこむ。しかし、街で起きた爆破事件からロッシや警官たちを救ったことがきっかけで、ロミオの無実は証明され、ロッシもロミオを気づかってくれるようになった。自由な時間をもらえるようになったロミオはアルフレドを捜し、念願の再会を果たす。アルフレドは街の不良グループ・狼団から煙突掃除の少年たちを守るため、秘密組織を作ろうとしていた。そして、アルフレドがリーダーを務める「黒い兄弟」が結成され、狼団との対決のときを迎える。決闘はロミオの活躍もあり、黒い兄弟の勝利で終わった。

ロミオはある日、アンジェレッタが実は伯爵家の孫娘であることを知る。すっかり体が弱ってしまったアンジェレッタのため、ロミオと黒い兄弟は、伯爵夫人のイザベラを説得して、アンジェレッタと引き合わせようとする。イザベラはロミオたちの行動に胸を打たれ、アンジェレッタと対面すると、療養のためにパリへ連れていくのだった。

誇り高きアルフレドの戦い　そして、悲しい別れ…

ロミオはアルフレドの生き別れの妹・ビアンカと出会った。実は兄妹は貴族出身だったが、叔父夫婦により両親を殺されていたのだ。アルフレドは両親の名誉を回復させようと、その機会を探していた。ロミオたちの協力でビアンカと再会したアルフレドはすべてを打ち明け、大公邸で開かれる晩餐会で、国王に直接訴え出ることを決意する。晩餐会の夜、黒い兄弟だけでなく、かつて戦った狼団も結束して、アルフレドを大公邸に送りこむ。偶然居合わせたイザベラも協力してくれた。そして、ついにアルフレドは国王の前で、叔父夫婦の陰謀を暴くことに成功する。

すべてが終わったとき、アルフレドは自らの命が燃え尽きるのを感じていた。以前から、重い病にかかっていたのだ。アルフレドは聖バビラ教会でロミオにビアンカのことを託すと、眠るように息を引き取る。親友アルフレドの死に打ちのめされるロミオ。だが、仲間たちに支えられ、ロミオはアルフレドに代わり、黒い兄弟の新しいリーダーになる。

春になる頃、煙突掃除夫としての契約が切れ、ロミオたちが故郷へ帰る日が来た。数年後、大人になったロミオはビアンカと結婚し、ソノーニョ村で教師になっていた。

キャラクター紹介

キャラクターデザインは楠葉監督とのコンビ作が多い佐藤好春。個性豊かな少年たちを生み出している。



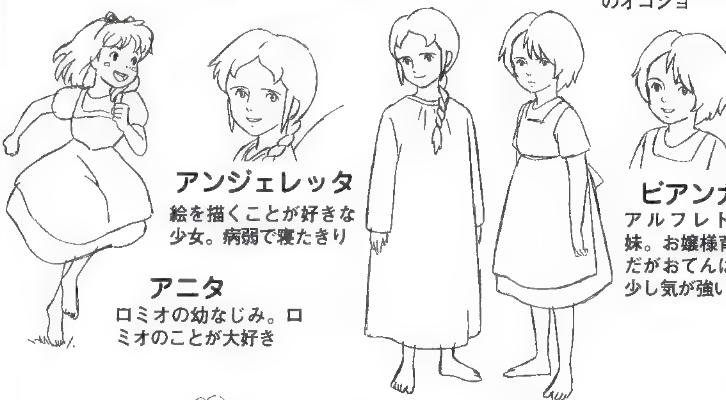
ロミオ
11歳の少年。素直な心で周囲の人々に影響を与えていく



ピッコロ
いつでもロミオと一緒の大親友のオコジョ



アルフレド
ロミオと友情を誓う12歳の少年。貴族出身



アンジェレッタ
絵を描くことが好きな少女。病弱で寝たきり

アニタ
ロミオの幼なじみ。ロミオのことが大好き

ビアンカ
アルフレドの妹。お嬢様育ちだがおてんばで少し気が強い



ニキータ
狼団の紅一点。次第にアルフレドに惹かれていく



黒い兄弟 ミラノで働く煙突掃除夫の少年たちが、乱暴な狼団に対抗するために結成したグループ。リーダーはアルフレド



狼団 ミラノを縄張りにしている不良グループ。煙突掃除夫の少年たちを「よそ者」と呼び、目の敵にする。リーダーはジョバンニ



ロッシ
ロミオを買った親方。人のいいところもある

アンゼルモ
ロッシの息子。ずる賢い性格でロミオを苛める

ルイニ
「死神」と呼ばれている人買い

エッダ
ロッシのおかみさん。アンゼルモを溺愛する

イザベラ
アンジェレッタの祖母にあたる伯爵夫人

カセラ教授
ロミオとアルフレドの理解者。医師でもある

解説

「ロミオの青い空」は後期の名作シリーズの中でも、特に人気の高い作品である。ロミオやアルフレドといったキャラクターたちの魅力に、少年同士の熱い友情ドラマが加わり、女性ファンを一気に急増させたのだ。煙突掃除夫として働く少年という、名作シリーズの中では比較的重いテーマの原作ということもあり、アニメ化に際してはストーリーに大幅な変更が加えられた。その結果、よりドラマチックでエンターテイメント性にあふれた作品に仕上がり、新たなファン層を拡げることにつながった。

メインスタッフは、監督・楠葉宏三、脚本・島田満、キャラクターデザイン・佐藤好春という、「ナンとジョー先生」を手がけた3人が再び集結。この作品でも演出・セリフ・作画と息の合ったところを見せ、三拍子そろった名場面を数多く生み出した。

また「ロミオ」はキャストの豪華さも話題を呼んだ。ロミオを演じるのは「小公子セディ」でデビューした折笠愛、アルフレドにはベテランの藤田淑子、ナレーターは同じくベテランの池田昌子。その他、若手も人気者がそろい、名作シリーズならではの顔ぶれとなった。



このセリフがツボ!!



「君が髪に花を飾ったら、きっと似合うだろうと思ってね」（17話）

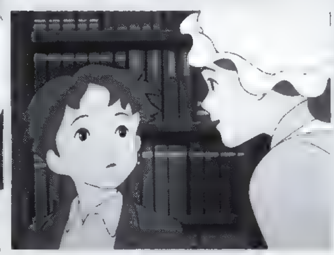
◀「ロミオ」といえばアルフレドのキザなセリフ…と言われるほど名ゼリフを連発していたアルフレド。その最たるものが、このニキータへの口説き（?）文句。これで心が動かない女性はいないだろう。

▼黒い兄弟の協力でイザベラに会いに来たものの、力尽きたアンジェレッタ。ロミオの胸に抱かれて、アンジェレッタは素直な想いを口にする。



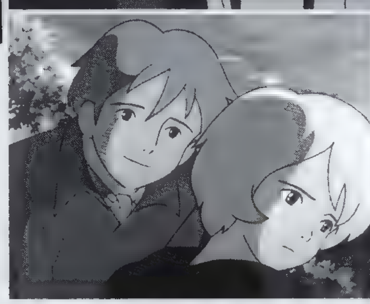
「大好き…ロミオ…」（22話）

▼カセラ教授のメイド、ピアにアルフレドと比べられてしまったロミオ。コンプレックスが芽生えた瞬間だ。



「ロミオはまだまだ子どもね」（16話）

▶アルフレドがロミオとばかり話すため、拗ねてしまうビアンカ。アルフレドの言葉はただの慰めではなく、ロミオとビアンカの未来を感じてのものだった。その未来が見られないことに気づいている様子も切ない…。



「お前もいつかきっとロミオが好きになる」（26話）

テオじいさんのモデル

20話のテオじいさんの姿は、作画の神様と言われた故・森やすじがモデルである。名作シリーズのスタッフに多大な影響を与えた存在で、この「ロミオ」も最初に作られた企画書には森やすじがスケッチを描いていた。その縁もあり、佐藤好春はオマージュをこめてテオじいさんを作った。



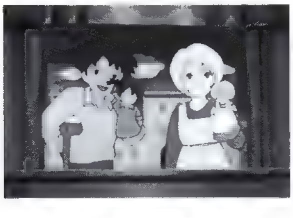
名作史上異例の盛り上がり!?

女性ファンの多い「ロミオ」は、名作シリーズでは珍しくミーハーなノリで同人誌界を賑わす作品だった。もちろん内容の大半は「やおい」と呼ばれるネタ。ロミオとアルフレドの友情は深すぎるほどに親密だったので無理もない。今でもイベントが行われるほど、熱いジャンルだ。



追加で作られた31話&32話

当初の放送予定が変更になり、急遽追加で作られた話数がある。それが31話と32話だ。最終話前なので、ラストに絡んだエピソードでもよかったのだが、何しろ急だったので、どちらも1話で完結するエピソードになった。「打ち切り」とは逆の状況。ある意味、恵まれている…!?

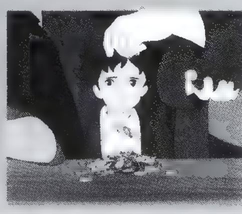


ワンポイントコラム 煙突掃除夫の過酷な現実

そもそも煙突掃除夫の親方たちは、なぜ子どもたちを雇うのか？　それは、狭い煙突の中を掃除するには、体の大きな大人よりも小柄な子どもの方が、効率がいいからである。ただそれだけの事情で、貧しい村の子どもたちは道具のように売り買いされていた。

ロミオは85リラ。アルフレドは86リラ。子どもが二人だけということで相場の値よりもつり上がったが、１回の煙突掃除代は1リラなので、その元をとるためにロミオたちは90回近くも煙突に入らなければならない。しかも、ロミオがやっていたとおり、作業では素手同然で煤をかき落とすのだ。鼻と口は粗末な布で覆うだけなので、体への負担はかなり大きい。アルフレドのように、煙突掃除の子どもがたちが肺を病んで命を落とすことは、決して珍しくないのだった。





原作と原作者

原作はドイツの女性作家リザ・テツナーによる児童文学『黒い兄弟』。煙突掃除夫として売られる少年たちを描いたこの作品は、1941年にスイスで出版された。テツナーは1894年ドイツ生まれ。ナチスの弾圧を逃れて、1933年にスイスへ亡命し、児童文学の執筆や言語教育に携わった。その後、テツナーはスイス国立図書館に保管された古い資料の中から、ミラノに煙突掃除夫として売られた少年たちの記録を発見。そこには少年たちの悲惨な状況と、マジョーレ湖で実際に起きたボート転覆事件について記されていた。この悲劇を人々に伝えたいという願いをこめて、テツナーは『黒い兄弟』を執筆したのだった。

原作ではアルフレドの死後、ジョルジョ（原作でのロミオの名前）と仲間たちのミラノからの逃亡劇が描かれていた。また、ルイニは逮捕され、カセラ教授の息子ロレンツォも登場する。こうした設定はアニメでは使われなかったが、アニメのアルフレドは、原作のアルフレドとロレンツォを合わせたようなイメージになっている。アンジェレッタの出生の秘密、大公邸でのアルフレドの訴えなどは、アニメで新たに加えられたオリジナルのエピソードだ。



◀湖でロミオに命を救われ、心の揺れを感じさせたアニメのルイニ。原作では逃亡した少年たちを追い、容赦のない悪役ぶりを見せた。

DVD



解説書には、1～4巻:楠葉宏三（監督）と佐藤好春の「スタッフ座談会」、5～8巻:折笠 愛（ロミオ役）と藤田淑子（アルフレド役）の「キャスト座談会」を掲載。どちらも貴重な顔合わせなので、必見の内容だ。

発売元:バンダイビジュアル　全8巻
BCBA-0839～0846　各:カラー／94分（4話収録）／日本語字幕（ON・OFF可）／¥3,800円　※1巻は118分（5話収録）、8巻は97分（4話収録）　全巻:OP、ED、予告編を収録　※最終巻に、カラオケ「空へ…」（ステレオ）の映像特典収録

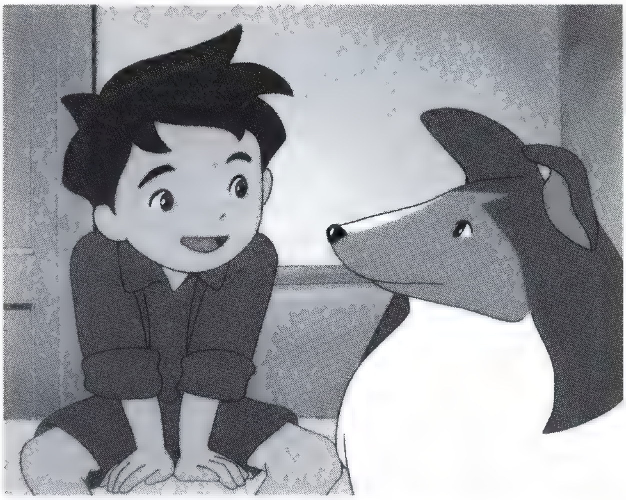
各話タイトルとスタッフリスト

話数	タイトル	スタッフ
1話	アルプス！小さな村の大事件	①島田満　②③楠葉宏二　④佐藤好春
2話	運命のはじまり・炎の中の家族	①島田満　②③宮下新平　④大城勝・佐藤好春
3話	さよなら・ぼくの村	①島田満　②③楠葉宏三　④井上鋭・佐藤好春
4話	似顔絵の少年	①島田満　②宮下新平　③楠葉宏二　④大城勝・佐藤好春
5話	酒場での一夜	①島田満　②③岩本保雄　④アベ正己
6話	舟が沈む!! 嵐の中の友情	①島田満　②宮下新平　③楠葉宏三　④井上鋭・佐藤好春
7話	天使の住む家	①島田満　②③松川智充　④大城勝・佐藤好春
8話	天使からの贈り物	①島田満　②③楠葉宏三　④井上鋭・佐藤好春
9話	月夜のラブレター	①島田満　②宮下新平　③佐々木和宏　④大城勝・佐藤好春
10話	青空のスケッチブック	①島田満　②岩本保雄　③有原誠治　④北崎正浩
11話	友だちになろう！	①島田満　②③松川智充　④井上鋭・佐藤好春
12話	霧の街に消える	①島田満　②宮下新平　③横田和善　④大城勝・佐藤好春
13話	地下水道での再会	①島田満　②③楠葉宏三　④井上鋭・佐藤好春
14話	逃げるんだ!! 早く	①島田満　②③楠葉宏三　④大城勝・佐藤好春
15話	火をともせ　11人の誓い	①島田満　②楠葉宏三　③松川智充　④井上鋭・佐藤好春
16話	ライバルはアルフレド！	①島田満　②宮下新平　③横田和善　④大城勝・佐藤好春
17話	聖バビラ教会の決闘	①島田満　②③楠葉宏三　④井上鋭・佐藤好春
18話	朝日にとどけ！団結の歌	①島田満　②宮下新平　③横田和善　④大城勝・佐藤好春
19話	おばあちゃんは魔法使い	①島田満　②楠葉宏三　③松川智充　④井上鋭・佐藤好春
20話	テオじいさんの人形劇	①島田満　②宮下新平　③横田和善　④大城勝・佐藤好春
21話	アンジェレッタの秘密	①島田満　②③楠葉宏三　④井上鋭・佐藤好春
22話	おばあさまに会えた！	①島田満　②宮下新平　③楠葉宏三　④大城勝・佐藤好春
23話	さよなら…ぼくの天使	①島田満　②宮下新平　③楠葉宏三　④井上鋭・佐藤好春
24話	ねらわれた兄妹	①島田満　②宮下新平　③横田和善　④大城勝・佐藤好春
25話	再会！ビアンカとアルフレド	①島田満　②③楠葉宏三　④井上鋭・佐藤好春
26話	誇り高き魂	①島田満　②宮下新平　③横田和善　④大城勝・佐藤好春
27話	長い一日のはじまり	①島田満　②③楠葉宏三　④井上鋭・佐藤好春
28話	貴公子アルフレド	①島田満　②宮下新平　③横田和善　④大城勝・佐藤好春
29話	永遠のアルフレド	①島田満　②③楠葉宏三　④井上鋭・佐藤好春
30話	最後の誓い	①島田満　②宮下新平　③横田和善　④大城勝・佐藤好春
31話	本当の宝物	①島田満　②③宮下新平　④佐藤好春
32話	素敵なクリスマスイブ	①島田満　②西田健一　③横田和善　④佐藤好春
33話	空へ！自由の翼にのって	①島田満　②③楠葉宏三　④井上鋭・佐藤好春

①脚本　②演出　③絵コンテ　④作画監督

名犬ラッシー

放映期間：1996年1月14日～1996年8月18日



スタッフ 原作：エリク・ナイト　製作：本橋浩一　製作管理：本橋寿一　企画：清水賢治・佐藤昭司　脚本：松井亜弥・三井秀樹　音楽：笹路正徳　キャラクターデザイン：森川聡子　美術設定：伊藤主計　美術監督：森元茂　音響監督：藤野貞義　撮影監督：森下成一・熊谷幌史　プロデューサー：鈴木専哉・余語昭夫　監督：片渕須直　制作：日本アニメーション・フジテレビ　■主題歌：OP「終わらない物語」ED「少年の丘」　作詞：とみたきょうこ（OP）・森雪之丞（ED）　作曲：桐生千弘　編曲：笹路正徳　歌：森岡純（トライクル）

キャスト ジョン・キャラクロー：日高奈留美　サム：野島昭生　メリッサ：吉田理保子　コリン：田中真弓　サンディ：松倉羽鶴　プリシラ：國府田マリ子　フォレスト：津田延代　ホッパー：佐藤正治　アイアン：大塚明夫　ラドリング：寺島幹夫　カリー先生：島田敏　メアリー：野田順子

ストーリー

イギリス北部の炭鉱の村、グリノールブリッジ。炭鉱事務員の父と看護婦の母と3人暮らしのジョンは、家ではいつも一人ぼっち。

ある日、ジョンは迷子のコリーの子犬を拾い、飼い主からゆずってもらう。子犬の名前はラッシー。ジョンにとっては兄弟そのものだ。村の人たちとの温かい交流を通して、ジョンもラッシーも育ってゆく。

ある日、鉱山の持ち主、ラドリング侯爵が、孫のプリシラを連れて視察に訪れた。ジョンたちと出会ったプリシラは、ジョンの友達、サンディやコリンとともに、小さな冒険に挑戦し、子供らしい時間を満喫して村を去る。

炭鉱に危機が訪れた。石炭が出なくなり、会社は閉鎖を打ち出したのだ。ジョンの父は独学で再興の道を探る。父を信じるジョンも、ラドリングに直談判に行く。

ラッシーは美しい成犬になっていた。犬好きのラドリングは、美しいラッシーを気に入り、ラッシーを担保に試験採掘を続けることを許可する。そしてラッシーはスコットランドのラドリングの屋敷に連れていかれてしまった。

ジョンは、じっとしていられず炭鉱に足を運び、父の仕事を懸命に手伝った。一方、スコットランドでは、ジョンのもとに戻ろうとするラッシーの強い意志を見てとったプリシラが、ラッシーを屋敷から逃がす。ラッシーはすぐさま走りだした。優しい老夫婦に助けられたりしながら、目指すは南南西へ400マイル、グリノールブリッジのなつかしいジョンのもとだ。

皆の努力と、コリンの大手柄で、ついに石炭の鉱脈が発見される。安堵のあまり、ジョンは眠り続ける。一方、長く困難な旅を続けていたラッシーも、村の目前までたどり着いていた。ようやく目覚め、「ラッシーを迎えに行かなくちゃ！」と飛び出していくジョン。村外れの川辺で、ジョンとラッシーは再会を果たしたのだった。

各話タイトルとスタッフリスト

1話　ひとりじゃない	①松井亜弥　②③片渕須直　④井上鋭
2話　大さわぎの留守番	①松井亜弥　②③片渕須直　④佐藤好春
3話　さよならラッシー	①松井亜弥　②③片渕須直　④大城勝
4話　父さんの給料日	①松井亜弥　②片渕須直・青山弘　③片渕須直　④井上鋭
5話　ごちそう求めて6マイル	①松井亜弥　②ワタナベシンイチ　③片渕須直　④佐藤好春
6話　嵐の中をかけぬけろ	①松井亜弥　②小林孝志　③片渕須直　④大城勝
7話　マフラー泥棒を捕まえろ	①三井秀樹　②③片渕須直　④井上鋭
8話　ラッシーなんか大嫌い	①松井亜弥　②片渕須直　③片渕須直・藤本次朗　④佐藤好春
9話　空から来たおてんばお嬢様	①松井亜弥　②片渕須直　③片渕須直・藤本次朗　④大城勝
10話　はじめてのケーキ作り	①三井秀樹　②寺東克己　③片渕須直・藤本次朗　④井上鋭
11話　プリシラ・最後のわがまま	①松井亜弥　②藤森一真　③藤本次朗　④佐藤好春
12話　火事をおこしたのは誰だ	①松井亜弥　②寺東克己　③片渕須直　④大城勝
13話　サンディは牛どろぼう？	①松井亜弥　②片渕須直　③中西伸彰　④井上鋭
14話　怪しい大男を追跡しろ！	①松井亜弥　②寺東克己　③中西伸彰　④大城勝
15話　アイアンの無実をはらせ！	①松井亜弥　②寺東克己　③藤本次朗　④井上鋭
16話　急げ！ホッパー先生を助けろ	①三井秀樹　②神谷純　③藤本次朗　④佐藤好春
17話　カリー先生の結婚	①松井亜弥　②飯島正勝　③西田健一　④大城勝
18話　大騒動！サーカスの象が逃げた	①三井秀樹　②寺東克己　③藤本次朗　④森中正春
19話　コリンの初恋とたからもの	①松井亜弥　②③中西伸彰　④井上鋭
20話　大変だ！母さんが倒れた	①三井秀樹　②飯島正勝　③藤本次朗　④大城勝
21話　おばあちゃんに会いたい	①松井亜弥　②片渕須直　③中西伸彰　④井上鋭
22話　ジョンの決意・鉱山を救え！	①松井亜弥　②紅優　③吉田健次郎　④森中正春
23話　頑張れジョン・ラッシーを守れ！	①松井亜弥　②片渕須直　③藤本次朗　④井上鋭
24話　消息不明・ラッシーを捜せ！	①松井亜弥　②片渕須直　③中西伸彰　④平松禎史
25話　お帰りラッシー	①松井亜弥　②紅優　③片渕須直　④井上鋭・森川聡子
26話　夢に向かって走れ！（本放送時未放映）	①松井亜弥　②③片渕須直　④森中正春

①脚本　②絵コンテ　③演出　④作画監督

解説

『若草物語ナンとジョー先生』『七つの海のティコ』などで絵コンテを担当していた片渕須直の監督デビュー作品。久しぶりに頭身を下げた柔らかな線のキャラクターで、初期の作品をほうふつとさせる雰囲気があった。

ジョンの家族は原作の設定を大きく変え、ぐっと現代的な共働きの若い夫婦になった。また、原作ではラッシーは初めから成犬。1話から7話はアニメのオリジナルだ。

原作で多くのページをさかれているラッシーの旅の部分は、話数の関係もあり2話にまとめられてしまったが、その分、オリジナルをふんだんに盛り込んで描いた子どもたちの日常や村の大人たちの姿が際立った。

特番が入って放映されなかった最終回は、DVDに収録されている。

DVD



解説書には、1～3巻片渕須直（監督）、4～6巻松井亜弥（脚本）のインタビューを掲載。2・4・6巻にプロダクションノート掲載。ジャケットはキャラデザインの森川聡子。

発売元：バンダイビジュアル　全6巻 BCBA-1251～1256　各：カラー／1・2巻118分（5話収録）3～5巻94分（4話収録）6巻99分（4話収録）日本語字幕（ON・OFF可）¥3,800全巻：OP、ED、予告編収録　※最終巻にカラオケ「終わらない物語」（ステレオ）の特典映像収録

このセリフがツボ!!

「ジョンのバカ！なにもひとりで抱えこむこと、ないじゃない！」（第23話）

岩の城でひとり泣きくずれるジョン。日が暮れて、サムが迎えに来た。出口には、心配顔のサンディとコリン。その時のサンディのひと言。



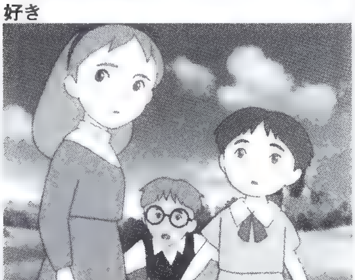
原作と原作者

原作者のエリク・ナイトは、イギリス・ヨークシャー州生まれのアメリカ人。幼いころに父をなくし、15歳の時にアメリカに渡り、職業を転々としながら絵の勉強を始めたが挫折、小説家を志す。38歳の時にようやく認められる。2年後、週刊誌に発表した当作品が話題を呼び、少年向けに書き直して1940年に出版したのが『名犬ラッシー（原題『Lassie Come-Home』）』だ。

生まれ育ったヨークシャー地方やスコットランドを舞台に、ヨークシャー人特有の気質や美しい自然が生き生きと描かれている。ちなみに「ラッシー」とは、主にスコットランド地方で若い女の子、ガールフレンドを呼ぶ言葉。今で言えばギャルとかカノジョ？　アニメではどうしても男のコの印象を持ってしまうが、原作では出産も経験している。



▼幼なじみのサンディやコリン、ラドリング公爵の孫娘プリシラもラッシーが大好き



家なき子レミ

放映期間：1996年9月1日～1997年3月23日



スタッフ 原作：エクトル・マロ（「家なき子」より）　製作：本橋浩一　製作管理：本橋寿一　企画：清水賢治・佐藤昭司　脚本：島田満・小山眞弓　音楽：服部克久　キャラクターデザイン：大城勝　美術設定：伊藤主計　美術監督：川口正明　音響監督：藤野貞義　撮影監督：熊谷幌史　プロデューサー：瀬山麻土香・佐藤賢一　監督：楠葉宏三　制作：日本アニメーション・フジテレビ　■主題歌：OP「愛について」　作詞：さだまさし　作曲・編曲：服部克久　歌：さだまさし　ED「しあわせの予感」作詞：岡田富美子　作曲・編曲：服部克久　歌：Youca

キャスト レミ：堀江美都子　アンヌ・バルブラン：弘中くみ子　ナナ：嶋方淳子　ヴィタリス：山野史人　マチア：安達忍　ミリガン：山田栄子　アーサー：冬馬由美　ガスパール：福田信昭　ジョリクール：佐藤智恵　ネリー：林原めぐみ　ブレル弁護士：速水奨　リカルド：結城比呂　リーズ：かないみか

この場面がツボ!!

涙



第13話

パリを見下ろす公園。苦しげに座り込むヴィタリス。「ゼルビーノとドルチェが迎えに来てくれた……」とつぶやく。2匹の姿はレミにも見える。と、いつの間にか2匹の間にヴィタリスが……。涙にくれる別れのシーン。

ストーリー

小さな村で、貧しいながら幸せに暮らす歌の上手な少女、レミ。しかし、出稼ぎに出ていた父が事故に遭い、レミは借金のために人買いに売られてしまう。その時初めて、レミは自分が捨て子だったことを知るのだった。

レミは旅芸人のヴィタリスに救い出され、一座に加わる。猿のジョリクールと3匹の犬が一座の仲間だ。ヴィタリスは、厳しくも暖かい人物だった。旅の生活にも慣れたレミは、明るさを取りもどす。

ある日、興業先の町でヴィタリスは放火の疑いをかけられ投獄されてしまう。途方にくれるレミに手を差し伸べたのは、偶然出会ったイギリスの婦人、ミリガンだった。息子のアーサーはレミに冷たく接するが、やがて心を開き、レミと姉弟のように仲良くなる。

やがて釈放されたヴィタリスは、ミリガンの希望どおり、彼女にレミを託して、ひそかに旅立つ。しかし、レミは必死でその後を追うのだった。

ふたたび一座の旅が始まる。しかし、危険な雪山を越える中で2匹の犬がオオカミの犠牲になる。さらに目的地のパリを目前にして、ヴィタリスまでが「前へ進め」と言葉を残し、亡くなってしまう。

ジョリクールと犬のカピだけを道連れに、レミはガスパールという男の元に身を寄せる。ガスパールは孤児を使って金を稼ぐ暴君だった。ムチでおどすガスパールに毅然と立ち向かうレミ。子どもたちのリーダー、マチアはそんなレミに優しさを示すようになる。

一方、ミリガンはレミを探していた。レミが、幼いころ誘拐された娘に間違いないことが判ったのだ。しかし、それを知ったガスパールは、レミを隠してしまう。

命をかけてレミを救い出したのはマチアだった。前に向かって進み続けたレミは、ついに本当の母親と再会できたのだった。

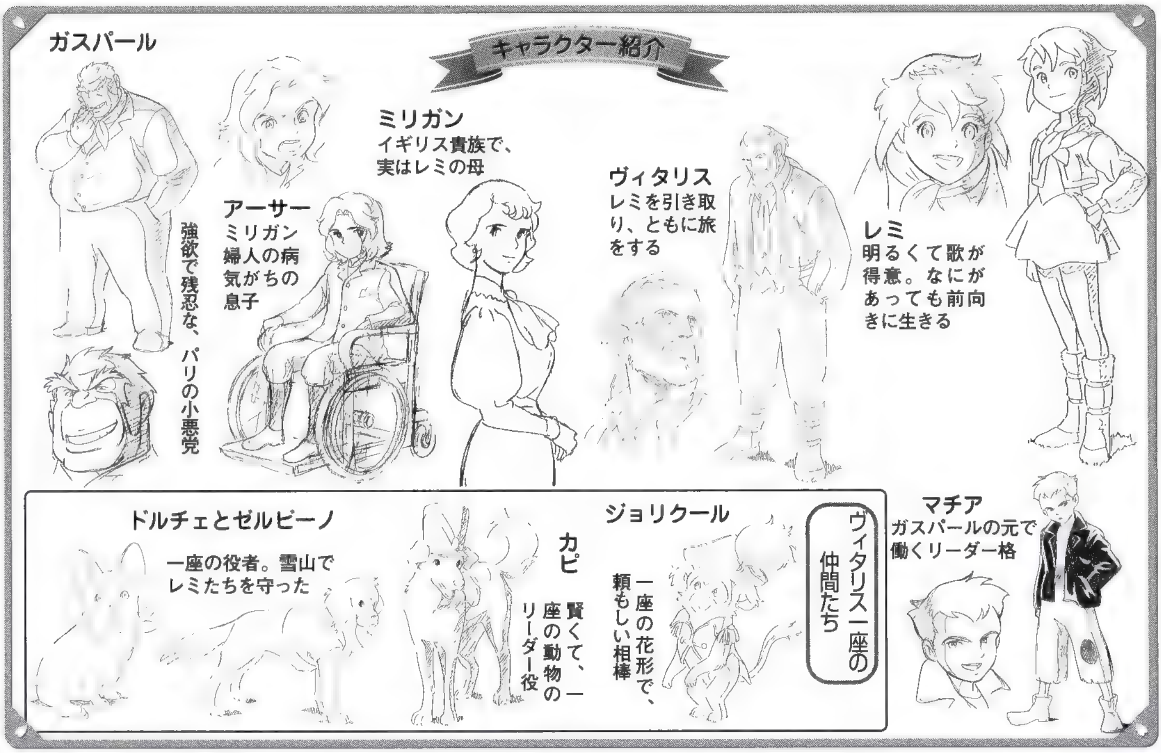
解説

『名犬ラッシー』が25話の放送回数で終了した後を受けて、9月スタートという変則的な形となった『家なき子レミ』。『ラッシー』に引き続き名作シリーズベテランの楠葉宏三以下、充実した社内スタッフで固められ、往時の名作シリーズの雰囲気が戻ったと言われている。

大胆にも主人公レミを女の子に変えたことで、終盤ではマチアとの幼い恋で盛り上がった。レミ役には、歌がうまいという設定にぴったりの堀江美都子がはまり役だった。

オープニング曲にさだまさしを起用し、スタート時には電車の中吊りポスターを出すなど、テレビ局も話題づくりを行なった。しかし時代の流れには勝てず、放映話数23話（製作話数26話）で幕を閉じてしまった。

そして、この作品を最後に、名作シリーズの枠は休息に入る。



原作と原作者

原作者は『ペリーヌ物語』と同じエクトル・マロ。マロは多くの小説を書いたが、子ども向けの読み物はそのうち『ロマン・カルプリス』『家なき子』『いもうと』『家なき娘』の4作品だ。とりわけ1876年に出版された『家なき子』（原題『Sans Famille』）は高い評価を受け、1978年にフランス・アカデミー賞を受賞している。

家族をこよなく愛したマロは、この作品を当時10歳だった彼の娘、リュシーに捧げている（リュシーは長じて自分の娘にペリーヌという名を付けた）。

原作は長編で、完訳は偕成社刊（二宮フサ訳）で、上中下の三巻に分収されている。当然、アニメにないエピソードがぎっしり。レミはラストでは結婚している。

DVD



解説書には、1～3巻に楠葉宏三(監督)、4～6巻に堀江美都子(レミ役声優)のインタビューを掲載。ほかに設定資料やキャラクター紹介を収録。ジャケットはキャラデザインの大城勝。

発売元：バンダイビジュアル　全6巻　BCBA-1235～1240　各：カラー／1・2巻118分、3～5巻94分、6巻98分（1・2巻5話収録、3～6巻4巻収録）日本語字幕（ON・OFF可）¥3,800　全巻：OP・ED、予告編収録。※最終巻にカラオケ「愛について」の特典映像収録。

各話タイトルとスタッフリスト

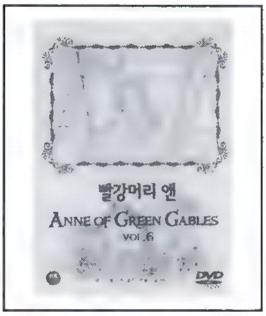
1話　悲しい誕生日	①島田満　②③楠葉宏三　④大城勝
2話　さよならお母さん	①島田満　②③高木淳　④井上鋭・森川聡子
3話　ヴィタリス一座	①島田満　②③楠葉宏三　④大城勝
4話　素敵な贈り物	①島田満　②寺東克己　③高木淳　④井上鋭
5話　奇跡のマリア像	①島田満　②飯島正勝　③西田健一　④大城勝
6話　幻のおかあさん	①島田満　②③高木淳　④井上鋭
7話　もうひとつの家族	①小山真弓　②寺東克己　③楠葉宏三　④大城勝
8話　さよなら私たちの家	①小山真弓　②鈴木孝義　③高木淳　④井上鋭
9話　運命の出会い	①小山真弓　②③楠葉宏三　④丸山宏一
10話　ひとりぼっちのアーサー	①小山真弓　②鈴木孝義　③高木淳　④大城勝
11話　ペンダントの秘密	①小山真弓　②寺東克己　③藤本次朗・西田健一　④井上鋭
12話　悲しみの雪山	①小山真弓　②③高木淳　④丸山宏一
13話　雪の日の別れ	①小山真弓　②③楠葉宏三　④井上鋭
14話　新しい旅の始まり	①小山真弓　②楠葉宏三　③高木淳　④大城勝
15話　新しい仲間	①小山真弓　②寺東克己　③西田健一　④井上鋭
16話　雨の日の子猫（本放送時未放映）	①小山真弓　②飯島正勝　③西田健一　④井上鋭
17話　地下迷路での誓い	①小山真弓　②楠葉宏三　③高木淳　④丸山宏一
18話　すれちがう母と子	①小山真弓　②杉島邦久　③楠葉宏三　④井上鋭
19話　旅の一家（本放送時未放映）	①小山真弓　②高木淳　③平川達也　④丸山宏一
20話　心の友達（本放送時未放映）	①小山真弓　②楠葉宏三　③西田健一　④大城勝
21話　想い出のバイオリン	①小山真弓　②楠葉宏三　③高木淳　④大城勝
22話　地下からの生還	①小山真弓　②飯島正勝　③西田健一　④井上鋭
23話　ふたりの願い	①小山真弓　②寺東克己　③高木淳　④丸山宏一
24話　引き裂かれた愛	①小山真弓　②杉島邦久　③楠葉宏三　④井上鋭
25話　脱出！	①小山真弓　②③高木淳　④大城勝・丸山宏一
26話　私のお母さん	①小山真弓　②③楠葉宏三　④大城勝・井上鋭

①脚本　②絵コンテ　③演出　④作画監督

世界名作アニメ事情

海外で紹介される多くの日本アニメーションの作品の中でも「世界名作劇場」はまさに世界中に伝播。その形態もテレビからビデオ、ＤＶＤへと多彩に変わりつつある。ソフトのパッケージに見られるように、作品の嗜好もお国柄を反映して実に多彩！

（※ＴＶ放映作品は、２００[illegible]年までに各地域で放映された「世界名作劇場」の作品名を列挙したもの。写真はビデオ、ＤＶＤの現地発売版のパッケージ）



▲ドイツの会社が権利を取得、そこから韓国向けに販売されたという『赤毛のアン』。世界は動いているんだねぇ…



▲台湾と並び「名作」が浸透している韓国。『ピーターパンの冒険』のＤＶＤだが、日本版と印象はほとんど変わらない

NORTH AMERICA

●ＴＶ放映作品
『トム・ソーヤーの冒険』『ふしぎな島のフローネ』
『愛の若草物語』『フランダースの犬（劇場）』

ディズニーアニメの牙城だが、15年ほど前から世界名作劇場の放映がされている。「トム・ソーヤーの冒険」や「愛の若草物語」など、やはりアメリカ原作のものに人気がある。

SOUTH AMERICA

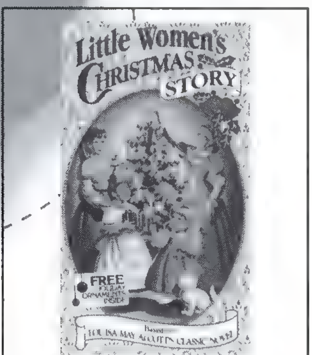
●ＴＶ放映作品
『母をたずねて三千里』『ペリーヌ物語』
『トム・ソーヤーの冒険』『ふしぎな島のフローネ』

ラテン系の諸国に受け入れられやすい世界名作劇場。ラテンアメリカでも当然古くから視聴されている。特に「母をたずねて三千里」は、南米アルゼンチンが舞台なので人気が高い。

ASIA

●東南アジアでのＴＶ放映作品
『名犬ラッシー』以外すべて
●中国でのＴＶ放映作品
『母をたずねて三千里』『トム・ソーヤーの冒険』
『ふしぎな島のフローネ』『フランダースの犬（劇場）』

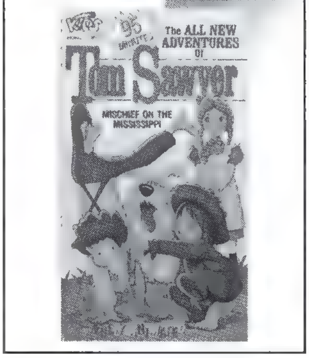
台湾、韓国、香港などを中心に世界名作劇場の浸透がもっとも進む地域。韓国では、かつて日本製アニメの放映自体が難しかったが、その当時でも世界名作劇場作品は日本製を謳わないで放映されていたという。



▲北米で発売された『愛の若草物語』のビデオ。クリスマスにちなむ２話分をまとめたもの。南部の香り漂うパッケージ…



◀「名作」のＤＶＤ－ＢＯＸも盛んに出ている。台湾版の『フランダースの犬』。パトラッシュは「忠狗」だ、確かに！



◀ビデオではなくキャンディでも入っているのではないか…。これもアメリカンテイスト漂う『トム・ソーヤーの冒険』

EUROPE

●東欧・ロシアでのＴＶ放映作品
『母をたずねて三千里』『赤毛のアン』
『ペリーヌ物語』『トム・ソーヤーの冒険』
『ふしぎな島のフローネ』
『アルプス物語・わたしのアンネット』
『小公女セーラ』『トラップ一家物語』
●北欧でのＴＶ放映作品
『トム・ソーヤーの冒険』
『ふしぎな島のフローネ』
●その他の地域ＴＶ放映作品
『ピーターパンの冒険』『名犬ラッシー』以外すべて

ヨーロッパでもラテン系諸国で特に人気の世界名作劇場。イタリアのテレビ局は「新作ができたらすぐにでも購入する」と言っているそうだ。逆にイギリスでは、これまでにテレビで放映された作品はひとつもないらしい。なぜだーっ!?



▲これもイタリアの『愛の若草物語』のビデオ。魅惑的な四姉妹だ。特に長女のメグ[illegible]、アメリカ版と比べてみても面白い。



▲キミは、誰!? [illegible]『愛少女ポリアンナ物語』イタリア版 [illegible]



▲フランス版『トム・ソーヤーの冒険』[illegible]

MIDDLE and NEAR EAST

●ＴＶ放映作品
『母をたずねて三千里』『ペリーヌ物語』
[illegible]
『ふしぎな島のフローネ』
『アルプス物語・わたしのアンネット』
『小公女セーラ』『愛少女ポリアンナ物語』
『愛の若草物語』『私のあしながおじさん』
『トラップ一家物語』『若草物語・ナンとジョー先生』
『フランダースの犬』

アラビア語諸国やトルコでかなりの作品が放映されているが、宗教的な理由から、そもそも放映が難しい作品もあるそうだ。

AFRICA

●ＴＶ放映作品
『トム・ソーヤーの冒険』『ふしぎな島のフローネ』他

今までテレビ放映されたのは北アフリカのアラビア語地域と南アフリカのみ。その他の国々はこれから。



▲台湾で発売された『母をたずねて三千里』のＤＶＤ。台湾版では「萬里尋母」が右の香港版では「萬里尋親記」に。



▲香港版。宮崎駿氏はこの作品は監督ではなく「場面設定」。でも宮崎駿を前面に出したパッケージ。さすが香港、商売熱心！

世界は「名作」を待っている

現在、日本のアニメーションは海外でのセールスの幅を広げている。世界名作劇場作品も例外ではないが、今は「ＤＶＤがビジネスになる、まさに転機」（日本アニメーション・国際部）だという。

「アジア圏、特に台湾や韓国では以前からテレビでも放映され、ＤＶＤを見る環境も整いつつあるので、マーケットは急成長しています。日本の販売状況と変わりません。こうした国々が増えていきそうなという意味で転機」なのだ。

つまり、テレビだけでなく、ソフトの形を変えてさらに世界に浸透する可能性があるということだ。

もちろん一番の要因は「作品の質、スタッフのこだわり」だろう。「海外ロケハンを行い、舞台となった国にも違和感なく受け入れられるリアルな世界観にこだわってきました。大人も考えさせられるドラマ性を重視してきました。こうした作り方は、海外のテレビアニメーションにはなかったこと」（国際部）。作品作りそのものが世界に与えた衝撃は大きいのだ。海外と世界名作劇場とを結ぶ新しい動き（Ｐ１１０参照）にも、注目したい。

世界名作劇場グッズコレクション

名作グッズはぬいぐるみからお菓子、食器や文房具まで様々な種類が発売されている。買い逃すと手に入りにくくなる商品もあるので、欲しい人は早めに買っておこう。

ぬいぐるみ・グッズ



マスコットぬいぐるみ（バロン／ラスカル／アメデオ／パトラッシュ／マーフィ／メルクル／チップマック／クラウス） 各￥250
●ハピネットロビン



ラスカルフェイスクッション
￥1680
●エフクルー



アメデオぬいぐるみＳ￥1500
パトラッシュぬいぐるみＳＳ￥1200



ラスカルぬいぐるみ
Ｌ￥5000／Ｍ￥3000／Ｓ￥1500
●セキグチ



ポンポンシリーズ （パトラッシュ／ラスカル／アメデオ） 各￥780
●エフクルー

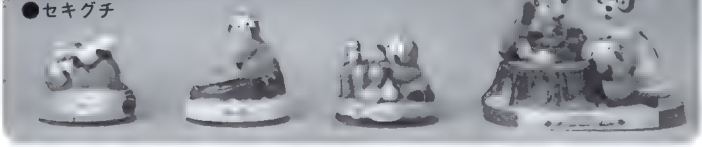


ハンドパペットぬいぐるみ
（アメデオ／ラスカル）
各￥1500
●セキグチ

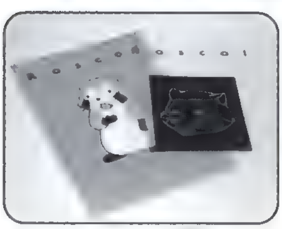
ぬいぐるみオルゴール
バスケット￥3800／リンゴ￥2500
●セキグチ



ラスカルオルゴール 左からミルク・カヌー・かぼちゃ ￥2200
世界名作劇場オルゴール ￥3800
●セキグチ

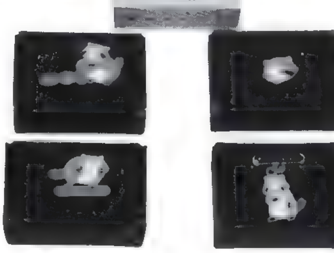


ステーショナリー ●ジェイエフエー

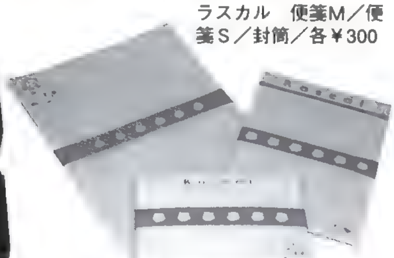


クリアファイル
全2種
（2色／4色）
各￥300





ラスカル
ピンバッチ
全4種
（クッキー／フェイス
ラスカル／あめ）
各￥300



ラスカル 便箋Ｍ／便箋Ｓ／封筒／各￥300



ポーチ ￥500
ピルケースＳ ￥300



カフェオレボウル ￥800



マグカップ ￥700



ラスカル
ノート￥300
メモ帳￥250

お菓子





ラスカル　ミニチョコクッキー／ミニアーモンドクッキー／ミニクランチチョコ　各￥350
●長登屋



ラスカル　プチクッキー／世界名作クランチ
各￥700
●長登屋



ラスカル　ケーキ　￥700
●長登屋



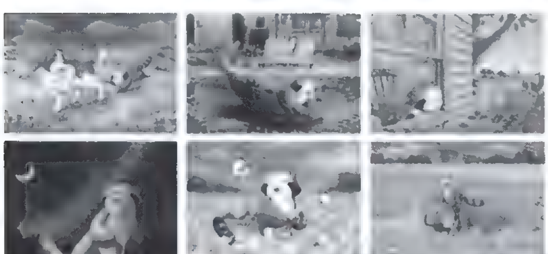
ラスカル人形焼きあん／カスタード
各￥700
●バンプレスト

ポストカード ●ドリームズ・カム・トゥルー

ラスカルファンタジー
全8種　各￥150

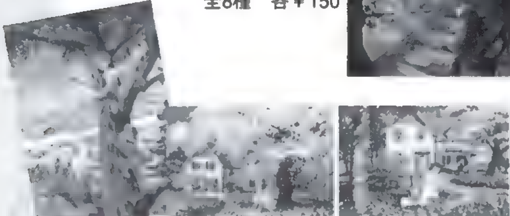






ラスカルポストカード
全8種　各￥150





ポストカード
トム・ソーヤーの冒険／赤毛のアン　各￥150

食器 ●たち吉

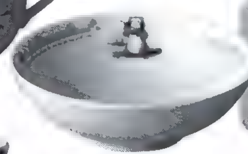
※和食器シリーズは近日発売予定

ケーキ皿　￥1000
ティーポット　￥2800
カップ＆ソーサー
￥1400（多種セット商品もあり）

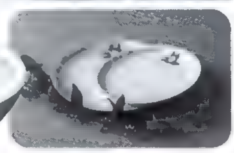




マグカップ
￥800



ボウル　￥1000



ミート皿　￥1300
ケーキ皿　￥1000



裏面の絵柄

湯呑（青）
￥600



飯茶碗（青）　￥600

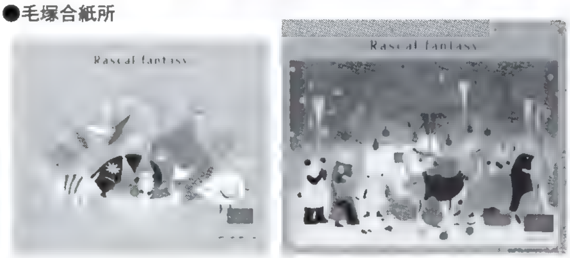


ポット　￥2300

ジグソーパズル



ラスカル ジグソー108ピース 全3種（湖／風のにおい／オール）各￥1000
●毛塚合紙所



ラスカル ジグソー300ピース 全2種（スプリング・カラー／朝市）各￥1400
●天田印刷加工

書籍

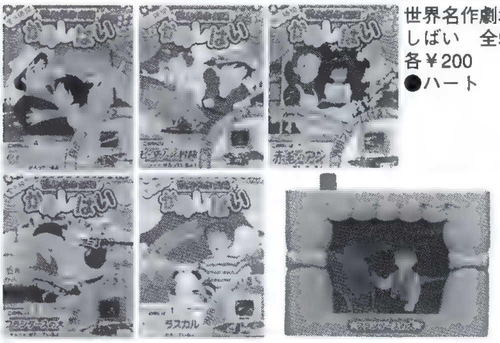
絵本アニメ　世界名作劇場　全24巻　各￥1400
（全24巻セット価格￥33600）
●ぎょうせい



その他



コロンブス　世界名作劇場Part1コレクション　全10種＋シークレットキャラクター　各￥200
●ユーメイト



世界名作劇場かみしばい　全5種
各￥200
●ハート



薬用ボディソープ（300ml）￥500／薬用ボディソープ詰替用（270ml）￥350／薬用ハンドソープ（250ml）￥450／薬用ハンドソープ詰替用（230ml）￥330／薬用石鹸（100ml）￥200（※ギフトセットもあります）
●クロバーコーポレーション

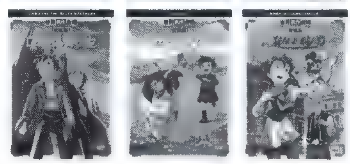
DVD

世界名作劇場・完結版　全23作品　各￥2800
●バンダイビジュアル



劇場版フランダースの犬ビデオ　￥2800
●バンダイビジュアル

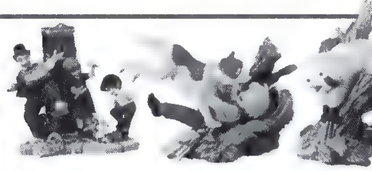
劇場版MARCO母をたずねて三千里DVD　￥5000
●バンダイビジュアル



限定レアグッズ

缶入りピンバッジ



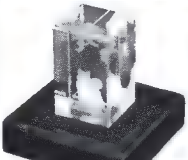


ミニヴィネットシリーズ　世界名作劇場1
全5種
●ムービック

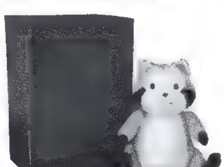
ミニヴィネットシリーズ
世界名作劇場セピア　全8種
●ムービック



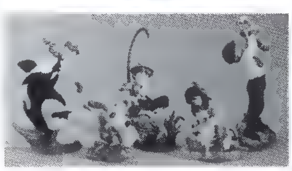




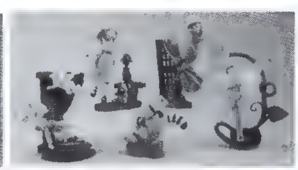
フランダースの犬
クリスタル



モヘヤぬいぐるみ（箱入り）
●セキグチ



ミニヴィネットシリーズ
世界名作劇場3　全5種
●ムービック



ミニヴィネットシリーズ
世界名作劇場2
全5種
●ムービック



ドラマチックコレクションシリーズ　世界名作劇場　全8種
●カバヤ

限定ぬいぐるみ（左から順に）
フェアリーラスカル（2003春限定）スノボラスカル（2001北海道キロロ限定）／三味線ラスカル（2003青森イベント限定）／マドラスラスカル（2002夏限定）／かいすいよくラスカル（2002夏限定）／ペアルックラスカル（2001ショップ限定）／さくらんぼラスカル（2002山形イベント限定）／キャンプラスカル（2001北海道キロロ限定）／麦わらラスカル（2001ショップ限定）サンタラスカル（2000クリスマス限定）



名作インタビュー

信じていれば、夢は必ずかなう――。
それを教えてくれた「世界名作劇場」が終了し、はや6年。
いまだに名作シリーズを愛し、懐かしむファンは多い。
さらに多チャンネル時代を迎えた昨今では、
再放送によって、新たな若いファンも誕生している。
その「世界名作劇場」を生み出し、支えてきた多くのスタッフの中から
中心的役割を果たされた方々に、当時の思い出をまじえながら
シリーズ復活に向けての意気込みなどをうかがった。

本橋浩一（日本アニメーション社長／製作）
佐藤昭司（企画）
中島順三（プロデューサー）
楠葉宏三（監督）
宮崎　晃（脚本）
関　修一（キャラクターデザイン）
佐藤好春（キャラクターデザイン・作画監督）
藤野貞義（音響監督）

日本アニメーション社長／製作

もとはし こういち

本橋浩一

Profile

1930年北海道生まれ。中央大学法学部卒業後、53年学陽書房入社。編集に携わる。60年に毎日新聞社系列の聯合広告で社長をつとめたほか、70年の大阪万博で電力館の担当プロデューサーに。72年日本アニメーションの前身であるズイヨー映像株式会社を設立、社長に。75年社名を日本アニメーションに改称。社長として現在に至る。

インタビューの筆頭に登場するのは、日本アニメーション株式会社の社長・本橋浩一氏。「世界名作劇場」への熱い思いを社長の立場から語っていただいた。

愛と感動を与えたいと名作シリーズを作り続けてきた

——日曜夜7時半の枠で、世界名作劇場をやろうとした意図はどのあたりにあったのでしょうか。

本橋：1969年に『ムーミン』を作りました。はじめはとにかく子供たちのためになるものを、という意識で作っていましたが、そのうち世界文学全集があるじゃないか。あれを片っ端からやってみようという話になりました。その第1作がズイヨー時代の『アルプスの少女ハイジ』です。その後、日本アニメーションに改称して『フランダースの犬』を作り、全部で23本になりました。その間テーマにしていたのは人間愛——子どもたちに「愛と感動」を与えたいと作り続けてきました。

初期の頃は、私とスポンサーの会長さんで次に何をやるか決めていました。特に『赤毛のアン』まで一社提供してくれたカルピスの会長は、「企業は社会に貢献すべし」という考えを持つ方だったので、「子どもの文化を大切にする」という私どもの考えを理解してくれましたね。その方とのことで印象に残っているのは『フランダースの犬』の最終回です。最終回に近づくと全国から「ネロとパトラッシュを死なせないで。死なせたらもうカルピスは飲まない！」という投書が、日本アニメにも局にもわんさか来ましてね。会長にどうしますかと相談に行くと「原作通りに死として描いてください」と。驚いて「いいんですか？」と聞き返しました。すると「主人公と犬は天国で幸せになります」と。

実は会長はクリスチャンで、クリスチャンの考えだと昇天は永遠の命のはじまりですからね。ただし「天に昇る場面はフルオーケストラでやってください」という注文を出され、かなりの費用を出していただきました。結果的に歴史に残る作品になりました。

うちの連中に言っているのは、昔の武士じゃないけど、名作復活のためには座して死ぬのを待つより動こうや、と……。

——その後、名作シリーズは23年続くわけですが、社長としてどんなご苦労がありましたか？

本橋：社長の立場で考えると、何より製作費の問題に苦労しました。いいものを作るには費用がかかります。予算は限られているにも関わらず、制作する方はいいものを作りたいから作画枚数を増やしたりして、とことん納得できるまで頑張る。そういうことは大切なんですよ。うるさく口を出したらいいものはできない。

ただ、当然そろばんが合わなくなってくるわけで、それをどうやって補填するかということを考えましたね。だから、かなり初期の頃から補填の財源として海外に販路を求めました。名作シリーズの原作は欧米圏のものが多いので、必ず需要はあると思い、カンヌで開催される国際的なフィルムマーケットに出したりしました。おかげさまで多くの国の方から高い評価をいただき、契約を重ねてきました。制作当時は赤字でも、今では世界各国に輸出されて大きな財産になっているわけです。

我々の思いを理解してくれる企業のトップを探すことから……

——現在、名作シリーズ復活に向けて、具体的にどんな働きかけをなさっていますか？

本橋：陰湿なイジメやわが子を虐待するような殺伐とした時代だからこそ、名作シリーズのような人間愛を描いた作品が必要だと痛感しています。しかし、今は親が忙しすぎて、子どもに何を選んでやったらいいのか考えるゆとりがなさすぎますね。ただ、最近は昔のスローな時代のよさを見直そうという動きも出てきました。そういう機運がもっと盛り上がると、名作シリーズ復活の手がかりになりそうです。

また、名作シリーズを復活させるためには、我々の思いを理解してくれる企業がどうしても必要になるわけです。新しい企業のトップの中に、将来をになう子どもたちに文化的貢献をしようと考える方たちが出てくると、うれしいですね。私が今うちの連中に言っているのは、昔の武士じゃないけど、座して死ぬのを待つより動こうや、と…。いろんな企業の経営者の方たちに、盛んに働きかけを行っています。手ごたえはかなりありますね。私も歳だけれど、名作シリーズ復活に向けて頑張ろうと思っていますから、命のある限り（笑）。

実は、中国最大の国営テレビ局である中国中央電視台（CCTV）と共同で、『レ・ミゼラブル』を原作としたテレビアニメ『少女コゼット』を制作することが決定しています。全52話の予定で、今後、うちからスタッフを派遣して、日中で作業をわけあいながら作っていきます。現在、日中同時放映を目指して、主要なテレビ局に売り込みをはじめているところです。楽しみに待っていていただきたいと思います。

（03年5月12日　銀座にて）

企画
さとう しょうじ
佐藤昭司

● Profile ●

1938年、東京都生まれ。62年に日本大学芸術学部映画学科卒業。63年にテレビ動画（株）入社。66年に動画技術研究所設立。69年に東京ムービー（株）入社。『巨人の星』『アタックNo.1』制作。72年にズイヨー映像（株）入社。『山ねずみロッキーチャック』『アルプスの少女ハイジ』制作。75年に日本アニメーション（株）入社。『フランダースの犬』以後、日本アニメーション作品の企画担当として現在に至る。

名作シリーズ23本すべてに関わったのが、企画の佐藤昭司氏だ。はじめてインタビューに答えるという佐藤氏に、名作の企画を立てるポイントについてうかがった。

世界に出かけて面白い原作を探し 3本にしぼって、プレゼンする

佐藤：『フランダースの犬』の頃は企画担当がいなくて、僕もプロデューサーに近い仕事をしていてね。ただ局や代理店、スポンサーとの打ち合わせで「来年は何やる？」という話の流れで、自然に企画の仕事も兼ねるようになった。ただ、最初の頃は、うちの本橋社長とスポンサーとその他の限られた人たちで、次に何をやるか決めていました。もちろん候補作は僕らが出してたんだけれどね。企画担当としてちゃんとやったのは『トム・ソーヤーの冒険』が最初だったかな。

中でも特に入れこんだ作品が『ロミオの青い空』だね。ブックフェアで原作の『黒い兄弟』を見つけて、惚れ込んだ。

―具体的に企画のお仕事というのは、どういうことをなさるんですか？

佐藤：まずは次の候補作を探すところからはじまります。だから世界の児童文学を読み漁った。あとは、イタリアのボローニャで開かれる子どもの本のブックフェアと、ドイツのフランクフルトのブックフェアには毎年出かけたね。確か『牧場の少女カトリ』や『ロミオの青い空』の原作もそこで見つけた。ポイントはアニメ化できるのか、シリーズになるのか。ハウス食品がスポンサーのときは「家族の物語を…」という要望があったから、それにふさわしいものを探しました。それから「こんな本がありますよ」と人に薦められることもある。名作アニメを作っていると話すと「それならこれどうです？」と教えてくれたり。『アンネット』はスタッフの知り合いの牧師さんが教えてくれたんだ。

面白い原作が集まったら、いよいよ具体的に企画を立てていくわけだけど、はっきりいって知名度があるものの方が視聴率が取れるというのはある。それをふまえて、1年間もつ内容か、キャラクターが魅力的かなど吟味して、毎年10～15作くらい出す。そこからフジテレビのプロデューサーが5本ほど選んで、それを持ち帰って最終的に3本ぐらいにしぼる。それを企画会議の席でスポンサーにプレゼンテーションをする。各作品のあらすじと1年間の展開、面白さのポイント、主要キャラクターの絵も描いてね。そのうえで協議して決めるわけ。

でも、そのとき選ばれなかった作品もそれでおしまいというわけではなく、翌年また候補作として出すことも。時代性とか、前の作品との関連とか、いろんなことを考えながら選んでいくから、一度ダメでも次は「これで行こう」となる可能性もある。たとえば『ブッシュベイビー』なんか、92年の放映だけど、その10年くらい前から企画には何度ものせてきた。アフリカが舞台で、しかも珍しい動物が出てくるからね。いつかやりたいと思ってあきらめずに何度も出していたわけよ。それが92年になって、やっと日の目を見た。そういうこともあるの。

企画を通すコツは作品を好きになること ありったけの情熱をこめてプッシュする

―中には知名度のない原作の企画も通してきました。

佐藤：やはり作品を自分自身一番好きになるということかな。5つあったら「佐藤さんはコレをやりたいんですね」と相手に思わせるように仕向ける（笑）。情熱をこめて、それをプッシュするわけ。お話はこうで、こんなキャラクターで、展開はこうなって、とにかく面白いんですよ、と情熱を持って語る。中でも特に入れこんだ作品が『ロミオの青い空』だね。ブックフェアで原作の『黒い兄弟』というのを見つけて、惚れこんだ。フジテレビの清水プロデューサーに、強引に「次はこれで！」とお願いしたら、清水さんが「『黒い兄弟』というタイトルがよくない」とおっしゃるので、「じゃあ、タイトルを変える。中身は絶対に面白いんだから！」と力説した。知名度は全然なかったけど、僕もいつまで企画の仕事やっていられるかわからないから、これだけは絶対やりたいと。…で、大阪のハウス食品まで行って「ぜひこれで！」と頼みこんだの。だから、企画が通ったときはうれしかった。

―名作シリーズで「この作品はやりたかった…」というものがありますか？

佐藤：『レ・ミゼラブル』や『秘密の花園』『オリバー・ツイスト』とかね。これらはいつも企画にのせていたんだけど、話が暗いなどの理由ではじかれていた。でも、『レ・ミゼラブル』など主役をコゼットにすれば、きっと面白いものができると思っていたら、今度、中国と合作することになってよかった。それから『十五少年漂流記』。これはスペシャルで1回やったけど、やりようによってはすごく面白くなると思うの。ほかにもやりたい作品はまだまだある。早く名作シリーズを復活させたいね。

（03年5月1日　日本アニメーションスタジオにて）

プロデューサー

なかじまじゅんぞう

中島順三

● Profile ●

1938年、東京は向島の生まれ。日本大学芸術学部卒業後、テレビ・映画の編集助手やコマーシャルフィルムの制作・演出を経験した後、アニメーションの世界へ。編集として『海底少年マリン』などを手がける。その後、ズイヨー映像株式会社で『山ねずみロッキーチャック』『アルプスの少女ハイジ』などに携わり、日本アニメーション株式会社へ。日本アニメーションでは名作シリーズの他、『未来少年コナン』などのプロデューサーを担当。現在は、音響映像システム（株）の代表取締役。

多くの作品にプロデューサーとして関わってこられた中島順三氏。長い月日の中で続けられた現場とのやりとりや、初期のころの思い出について語っていただいた。

作品の立ち上げに深く関わるプロデューサーという仕事

―どのような経緯で、アニメーションのプロデューサーになられたのでしょうか？

中島：たまたま、そこにいたからです。制作現場の担当としてスタートしました。日本アニメーションが最初に作品を立ち上げたときには、制作責任者という形で関わりました。

―実際の制作過程で、プロデューサーの方が関わられるのはどんな作業ですか？

中島：会社として次に何を作るのかが決まったとき、その提案のためにテレビ局や代理店と話をします。方向性が決まれば、そこで初めてシナリオや歌やキャラクターを誰に頼むのかと動き出します。監督にも相談してね。

―一番苦労されるのは、どんなことですか？

僕の持論として、「偶然」ではうまくいかないと思ってます。

中島：みんな苦労だけど、苦労と面白いのがくっついているというか。僕の持論として、アニメーションは「偶然」ではうまくいかないと思ってます。写真なら偶然キレイな富士山が撮れることはあるけど、アニメーションは「こういう富士山を描いてください」という要求をして描いてもらわなければならない。作品を立ち上げる段階で、考えたり検討する時間が十分に必要でしょう。

―原作は、どういう風に選んでいたのでしょうか？

中島：『フランダースの犬』のときはスポンサーの方から「この作品を」という話があり、『ロミオ』のときは企画の人間が海外のブックフェアで見つけてきて、まだ日本では翻訳できてないのを、翻訳してもらったり…いろいろですね。『アンネット』のときは、美術の井岡雅宏さんの妹さんが北海道で教会に通っていて、そこの牧師さんから「お兄さんがそういうものを作っているなら、ぜひこれを…」という話がありました。『セーラ』のときは「また古典をやろうか」という話が出て、作品の候補を選んでテレビ局と話し合いましたね。

他とは違うアニメを目指して時間と戦う制作現場

―シリーズ初期の制作現場は、どんな感じでしたか？

中島：最初はもう本当に大変でしたよ。新しい会社でしたから、「本当に支払いは大丈夫か」などと言われたこともありました。集まったスタッフは他のアニメとは違うものを作ろうと思っていたのに「そういうものはアニメにしたって面白くない」と批判されたりもしました。制作が始まると時間との戦いなんだけど、最初から、監督は一人でやること、シナリオもできるだけ一人と決めていたので、大変でした。シナリオからアフレコまで1本作るのに13週くらいのスケジュールで見ると、放送の始まる頃には、だいたい13～15本くらいは仕上げておきたくて。でも、やっぱり脚本を1年間一人でやるのは相当きつい。ストックも13週だったのが、いつの間にか10週に…と、だんだん減っていきました。

―それまでアニメをやられてない方を脚本に起用したのは、アニメ色に染まっていないという理由からですか？

中島：そうですね。やっぱり初期の頃は「アニメ＝まんが」という感じで低く見られていて、脚本にしても音楽にしても、映画の仕事をしていた方は「なんで俺が？」というのがあるんですよ。『アン』の音楽を誰に頼もうかというときにも、僕が三善晃さんの名前を出したら、日本コロムビアの人に「やってくれるわけないよ！」と言われた。でも、とりあえず聞いてみたら「3曲だけなら」と引き受けてもらえました。脚本に関しては、逆にアニメをやっている人だと「アニメはこういうもの」という感覚で書いてきてしまうところがあって、その辺が僕らとのギャップでした。それで「映画をやっている人で、誰か子ども向けの作品に興味のある人はいないかな？」って、人から紹介してもらっていましたね。そういう人たちとの方が、考え方が合いましたね。

―初期の頃と後期の頃では、制作現場の体制などに違いはありましたか？

中島：最初の頃は、ほとんど休みなしで作りました。『ペリーヌ物語』は全53話だったし。シリーズの後期になってくると、ナイター中継や特番の編成でポツポツと抜けてきて、一年間の放送でも50本ではなくなりました。昔は、みんなほとんどスタジオに住み込み状態だったけど、演出も脚本も作画監督も、一人でやるのはやっぱり大変です。今はそういう作り方はできないし、やらなくなりましたね。

―忘れられないクリエイターは、どなたですか？

中島：すぐに思い浮かぶのは近藤喜文さん。『アン』の終わりの頃はもう病気になられていて、働けるような状況

じゃなかったんだけど、代わりはいないし…。僕らも無理に「仕事して」とは言えないし、そのときに近藤さんが「終わりまでやりたい」と言ってくれて、言葉では言えないくらい嬉しかったというか…。病気のことも心配なんだけど「よかった。やってくれるんだ」という感じは、正直ありました。並み大抵の仕事じゃないですから。

――作品に愛着を持ったスタッフが多かったんですね。

中島：みんながそういう気持ちでいたから、その雰囲気は画面を通して伝わっていたと思いますね。「こうしたい」ということは山程あっても、時間がないから泣きの涙で手放してもらって…。でも、出来上がってからまた「あそこはこうすれば…」と悩んでいて。そうすると、直したい演出サイドと進めたい制作サイドで、ケンカ騒ぎになりかけたこともありました。

――中島さんはロケハンには行かれましたか？

中島：行きました。ロケハンはだいたい場所が限定されているんだけど『ラスカル』のときは、具体的に地名がどこなのかわからない。ただ、原作に登場するコシュコノング湖を目当てに地図で探して行きました。そしたら、原作者の住んでいた家があって、物語に出てくる教会もあって…。でも、その家を見ていたら怪しい連中だと思われ、パトカーが来ちゃいました。事情を説明したら、その留守だった家の人を連れてきてくれて、中を見せてくれたので、スケッチしたり写真を撮ったりしましたね。やっぱりロケハンに行ったと行かないでは大違いなんですよ。その物語の世界を、実際に感じるという意味では。キャラクターの生活の部分を、間違いなく描きたいというのがありましたからね。

いつまでも色あせない魅力を持つ名作シリーズ

――個人的にお好きな作品はありますか？

中島：『赤毛のアン』かな。視聴率も思っているほどいかず低かったし、オープニングの歌もあまり気に入ってもらえなかったですね。ただ、時間が経過して大好評になりましたけど。

――印象的なキャラクターというと誰でしょう？

中島：自分も歳をとっていたせいか『アン』のマシュウとマリラですね。北原文枝さんという役者の声も含めて、あの作品はマリラで引き締まっている感じがします。

――名作シリーズは主人公のパートナーとして、動物のキャラクターがよく出てきますよね。

中島：それはマーチャンダイジングを意識してやっていました。登場するときも、脚本では書かれていなくても絵コンテで加えたり、印象的な使い方や見せ方を工夫していましたね。

――そういうキャラクターは現在でもフィギュアなどで人気者ですが、こうした状況は予想できましたか？

中島：作っている当時、何年たっても人気が保てるかということは考えたこともないけど、最初から日本だけでなく、作品を海外で売ることは考えていましたから、日本人にしかわからない要素が入らないように注意していました。たとえば、キャラクターが何か失敗をして、つい頭に手をあてたりする動きとかね。国によって、それはありえないリアクションですし。あと、脚本を作るとき、いわゆるパターンとしての悪人は基本的に作りたくないというのがありました。本当に嫌な奴は『フランダース』の金物屋くらいじゃないかな。それ以外は、見ている人にとっては嫌な奴でも、みんなそれなりの理由があって、嫌な奴をやってますという感じでね。そういうことを考えながら、脚本は作っていました。あと、あまり汚い言葉は使いたくないと意識しています。

――今、CS放送などで名作が見られる機会も増えていますが、その状況についてはどう思われますか？

中島：一言で嬉しいです。もともと原作が、読み継がれている魅力的な話ということもありますけど「やってることがマンネリじゃないの？」と言われたこともありましたから。僕は「偉大なるマンネリ」だと意識しています。こういうことは古くならない。登場人物の気持ちが見ている人に伝わればうまくいくと、いつもそう思っています。僕は絵を描くわけじゃないし、何もしないので、一緒にやってくれたスタッフの人たちが頑張ってくれたということに尽きるんですけどね。

――もし、これから新しい名作シリーズを作るとしたら…というお話はあるのでしょうか？

中島：名作シリーズは「終わった」と言われているけど、僕らとしては「お休みしている」という感じ。だから、テレビ放映が終わったときから、再開することを考えている。今、アニメーションはすごく本数が増えているけど、10年後、20年後にも見たくなるような作品はほとんどないでしょ。もったいないと思うね。だから、名作は今休んでいるけど、やりたい人はいっぱいいるし、見たい人もいっぱいいると思っている。

――今、準備を進めている作品はあるんですか？

中島：それは言えないけど、自分で「あの話いいな」と思ったら、いつやれるかはわからないけど、国際部に頼んで原作権を押さえる手立てを考えたり、誰が原作権を持っているか調べたり、そういうことはやってます。

――中島さんにとって、名作シリーズでのお仕事はどういうものとして残っていますか？

中島：自分にとっては、非常にいい仕事に出会えましたね。そう思います。子どもの頃から母親に叱られながらも映画ばっかり観ていたんですけど、こういう映像の仕事をしようと考えたことはなかったんですよ。一時は、もうアニメーションはやだなと思ったこともあったし…。でも、それをこうして20年以上も長い間作る側にいられたことを、感謝もするし幸運とも思っています。

（03年4月22日　新橋にて）

僕は「偉大なるマンネリ」だと意識しています。こういうことは古くならない。

監督

楠葉宏三

くすば こうぞう

● Profile ●

1947年、愛媛県生まれ。日本アニメーション株式会社演出部に在籍。同社の『世界名作劇場』シリーズの監督を担当。主な作品として、83年『アルプス物語　わたしのアンネット』、86年『愛少女 ポリアンナ物語』、88年『小公子セディ』、91年『トラップ一家物語』、93年『若草物語ナンとジョー先生』、95年『ロミオの青い空』、96年『家なき子レミ』、99年劇場版『MARCO』など多数。

名作シリーズ全23本のうち、初期のころから演出助手として参加し、監督となってからは実に7本もの作品を手がけた楠葉監督。監督としての苦労や思い出を語っていただいた。

『アン』で高畑さんについたことが演出家としての大きな転機となった

―はじめて名作シリーズに関わるようになったころのことからお話しいただけますか？

楠葉：名作シリーズは『ペリーヌ物語』で演出助手として関わったのが最初です。そのときの演出の斉藤博さんとは前からおつきあいさせてもらっていたので、その関係でやってみないかと…。斉藤さんからも多くのことを学びましたが、一番影響を受けたのは『赤毛のアン』のときについた高畑勲さんですね。それまでは「絵」主体の演出をしていましたが、高畑さんと出会ってそうじゃないんだなと…。それまでも高畑さんの『ハイジ』や『三千里』を見ていて、すごいなぁと思っていましたが、そばで彼の仕事ぶりを見て、さらにショックを受けました。彼が作ろうとするものは「絵」じゃなくて「映像」なんですよ。高畑さんとご一緒したのは『アン』1本だけですが、その1年間というのはすごく勉強になりました。アニメの作り手として意識改革をしてもらいましたね。

高畑さんとご一緒したのは『アン』1本だけですが、その1年間というのはすごく勉強になりました。

とはいえ、高畑さんは実技指導なんてしてくれませんから「楠葉、お前は図々しい」なんて言われながら、そばにくっついて彼のやり方を見て、覚えて…。まあ、高畑さんだけじゃなく、昔の監督はみんな手取り足取り教えてなんかくれませんでしたけどね（笑）。

―名作の初監督作品は『わたしのアンネット』ですね。かなりの意気込みだったのではないでしょうか？

楠葉：名作シリーズでは確かに『アンネット』が初監督なんですが、実はその前に『フーセンのドラ太郎』という作品の監督をしていましてね。日本アニメーション史上はじめて13本で打ち切りでした。それまで日本アニメーションの作品は高視聴率を誇っていたんですが、私がはじめてそれを引っ繰り返しまして…。それを1本やってから『アンネット』の監督をしたので、かなりのプレッシャーはありました。しかも名作という看板番組ですしね。でも、一方ではこの作品を成功させて見返してやるぞ、みたいなところもありましたね。

ただ、作品に対するプレッシャーはありませんでした。確かに宗教色の濃い、難しい話ではありましたがね。ルシエンが犠牲的精神でアンネットを助けていくので、ルシエンが主人公みたいに見えますが、私自身はルシエンを拒絶しつづけたアンネットが、最後にルシエンを許すところに神が存在するのだ…と解釈し、信じていました。でも、そのキリスト教の宗教色を前面に出すときっと視聴者に受け入れられないと思い、ルシエンが主人公みたいな描き方をしたんですよ。

…で、脚本があがってくると、アニメとして表現するには少し難しいかなというところがあって、結構手を入れましたね。悩んだときは原作に立ち返る…みたいな。

まあ、私も生意気だったんでしょう（笑）。それを許してくださった脚本家の吉田憲二さんもすごい人です。

スタッフにイメージを伝え、働きやすい環境をつくるのが、監督という仕事

―ところで、アニメーションの監督・演出家というのは、やはり絵が描けた方がよいのでしょうか？

楠葉：素材が絵である以上はやっぱり描けた方がいいですね。絵コンテによって作画がなされるわけですから、監督のイメージを絵で伝える力があると仕事がやりやすくなります。どこからカメラが入って、どういう表情で…その程度のことは描けるぐらいの力はほしいですね。でも、あまりきれいに描く必要はありません。きれいに描きすぎるとかえってアニメーターの自由な発想を束縛してしまいますから。そこは微妙に難しいところですね。要は、演出家の伝えようとしていることがスタッフにわかればいいんですよ。

実は、私も絵が下手で、アニメーターにバカにされたことがありました。このやろうと思って、関修一さんの絵をなぞって勉強したものです。アニメの制作ってチームワークですからね。監督と作画スタッフの関係がよくないと、作品自体がおかしくなっちゃう。それが自分のコンテの絵がわからないのが原因なら、こちらが勉強しなければならないわけです。

―名作と他のアニメでは、作っていく上で何か違いがあるのでしょうか？

楠葉：いえ、作る姿勢としては基本的には変わりありませんね。与えられた条件のもと、全力で作るのは同じです。ただ、名作は日本アニメーションの看板番組ですから、ぜいたくができますね。腕のいいアニメーターをそろえ、いい声優さんもそろえて…。音楽も名作の場合は生録りですから当然費用がかかるわけです。

すべてのクリエイターが一番いい仕事ができる環境をつくりだすのも、監督の仕事だと思うんです。

脚本家も結構、有名な方が多かったですね。宮崎晃さんとか、映画・実写の方面で活躍なさっている方がお書きになりましたから、ずいぶん勉強させてもらいました。今の脚本家はパソコンで原稿を書く方がほとんどですが、昔は原稿用紙に手書きでしてね。ある時、宮崎さんの脚本を見ると、セリフが線で消されて横に書き直されているんですよ。それを絵コンテにするとき、消した意味を考えてしまうんですよね。「なんでこのセリフを消して、こっちに書き変えたんだろう…」と。そういうのは演出家としての訓練になりましたね。

――名作の場合、監督はそういうスタッフの人選にも関わっていたんですか？

楠葉：スケジュールが厳しかったですから、監督を引き受けたときにはもうメインスタッフは決まっていることが多かったですね。ただ、声優さんについては主役は新人というのが名作の基本でした。その中で印象に残っているのは山田栄子さんです。山田さんは『アン』がデビュー作。正直、最初はそんなに上手じゃなかった。でも、彼女のすごいところは一日一日よくなっていくんですよ。彼女の持ってる感性というか表現力というか、抽象的な言い方をすれば「本物」だったんですね。私だけじゃなくみんながそう認めたからこそ、名作シリーズに主役脇役問わず、あれだけ多く出演することになったのでしょう。

作画は基本的に社内でやっていましたね。そのためにきちんと作画できる人を育てていました。いま、名作出身のアニメーターで有名になっている人、多いですよ。佐藤好春さんなんか、その最たるものです。

――監督という仕事には、それらクリエーターを束ねていく能力も必要とされますよね？

楠葉：監督という仕事の一番はこんな作品を作りたいというイメージを各スタッフに伝えることにあるんですが、美術なら美術、作画なら作画、声なら声、それらすべてのクリエイターが一番いい仕事ができる環境を作りだすのも、監督の仕事だと思うんです。不思議なもので、スタッフ全員が一方向を向いて、なおかつ楽しく作っていると画面がいきいきしてくるんですね。いい結果がでるんですよ。だから変な言い方ですが、スタッフを束ねていくというより「一番弱いところを補強する」みたいな言い方の方がピッタリですね。弱いところがあるとどうしても全体のレベルが低くなるので、スタッフの中からも「これじゃあ…」みたいな不満が出てくる。視聴者に対しても失礼です。

補強というのは、具体的には作画なら作画のスタッフとよく話し合い、レベルを上げるための解決策を見つけるということです。作品という容器にヒビや欠けた箇所ができないようにして、もしできてしまったら急いで修復するわけです。だから監督というのは、これは私の場合ですが、芸術家というより職人ですね。

将来をになう子どもたちに向けて責任の持てる作品を作ってきた…

――名作シリーズが世の中に残した意義については、どうお考えですか？

楠葉：実は以前、BSフジの企画で、名作シリーズ23本を各90分に編集したものを作ったんですよ。その演出をやるために全作品を見直したんですが、はじめはVHS3倍速で見ればいいかと思っていたのに、自分でやった作品も含めてやっぱり見ちゃいますね。みなさん、本当にうまく作られていて、感心してしまいました。そして改めて『アン』は最高峰だと思いましたね。名作は今の時代のテンポからズレてるとか言われるけれど、それでも作っている側が見入っちゃうんですからね（笑）。基本としてはいつ、どんなに時間がたって見直してみても胸に残る作品、それがいわゆる「名作」でしょう。決して自己満足じゃないと思うんですよ。結局、時代が変わっても胸に響くものは同じなんです。「人間愛」「家族愛」というテーマはいつの時代でも感動的です。そんないつまでも心に残る作品を、日本アニメーションは23年間もの長い間作り続けてきたわけですからね、これはすごいことですよ。

――将来をになう子どもたちに見せる作品の作り手として、何か責任を感じていらっしゃいましたか？

楠葉：ええ。私なんかはアニメは子どもの情緒を育てる役割があると考えていますからね。殺伐とした世の中だからこそ、いい作品を作りたいと思っていました。子どもに対してウソをつかないというか…。過激な表現でおどかして、やりっぱなしで責任はとらないって作り方は無責任だと思います。

視聴者の方からもよく「悩んでいるときに名作に出会って生き方に影響を受けた」という内容の手紙をいただきます。視聴率が伸びなくて作り手の方が落ち込んでいるとき、そういうファンレターがくると、「この子のためだけにでも作ろう！」という気になりますね。

――名作シリーズを復活してほしいという声が多くありますが、楠葉監督はどうお考えですか？

楠葉：いろいろ条件の厳しさはあるけど、やっぱり復活させたいですね。願わくば、復活第一作は私の手でやりたいと思っています。

PRになりますが、今（5月現在）北海道テレビの開局35周年記念番組（※注）として、スペシャルを1本制作しているんですよ。脚本島田満、キャラデザイン佐藤好春、監督楠葉…の名作トリオで、主人公は北海道テレビのマスコットキャラクターです。私の希望もあって、名作の路線で作りたいと思っています。それが一つのきっかけになるといいですね。

（03年5月1日　日本アニメーションスタジオにて）

（※注）『onちゃん夢パワー大冒険！』は03年8月5日（火）夜7時から北海道ローカルで放映予定

脚本

みやざき あきら

宮崎 晃

● Profile ●

1934年、東京都生まれ。61年に松竹大船撮影所に入社。山田洋次監督『男はつらいよ』シリーズ第1作から助監督。脚本を共同執筆。5本目の『望郷篇』と『家族』でキネマ旬報脚本賞。71年『泣いてたまるか』75年『想い出のかたすみに』『友情』で脚本・監督。77年『あらいぐまラスカル』からアニメーションの脚本を手がけ、『ペリーヌ物語』『トム・ソーヤーの冒険』『南の虹のルーシー』『牧場の少女カトリ』『愛の若草物語』『ブッシュベイビー』など多数。現在は日本大学芸術学部講師。

『あらいぐまラスカル』をはじめとして、7本の脚本を書き下ろした宮崎晃氏。人間を描くことでは定評のある宮崎晃氏に、名作シリーズの思い出を語っていただいた。

実写で撮っても大丈夫なリアリティのある脚本を目指した

──まず、宮崎さんが名作シリーズに参加するようになったきっかけから教えてください。

宮崎：僕は松竹にいて映画の脚本を書いていたんです。その後テレビドラマも書くようになりました。

ある時、友人がアニメーションの脚本を書く気はないかと言ってきたんです。実はその友人の友人がマネージメントをしている何人かの売れっ子の脚本家に持ち込まれた話だったが「忙しい…」「アニメなんか書けるか」と断られたらしいのです。それで僕のところへ…。

確かにあの当時、アニメは映画やテレビドラマより一段低いものと見なされていたんです。僕はヒマだったし、アニメは決して嫌いではなかったから、「とにかく原作を読ませてください」ということになりました。それが『はるかなるわがラスカル』というノンフィクションだったんです。読んでみると、とても面白い。

アニメに関わったことのない人間に任せてみようと思ったのは、斬新なものを作りたいという思いがあったからでしょう。

でも、ここで急に不安になりました。少年の飼うあらいぐまの生態が生き生き描かれていて、ノンフィクションとしては優れたものではあるけど、ドキュメンタリーならともかく、はたしてアニメーションとして面白いものになるかなって。

プロデューサーの中島さんとディレクターの遠藤さんにお会いした時に真っ先にたずねたのはこのことでした。遠藤さんは「大丈夫です。絶対に面白くなります」と自信たっぷり答えてくれました。それで僕は、初めてアニメの脚本を書く決心をしたんです。

──子ども向けのアニメーションの脚本を書くということについては何か意識なさいましたか?

宮崎：いいえ。僕はアニメの作り方なんかわからないから、作風を変えることもできないし…。ただ、題材からいって、デフォルメされた人物像とか誇張された表現を求められることはないだろうと思って、遠藤さんに「日常をきちっと描くということでいいんですね?」と聞くと「そうです」とおっしゃるから、ホッとして、実写で撮っても大丈夫な脚本、つまりリアリティがある脚本を書こうと考えたわけです。と同時に、子ども向けだからって程度を下げて書こうなんて意識もなかったですね。

──『ラスカル』1、2話を読んだ遠藤監督が、当時は演出助手をしていた斉藤博さんに「これが本当の脚本というものだ!」と言った話は有名です。

宮崎：その話はだいぶ後年になってから耳に入ってきましたね。いやぁ、そのとき面と向かってほめてくれたらもっと張り切って… (笑)。いや、舞い上がってしまってダメになったかもしれないな。確かに今までのアニメーション…絵が動く面白さに重点を置く脚本とはちょっと違うなということはあったでしょうね。実写でやっても撮れる脚本だ、という手ごたえみたいなものは、遠藤監督も感じてくれたんじゃないかな。

人間をきっちり描くための大胆な脚色が成功のカギに

──その後、斉藤監督とのコンビで、『ペリーヌ物語』『トム・ソーヤーの冒険』『南の虹のルーシー』『牧場の少女カトリ』と続きましたね。

宮崎：認めてもらえたわけですからありがたいことですよ。斉藤さんは僕の脚本をほとんど直さなかったんですが、直したくても直せなかったんですよ。『トム』は別格として、問題のある原作が多くて…。物語の先がわかっていれば監督が手を入れることもできるけど、書いている僕だってはっきりした見通しなく書いているんですからね…。絵コンテで直したら次の話は逆の方に行ってしまったなんてことになったら、物語がぐらついてしまう。一話ごとに話は終わったように見えても、その時点で次への伏線が張ってあることもしばしばですからね。特に名作の場合は1年間に渡って人間を描いていくわけですから、人間をしっかり見すえる一貫性がないと物語は作れない。僕はリアリズム思考ですから、うそは書きたくないんですよ。たとえば『カトリ』で最後、カトリとお母さんが再会するシーンでも、お涙頂戴っぽく盛り上げようとすればできるんですけど、そうはしたくない。

それからよく悪党が出てこないと言われますね。でも、みんな何らかの理由があって悪に手をそめるわけでしょう? 一面的に描くのは抵抗がある。悪党とよばれる奴でも妻や子には優しいかもしれないじゃないですか。第一、子どもに、人間には悪い奴といい奴がいるんだと思わせたくない。だから『トム』のインジャン・ジョーなんかも、あえて人間的なものを残したつもりです。

──『トム』や『若草物語』などの有名な児童文学と、

しっかりした子ばかり書いていたんで、娘に「お父さんは私にプレッシャーをかける」と、よく言われましたよ。

『ルーシー』『カトリ』などのようにあまり知られていない作品とでは、書かれるときに違いがありますか？

宮崎：そりゃ大いにありますよ。『トム』や『若草物語』なんかは何しろ面白いんですから、原作が。ただ1年間の物語にするには長さが足りないから、『トム』の場合など『ハックルベリィ・フィンの冒険』からエピソードを借りたりして、工夫をこらしました。

『ペリーヌ』はまだよかったけれど、『ルーシー』『カトリ』の原作は、物語としての面白さに欠けていましたからね。これを1年間続けるためには大胆に脚色する必要がありました。

一番苦労したのは『ルーシー』『カトリ』の再評価がうれしい

—脚色される場合、たとえばどんなところにご苦労されたのか教えていただけますか？

宮崎：『ペリーヌ』の原作は、ペリーヌと母親がパリに入ったところから始まるんですよ。そこには長い間旅をして疲れ切った馬車と少女がいる…みたいなね。でも、そこから書いたのではとても1年もたないと考えて、シリーズ前半に「旅」の物語を付け加えました。結果的にその旅のエピソードを細やかに書いたことで、ペリーヌの人物像を際立たせることができたし、シリーズ後半の布石にすることもできましたね。

『ルーシー』…これが一番苦労したな。オーストラリアで連載中で、本にもなってなかったんですよ。第一、僕もそれまでオーストラリア開拓史についての知識がまったくなかった。今みたいにインターネットで情報収集なんてできない時代だし、アメリカ開拓史と違って図書館にも資料がない。せめて連載中の原作に開拓史についての情報がきちんと盛り込まれていればなんとかなるんだけど、内容が実にお粗末。取材旅行でオーストラリアに行ってなかったらどうなっていたことか…。

『カトリ』も原作が暗い話だったので、基本的なシチュエーションだけ残して、ほとんどオリジナルにしました。時代設定も変え、主人公も新しい人物像を作っていきました。カトリは将来、作家になるという設定を最初に決めて、その上で知的なものに対する欲求を持っている少女にしてね。背景に前から知識としてあったフィンランドの独立運動をからめ、少女の成長物語と民族の自立を重ねてみようと…。『カレヴァラ』なんかも早い段階からカトリに向学心を植えつけるきっかけにしようと考えていたんですよ。『カトリ』は当時、視聴率的にはふるわなかったようですが、後年になって評価されているようでうれしいですね。

それから『ブッシュベイビー』、これは動物の扱いが難しかったね。主役はブッシュベイビーだけど、擬人化できないし…。その動物と女の子の成長物語をどうからめていくか、いろいろ考えましたね。

—作品を見てみると、『トム』以外は後年の『ブッシュベイビー』を含めて、すべて主人公が女の子ですね。

宮崎：たまたま僕の娘が同時代的に成長していたので、書きやすかったですね。僕はきりっとした女の子が好きでね。弱いところも持っているけどシンは強く、つらい状況下でも明るさ、優しさを失わずに一生懸命頑張るという…。そういうしっかりした子ばかり書いていたんで、娘に「お父さんは私にプレッシャーをかける」と、よく言われましたよ（笑）。

脚本は構成力で決まる！ 構成をしっかり組み立てて書くのが宮崎流

—1年間のシリーズ、脚本はどのくらいのペースで書かれたのですか？

宮崎：放映前に1クール（13本）ぐらいは書き上げておきたいですね。夏ごろから1週間に1本ずつ書いていけば、放映までに軽く12～13本そろうはずなんですが、なかなかね…。次第に遅れて肉体的にも精神的にもつらくなります。でも、それを乗り切れるのはやはり僕一人の締め切りじゃないからでしょう。作品を作るには多くの人が関わるわけですから、僕の作業が遅れたら他の人に迷惑をかける。その結果、作品の出来が悪くなるということも考えられる。それが頭にあるから必死です。

ただ長年やってると、このくらいまでは遅れても大丈夫というのがわかってくる（笑）。特に僕はぎりぎりまで追いつめられて書くタイプなので…。締め切りの2～3日前にプロデューサーから「そろそろ上がりましたか？」と電話がくる。相手が不安にならないように「7割ぐらいは…」と答えるけれど実は1行も書いてない。いよいよ明日朝10時に原稿を取りにくると決まったら、24時間切った夜の10時ぐらいから書きはじめるわけ。でも、それまで何もしてないってことじゃないよ。僕は脚本は構成だと思っているから、うろうろしながら（笑）全体の構成を頭の中で練っている。構成をちゃんとしておけば30分くらいの作品なら、結構早く書けるもんなんです。

—現在、名作復活を望む声が高まっていますが？

宮崎：今はアニメの作品数が多すぎるよね。こんなにいっぱい作っていたら、いいスタッフも集まらないと思うんですが…。そういう中でゆとりをもって名作みたいな作品を作っていくのは難しいよね…。だけど、いいものを作れば、このシリーズのように繰り返し繰り返し放映され、DVDや本になったりするわけでしょう？ 長い目で見れば決してソンはしないはずですよね。

（03年5月2日　和光市にて）

キャラクターデザイン

せき しゅういち

関 修一

● Profile ●

アニメーター。名作シリーズで多数のキャラクターデザインを担当。現在はアニメーション制作に携わる他、青い鳥文庫の児童書で挿絵も手がける。

主な作品：78年『ペリーヌ物語』、80年『トム・ソーヤーの冒険』、81年『ふしぎな島のフローネ』、82年『南の虹のルーシー』、90年『私のあしながおじさん』、91年『トラップ一家物語』、92年『大草原の小さな天使ブッシュベイビー』、97年『機関車先生』、97年『エルマーの冒険』、02年『ふぉうちゅんドッグす』、他。

名作シリーズの中で、もっとも多くのキャラクターデザインを手がけている関修一氏。アニメ業界で長く活躍されているベテランならではの貴重なお話をうかがった。

思いがけず足を踏み入れたアニメーションの世界

—アニメーション制作に携わることになったきっかけはなんですか？

関：デザイン学校へ通っているとき、アルバイトを探していたら「日本テレビジョン動画背景係募集」という記事が目に入りまして…。日本テレビジョンっていうのは現在のエイケンの前身の会社なんですが、僕はてっきりテレビ局の「日本テレビ」の大道具の背景係かなと思ったんです。当時、品川にある会社へ行ったら、アニメ制作会社だったんですよね。応募の条件に「作品をもってこい」とあったので、僕はポスターカラーで描いたイラストを持っていったんです。でも、普通はアニメーターになりたい人は、マンガとかを持っていくんですよね。それで、とりあえず合格して仕事をすることになったら「関は背景の方がいいんじゃないか。ポスターカラーが使えるから」と言われて、背景にまわされました。3～4カ月くらいやったかな。そうしたら、動画の方が手薄だから、そっちにまわってくれと急遽言われて。自分としては、せっかく背景の作業にも慣れてきたので、本音を言えば変わるのは嫌だったんですが、結局は動画をやることになりました。その会社は後にTCJという会社になって、エイケンと分かれました。

『ペリーヌ』には、いろいろミックスされた要素が出ていると思います。

—どういう作品の動画をやられていたんですか？

関：『サスケ』が最初だったと思いますね。『サスケ』をやっているとき、次に『カムイ外伝』をやるということで、社内でキャラクターデザインを立てることになったんです。当時は、作画監督の人がキャラクターを作っていたんですよ。でも、今回はデザイナーのオーディションをやるからってことでそれぞれ出し合い、僕の絵が向いているんじゃないかということで採用されました。作画を始めて、まだ間もなかったんですけど、テレビのクレジットに僕は「美術」で出ていると思いますよ。その頃は「キャラクターデザイン」という役職名はまだなかったので…。それがキャラクターデザイナーとしての、初めての仕事でしたね。

—名作シリーズには、どういう経緯で参加することになったのですか？

関：そのTCJに3年いたあとフリーになり、虫プロや東映の仕事をやっていました。そのうちに日本アニメーションの前身だったズイヨーができて、いろんなところから巧い人が引き抜かれて、僕も誘われたんです。最初にやったのが『ロッキーチャック』でした。『ハイジ』も原画をちょこっと手伝ったんですけど、僕は森やすじさんって好きな作家で、絵も大好きだったんです。『ハイジ』も原案は森さんが描いていたから、キャラクターデザインが小田部さんでも、やっぱり森さんの絵に近いですよね。森さんの絵を見て、前から「名作の絵はいいなぁ。そのうちやりたいなぁ」と思っていました。その後『ペリーヌ物語』で、初めてキャラクターデザインをやりました。

『ペリーヌ物語』から始まった名作のキャラクターデザイン

—『ペリーヌ物語』は最初から関さんに…というお話だったんですか？

関：一応、決まったときにプロデューサーから「関さんに」というお話がありましたね。それまでの作品は、絵のラインがだいたい森さん流なんですけど、僕はちょっと系統が違っていたから抜擢されたんだと思うんです。でも始まってみたら、自分の中に名作路線っていうのが色濃くあってね。もっと違う風に描かなくちゃと思っていたんですけど、どうしても引っ張られました。かなり苦労したのを憶えてます。本当はもっと違うものを求められていたと思うんですけどね。そういう意味では『ペリーヌ』には、いろいろミックスされた要素が出ていると思います。本当に緊張しましたよ、名作ってことで。

—どの辺が、絵が引っ張られた理由なんでしょうか？

関：やっぱり、森さんの絵が好きだったからだと思うんです。それまでは『アンデルセン物語』とか『ビッケ』とか、どちらかというとバタくさいものをやっていましたからね。日本アニメーションに入ってからも、名作ではない合作ものとかやっていましたし。

—ロケハンに行かれたことはありますか？

関：『フローネ』で南の島へ行きましたね。オーストラリアのすぐそばにある小さな島なんですけど、漂流記の話なので、美術の人はすごく参考になったと思いますよ。僕は、もちろんスケッチもしましたけど、ほとんど遊びに行っていたようなもので…。『ペリーヌ』と『トム・ソ

ーヤー」は行かなかったですね。当初『トム』のキャラクターデザインは、僕じゃなかったんですよ。候補に上がっていたのは、今ジブリの方にいる百瀬さん。あの人が最初はやるはずでした。でも、他の仕事との関わりで全然ダメだっていうことで、僕になったんですよ。

—キャラクターデザインをする際には、監督から詳しい説明があったりしますか？

関：具体的な打ち合わせは、第一稿を上げてからですね。そのあと、いろいろな意見のキャッチボールがあります。

—決定稿までには、どのくらいかかりますか？

関：作品や監督さんによりますね。最初の『ペリーヌ』のときには、まず僕自身がどういう絵にしようか迷ったくらいです。絵の傾向がわかってくると、スタッフも「関にお願いしたらこういう感じになる」っていうのは、自然にわかるわけですから。だから「この作品は関で行こう」となったら、長くはかからないですよ。早いときは一発で決まることもあります。

—キャラクターデザインで重要なことはなんですか？

関：決定するまでにスポンサーにも見せるわけですから、スポンサー受けを考えたら、とにかく可愛い絵というのが大切なのかもしれません。でも、スポンサーが見るのはデザインされた一枚の絵であって、それが動いたときにどうなるか、というのはわからないんですよ。でも、僕が重視しているのは、パッと一枚絵で見て可愛いというより、動きだしたらだんだんと輝いていくような、そういうデザインができればと思っていますね。だから、スポンサーを通すとき「もうちょっと可愛くしてくれ」っていう注文は、かなりありましたね。『フローネ』のときも「これ可愛くないから」って、結構言われたんですよ（笑）。でも「これでいいんだ」と思って、やりましたね。

—決定稿までの道のりが、一番長かったキャラクターは誰ですか？

関：その『フローネ』が結構長かったね。僕はスポンサーとの打ち合わせの席には行かないんですけど、間に立っているプロデューサーの松土隆二さんが苦労したみたいです。松土さんは「関さんを信用しているから、関さんの好きなのを描いて。あとは俺がスポンサーの方とうまくやるから」って…。だから、プロデューサーが一番苦労したと思いますね。

動きだしたらだんだんと輝いていくような、そういうデザインができればと思っていますね。

スタッフの熱気に満ちた名作の制作現場

—関さんが初期の頃に手がけた作品と、後期の頃に手がけた作品では、制作状況に違いがありましたか？

関：最初の頃は僕も東京にいたので、結構泊まりこんだり、スタッフと一緒にワンフロアでワイワイ作っていましたね。そういう熱みたいなものは、作品に出ていると思います。『あしなが』以降は、もうこっち（伊豆）にいたので、ファックスでやりとりしました。もちろん打ち合わせには何回か行きましたけど。一緒に作っているという感じは、以前より薄くなってしまったところはあります。

—絵柄的な変化もありましたか？

関：やっぱり少しずつリアルになっている気がします。等身も伸びてきていますし。名作シリーズ自体が、だいたいそういう流れできていると思うんですよね。

—制作現場はどんな様子でしたか？

関：活気がありましたよ。でかいワンフロアに、いろんな作品が班ごとに分かれていて、泊まりこんでいる人が多くて、夜になると酒を飲んで「いい作品を作りましょうね！」と熱く語っている。そういう感じでやっていましたね。泊まりこまなくても、もっと合理的に仕事ができたんだろうけど（笑）。やっぱり昔は熱みたいなものがありましたからね。泊まりこんでいるから、すごい仕事をやっているというわけじゃないんだけど、熱気みたいなものはありましたね。だから、豪快な作画監督になると、一升瓶を横に置いて作業をしている人がいましたよ。僕も飲んでやったことがあるんですけど、そのときは結構イケてるように見えても、朝見るとひどいんです。やっぱりいいかげんな感じで（笑）。

—制作過程で、一番ご苦労されたことはなんですか？

関：好きなことですからね。苦しいというより、楽しかったですね。若かったし。みんなとワイワイいることが楽しい…という感じででしたから。最初のエイケンの頃にも、僕はあんまり仕事がなくて、家も近かったんだけど、なぜか仕事場に泊まっていましたね。

—名作シリーズで関わられたスタッフの中で、特に印象深い方というとどなたですか？

関：やっぱりプロデューサーの松土さんや斉藤博監督は、一緒に組むことが多かったので印象に残っていますね。松土さんは今、独立されて自分で会社を持っているんですけど、そこの『ふぉうちゅんドッグす』という作品で、久しぶりに一緒に仕事をしました。名作がなくなってから、僕はあんまりアニメーションの仕事をしていないんだけど、シリーズものとしては久しぶりのキャラクターデザインでした。



◀▼それまでとは違うデザインで名作シリーズに新たな風を吹き込む

キャラクターデザイナーとしての強いこだわり

—今でも、昔の作品を見返したりしますか？

デザイン画を見せるわけじゃなくて、画面になってからが勝負だから。

関：DVDになったりしたときに、パッケージのイラストをちょこっと描いたんですけど、そういうときに見ましたね。最近、たまたまそういう機会が続いたので『あしなが』も見ました。

――スタッフの中には、昔の作品を見るのが苦手という方もいるようですが…?

関：僕は作画の方をやっていないから、見られるのかなと思いますね。

――制作当時は、仕上がった映像を見たときは、どうでしたか?

関：最初はラッシュとか見ると本当にドキドキしちゃって、自分の鼓動が聞こえるくらい緊張していましたね。

――キャラクターデザインのみのお仕事だと、設定が仕上がったら作業終了ということですか?

関：そうですね。最初にメインキャラクターができちゃうと、あとは各話のゲストキャラくらいで…。『ペリーヌ』のように旅をする話だと、行く先々でいろんな人たちが出てくるから、毎回毎回新しいキャラクターを描いていましたね。

――キャラクターデザインの作業で、名作シリーズと他の作品とでは大きな違いはありますか?

関：『ペリーヌ物語』のときは、名作だからというプレッシャーがかなりあったんですけど、今はないですね。

――思い入れのある作品を、あえて挙げるとすると?

関：僕はやっぱり『トム・ソーヤー』ですね。もちろん最初にやった『ペリーヌ』というのもあるんだけど、さっき言ったようなプレッシャーもあったし…。やっぱり『トム・ソーヤー』では吹っ切れて、自分のカラーが出たんじゃないかなと思うんです。だから、好きなキャラクターを挙げるとしたらトム。それから、トムもそうなんですが、実はハックが特に好きなんですよ。

――『トム』のときは、わりとすんなりキャラクターができたんですか?

関：『ペリーヌ』での苦しみがあって、それを引きずっちゃいかんという葛藤はありました。最初はもうちょっとリアルっぽい雰囲気だったと思うんですよ。でもやっぱり元気のいい感じを出さなくちゃいけないっていうことで、最初だけちょっと苦しみました。

――名作シリーズのファンの方から、感想をもらったりすることはありましたか?

関：ファンレターとかはないけど、名作ファンの機関誌とか、そういうものを見せていただいたことはありますね。よく「関さんは隠れファンが多いんですよ」って言われるんですが……隠れないで出てきてほしいんですけど。堂々とファンだと言ってください(笑)。

――時間を経ても名作シリーズが多くの人に見られているということ、根強いファンがいるということについては、どう思われますか?

関：いいことだと思いますし、素直に嬉しいです。だから、昔のだけじゃなく、また新たな名作劇場ができればいいんですけどね。

――作り手側としては、やっぱり小学生くらいのお子さんを対象に……という意識はあったんですか?

関：対象というのはもちろんあるんですけど、僕はその対象の子どもたちに分かるような…ということは、一切考えていなかったですね。自分の出したいものを描いていました。よく「こういう感じで描いたら売れるよ」とか、いろんな話をされるんですけどね。それもまた失礼な話で…。どれが当たるかなんてわからないんだから。

――もし、また名作シリーズを作る機会があるとしたら、こういうものを作ってみたいというのはありますか?

関：できるかどうかわからないけど、何か新しい試みはしたいですね。デザイン的にはなるべくシンプルで……という風にいきたいなと思うんですけど。



▶思い入れがあるという『トム・ソーヤーの冒険』。元気な少年を見事に表現したデザインだ

――キャラクターデザインをやっていて、嬉しいと感じることはなんですか?

関：やっぱり僕は作画監督をやっていないので、僕のデザインしたキャラクターが、画面上でイメージどおりに仕上がっていると嬉しいですね。回を重ねるごとに、生き生きと魅力的になってきたりとか。僕が描いたものはデザイン画を見せるわけじゃなくて、画面になってからが勝負だから。

――関さんにとって、名作シリーズとは?

関：やっぱりキャラクターデザイナーとして、一番仕事をやらせてもらえるものが名作シリーズなので、僕にとってはとても大切なものですね。

(03年5月2日　伊豆にて)

キャラクターデザイン・作画監督

佐藤好春
さとう よしはる

Profile

アニメーター。名作シリーズで多数のキャラクターデザインと作画監督を担当。87年～92年にはスタジオジブリの作品に参加。現在は、株式会社タイトーに在籍。ゲーム『ガラクタ名作劇場らくがき王国』のキャラクターデザイン、イメージイラストを手がける。主な作品：86年『愛少女ポリアンナ物語』、88年『となりのトトロ』、89年『魔女の宅急便』、91年『おもひでぽろぽろ』、92年『紅の豚』、93年『若草物語ナンとジョー先生』、95年『ロミオの青い空』、97年劇場版『フランダースの犬』、02年『猫の恩返し』、他。

『ロミオの青い空』を含む3作品のキャラクターデザインを手がけ、多数の作画監督や原画を担当した佐藤好春氏。新人時代からの名作シリーズとの関わりをお聞きした。

日本アニメーションに入社 先輩・近藤喜文氏との出会い

―佐藤さんがアニメーターになられたきっかけは、なんでしたか?

佐藤：『アルプスの少女ハイジ』に感動したからなんですよ。一日の生活描写を、丁寧に追っていく感じが良くて…。もともと絵を描くのが好きだったので、こういうものを作ることが仕事になるなんて、これほど素晴らしいことはないんじゃないかなと思いましたね。

―『ハイジ』をご覧になって、アニメーターという職業を知ったんですか?

近藤さんを見ていて、仕事を面白くするのは自分自身だなと感じました。

佐藤：そうですね。東映動画でアニメーションを教える学校みたいなのをやっていたんですけど、そこの募集がアニメージュの創刊号に載っていて、応募したんです。なんでそうしたかというと、どういう風にアニメーターになったらいいのか基本的にわからなかったので、とりあえず試験があったから受けてみて、そしたら入ったという感じでした。東映のときの同期には、名倉靖博さんがいますね。一応、日本アニメーションにも電話してみたんですけど、そのときは新人を募集していなかったんですよ。

東映の研修が終わったあとは、スタジオ・カーペンターに入ったんです。一番最初にやった動画は、テレビの『銀河鉄道999』や『キャプテンフューチャー』でしたが、僕には向いてなかったみたい（笑）。それで、もう一度日本アニメーションに電話したら、今度は募集していたんですよ。すぐに「試験を受けさせてください」とお願いしました。ちょうど東映にいる頃『未来少年コナン』を放送していて、それも日本アニメーションの制作だったから、やっぱりここに入りたいなと思っていました。最初に見た『ハイジ』への憧れを捨てられなかったんですね。

―アニメーターの入社試験は、どういう内容のものだったんですか?

佐藤：わりといいかげんな試験でしたよ（笑）。その場でやらされるのかと思ったら、森やすじさんが描いた課題を渡されて、郵送で送り返せばいいというものでしたから。試験内容は「少年が杭を打つ動きの間の絵を描く」とか「ドアが閉まるときの途中の絵を描きなさい」とか、そんな感じでした。

一番面白かったのは、森さんの文章で「男の子が犬に追われて電柱に飛びついている。その過程の絵を、どこでもいいから描きなさい」というものでした。それが、すごく印象に残っていますね。その頃は森さんがどんなにすごい人かなんて、念頭にもなかったんですよ。日本アニメーションに入ってから、森さんに教えてもらって、すごい人だと思ったんです。

―それでは、影響を受けたクリエイターというと、やはり森さんですか?

佐藤：影響と言われたら、近藤喜文さんの方が強いと思うんですよ。3カ月の研修をやりながら、現場でよく見ていたのは『赤毛のアン』なんですよね。その先輩たちと一緒に、やらせてもらっていましたから。森さんに教えてもらっていたときは、別フロアだったんですよね。できたら見せに行くという感じで。近藤喜文さんのときは同じフロアだったから、仕事しながらときどき様子をのぞいて、いろいろ言ってくれるんですよ。それが楽しかったですね。やっぱり近藤さんみたいな人がいたから、この仕事を続けてこられたんだなって思いますよ。仕事に対する姿勢を教えてもらったわけじゃないけど、近藤さんを見ていて、仕事を面白くするのは自分自身だなと感じました。こちらはまだまだ仕事の遅い新人だったのに、仲間だと思ってくれていた諸先輩方には、本当に感謝していますね。

―仕事を辞めようと思ったことはありませんでした?

佐藤：『アン』のときには思いませんね。まだまだ楽しかったです。『トム・ソーヤー』も近藤さんと一緒にやったんですけど、『フローネ』のときから近藤さんが外れて、社内に教えてくれる人がいなくなっちゃったんですよね。人手が足りなくなって、僕も『フローネ』から原画にまわされたという感じでした。それがチャンスといえばチャンスなんですけど、全然ついていけなくて大変でした。

でも、そういうとき参考になったのは、現場に残っていた『未来少年コナン』の原画でした。波とか蝶とかの自然現象のカットばかりなんですけど、近藤喜文さんが会社を辞める前に「こういうのは大事だから、とっておいた方がいい」とおっしゃって、置いていったんですよ。それを見て、いろいろ参考にしましたね。それ以外のものは、もう何も残っていませんでしたから。

キャラクターデザインって、本当は歳を取ってからやる方がいいんですよね。

外に出て、初めてわかった アニメーションの奥深さ

―最初の作画監督は『わたしのアンネット』でしたが、そのときはどうでしたか？

佐藤：最初、話が来たときは断りましたよ。そんなことできないって。人手不足の状況の中で、まだまだわかっていないこともあって、仕事に自信があるとは言えなかったですから。ただ、キャラ設定の絵に合わせるだけというか…。結局は時間に追われて、手いっぱいになっちゃいましたね。今だから言えるんですけど、原画のときにもっと、キャラの芝居の面白さをわかっていたらと。作画監督として名前が出て、自分の絵が映像になったのを見て、嬉しくないと言ったら嘘になるんですけど。

動きのことなど、自分の中で細かいことまで考えるようになったのは、日本アニメーションを辞めたあとだったんです。辞めてジブリに行って、そこで宮崎駿さんにコテンパンにやられて、そのときですね。アニメーションの奥深さを知ったのも、つい最近ですよ。外に出ると、いろんな人のいろんなやり方があるってことを、本当に実感しますから。

その後、日本アニメーションに戻ってきて『ナンとジョー』をやったときも大変だったけど、外で覚えたことをやったという意味では楽しかったですよ。そのあとの『ロミオ』も、外で吸収したことを出していたから面白かったです。『アンネット』や『ポリアンナ』をやったときとは、気持ちが全然違いましたね。

―『ポリアンナ』での初めてのキャラクターデザインのときは、どうでしたか？

佐藤：まだ余裕のないときだったので、まったく覚えていないんですよ。あれは楠葉さんのおかげで、できたという感じですね。楠葉さん御自身も絵を描く方なので、イメージだけ描いてくれて、僕はそれを自分の絵に直しただけでした。ポリアンナの耳のところの三つ編みも、楠葉さんのアイディアだったんですよ。あの頃はデザインを考えるというより、とにかく自分の描ける絵を描いたという印象が強いですね。ただ、ハイジが好きだったから、ハイジみたいな年齢で可愛ければいいかなと思っていました。それで、ポリアンナはあんなにコロコロと丸くなっちゃったのかもしれませんね。

―キャラクターデザインの作業は、監督との打ち合わせで進めていくんですか？

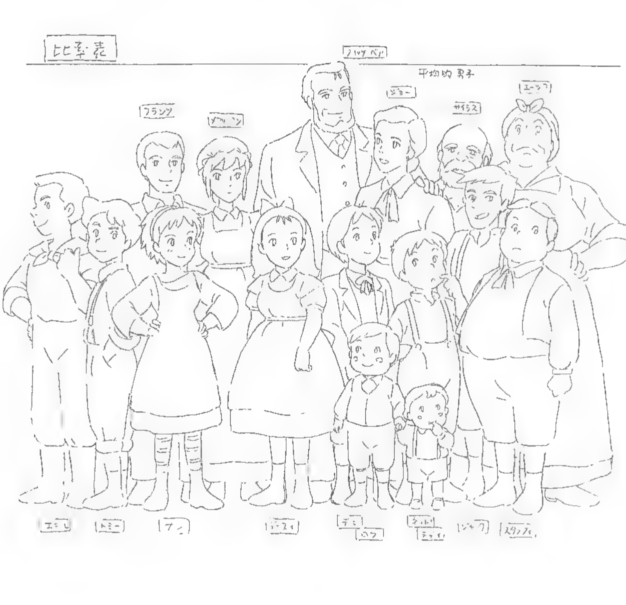
佐藤：そうですね。楠葉さんと…あと『ロミオ』では、島田満さんも一緒でした。島田さんのプロットを見て、それも参考にしながら、まず自分のイメージだけで起こすんです。でも、なかなかピンと来なくて。そのとき、企画の佐藤昭司さんに『ハイジ』のロケハンの写真を見せてもらったんです。ちょうどイイ顔で写っているスイスの男の子がいると聞いたので。そのアルバムを借りて描いたのがロミオだったんです。ちなみに初期設定のアルフレドの髪形がオールバックになったのは、楠葉さんが「オールバックでいこう」って言ったからだったんですよ（笑）。

―あれは、どういう経緯で変更になったんですか？

佐藤：フジテレビからも「ダメだ」って言われたんですよ。それで、前髪をたらしたんです。島田さんも「あれは良くなかった」って、言ってましたよ。あと、『ロミオ』の古い企画書には森さんが描かれた絵があって、そのイメージから抜けられなくて苦労しました。

―『ナンとジョー先生』も『ロミオ』も同年代の子どもたちが大勢いる作品でしたけど、個性付けなどで苦労されることはありませんでしたか？

佐藤：『ナンとジョー』のときは自分のバリエーションの中から、デブ・チビ・ノッポって描いただけだったんですけど、それがそのまま通っちゃって…（笑）。あとで、困ったなぁと思いましたね。あまり深く考えない性格なので。『ロミオ』は黒い兄弟や狼団とかいっぱいいましたけど、島田さんが作ってくれた性格設定を見て、初めてそういうものから起こしました。だから、キャラクターデザイナーとしてちゃんと描いたものって、もしかしたら『ロミオ』だけかもしれないですね。面白かったですよ。『ナンとジョー』は性格設定よりも、描きやすさを優先しました。だから改めて見ると、キャラクターとしての完成度が少し低いかもしれません。キャラクターデザインって、本当は歳を取ってからやる方がいいんですよね。『ポリアンナ』のとき、僕は20代だったんですけど、



◀描きやすさを優先したというが、個性的なキャラクターがそろっている『ナンとジョー先生』

■佐藤好春　描きおろしイラスト■

佐藤さんには記念にイラストを描いてもらいました。何となくハイジに似ているのは、気のせい？



それで大人の女の人を描くというのは、やっぱり無理ですもん。

キャラクターやエピソードに対する、こだわりの部分

──思い入れのある作品やキャラクターを、あえて挙げるとするとなんですか？

佐藤：思い入れって考えると、日本アニメーションに戻ってからの『ナンとジョー』や『ロミオ』の方がありますね。その前の作品に関しては、無我夢中というか、若気の至りというか。でも、最近やっと自分なりに、名作シリーズを全体的に見られるようになったかなと。

──佐藤さんは楠葉監督と一緒に組まれる作品が多いですよね？

佐藤：楠葉さんと組むときはラクかな？ 冗談半分、本気半分で（笑）。初めて作画監督をやった『アンネット』も楠葉さんだったし、『ポリアンナ』でも助けられた部分が多かったから、感謝してます。長くやっていると、お互いに慣れてきたところもありますしね。楠葉さんがどう思っているかわからないけど、僕が楠葉さんを助けた部分もあると思うんですよ。だから、持ちつ持たれつで…。楠葉さんと一番いい関係でできたのは『ロミオ』じゃないかな。



▶『ロミオ』は自他共に認める完成度の高いデザイン

──主人公の性別が男の子か女の子かで、仕事的に何か変わってくるところはありますか？

僕は僕で自分のできることをやってきたから、それはそれでいいと思っているんですよ。

佐藤：それは『ロミオ』をやって感じましたね。基本的に男の子って『トム・ソーヤー』の印象が強かったんですよ。ハチャメチャな感じ。だから、ロミオとアルフレドが向かい合って、友情がどうとか言ってるのは、最初はよくわからなくて理解できなかったな。ダンテとかが出てきて、黒い兄弟たちが助け合いながら何かをやっていくっていうあたりから、面白いなと思いました。本当は、その辺をもうちょっと細かくやりたかったですね。狼団のボスとアルフレドがやり合って、そのあとで仲良くなるけど、普通1回だけでは、ああはならないだろうなって…。そういうことが、もう少し丁寧にできるんだったら、またやってみたいですけどね。

──やはり、作品全体のキーとなるエピソードだと、力が入ったりすることはありますか？

佐藤：自分としては『ナンとジョー』も『ロミオ』も、それなりに踏みこんで、やったつもりなんですよ。『ナンとジョー』で、やっとプラムフィールドに馴染んだダンが火事を起こして抜けちゃって…。あの辺の話は思い入れがあったから「作画監督のローテーションを変わってでも僕がやりたい」と言った覚えがありますよ。『ロミオ』でアルフレドが死ぬシーンも「表情はこうなるだろう」とか、楠葉さんと話し合いましたね。

名作シリーズとの関わりで得られた経験と自信

──普段、本などを読んでいて「これは名作で使える」と思ったりすることはありましたか？

佐藤：最近は読んでないんですけど、昔はありましたよ。近藤さんとは日本アニメーションにいるときも、ジブリにいるときもそうだったんですけど、よく小説を読んでいて「こういうものがアニメ化になるといいね」とか話していましたよ。近藤さんは推理モノを読んでいて、ＮＨＫで夕方6時からやっている子ども向けの実写ドラマみたいな、ああいう感じのアニメができないかなって、言っていましたね。僕もそれを近藤さんたちと、将来一緒にできたらいいなと思っていました。

──佐藤さんが今までの全仕事を振り返ったとき、やはり名作シリーズは特別なものになりますか？

佐藤：アニメーターとして自分が何十年もやってきた中で、そのほとんどを占めているのは名作とジブリなんですよね。自分の年代によって、できてきた仕事もあるだろうし…。宮崎駿さんは若い頃に『三千里』とかをやって、今も変わらずスゴイ人だと思いますけど、僕は僕で自分のできることをやってきたから、それはそれでいいと思っているんですよ。今のアニメ業界にはいろんな巧い方がいて、そういうところを見ると自分に勝ち目はないし、以前は落ちこんだりもしたけれど、自分の絵で喜んでくれる人がいるんだったら、まだできるかなと…。だから、やってこれたんだと思いますね。今、やらせてもらっているタイトーの仕事も「名作のようなイメージで」ということで最初にお話をいただいたので、なんだか嬉しかったですね。名作を見た人たちが、ゲームを作るそれなりの立場にいるっていうことも含めて。もともと自分も『ハイジ』に憧れて、この世界に入ったわけですから、逆の立場になったみたいで不思議な感じでしたね。

──佐藤さんにとって「名作シリーズ」とは、どういうものでしょうか？

佐藤：体の一部かもしれませんね。しみこんでいるとは、あまり思いたくないけど…。でも、今思うと名作で『ロミオ』や劇場版『フランダース』のような仕事ができたわけですから、感謝していますよ。こういう作品って、やっぱり復活してほしいですよね。

（03年4月30日　海老名にて）

音響監督

ふじの さだよし

藤野貞義

● Profile ●

音響監督。TV制作会社で外国映画日本語版製作の演出・編集を手がけ、以後フリーに。多数のテレビアニメ、劇場映画の音響監督を務める。名作シリーズでは90年『私のあしながおじさん』以降の全作品を担当。その他の主な作品：85年『機動戦士Zガンダム』、86年〜87年『宇宙船サジタリウス』、88年『魔神英雄伝ワタル』、95年〜97年TV版『スレイヤーズ』シリーズ、02年『RAVE』『WitchHunterROBIN』、03年『クラッシュギアNitro』『出撃！マシンロボレスキュー』など。

名作シリーズ後期の作品で音響監督を担当された藤野貞義氏。音響スタジオというもうひとつの「現場」で、役者たちと仕事をする藤野氏にお話をうかがった。

BGMも作品の顔

—藤野さんは『私のあしながおじさん』以降の全作品を担当されていますが、名作シリーズのお仕事をやることになった最初のきっかけはなんですか？

藤野：『あしなが』のプロデューサーの方とは、以前から他の作品で長く一緒にやっていたんですよ。ちょうど前任者の方が辞められるということで、声をかけていただいた感じです。

—藤野さんは、作曲家に渡す音楽のメニュー（曲目）の発注もやられているそうですが？

藤野：名作に限らずどの作品でも全てやっています。そうするものだと思っていましたから。BGMは作品にとって大変重要なものです。作品が決まるとプロデューサーや監督から企画書・プロット等を見せていただいて、音楽のジャンルや作曲家をどうするか、またどんな雰囲気のものにしていくか、など打ち合わせをします。

　音楽にはクラシック・ジャズ・スタンダード・ロックからヒップホップと、いろいろなジャンルがあり、そのどれを基調にしていくかによって作品の印象は大きく変わってきます。それに名作の場合、舞台となる国（場所）があり時代背景があります。なかには各国を旅して回るものもあります。ですから、主人公の行動や心情（喜怒哀楽）だけでなく、それらの要素を含んだ曲も必要となってきます。

　私は選曲も自分でやりますのでどうしても「どのシーンで」「こんな心情で」「ここで転調して」と、ずいぶん細やかな要素を含んだたくさんの曲が欲しくなるんです。

　それで、監督と打ち合わせしてメニューは自分で書きます。でも作曲家は大変です。時間がない（有名な方ばかりだったから）上に、こと細かな制約、大量のメロディー、幅広い知識と自分の生まれてない時代の古楽器の音色まで要求されるのですから。その上最後に「この作品を是非貴方の個性で盛り上げてください」と……。でもどの作曲家の方も理解して快く受けてくださり、素晴らしいものが上がってきました。

—音楽で一番こだわるところはどこですか。

藤野：音楽はそれ自体が強烈な個性と表現力を持っています。だから使い方によっては映像から突出することもあります。確かにその場面の状況にぴったり合って感情を歌い上げてくれるもの、映像や台詞で表現できない部分を補ってくれるもの、何気なくまるで空気のように流れているもの、全て必要です。でも、その中に常に印象的に残ってくれるものがあれば幸いです。それが突出した個性であっても。シナリオ・映像・台詞（役者）・効果音それぞれの個性と音楽がぶつかり合い、一体化して作品の顔となってくれるから。

スタジオの中で繰り広げられる役者たちとの共同作業

—キャスティングをする際に、もっとも気をつけていることはなんですか？

藤野：プロデューサーにも監督にも、その作品をやると決まった時、それぞれに思い描いたヒーローやヒロインの声のイメージがあり、また主人公が男の子の場合、年の合った子役でいくのか女性の役者でいくのか、その辺を合わせてよく話し合います。それで皆のイメージに合った人を探します。作品によっては「今回のヒロインはあの役者さんのイメージがぴったりなんだよ」と、オーディション前にある程度決めていることもあります。

　オーディションでは役者さんに「こんな声を出してください」とは言いません、ある程度イメージが近い人にお願いしているので、原稿を渡して自由に演じてもらいます。皆それぞれ自分なりに解釈し、十人十色のヒーロー・ヒロインができ上がってきます。時には「面白い！」と、スタッフが思い描いている主人公のイメージとは違うけど「この人にやってもらったら、面白いものができる」など、意外な結果が出ることもあります。

—主役が決まったとして、その他のキャスティングで考慮されることはありますか？

藤野：バランスを考えます。たとえば『あしなが』ではジュディに対して、ジュリア、サリー同世代の二人の少女が深く関わってきますが、このキャラクターは声の質も性格も本人に近い素のままで演じられる人を選びます。三人の会話が常にごく自然に入っていければと思い…。また『ナンとジョー先生』ではたくさんの少年が出てきますが、それを全て女優さんで演じてもらうのは辛いも

オーディションでは役者に「こんな声、出してください」とは言いません。原稿を渡して、自由にやってもらう。

ミュージカル的なものが好きなんです。

のがあります。そんな時、どの役は男性でと、キャラクターを考慮しバランスを考えます。

—ときには、キャラクターと演じる役者がダブったりすることもありますか？

藤野：よくあります。毎週毎週同じ時間に同じスタジオで顔を合わせていると、作品にもキャラクターにも思い入れがすぎ、いつの間にか役者さんとではなくキャラクターと話をしている錯覚に陥ることがあります。ある時、他のスタジオでその役者さんを見掛けた時「あれ、録りの日でもないのに、何でジャッキーがこんなところに居るんだ？」て、思ったことも。

—名作のキャストは若手からベテランの方まで幅がありますけど、今はそういう作品は少ないですよね。

藤野：そうですね。名作は作品の性質上、幅広い年代のキャストが登場しますし、それにできるだけ自然に描いていこうという意図もあり、子供たち以外はなるべくリアルな年代の人をキャスティングしていましたから。

確かに制作コストの問題もあるかもしれませんが、新人が中堅に中堅がベテランへと、世代の流れもあり、また毎年たくさんの新人が育ってきていることもあります。何よりも、最近の作品の内容自体に若手の新人さんを求める傾向のものが多くなったからではないでしょうか。

—役者さん同士で、役柄についてのディスカッションみたいなものはあるんですか？

藤野：個々の役柄についてはありませんが、互いに思い違いをしている部分を修正したり、台詞のニュアンスが相手に通じているか、タイミングは間違っていないか、などを確認しあっています。何話か話が進んでいくといいリズムでアフレコできるようになるのですが、最初の頃は皆、自分の役を掴むのに必死ですから。

—そういう場合、役者の方から相談を受けたりすることはありますか？

藤野：ありますよ、それを受けるのが仕事ですから。「なぜ、私のキャラが急にこんな行動を？」「どうして、こんな気持ちになるのか」など、たいていはフィルム上で見えない演出の意図や作品の狙いであったりするので、細かく説明し、理解してもらいます。

でも、若い役者さんには、台本にある自分以外のセリフやト書きなど、全体的なものを読んでほしい。自分のセリフだけ練習してきちゃう人もいるけど、対応がきかなくなっちゃうんですよね。現場で「ここを変えよう」と言っても変えられない。だから「練習はしないでください」って言うんですよ。

ストーリーの展開と「この子はどうしてこうなったんだろう」っていうのがわかれば、あとは現場でのタイミングだけ。でも若い人によっては、自分で演じ方や口調までハッキリ作ってきちゃう。「それは違うから、全部忘れた方がいいんじゃないか」っていうことをも話したりしますね。

—名作に出演した役者で、印象深い方はいますか？

藤野：やっぱり名作で最初にやった『あしなが』の堀江美都子さん。すごく感情豊かな方でした。名作のヒーローやヒロインは、みんな印象に残ってますけどね。最初（『あしなが』）と最後（『レミ』）っていうわけじゃないけど、堀江さんかな。

名作だからこそできる芝居、描くことのできる日常的な感情

—名作では日常的な芝居が多いですね。

藤野：状況によって台詞のテンポや動きが早くなることはあるけれど、基本的には短いシークエンスや小刻みなカット繋ぎはありませんでしたから、日常的な生活リズムの流れにそった作品が多かったですね。でも、自分はミュージカル的なテンポと動きのあるものも、好きなんですよ。

—確かに藤野さんが手がけた作品は、キャラクターが歌うシーンが多いかもしれませんね。

藤野：プロデューサーの方が好きだったのもありますが、『トラップ一家』に出ていた役者さんは全員歌が上手でしたね。

なかでもヴェルナー役の松岡洋子さんは本当に上手で、初見でコーラスをアカペラでこなしてしまうんです。しかもキレイに。アフレコの当日いきなり「この歌なんだけど」ってスコアを見せると、全員でハーモニーまで付けて美しいコーラスにしちゃったんです。こんな現場を見せられて、スタッフ全員がその気になっちゃったんですよ。

—御自身のキャリアの中で、名作シリーズはどういうものとして残っていますか？

藤野：やっぱり大事なものですよね。だって、成人してからは、仕事が占める割合って大きいじゃないですか。そういう意味では、何年も関わったっていうことは財産ですよね。

—名作シリーズをまたやりたいというスタッフの方も多いようですが…？

藤野：『名作』と銘打たなくてもいいんだけど、こういうジャンルのものは、残しておきたいです。普通の生活をしてきた中で、昔の心の感動はいつまでも残っているじゃないですか。

堅いことを売らなくてもいいんですよ。ごくごく日常的な感情の出会いが、淡々とした中で描かれれば、どの子もどの大人も、納得する部分があるじゃないですか。ちょっと笑えたり、ちょっと涙したり……そういうものは絶対ですよね。そういう作品は、残しておきたいんじゃなくて、これからもやっていきたいと思います。

（03年5月15日　新宿にて）

最新情報満載!

名作劇場に関連したHPや携帯サイトを紹介。夏のイベント情報もあるのでぜひチェックしてください。

世界名作劇場NEWS

ケータイで名作キャラと遊ぼ♪

世界名作劇場

世界名作劇場のキュートなキャラクターたちの待ち受け画面、フォトフレーム、アプリなどがいっぱいつまったサイト! ラスカルに、パトラッシュに、アメデオに会いに、今すぐアクセス♪





待ち受け画面

すべての携帯から待ち受け画面がゲットできる。種類も豊富なので、毎日違う画面にすることもできる。

フォトフレーム



フォトフレームを使えば、普通の写真もとてもかわいく早変わり。

●i世界名作劇場【i-mode】

<アクセス方法>i Menu → メニューリスト → 待受画面/iアプリ待受/フレーム → アニメーション/マンガ → i 世界名作劇場

*ラスカルはともだち	月額 ¥100
*名作大好き	月額 ¥100
*世界名作アプリ	月額 ¥200
*ラスカル世界名作	月額 ¥200
*名作ミニシアター+	月額 ¥250

●世界名作劇場☆J【J-sky】

<アクセス方法>J-スカイメイン → キャラクター・画像 → アニメ・コミック → 世界名作劇場☆J

*毎日ラスカル	月額 ¥150
*名作キャラ☆ミックス	月額 ¥150
*名作キャラ☆アプリ	月額 ¥90
*世界名作メロディ	1曲 ¥30
*世界名作ボイス	1曲 ¥30

●世界名作劇場EZ【EZweb】

<アクセス方法>「51011」を入力 → EZボタン → インターネットナンバー → 世界名作劇場EZ

*ラスカルだよ!	月額 ¥200
*名作がいっぱい	月額 ¥200
*名作着信メロディ	1曲 ¥30

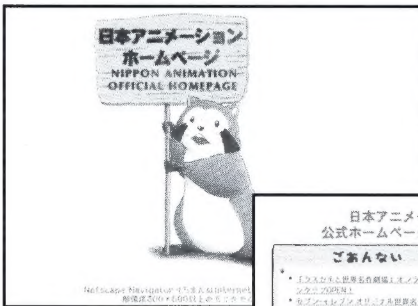


名作のことなら何でもわかる!

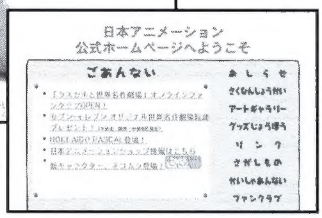
日本アニメーション公式HP

世界名作劇場を制作した日本アニメーションのHP。イベントやグッズなどの、最新情報はここを見れば一目瞭然。限定グッズを買い逃すこともなくなるかも。

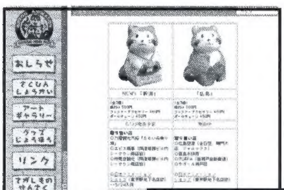
http://www.nippon-animation.co.jp



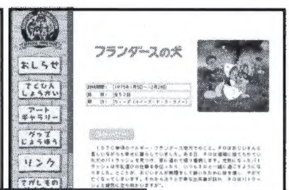
◀トップページはラスカルがお出迎えしてくれる。クリックすると中に入れる



▶案内板からいろんな情報のページに行ける。最近更新された情報もすぐわかる



▲発売前のグッズ情報もくわしく乗っている



▲ストーリーがわかる作品紹介ページもある



▶ファンクラブは無料でコンテンツが楽しめる

イベント情報

「ラスカルと世界名作劇場」~わくわくサマーフェスティバル~

この夏、新高輪プリンスホテルに世界名作劇場が登場します。この期間だけの限定グッズあり、ラスカルルームありと、ホテルに名作ワールドが広がります。夏の記念にぜひ行ってみてください。

キャラクターショップ

世界名作劇場に関する様々なキャラクターグッズが集合します。ここだけでしか手に入らない商品や、数少ない貴重な商品などが期間限定で手に入ります。

赤毛のアン　カフェ&レストラン

料理やケーキ作りが大好きなアンのお店では、コーヒーや紅茶、ケーキや軽食などがカナディアンイメージの中で楽しめます。



ラスカルルーム

宿泊パックとして、期間限定でラスカルルームが登場。部屋の数には限りがありますので、確実に宿泊したい方はお早めにお問い合わせください。

エントランスゾーン

名作ゾーンへの第一歩となるのがこの空間。世界名作劇場に登場する様々なキャラクターや様々なシーンが広がり、これからはじまる名作への旅へ誘ってくれます。

世界名作広場&プレイランド&シアター

エントランスゾーンを抜けるとヨーロッパの広場をイメージした大空間が現れます。このゾーンは、プレイランドを中心に、『フランダースの犬』、『あらいぐまラスカル』、『母をたずねて三千里』、『赤毛のアン』、『トム・ソーヤーの冒険』、『ロミオの青い空』の6作品のジオラマ&クイズコーナーや参加型ゲームを設置。世界名作劇場シアターでは、毎日あの懐かしい映像を上映します。

開催場所:新高輪プリンスホテル　大宴会場「飛天」
開催期間:2003年8月10日(日)~8月24日(日)全15日間
10:00~17:00(最終入場16:30)
入場料金:(税込)
前売券　大人1000円　小人500円
当日券　大人1200円　小人700円
ランチプラン券　大人3100円
小学生1900円
小学生未満1400円
主　催:「ラスカルと世界名作劇場」実行委員会
共　催:新高輪プリンスホテル
監　修:日本アニメ企画株式会社
企画制作:日本アニメーション株式会社　有限会社笑遊堂
協　力:ラスカル会
問い合わせ:新高輪プリンスホテルチケットセンター
(TEL:03-3447-1121)



監　修
日本アニメーション
＊
カバーイラスト
関 修一
＊
編　集
フィールドワイ
＊
編集協力
アイプランニング
＊
ライター
大山美保
小根山友紀子
株田馨
草刈勤
田中史子
野下奈生
宮村妙子
矢野真弓
＊
デザイン
武田崇廣
望月志保
細井威之
笠久美
＊
画像加工協力
安藤幹夫
安藤俊夫
＊

思い出の世界名作劇場
オフィシャルガイド

2003年8月8日発行

＊
編集人:佐藤景一
＊
発行人:諸角裕
＊
発行所:株式会社双葉社
162-8540 東京都新宿区東五軒町3-28
http://www.futabasha.co.jp/
振替00180-6-117299
営業部03-5261-4818
編集部03-5261-4837
＊
印刷所:三晃印刷株式会社
＊
FUTABASHA2003
＊
Printed in Japan

思い出の 世界名作劇場 オフィシャルガイド

■2003年8月8日発行 ■発行人：諸角裕 ■編集人：佐藤景一
■株式会社双葉社／〒162-8540 東京都新宿区東五軒町3-28
■営業部03-5261-4818／編集部03-5261-4837／振替00180-6-117299
■印刷所：三晃印刷株式会社



収録作品

フランダースの犬（1975）
母をたずねて三千里（1976）
あらいぐまラスカル（1977）
ペリーヌ物語（1978）
赤毛のアン（1979）
トム・ソーヤーの冒険（1980）
ふしぎな島のフローネ（1981）
南の虹のルーシー（1982）
アルプス物語 わたしのアンネット（1983）
牧場の少女カトリ（1984）
小公女セーラ（1985）
愛少女ポリアンナ物語（1986）
愛の若草物語（1987）
小公子セディ（1988）
ピーターパンの冒険（1989）
私のあしながおじさん（1990）
トラップ一家物語（1991）
大草原の小さな天使 ブッシュベイビー（1992）
若草物語 ナンとジョー先生（1993）
七つの海のティコ（1994）
ロミオの青い空（1995）
名犬ラッシー（1996）
家なき子レミ（1996/97）

世界に愛された名作アニメのすべて

- キャラクター、ストーリー解説はもちろん、名セリフ、見どころ、原作紹介からグッズリストまで充実の内容。
- プロデューサー、監督、脚本、キャラクターデザイン、作画監督、音響監督：スタッフの証言で感動がよみがえる！

9784575475562

定価：本体933円＋税

雑誌67726-57
©FUTABASHA2003
Printed in Japan

ISBN4-575-47556-4
C9476 ¥933E

1929476009333